女子文壇

十一月一日

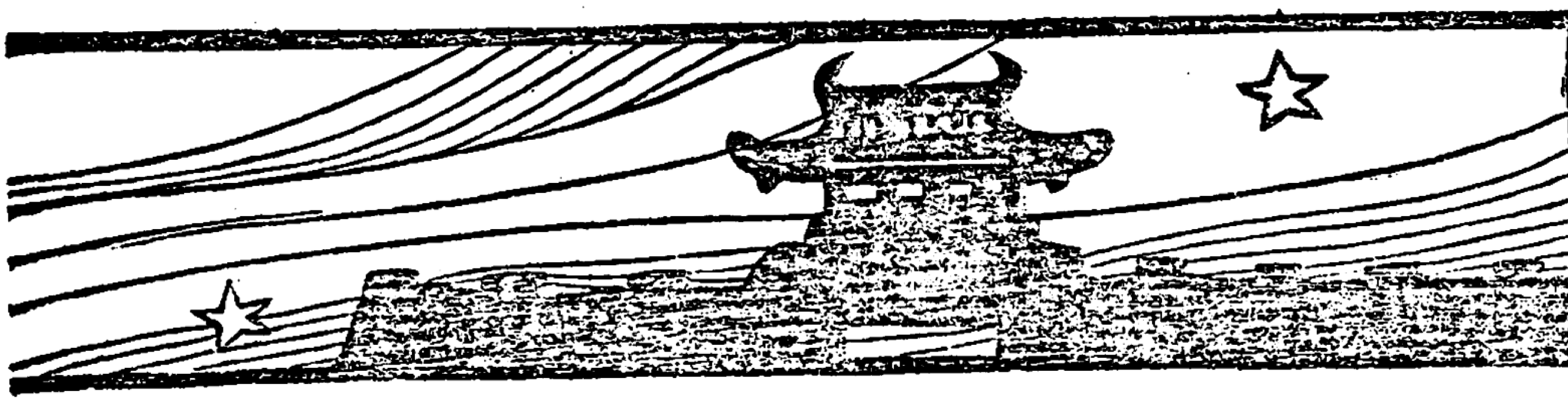
第六年第十三號



第三種郵便物認可
（明治四十三年九月廿五日印刷納本
毎月一回二十五日印刷納本）

東京女子文壇社發行

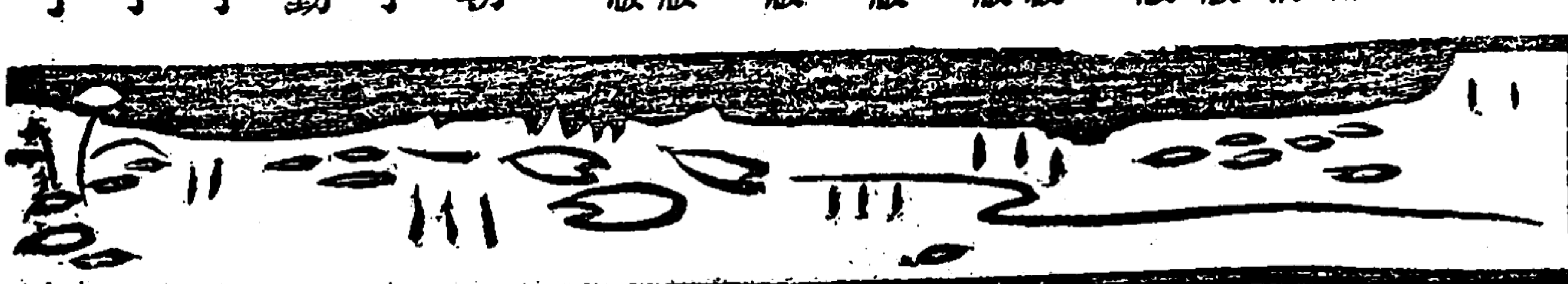

十月一日より
秋期新製品陳列會開催
◎懸賞募集改良玩具陳列
◎懸賞當選優秀圖案陳列
寄裂見切反物大賣出し
尚店内には光線應用による千變不思議なる餘興の設備も有之候間何卒
倍舊の御愛顧を賜り永當の御來遊御買上の程切に奉願上候　敬白
東京日本橋
白木屋呉服店
善き品を廉く賣れ!!
日本橋



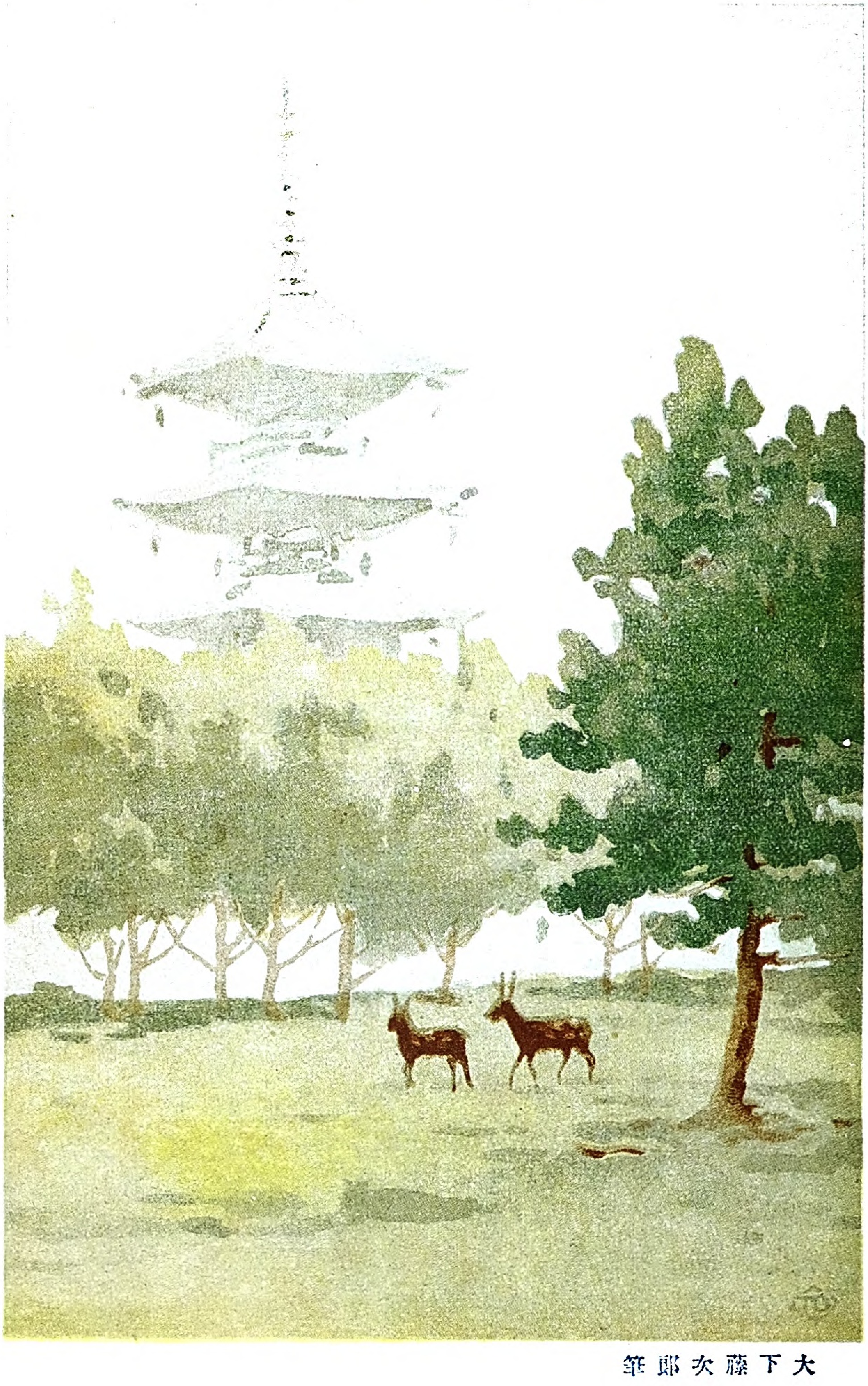
女子文壇拾月號（第六年第拾參號）目次

【卷頭口繪】

【本欄】（一—一五六）



奈良の朝霧



大下藤次郎筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

專賣特許 エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明 清浦子爵 高山

三兩博士の實驗有效御證明東京美術學校千頭教授の實驗有效御賞贊狀其他大家より多大の高評を以て迎られたる特許**エンゼル香油**は毛髮を黒化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる『**ヘリオトロープ**』『**バイオレッツ**』『**ホワイトリリー**』等の高雅なる



よい香!!

紳士婦人用高等香油

芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故に別に他の香水等御用の必要は有ません又たくせ

毛の方はB號**エンゼル香油**御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

◉賣價は小罎六十錢中罎壹圓大罎壹圓八十錢と天性難毛用特製三圓五十錢の四種て送費は市内は何れも七錢内地は小中罎迄は十一錢大罎及び特製十五錢です 東京市本郷區東片町十五番地

エンゼル商會 電話下谷二五六九番 振替東京二〇七四三番

產科婦人科專門醫學士北畠孝夫先生閲

婦人病心得

(最近)子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛嘆の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈すはがきにて至急申込まれよ

目次

婦人病の總論◉子宮病血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病并及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一(電話新橋三千六百一) **笹岡省三**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



銀座通り



東京錦石堂石印

ケーバー石鹸

舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり

レツクス



實用浮石鹸

英國ホッソンエンドシンプソン會社特製品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり

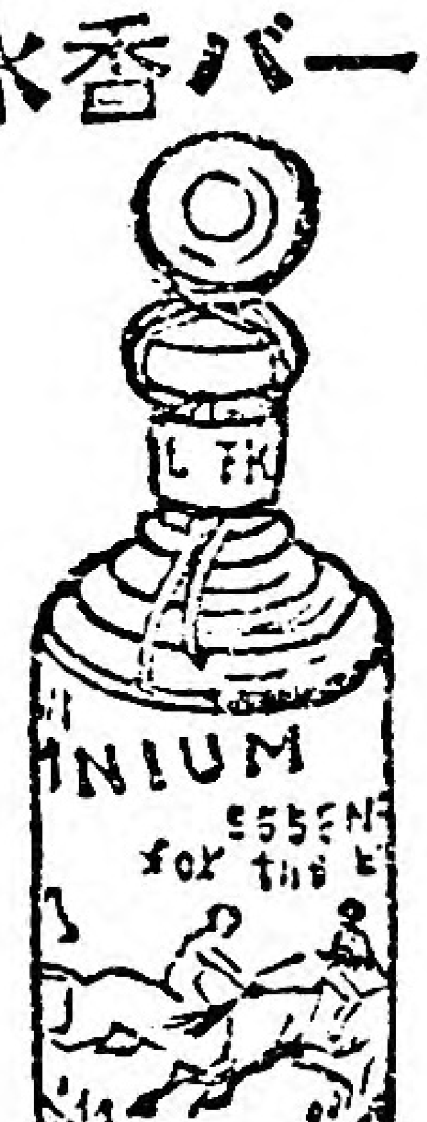
價格の低きは本品の特點なり

實用に適するは本品の特點なり

上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

ケーバ香水



(商標)全世界を通じて流行品

最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水

定價

小壜	金廿五錢
中瓶	金一圓
大瓶	金二圓
特大瓶	金五圓

東洋一手代理店

竹間商店

◎發賣所は全國到る處の信用ある舶來小間物、及び化粧品店に有り升

御手植の櫻



山階宮安子女王殿下京都墓參の砌御手づから櫻樹を植ゑ給ふ

工兵少佐大島義豊氏家庭



前列大島少佐令息義男、大島工學士夫人つな子、少佐令嬢秀子、同母堂、同夫人準子、武義氏令嬢、同夫人里子

後列右より工學士大島義胤氏、大島少佐、大島武義氏、義胤氏令息一義

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

愛らしき少女達の讀物には一等評判よい

十一月一日發行　十一月號　第十卷第二號

少女

（毎月一日發行）定價一冊拾錢（送料壹錢）半年（郵税共）六拾三錢（口繪挿畫澤山）

◎樂譜（新體詩樂譜）……弘田音樂校教授
◎九月までの各府縣成績……記者
◎廻覽雜誌……一色醒川
◎東京と大阪の御馳走競べ……麻布治庖會 三輪ゆき子
◎花子さんの修學旅行……糟谷秋風
▲おとぎばなし 小猫とピアノ……佐々木好母
▲少女小說 珊瑚の船……田島曲琴
▲少女小說 深山の少女……澤村文學士
▲少女小說 女間諜……磯萍水
▲少女小說 少看護婦……松村駿子
▲少女對話 淋しい秋……溝口白羊
◎黄菊白菊　◎珈琲の後
◎少女小說三編……讀者三名
◎當世少女番附……記者
◎新式懸賞あて物 其他面白い者澤山あり

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社（振替口座東京第壹七弐九番）最寄書店に無くば直に御申込を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新發明美容劑 内體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次内體**純白色**に**變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を顯ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」社製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當舘にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くし、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消りを必治する法●痃癖の必治法●人造麝香の製法●上等香水製セ●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を清良にする法●歯痛即治●製法●髪の脫落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●髪毛の光澤を美にする新藥●歯磨粉製法●西洋流油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の婆々を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を○○す藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生涯中變らぬ秘術●恪氣深き女を治する法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座隱身術●人を眠らす秘法●即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記臆力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身欲取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●脹熾を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを治する法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●歯痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞き再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●ふざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●蒔酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の臭氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す合計壹百四十法あり着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

悪筆は一生の損

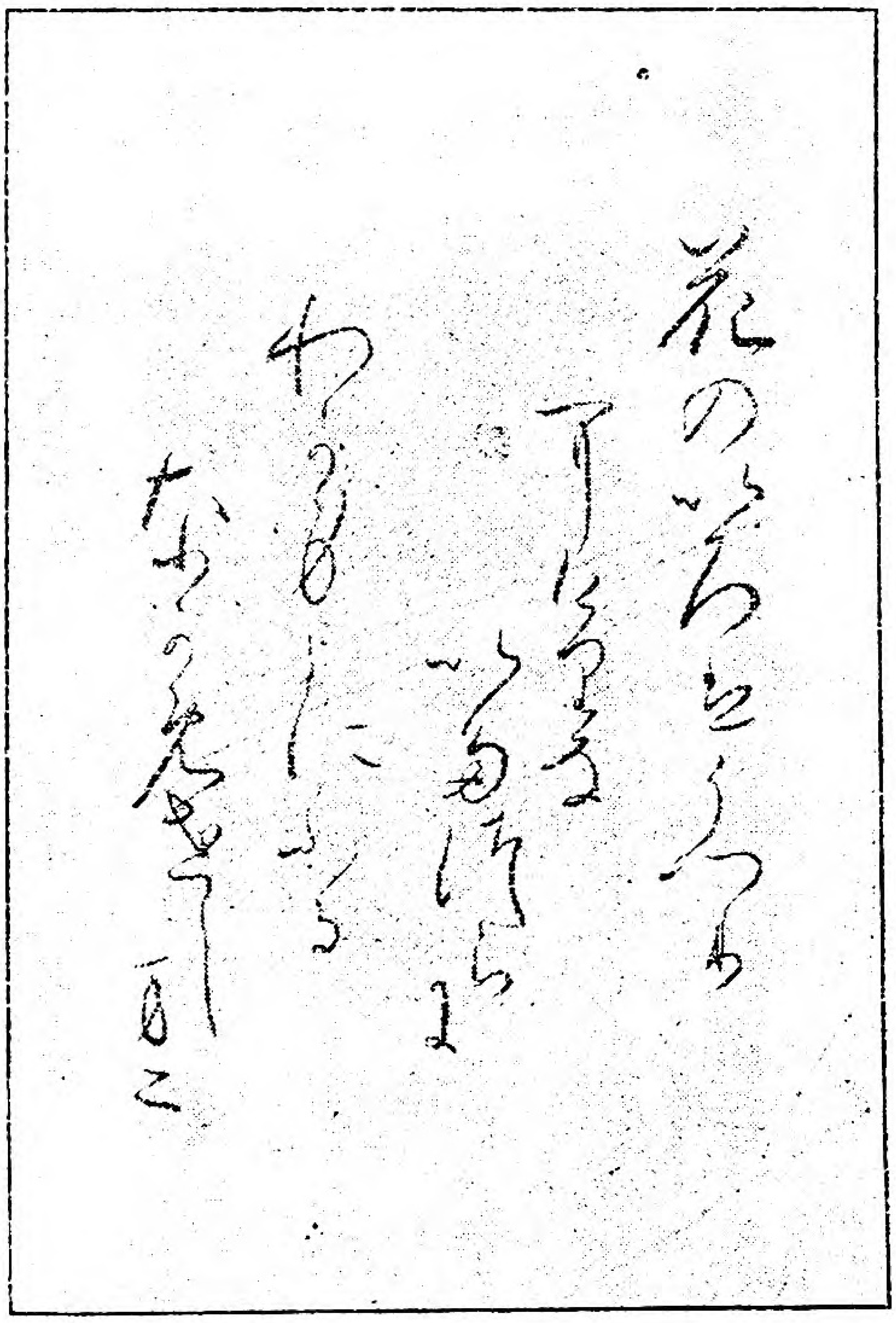
習へば斯くの如く直ちに上達する

本會獨特の特許速成通信敎授の方法にて練習すれば如何なる性來の惡筆にても最も短日にて上達すること全く機械的也

▼女子部の書者
小野鵞堂先生

▼男子部小學部書者
稻川雲谿先生
玉木愛石先生

外講師大家數拾名



二ヶ月目の清書 大阪市會員 枡田安子（見本 詳細會則無代進呈す）

東京本郷區大學正門前
電話下谷 三〇一一番
電話下谷 三二一〇番

帝國習字速成學會



荒川西班牙公使令孃きよ子
（東京女學館卒業）



伯爵山本海軍大將令孃
浪子（東京女學館卒業）

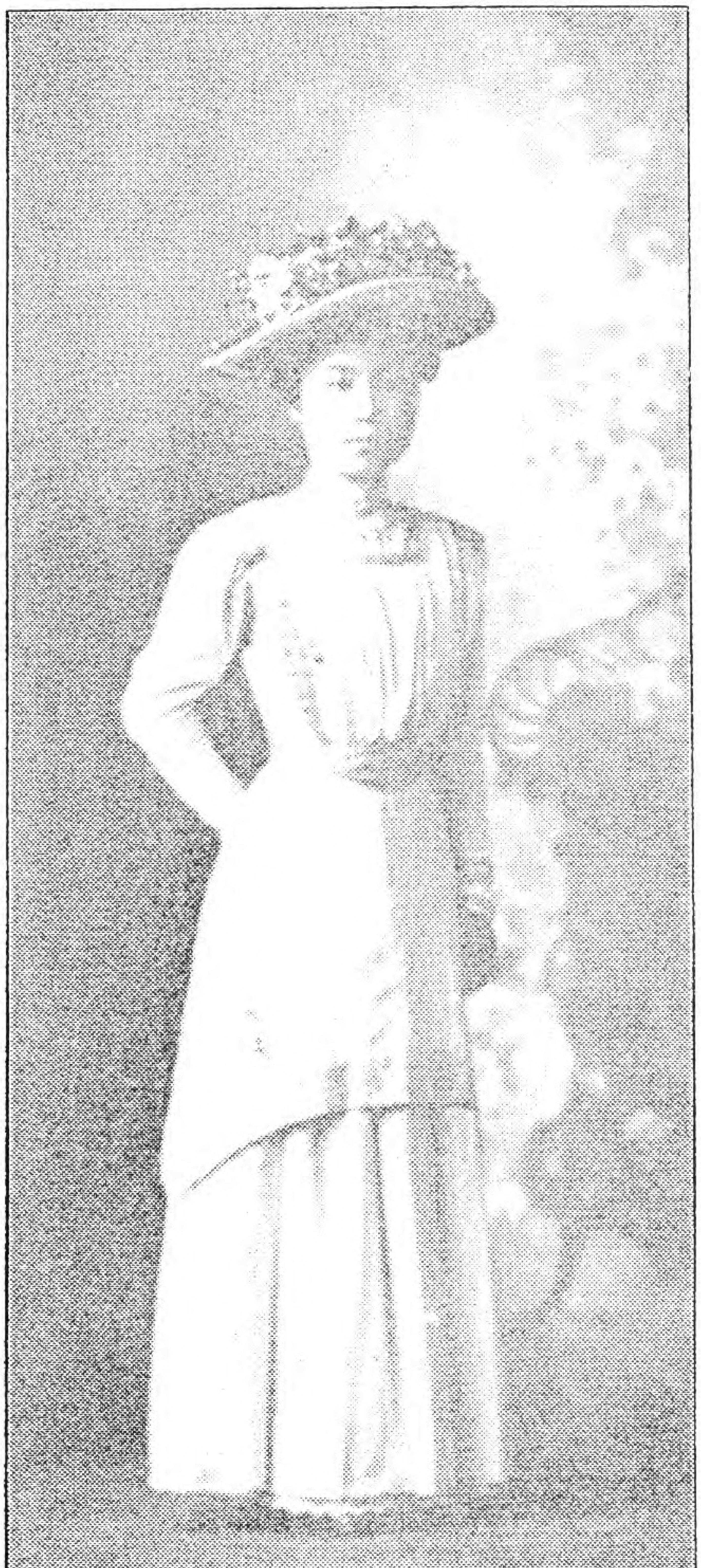


島津家々從木下時秀氏令妹ます子
（東京音樂學校卒業）

渡米せる婦人



在米國シヤトル　南てい子
（女子大學家政科卒業）



米國文學士二宮貞子
（本欄記事參照）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

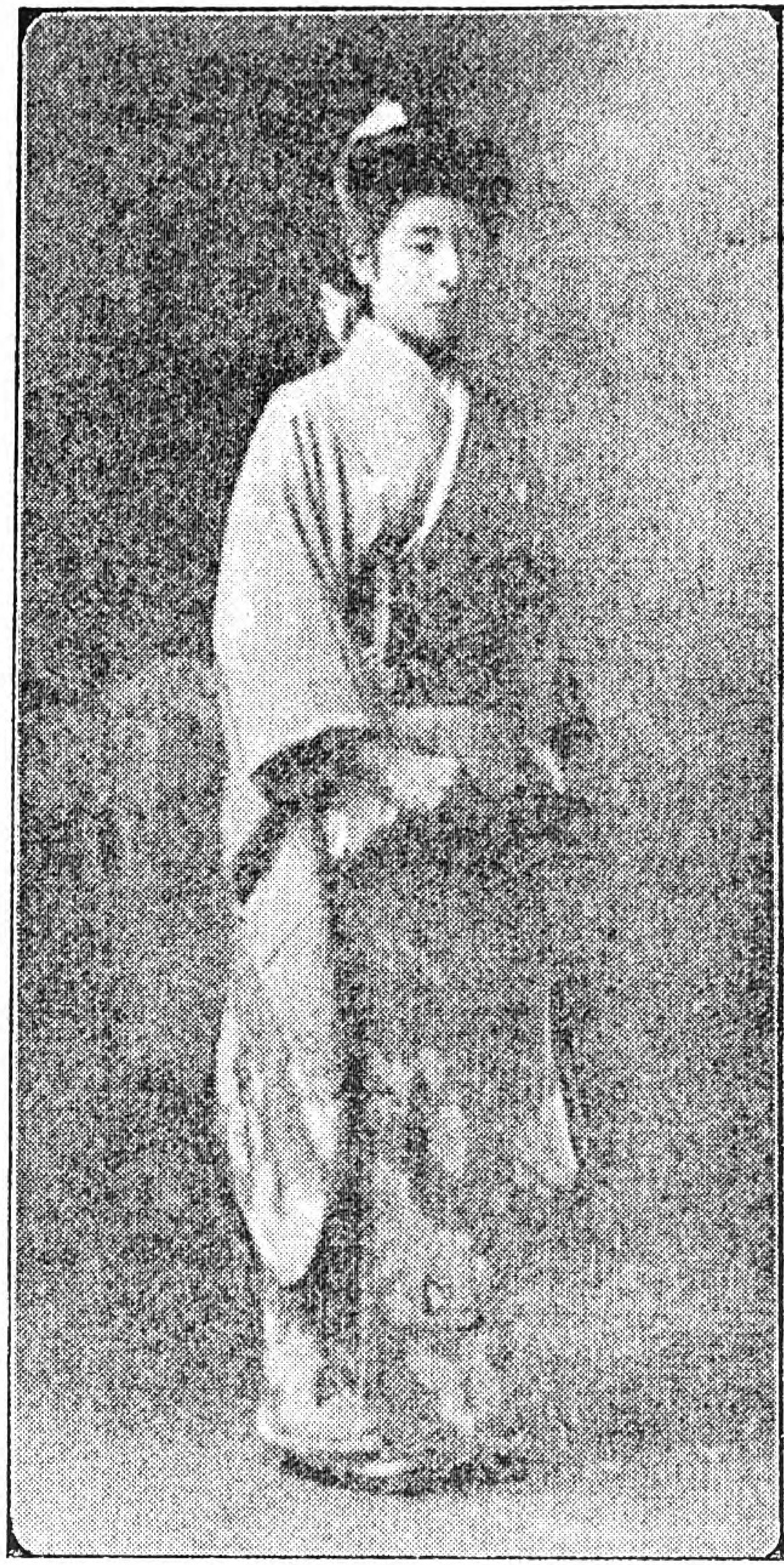




二見精華氏夫人令妹たみ子



宮下眼科醫院長令妹八千代子
（東京女學館卒業）



原六郎氏令嬢登世子
（東京女學館卒業）



大久保陸軍少將令弟唯氏と夫人君子（學習院卒業）



鐵道院技師小疇壽氏と夫人靜子



在米美術商高野矢一郎氏と夫人慶子（女子師範卒業）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶと〱肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◎ぶと〱ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◎ふき出物多き人◎脹滿◎ぶつ〱逆上腫等輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば色は艶白となり程よくやせて誓つて美顔窈窕たる美人となる事を保證す

諸嬢姉の福音



藥價 一劑一圓五拾錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◎世界唯一 **月やく下し藥**……見よ……病める婦人……月經なき女子

專門博士賞賛指導の新發見良藥

▲勿驚……藥力最強度……其効極て峻烈……有効無害……保險藥



本劑は婦人月經不順月經滯りは一二劑にて必ず流下す二三ケ月の月經閉止四五月以上又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖 東京京橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 **小宮愛生堂**

●らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治ノ病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不抜の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治することと到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貮劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を遂す。

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

●美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

記臆增丸

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進することと誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全快通に

流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及び惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢注意本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比 最新發明藥 あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去することを保險附

新發明にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛に除去し得らることを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へ全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去するものとす一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し、患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

以上五藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

●未曾有の歡迎を受けたる一大快著

好評 新刊

實例 心理治療秘訣

本書は最新の學理と多年の實驗に依り心理治療の秘訣を説きたるものにしてこれを實地に應用すれば如何なる病者も奇蹟的に治癒す今や空前の歡迎を以て斯界に迎へられつゝあり。

肺病心理治療法

▲右兩書共定價金参拾錢……切手代用参拾五錢▼

發行所 東京市小石川區大塚町三番地 心理療法研究會

●見よ！玆に確實なる美容法あり●

美容は婦人幸福の素、幸福たらんとせば美容法を講せざるべからず、世に美人法を説き美顔術を論ずるもの少なからず、然れども實行至難のもの無効有害のもの多し、

洋裝美本 全一冊 定價（送料共）金十五錢

實効確証 美顔新法

著者深く之を遺憾とし、歐米の圖書藥品等につき研究すること多年、終に或る藥品を以つて根本的に美容となるの秘法を究め、本書を公にす、本書記す所の秘法皆簡易迅速に行はれて、其効確實なるを證す、幸に世上有りふれたる無責任の雜書と同視するなく一讀其秘法を試みられん事を

▲切手代用一割増、振替送金一錢増

●發行所 東京神田猿樂町二の三 振替東京第一九八一 三英堂●

夢二畫集



春の巻 七版 定價五拾錢 送料八錢

再版と三版の時に、訂正をして新しい木版を入れた。繪の間に散文が入れてある

夏の巻 六版 定價五拾錢 送料八錢

これには新しい試みとして短詩が挿むである。印象を表白するにあたり、著者はいかなる形式によるかを豫め考へてゐない。氣の向いたまゝに繪になり詩になるのだ。

花の巻 四版 定價四拾錢 送料四錢

たゞもう美しければ好い。眞、僞、善、惡、汚、疲、それ等のすべてさへ美しくあり得る

旅の巻 四版 定價七拾錢 送料六錢

あの白い路は一體どこまで往くのだろう。まあ、歩いて往て見ようゆけども／＼果てはない……私はまだ、今日も白い路を歩いてゆく

秋の巻 定價五拾錢 送料八錢 近刊

發行所 東京麹町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇第四增刊

今の婦人

十一月十日發行

▲『今の婦人』を讀むと現代的の若い婦人は何んな考へを抱いて居るかと云ふことが分ります

▲若い人は若い人どうしで話があふやうに、妙齢の諸孃、若奥樣達は此雜誌を見ると何んなに深く其記事が胸に響くでせう

▲時代かぶれのした輕佻な態度は編者の忌む處です、無名の婦人が熱誠を捧げて書いたものは、假令激烈燃ゆるやうな文字でも、皆誠意が籠つてゐます、眞面目なる意味に於て進歩して居ます

▲本誌に載る女子の文章の自由自在なことは、常に誇りとする處ですが、增刊には殊に際立つて力のある文章が多い

▲一つの告白を書き、一つの經驗を語るも皆之れ優れて純潔な人格の反映ですから、僅に一冊の雜誌から受ける感化も何んなに大きいか測り知れません

▲要するに『今の婦人』は世の若き婦人方に最も親しき友情を以て相見えやうとするものです

頁 二百餘頁　口繪 數葉美麗　定價貳拾錢 郵稅壹錢五厘

東京市京橋大鋸町　女子文壇社出版　(振替口座壹七弐九)　賣捌 全國雜誌書店

名士の夫人



前大倉組英國倫敦支店長工學士門野重九郎氏夫人忠代子



正金銀行副支配人故西巻豊佐久氏夫人都兒子

誌友



（七尾）近江加能惠子

（山口縣）林あさ子と令妹

（香川縣）大西彰子、吉田幸子

（滋賀縣）山本たみ子、磨志緒子

（京都市）山口春枝子

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◉本號より畫報の紙數を増加せり◉

婦人畫報

十一月一日發行

十月の卷 一冊廿五錢

郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八拾八錢

畫報

▼湯の宿 中澤弘光筆彩色美人石版畫

▼珍らしき盆栽と金石……

▼朝鮮婦人の洗濯と女學生の彈琴

▼婦人の能狂言▼跡見女史應接室

▼母と娘の一日の仕事

▼大阪市愛信愛高女生の風俗其他

▼豐臣時代と德川時代の婦人風俗……

▼愛[illegible]婦人婦人同人神田婦人會慰問

▼泰宮内親王殿下の御歸京……

▼朝香宮兩殿下の御外出

▼李王殿下と同妃殿下

▼李太王殿下と同妃殿下

▼墺太利大使令孃結婚御下賜品

▼ウイルミナ、プール兩女學校……

▼令孃鑑▼二學士の新夫人▼後藤遞信大臣家庭

▼兩班の家族婦人外出中流下流の婦人

▼韓裝したる伊藤末松二夫人 和裝したる李朴二夫人

▼十月の挿花▼女學校の授業始め……

▼文部省開催音樂講習會紀念撮影

▼婦人矯風會員の水害地慰問……

▼名流婦人筆蹟▼樺太婦人會……

▼英國生になる日本婦人畫家の寫……

讀物

◎皇后陛下の御歌……

◎歐洲婦人と音樂……幸田延子

◎假名の上達する法……岡山高蔭

◎大阪京都の女學校

◎勇婦かつ女……遠山稻子

◎應接ぶりから見た貴婦人……

◎小兒衛生……弘田博士

◎危險なる婦人の思想……井上博士

◎慈善とは如何なるもの……小河博士

◎余が見たる朝鮮婦人……萩野博士

◎應用の才……下田學士

◎東京名物と料理挿花のたしなみ

◎忘れ得ぬ朋友のかずく……玉水

◎特色ある二夫人

◎新歸朝の米國文學士 古谷孃訪問

◎通俗婦人法律談……川名博士

◎能く働く信州の婦人……宮川すみ子

◎朝鮮婦人の長所と短所……三谷民子

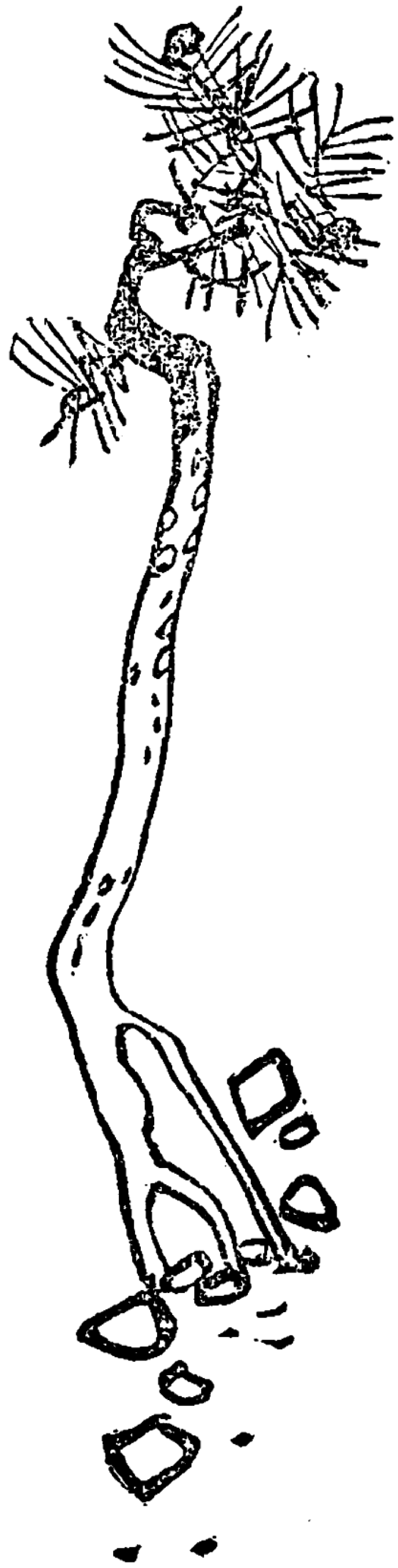
東京麹町區飯田町四丁目四番地 東京社 電話番町二三三九 振替口座二一一八一

女子文壇

第六年第拾參號



明治四十三年十月一日發行



世間一般の婦人に對して

子爵　秋元興朝

◎人は悉く非凡でない

從來からでもさうですが、とかく我國の男子にしても、亦女子にしても、非凡な人を以て自己の理想とする、それは決して惡い事ではないが、一面から見れば慥かに敎育の弊であると考へる、婦人が理想の人を云ふと、西洋では慈善家エリサベスフライとか、敎育家のメリーライオンとか、フロレンスナイチンゲールとか、日本では紫式部、清少納言、加賀千代女などゝ、まあ云つたやうに、多く普通以上に超絶した人物を標準として、敎育して居るのである。

勿論以上の人々は現世間に幾多不朽の敎訓を殘した偉大な、功績に富んでゐるのはいふまでもないが、餘りに、是等非凡な人を過信し、崇拜した結果、寧ろ學問の目的を過大にしはしないか、自然實世間に遠ざかつて行くやうな傾向になりはせまいか。

之等の人々は、自らならんと欲してなつたのでなく天から授つた天才である、先天的に與へられたもので

普通人の、たやすく企て及ぶ可き者でないのである之等の人の師表となる可き、人物を雛形として、只だ良いことをせよ〱と言ふ、雛形精神は、雛形精神を作るのであつて、この精神はあてにはならん、それよりも惡いことをしては、ならんと云ふ様に、敎育する方がよい。

　この現世に觸るゝことの高い、偉人を理想として、是等の人々の行ひを習ふと云ふことより、却つて現社會にあつては、生眞面目に遣り通すと云ふことを、主とした方が、人生必須の目的に適つてゐる。

　人間が此の世に生れ、偉いものになりたい、自分の名を天下に擧げたいと、希望しない者はなからう。併し名譽心の爲めに、惡意を起し、不道德な利益を得る人がある、これほどきたない、見苦しいことはあるまい、利益も道德の伴ふ利益でなければ、眞の利益と云ふものではない、同時に利益の伴ふ道德でなければ、眞の道德ではない、若しも道德の伴はざる利益によつて富んだものならば、それを眞の富とは云へない、また利益の伴はざる道德であつたならば、それは死せる道德である、道德の伴はざる利益即ち富なれば、それは決して賞すべきものでない。

◎正成と尊氏

此頃何にかにつけて、成功〱と云ふ言葉が流行るが、サテそれは如何なる意味に於て用ゐられて居るかといふに、多くは黃金を澤山に蓄ふる事が、出來たとか、顯要なる地位に進む事が得たとか、云ふやうな意味に於て用ゐられて居る、私は決してそれが成功でないとは云はないが、古人も曰はれた如く、不義にして富むはわれ居らず、不義の利は浮雲の如しで、又權勢なども成功の中に數へることが出來ないと考へる、もしもそれ等が成功であるとすれば、例へば元弘建武の間に於ける、正成の方は全くの失敗者と云はねばならぬ、のみならず、その當時に於ては、殆んど百戰百敗の極、遂に湊川の露と消えたのであるから、不成功の數に入るのであるが、併し今日に至るまで、正成を呼

んで不成功の人と云ふかといふに、さうでない、尊氏を名けて、成功の標本とするかと云ふに、またさうでもない。

◎自分の仕事を尊ぶこと

そこで人間は、自重と云ふ事を念頭におき、名譽を望むがよい、自重と云ふことは、自分を信ずる事である、自分はこれだけのことをする力がある、而して自分のするところの仕事は、貴い仕事である、自分はこれをする爲に、此の世に生れたのであつて、是を成就しなかつたら、人間として、役目が立たぬのであるといふ考へを以て、自分の職務に從ふのが自信である。自分の從事する仕事を、貴き仕事と信ずる上は、其の貴い仕事に從事する自分も亦、貴き人でなければならぬ、竟り自分を重んずる事になるのである、自重と高慢とは履き違へ易いものであるが、高慢と云ふ方は、自分を尊ぶと共に、他人を輕蔑するのであるけれども自重に至つては、それはない、自分を尊ぶと共に他人をも、尊敬するのである、むしろ他人に對した場合には、自分を謙るのである、何故ならば、他人も亦貴き天職を全うしつゝある事を信ずるからである、この心を以て、男子は男子の職務、女子は女子の職務を全うしたら、これ位ゐ名譽なことはない。

女子の職業と云つても、働く場所は矢張り家庭である、家庭が最も女子の手腕を要する所であつて、女子は實に家庭の女王である、卽ち良く夫の世話をし、子供を敎養し、家事を理めて行くのは、婦人其の者である、俗に嬰兒の魂百までと云ふが、母の氣質は其子に乳を飮ますと同時に、吸込まれるのである、又家庭に於ける感化は悉く子供に移るから、子供を見れば、直ぐ其家庭の趣きが分る、如何に良い着物を着せて、外形を隱しても、其下から直ぐ家の本當の性質は、子供の言葉、擧動に於て、白狀して居るのである。

◎私の妻は十四歳で來た

私の家内も、非常に子供の爲めに苦心して居つたの

であつたが、四十五を一期として逝去し、八月二十七日が、丁度五十日にあたるので、まだ取込んで居るやうな始末である、元々去る三十八年頃肋膜を病んだのが、今回發病の因で、其後はとかく四季の健康勝れず、醫師の力で今日まで居つたので、まだ四五年は大丈夫と信じて居つたが、昨年の九月より愈々ぶら／＼病の氣味となり一週間以前より、どつと床について、痼疾の腎臓に脊髄病までも併發した爲め斯く死期を早めた次第である。

十四歳の時に嫁して來たので、三十一年間は、私の爲めに片腕ともなり、良く世話をして、殊に私が二十六年から三十一年まで、英佛公使で赴任中は内外の事によく當り、良く盡し、寸毫も後顧の患なからしめた。



樺山大將別邸の庭園

子供と云ふても、たつた娘一人である。今年六つになる孫順朝と云ふのが居る、これは生れた日に奉天旅順が占領されたので、重野博士より順朝と名付けして貰つた、養子が英國に滯在中に、生れたので英子と云ふ、二人の孫が居るが、妻が逝去後淋しがつて時々尋ねるので、家の中がどこともなく火が消えた樣で、後四五年居つてくれたらどんなに幸福かと返へらぬくり言を言ふて居る。

要するに、一國の健全は、一家の健全が基であるし、一家の健全は一人の健全が基である。其家族の中の主婦たるものが、徒らに非凡な人物を理想とばかりしてゐて眼前の子女の教育、一家の始末を忘れてゐるやうでは、却つて學問の弊に陷つたといふものである。何處までも現在の境遇を自重して勤めねばならぬ。



朝鮮婦人の衣食住

男爵目賀田種太郎氏夫人　目賀田逸子

◎綺麗な朝鮮婦人の服

朝鮮婦人の服は色と云ひ仕立方と云ひ、實に單純なものですが、併し日本婦人の服に比べて勝つて居る點も澤山あります。夫れからその綺麗なことも、朝鮮風の御化粧をして紫、赤、黄、萠黄、淺黄、桃色などの衣服を着けた人が、五六人も立たうものなら宛然花が咲いたやうで、日本人のやうに金ばかり餘計に懸けて澁いとか凝つてるとか言つて嬉がつてる眞黒な服装とは、全く比べものになりませぬ。其地質はと申しますと、朝鮮の國から産出する織物と云つては、眞個にピラ／＼な羽二重、それに麻位のもので何にも出來ないのです。何んせよ京城と云へば、朝鮮の首府ですが、其市中は勿論、附近の田舍でも、機を織つて居る處は只の一軒もないのです。ですから、上流婦人の着物は悉く支那の織物を用ひます。夏ならば、紗紋、上等麻、冬ならば支那繻子と云ふやうなもので、どんな贅澤な人でも、亦何のやうに立派な禮服でも、是れより上等の品と云ふものはないのです。さうして色は日本のやうに、やれ櫻鼠だの、梅鼠だのと勝手次第な名

を附けた複雑ないろ〳〵の色なんぞはありません。大概は赤、黄、樺、萌黄、紫、海老、桃色、白、黒、鼠位なもので、假令どの様に年老つた婦人でも、又は外道のやうな醜い顔の婦人でも、髪の毛を眞中から兩方に分けて、鬢附油で額に捏ね附け、眞白に白粉を附けて、額上に紅を指して、上着、裳、上着の紐、裳の紐などに前に申したいろ〳〵の色を彩好く取合せて着飾つた處は全く綺麗です御世辭ではありませぬ。私の歸朝しますときに李址鎔氏から私に二着、子供(令孃信代子)に一着の朝鮮服を贈られましたが、上着は乳の上部までしかないので、裳を胸の上部から穿きます、さうして此裳の下には、肌に太い股引のやうなものを穿き、其上に中部だぶだぶに太く、下部のくゝれた股引を用ひ、更に白の長い



米國スミス女子大學の運動場

裳を穿き其上に眞個の裳を穿くので、どんなことをしても脛が現はれるの、車から落ちて腰が丸出しになつたのと云ふ不體裁はありませぬ、此點も遙かに日本服に勝つて居らうと思ひます。以上申した服裝は上は妃殿下より宮女 大官の夫人、官妓などに至るまで布の質に高下はないので只帽子の後方に長く垂れて居る冕(幅四寸位長三四尺)の玉などに、いろ〳〵あつて、夫れによつて身分の差を別つのみであります。

◎二階建がない

朝鮮では何のやうな大官の家でも二階建といふものはない、門は所謂長屋門で、門の兩方の長屋のやうに小さい家に、日本で云はゞ書生、彼方で云へば食客が置いてあります。家は内房と外房と別になつて居て、

男子は外房、女子は内房に住み、内房には奥さんの房室、女中の房室、隱居所などがあります、房室と云つても小さな部屋で、それは實に乾燥無味なもの、別に其國特有の美術品が飾つてあるでもなければ、遠來の貴重品が置いてあるでもなく、又朝鮮人に限つて、上下を通じて盆栽を好むとか、花を愛づるとか云ふやうな事が頓とない、だからその無趣味といつたら殆んどないのです。

◎寂しい貴顯の御室

私は或時李太王の御兄樣のお居室に參つたことがあります、今その御名を忘れましたが、なか〳〵勢力のある宮樣でしたけれど、其御室などには、矢張り是れぞと申すものがないのです。長い煙管が幾本も掛けてあるから、此中のどれが一番好いのですと伺ひますとこれが一番で、次はこれだなど〻御話になります、それから大きな團扇があります、これは何うして御遣ひになりますと伺つたら、これは一人で遣ふのではない傍らから煽がせるのだと申され、又日本の苅萱たわしに似たやうなブラッシのやうなものがあつて、夫れは着物の塵を拂ふものだと答へられました。それから内房の方に參つて、戸棚のやうな處を開けますと、天井裏が、土藏兼物置とでも云ふやうになつて居つて、此處に大切なものが藏つてありますが、これとても薄汚い暗い處で其中の品も大抵思ひやられます。家具の主なるものは、先づ衣服簞笥で、これには檜造りに眞鍮の金物を用ひたものや、蝶貝細工の塗物などもあり、朝鮮の物としては一寸雅致のあるものです。次に室の構造はと申すと何の室も皆こま〴〵して、而も高低が澤山にあります、これは冬期溫突で室内を暖めるには何うしても斯う云ふ構造でなければならぬのださうです。襖は大抵唐紙又は障子ですが、唐紙には縁が無くさうして革の引手が附いて、開扉になつて居ります、上流の家庭でさへ斯樣な麁末な構造なのですもの、他は推して知るべきです。一般の民家などの麁造は言ふまでもありません。

◎染物が上手

一般の婦人も、概して家事を整ふることが上手で、裁縫など右の示指の尖に、指貫を掛けて針を運ぶのです。私も眞似をして見ましたが、何うしても出來ませぬ、それに染物が大へんに上手で、衣服の色なども大抵皆自分の好みの色に染めるのです、女官なども、染色を盛にいたすさうで、折節手を眞紅にして居るものなどを見受けます、それですから朝鮮婦人に贈るには、反物なら白地のものが宜いのです。

◎人の前で小用を足す

貴婦人方を私共の官邸に御招ぎすることがあります爾う云ふ時には皆な駕轎に乘つて來ますが、御附の女中は足袋に草鞋を穿いて、駕轎の兩側に附いて徒歩して來ます。而して、女中達は別の建物に休憩させて置くのですが、若し主人の方に用があつて、呼び寄せることがありますと、女中は草鞋を脱いで、足袋の儘參ります、上流婦人の交際振は中々如才なく、殊に例の美しい衣服は、目の覺める樣ですが、爰に興の覺めるのは、卑陋な御話ですが、小用を達したくなりますと大勢人の見て居る前でも一向構はずに、一寸片隅の方に往つてさしこみ（朝鮮特有の婦人用便器）を用ひて用を達します。更に驚くのは、それを庭前だらうが何處だらうが構はずにシヤアーとこぼして、平氣で居ることであります。

◎青物を生で噛る

庭園を散歩する時に、茄子や、大根などが畑に成熟して居りますと、それを捥取つて、ちよつと土を拂ひ爪で皮を剝いて、生の儘丸噛りを始めます。それですから、若い奥さん達は、わらはずには居られません、私も可笑さを耐えながら、皆さんに笑つては可けませんと目顔で制しながら、急いでナイフを取寄せて皮を剝いて上げますと、皆喜んで、それを噛りながら、散歩をするのであります。そこに至つては朝鮮も誠に

未開な國だと思はせるやうな點が多いのでございます

◎菓子の上の眞黑な蠅

食物の話が出ましたから、序でに申しますが、朝鮮の蒸菓子と云ふのは皆新粉です、新粉を蒸して、青や赤や黄で毒々しい色を附け、夫れを四角や三角、菱型扇の地紙のやうな形などに造つて、上部に朝鮮の胡麻油を塗り、それに豆粉、黑胡麻、白胡麻などが附けてある、それをば箸で挾んで蜂蜜の中に一寸入れて食べるのです。けれどもこれには上が眞黑になるほど蠅が群つて居りますから、それを見てはとても口にすることが出來ませぬ。有名な朝鮮飴、チヤキ〳〵鋏の音をさせて肩から胸に荷を釣り下げて、賣つて歩きます。さうして一錢でも二錢でも、鋏で切つて賣りますのです、此飴にも蠅の糞が一面に附着して、其不潔さと申しては御話になりません、だから私は朝鮮飴などは、御土産に買つて來る人は罪人だと何時でも申すことであります。

◎眼を塗り塞がれたる花嫁

朝鮮の御嫁さんは、婚禮後、人を見るのが羞しいとの意味でもありますか、二三日の間目を閉いで居るのです。唯目蓋を閉いで居るなら未だしも、鬢付油のやうな油を塗つて、睫毛を附着せて仕舞ふのですから、耐つたものではありませぬ、馬鹿なことをしたものです。私が或處の婚禮式を、某夫人と一緒に見に往つたことが御座いますが、御嫁さんの服裝はと申すと、何のことはない日本のお雛樣です、それを見てから私はお雛樣が厭になりました。それからお婿さんは桃色の服に薄化粧をして、約束の帽子を被つて居ります。約束の帽子と云ふのは普通の帽子とは違ふので、つまり婚禮の約束濟みの人は、帽子を見たばかりで判るのです、お嫁さんは十四五でした、お聟さんの方は十二三ですから、約束をして置いて、半年とか、一年乃至三年位交際をし、其の間お聟さんはお嫁さんの方に泊りに往く、さうして雙方いよ〳〵宜いと云ふ處で、更に

眞個の婚禮の式を擧げるのださうです。

◎嫁入の行列

お嫁さんの行列は、お嫁さんが駕轎に乘り官妓が數十人附添つて、日本で申せば盆燈籠のやうな、赤や黄などいろ〳〵の提灯をぶらさげて、二列になつて進んで往きます、式中は前に申す通り、目を閉ぢて居るのは無論のこと、其儘舅姑へ對面があるのですが、此時には誰にでもお嫁さんを見せると云ふので、草履を手に提げた人が、庭前に一杯になつて押合ひ、犇合ひ、がや〳〵大騷ぎです。さうすると、本來ならば、愼んで居るべき筈の舅姑さん達が、又大騷ぎをして此喧騷せる見物人を制するなど、それは〳〵餘程奇妙です。さて、式が終つて別室に入



米國スミス大學卒業生の餘興

つてから、私共は外國人で、殊に式を見に來たと云ふので、大へんに鄭重な取扱ひを受け、モッと近く寄つて好く御覽なさいなど申されて、お嫁さんの手道具なども色々見せられました、が其道具と云ふのが、日本のボール箱よりは少し堅固なと思ふ位の粗末な箱で、中には簪、箱迫、懷中物、珊瑚珠のやうなものが入つて居ました、モウ此邊で歸らうとすると待つて下さい、御馳走を上げると云ふので、甘苦い人參のお湯に(人參湯は大へんに貴いものとして特に珍客に出す習ひです)例の新粉のお菓子、サア困つた今日ばかりは食べた風の瞞着も六ケ敷いと思つて居ると、二三の婦人は大きくては召上がり惡からうと云つて、親切にも立膝をして手摑みで小さく捥り、サア召上がれと云つて出されたには、ほと〳〵閉口いたしました、何故

ならば是等の婦人でお鼻をかむのは始終手洟ですもの

◎十三四の夫に十七八の妻

朝鮮の夫婦は妻の方が年長ですから、十三四の夫に十七八の妻などゝ云ふと、妻は夫のお守を始終して居るやうなものです。それ故若い時には夫がお菓子をねだつて、妻がそれを出して遣ると云ふやうな有様ですですから其精神上の關係が何時までも附いて廻るものか、年取つて後までも、朝鮮では女の方が一生懸命に働き、子供の守は男がすると云ふやうな狀態です。それから朝鮮人は、男女共荷物は手に提げると云ふことはなくて、頭の上に載せ、又は背中に梯子のやうにして背負ひます。又朝鮮人が子供の時は非常に悧發でも年の長ずるに從つて鈍になるやうですが、之も一つは頭の上にあまり重量を載せる爲めであるまいかと思ひます、併しこれは私の素人考へに過ぎませぬ。

◎鳳仙花で爪を染める

地質が日本とは全然違つて、砂交りと云ふやうな土ですから、前に申した貴婦人の大根や茄子の丸噛も出來るのです。いかに何でも、日本の畑に出來た大根では、洗はずに口にするといふ譯にも參りますまい。それに果實なども非常に好く實りまして、毛無桃などは日本では曾て見たことのないやうな大きさに、而も味の美いものが、十の花が咲けば十だけ完全に成熟します。柿なども枝の撓む程澤山に實ります、それに彼方では夕顔の實(瓢)を、桶や柄杓などの代りに使ひますが、それは〲大きくなりまして、驚くやうなものがあるのです。而も木や花に、害蟲などは少しも發生しませぬから、表皮に一點の傷も出來ませぬ、それですから私は此朝鮮の土地で花や果實を充分に培養したならば何のやうに樂しからうと思ひます。何分前に申しました如く、花などに對する優しい趣味は彼方の人には微塵もなく、宮中の御宴にすら、一輪の花も活けてない位ですから、今日の所では、花を培養して居る者などは、只の一人でもないのです。只鳳仙花だけは絞

赤、紫などいろ〳〵あります、そして彼方の婦人は赤い鳳仙花の花の液で、兩手の爪際を染めて、それを化粧の一ッにして喜んで居ります。

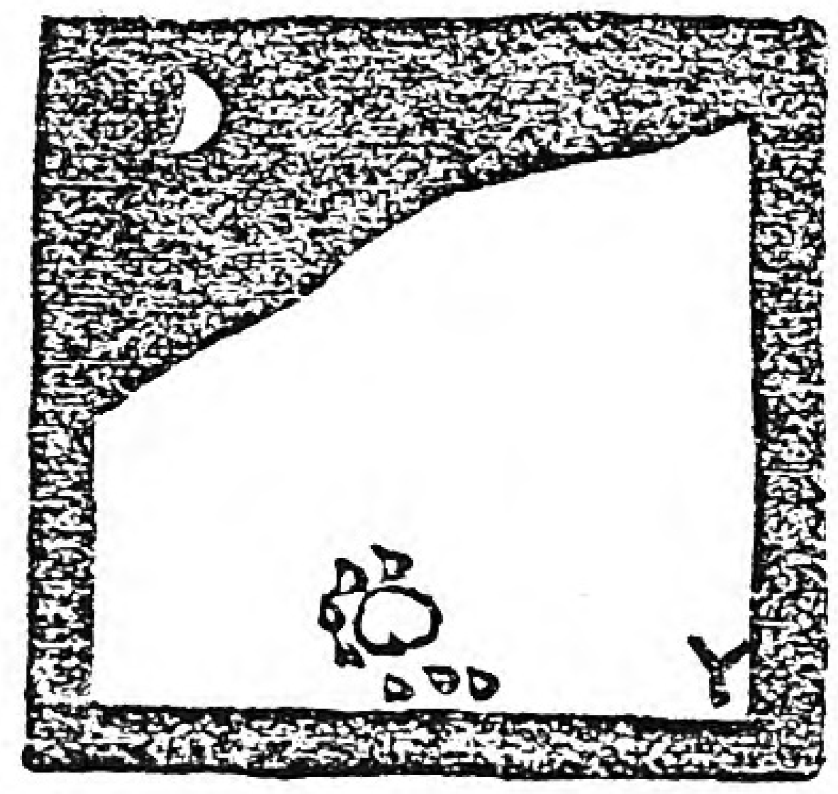
◎梳櫛が何より良い

何にしても今日の朝鮮は、總ての事が打棄り放しになつて居るのですから、日本にお土産を持つて來やうなど丶思ひましても、何一つありは致しません。これには皆さんも毎度當惑して御在でのやうです、併し私は一つ大へんに好いものを見出しました、それは梳櫛です。朝鮮の梳櫛は日本の小間物屋で賣つて居るものとは比べものにならぬほど上等でした、私は自分が非常の雲脂持ちなので、始終頭髪を苦にして居ります處へ、前に御話するやうな矢鱈に出歩くものですから、詰り斯う云ふ櫛を賣つて居る處を探し出したのですが五十枚買ふと大變に廉いのです、それは陰陽梳、角梳畫角小眞梳など丶名をつけてあります。朝鮮のお土産には櫛などは宜い方です。

◎栗は一年中絶えぬ

朝鮮では四時殆ど栗の絶ゆる時はありませぬ、ですから朝鮮の市中を歩くと、十二三歳の子供が幾人となく燒栗の店を出して居ります。其店といふのが、又風變りでして、例の土地は乾燥して居るのですから、地面に小さな孔を穿り、其中に炭を起し、日本の鼠落しの中に、鬼皮だけを剝いた栗を入れて、火の上に架けて、搖かしながら燒いてゐます。それが大變に廉くて五錢も買はうものなら澤山あります、朝鮮には栗が澤山出來る上に、空氣が乾燥して居ますから、其保存にも骨が折れないのでせう、それ故勝栗なども澤山あります、栗のうちで一番甘味いのは平壤栗で、日本の柴栗に同じやうな小さな栗です。私は此栗を此方に持つて來て蒔きまして、今では大分大きくなりました、が日本の土地では何う云ふ風な實を結びますか、多少違つたものが出來るだらうと、樂みにして居ります。

▲記者曰、朝鮮に就いて婦人方のお話も澤山伺ひましたが、右の目賀田令夫人のが尤も面白いので、時事新報から其一部を轉載しました。



天使と仰がれたる婦人の模範

日本女子大學校教授　村田勤

フロレンス、ナイチンゲール孃の臨終は八月十三日午後二時だつたとの事であります、日本に傳はつたのは翌々日で十六日の新聞に出てゐます、私は豫て執筆中の同孃の傳記を十四日午前十一時に脫稿したので、時間で云ふと僅かに五六時間違ひ不思議なやうです。もういろ／＼詳しく外字新聞に出て居りますが、亡くならるる數週前からどうも身體が常のやうでないと云ふので、サー、トーマス、バローと云ふ名國手が附き切つてゐた、ところが大分よくなつて死ぬ一日前、卽ち十三日の金曜には餘程氣分が清々して、もう直るのかと思はるゝ程であつたが、其の晩から又病革り十三日の朝八時頃になると親戚共も集り、二時頃瞑るが如く逝いた、齡は九十年と三ヶ月だと云ふ事です。御承知の如く此人は、クリミヤから歸て來てから病み臥しました、最初は疲勞したのだらう位に思つて居たが三月休んでも半年休んでも一年休んでも、よく直らない、遂に其儘病累の身となつたのですが、其の病源は一つには其の體質にもよるので、其の身は英國では中流の上位の處にあつて、元來生れだて華車なのにもよつたのでせう。其れと其の戰役中マラリヤ熱にかかり、一度は危篤とまで報ぜられたのですが、不思議に恢復しました、しかし其の病氣が又一つの原因となつてゐる、其れから滿二年程其の虛弱の身を以て過度の勞働をやつたと云ふ事が最大の原因を占めてゐるので、この三個の原因が集つて、一千八百五十六年八月十五日英國に歸つた三十六の齡から、床に就いた切りで、再び健康體には復せられずに、今年で五十四年の間、ベッドに居るか、ソフアに居るか、兎に角一室を

出づる事が出來ない位で暮されたやうです。

しかし不思議な事は、病氣になつてから身體などは肥滿して來た、或は癱瘋だつたらうかと云ふ位で、それが兎に角よくなかつたさうですが、頭腦は明晰で興味が廣く、寢床に居ながら世界中の赤十字社の事業、英國の海陸軍の衛生の事、公衆衛生、萬國病院の衛生などの事が分る、教育家の所謂興味の多い、同情の深い性格でした、其生涯中書かれた論文數種と、二冊の書籍とは皆ベッドの上に成つたのであります。

近世の戰爭中クリミヤ戰爭程悲慘なものはないとせられてゐる、と云ふのは戰地で斃れる者の十中の九までは病死であつた、當時英國の軍隊の平均は約二萬九千人、平生其地に駐在してゐるものが一萬一千六百五十二人で、其中で一萬五千三人死んだ、それが或は虎列拉、或は赤痢、壞血病、猩紅熱などで、兎に角陸軍衛生隊の方では容易ならぬ失態を來したのである、始めの程は宜い加減に本國へ報告したものですが、ロンドンタイムスで素破拔かれて狼狽し、是れは何とかして輿論の攻擊を鎭める工夫を爲ねばならぬと云ふ一方法として、看護婦隊を組織して出すと云ふ事になつた勿論其の以前から看護卒と云ふものはあつたが、醫者の手傳には餘りならぬ、かやうに一向病人の心得のないものを病院に使つてゐたものと見える。

當時同盟軍の佛蘭西の方では、看護婦を戰場に送ると云ふ事も既に行はれてゐた、それはカトリックの尼さんなどの事業でしたが、兎に角英國に比べると餘程進んでゐたが、何分英國では前古未曾有の事で、此議が建てられた時國民共は其れに又一驚を吃した、しかし時の陸軍大臣シドニー、ハーバードは信ずるところあり豫て相識なるナイチンゲール孃を一切の總監督者として擧げた、孃は是れまで其の知識も有し識見も備へ、佛獨の諸國に行つて學び常に此點について英國の後れてゐると云ふことを慨嘆してゐたのです。

いよ〳〵孃の一行が戰場に行つて活動した結果の成績を簡單に云ふと從來百について六十と云ふ死亡率が內部整頓した後には百について二強と云ふ程に減じたので、其れ丈け見ても非常な成功と云ふ事がわかる。勿論それには方法宜ろしきを得たからでもあらうが、又一つには普通の雇はれ人のやうではなく精神誠意を盡し、更らに物質上から云つても自分の私宅のものまでも打ちこんでかゝつたのですから、初めは如何かと危ぶんだり輕蔑したりしてゐたものが、醫師と云はず

人民と云はず、悉く敬服して、ナイチンゲールの名聲は一度に高くなつたのである。

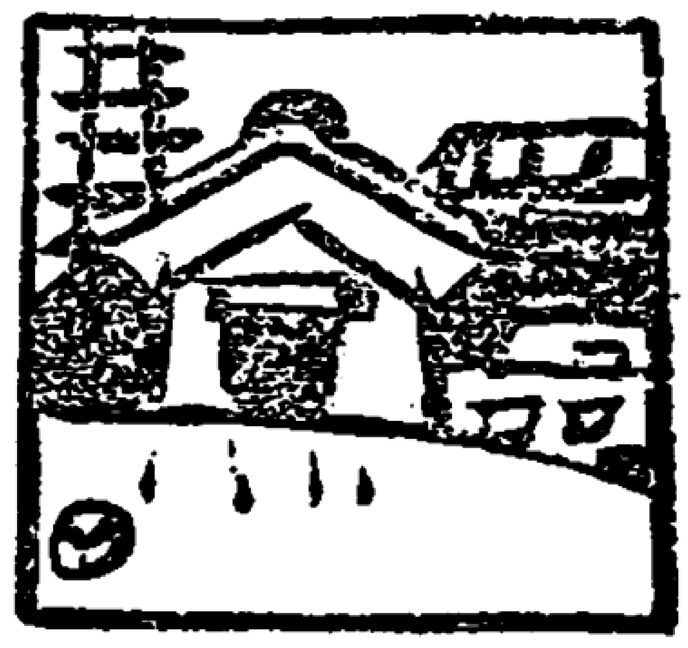
　しかしこの人は非常な陰德家で、わざ〳〵軍艦を出して迎へやうとしたにも係はらず、名をかへて佛國の船で、人の知らぬひまに歸つて了つた。さう云ふところも亦一層其の德望を高からしめ、面會せんと欲して押しかける、其の近邊を彷徨つく、と云ふさわぎであるが、誰れも其の人を見たものがない、さうすると猶ほ〳〵慕つて來ると云ふ有樣であつた。

　亡くなられたのは倫敦の西區パークレーンの南街の邸宅であつたさうです、其の邸宅を尋ねた方に、日本では石黑男爵、松平乘承子爵、津田梅子、安井哲子など云ふ方があります、赤十字社の小澤副社長の行かれた時は餘程惡るくつて會へなかつたさうです。

　葬式の事はこの新聞に詳しく記されてゐますが、二十日の十二時セントポール院で行はれた、セントポールはウエストミンスター、アベーに次ぎ世界でも有數な大寺院です、同孃の精神に從つて質素にし曠れがましくは爲なかつたが、いかにも莊嚴な式だつたさうです、それから又田舍の東ウエローの墓地に葬ると書いてあります。

　其式には勅使や宮さま方のお使ひなども立つ、先帝エドワード七世の后アレキサンドラ陛下のも見えてゐます。柩を舁いたものは近衛兵の屈強な立派な人々でした、花環は擧げて數ふる事は出來ぬ、兎に角花環丈けを滿載した馬車が二臺あつて、弔詞を書いた手紙をリボンで括つてある、其れには皇帝陛下の御宸筆のもあるのです、各國から使節は參列する、弔電も多い、日本陸軍軍醫部を代表したもの、それから日本赤十字社からの弔電もあつた、クリミヤに緣ある土耳其からも無論來てゐる。

　要するに此人の一生涯は全く獻身犧牲の精神を以て國家人類の爲めに活動し九十年を送つた、クリミヤの役が終つたのは一千八百五十六年、其後八年經てから一千八百六十四年八月ゼネバで萬國赤十字社と云ふものが結ばれたので、悲慘の黑影を以て封じた十九世紀の歷史中かゝる光榮ある黎明を見るのも其の遠因としてたしかに孃の功でありませうが、その榮冠をいたゞき檜舞臺を占めて、天使と仰がれ、美しき名フロレンス、ナイチンゲール、譯せば花の都の鶯と謳歌さるるは、功勞も功勞ではあるが、一方から云へば又好運な人であつたとも云へませう。（談）



女中も使ひやうで働く

工學博士辰野金吾氏夫人　辰野ひで子

◎經驗談の利益

當節は雜誌などにも誠に立派な家庭のお話が見えるやうでございますが、何うも宅などでは、私が行きとどきませんものですから、お尋ねになりましても、別にお話申やうな事もございません、本當にお恥しうでざいます、却つてお載せなさいますと、襤褸が出る位のものでございます。

それこそ只今の教育をお受け遊した方は、世の利益となる事でございますから、家庭の改良とか、又衣服の改良とか、部屋の裝飾、割烹から交際に至るまで、種々な事をお教へ下さいましたら、宜しうございませうね、さう致しますと、新しい事を知らぬ者には、大層な利益となるのでございますからね、世の中には家庭の事や、子供の教育を致します上にも、隨分困つて居る人もあるのですから、本當にさう云ふ人々に對しては、恩人でございますよ、私などが皆さんのやうに何んでも出來ますならば、それこそどん／＼と申上ますが、どうも無い事は申上られません。

◎下婢は上手に使へ

或る奥樣などが、何時も下婢の爲めに心配すると申されますが、私はたゞこれだけには、今日まで心配したことも、また下婢が滅多に入れかはりしたこともございません。

この下婢を使ふと云ふ事は、何でもない樣ですけれ

ども、非常に骨が折れるもので、同じ使はれる身にしても、唯譯もなく牛馬の樣に働かされて、何の慰藉もなく箸の上げ下しにまで、叱り通される程、つらい事はありませんでせう。隨つて主人との折合は惡く、自分も不愉快で日を送りますゆゑ、長い月日の中には自然と、主家の秘密が世に持出されるやうな事も起るのでせう。

それを上手に使ひ廻して行きますと、下婢達は喜んで働きますし、臺所に洗ひ流した米の一粒でも、主人の爲を思ふて拾ふ樣になりますから、一家の經濟の上から見ると非常の得になります。

私は下婢達に對し、一策として次のやうな方法を設けて、多年實行して居ります、家庭も至極圓滿で、下婢達も本人が一家を組織するまでは、使つて貰ひたいと云ふ風でございます。

◎紙屑や空瓶の始末

何も構はぬ家では、下婢までが紙屑といふ紙屑等は一括めに圓め込で隅の方へ投やつたり、往還や庭先へ殊更に掃き出して、平氣でゐますが、こんな事は自然主家の物を粗末にすると云ふ念を增す計りでなく、衛生上並に外觀上の不體裁ともなりますので、私どもでは一々拾ひ集めさせて、屑籠に入させる、そして一杯になつた時、屑屋にやつて代金は下婢達の所得にするので、一擧兩得ではありませんか。

何時となく、客が多いものですから、ビールなどの空瓶もたくさんに出來ます。これも拂下げた代金を、所得にさせますので、要は物を大切に保存すると云ふ事になり、其結果一皿一枚一本の上にまで及ぼして、滅多に破損すると云ふ事がなく、竟り破損し易いものの取り扱ひを叮嚀にさせる一策です。

こちらがそんな風にして、やるものですから、下婢達も何にかと考へて、臺所履きの下駄や、たわしや、さゝらなどを求めて使用してくれますので、まことに好都合でございます。双方ともに利益を得るといふ譯でございます。

◎來客の前で叱るな

よくお客の前で、取次のしやうが惡いとか、茶の出し樣が宜くないとか、障子の閉てやうが緩いとか、それは〳〵、一々御構へなく小言を仰有るのを見ますが如何に使はれる身でも、餘りお客の前も構ひなしに言はれては、中々堪へらるゝものではありませんからね一家の家族ですもの、親切にしてやらないのが間違ひです。さうでないと奉公人根性とでも申しませうか、直ぐに退るやうな事になるので、双方の損は此上なからうと思ひます。

　食物です、これもよく世間にあることで、下婢だから漬物丈でよい、副菜はいらないと、それは〳〵甚だしい所があります、區別も或る時は、せなければならぬ時もありますが、主人だから、下婢だからとて、同じ人間、同じ口ですもの、うまいものはうまいにきまつて居ります、宅などは主人などは時として別にすることがありますが、まあ大概は均等にして居ります。

◎指圖は一度、後は下婢任せ

それに一度、臺所に出て指圖すると、後は下婢の氣任せにしておきます、私も手數が省けて凡ての都合もよく、樂でございます、斯く申ますと樂する爲めにと云はれるかも知れませんが、一つ〳〵あれもこれもと指圖される身になつたら、さぞ苦しからうと思ひまして、それに仕事なども落付いて出來ます。

　毎年暮になりますと、家内が多いものですから、餅を一石五斗位つきますが、元旦にならない内から食べたい丈食るがよいと申して、ついた丈出し放しにしておきます、正月になると餅が厭になつたとて、書生などが食べない事があります、人間は幾程食べると云ふても知れて居ります、それに病的のものは例外ですが、通常の人には限られて居ります、奉公人に食物をケチ〳〵するほど、苛酷なことはありません。外の事は兎に角、食物のことだけは、眼をかけてやらぬと、却つて弊害があるやうに思はれます。



米國スミス大學を卒業して歸りたる感想

パチエラー、オブ、アーツ　二宮貞子

◎十七歳で洋行

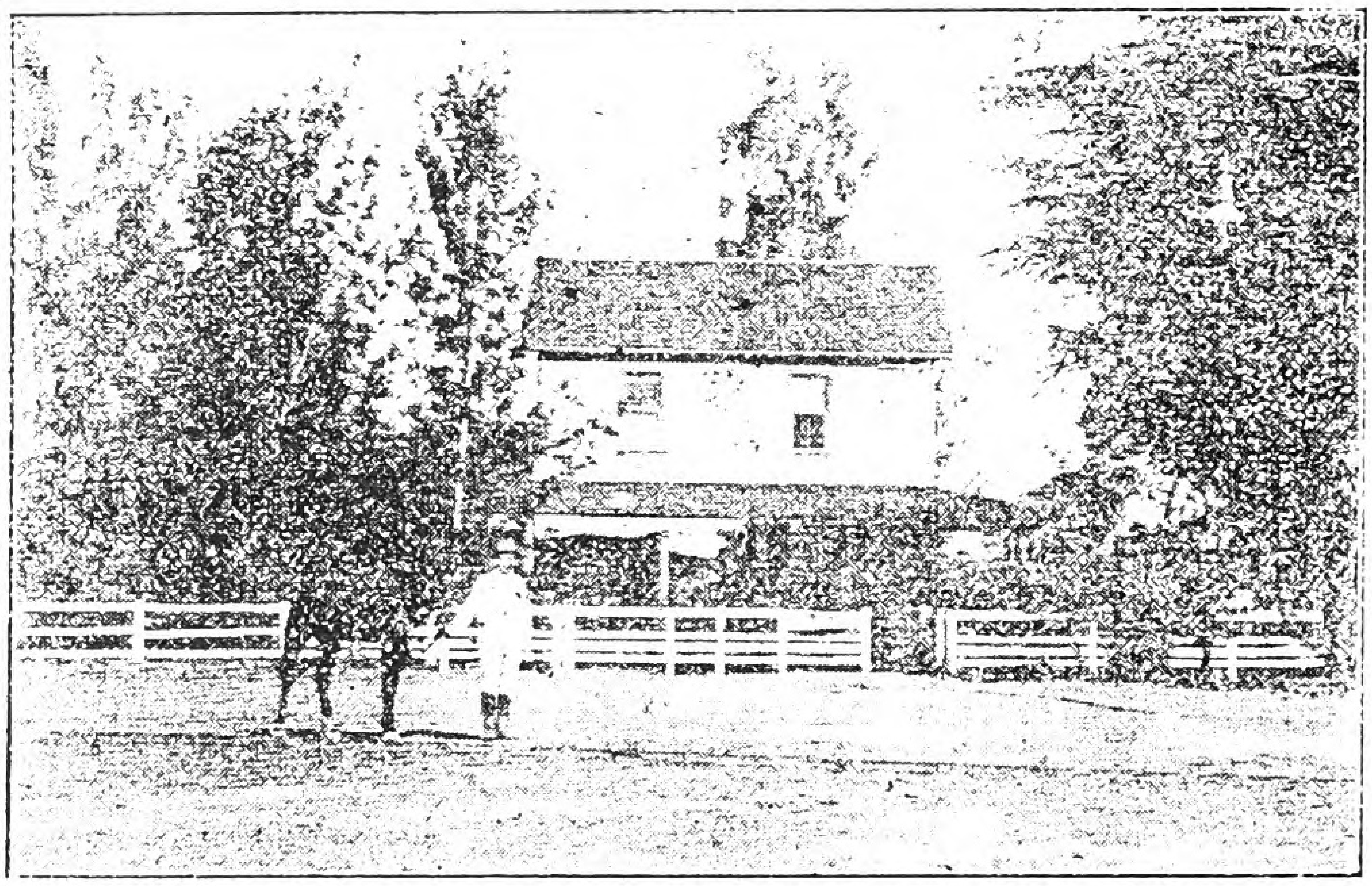
私は今を去る八年前に、父が松山市に經營して居りました松山女學校を卒業し、(十七歳)其夏父と友人の方と共に渡航し、ボストン市の矢張り父を知人のお宅に一箇年たらず、彼地の風習並に語學の研究する爲めに居りました。十八歳の時に郊外の高等女學校に入り卒業後はボストンより百哩距つて居りますスミス大學に入學しました、この大學は三十五年前の創立ですが在學生は千七百餘名、今年の卒業生は三百六十名で、卒業生はみな同一の、パチエラー、オブ、アーツの學位を授けられて居ります、米國で最も大なる學校の一

◎女學生も行け

洋行中のお話でございますが、無頓着なものですから、一向に珍らしいお話もございませんが、私は日本の貴婦人方に何卒、一度海外へ漫遊して頂き度いと切望致します、それは彼地の婦人に接し、趣味を養はれ度いことゝ、今一つは、日本婦人の高尚優美な模範を示されて、外國人に深き印象を與へて頂き度いことです、それから女學生の方にも、ドシ〲彼地の學校に入學して、外國の學術の趣味を養はれ我國の婦人からも、心理學者や、農學者、植物學者などが續々出るやうになつて頂き度いと思ひます。

つに數へられ、生徒を百人宛入れる寄宿舍七棟と他の公認下宿とでもいふやうな寄宿舍が校外にあります、これは例へ金がなくとも、伎倆さへあれば、自活の出來るやうに、種々の團體から組織されて居ります。私もこの方に寄宿して、各方面から招聘され、得るところの酬報を宿費として居りました、寄宿費は一箇年三百五十弗から、月謝は一箇年百五十弗です、特に出來の良い生徒は月謝は免除される、私も月謝は免除されて居りましたから、樂でございました、四箇年の星霜を夢の間に終へて、今年の六月に卒業したのでございます。

◎苦學しやうと思へば出來る



布哇ソイパフ耕地事務所　布哇　上土井定子寄

スミス大學では、日本人として私が始めて卒業したのですか、校長などは此後日本からも續々入學生があるやうにと申されました。

日本と違つて、苦學しやうと思へば、どんなにでも學費の道がります、それに彼處此處に種々の團體が組織されて居て、自分の精神一つで學費を得ることがたやすく、それに夏休みが六月中頃より九月中頃まで三箇月間ありますから、此間に海岸に組織される團體や、山に組織される團體などに入りまして、報酬を得ることが出來ます。この三箇月間に半年位の學費を得る人がいくらもあります、誠に好都合に出來て居ります、日本にもこんな團體が組織されて、苦學生に十分學費を得る道があつたらどんなに幸福かと思ひます。

只だ入學の時に六ヶ敷のは語學です、語學が備はつてさへ居りますと、試驗だとてそんなに六ヶ敷ことはありません、語學もやはり彼地で一箇年ほど、實地に硏究した方がよいと思ひます。

◎米國は居心地が好い

一寸人の家を訪問しても、居心地の好い家と、惡い家とがありますし、必ずしも厚遇をうけなくつて、何となく居心地が好く、頻りにご馳走されても、何だか尻の落付かぬことがあるものですが、彼地に居りました間は、決して何づれの家に參りましても、そんな區別を感じたことがありません、それは何に原因するのであるかと思ひますと、米國婦人が交際に行き屆いて居るからで、今に始まらぬ事ですが、全く上手でございます。彼地に八年も居りましたが、日本だからとて決して區別がありません、之れが何より異國に居つて嬉しく愉快に感じたことでございます。身體のことに就ても、細かに注意してくれるから、少しも異國だからと云ふ、不自由を思ひませんでした。私計りでもございませんが、この何にても區別されると、自然人間が僻むものですが、それがそんな感じなどを、決して起させない、實に交際が上手な結果であると感心しました。

◎大學附近の景色

大學の附近の景色は米國でも有名な所で、亭々として雲を摩する喬木が晝尙暗き林を作り、鳥も通はぬ幽境が多い、低い山にはクロチとか申す鳥が、よく遊ぶのを見ました、其間の奇巖絶壁と申したら、何に喩へやうもございません、誠に仙人の門とでも申すべき處が多うございます、日本の景色といふものは、すべてピクチユアーデスク的のものであると思ひます。

水引の赤三尺の花ひきてやらじといひし朝露の路
秋霧や林の奥の一つ家に啄木鳥飼ふと人をしへけり
秋の水なかの島なるおん寺の時鐘うちぬ月のぼる時
秋雨は別れに倚りしそのかみの杜の如くなつかしきかな
秋の風きたる十方玲瓏に空と山野と人と水とに

晶子作『まひ姫』より



帝國圖書館の婦人室

長曾我部菊子

入場の切符を賣る小さい出札口から爺樣の黒い顏が見える。不圖私は可笑しい事を思ひ出した。其れは一昨日の事で、其れまでは一回一回の切符で入つて居たのだつたが、今日は十回分買はうと思うて、
「十回分を下さい。」
と云つた。お爺さんは、默つて十回分の紙を押し出した。而して、
「この使ひ樣は解つてゐますか。」
と問ふた其眼は暗い眼で、癇の強い光を持つて居た。一回分のと別に變つた事もあるまいと輕く、
「はい。解ります……」
而して手に持つて行かうとすると爺樣は、大聲で、
「不可ん。不可ん」
と咎めた。
「其れお見なさい、知らんで居つて知つてゐると云ふてゐるのだ。」
「御免なさい。それなら如何しますか。」
「それだから初から言はぬ事ではない。あんたは知つて居る。解つて居ると云うた……。」
癇癪持と見えて、くどくど云つたがけれども深切に敎へて呉れた。其愛すべき爺さんが今も居た、私は、入らうとして目禮すると、お爺さんも目禮を返した。

婦人室には、十二三人程入つて居た。思ひ思ひの場所に椅子を取つて居た。私は中央に腰を掛けた。可愼し相に差し俯いて讀んで居る女もある。胸を廣げ肩を張つて讀んで居る女もある。私は、此の女達が何を讀んで居るので在らうかと一寸好奇心を持つた。隣に居た女を見ると、表紙の古くくすんだ、生理書の系圖のついたページを頻と見詰めてゐる。

その隣は代數の書物の樣だつた。私の向ふに居る女は、英語の書物を二冊借りて、其の一冊を筆記して居た。さらさらと輕く鉛筆の走る音がする。然し此人達は、試驗の爲に此處へ勉强に來て居る許で、專門に何かを研究てゐるのではないかと思ふた時、何としても女の學問といふのが、今の場合淺薄だと考へられてな

らなかつた。

然れども凡て此處に居る女達は、電車通の呉服屋の紅白の織物に目を迷はすやうな、公園の樹影を紫の洋傘を窄めて、足許を見詰めて行くやうな誘惑はれ易い表情も、囚はれたる柔順の態度も持つてなかつた。互に口を開かなかつた。物音をさへ立てなかつた。讀むのに倦いてさへそつと忍足に窓の方に倚つて、其の高い窓から、外を圍む青葉が、さやさやと風に亂れるのを茫乎とした心持で覗くばかりであつた。

窓から差入る光線は柔和で纖弱で、讀書の眼に心地よい程の強みをもつてゐた。

室の入口の圖書目錄を据付けてある方卓から、長方形をした此の婦人室の果を見やると、隨分遠く見える。最はづれに讀んで居る女の格好の好い――わざと崩れさうに結んだ髮の形、頸の邊の美しく目をひく、私は例の茫然と見惚れてゐた。

と、脊の高い女が立つた。二卷の地名辭典と何かの地理書籍とを重たさうに抱へて居つた。それで私も初めて、借り出したい書物の名を書き記して、婦人室を其女について出て行つた。

入口を出て左に入ると、特別室である、其處には、さしも集れる二百許の人もたゞ寂然として、鉛筆の走る幽な響、ページ繰る音の外には咳の聲さへしなかつた。勿論若い學生が多數ではあつたが、西洋人も居た髯の美しい年輩の人が相並んで數理書を渉獵して居たあらゆる學問は、あらゆる精神階級の人にくりひろげられくりかへされてゐる目醒しさ。

脊の高い女は顔を眞直にして其中を通つて行つた。私は其後から歩いた。

書物の出入をする人は、黒い服を着て高い卓の向ふに居た。先から來て其處に立つて待つて居る男があつた。

「高島さん――。」

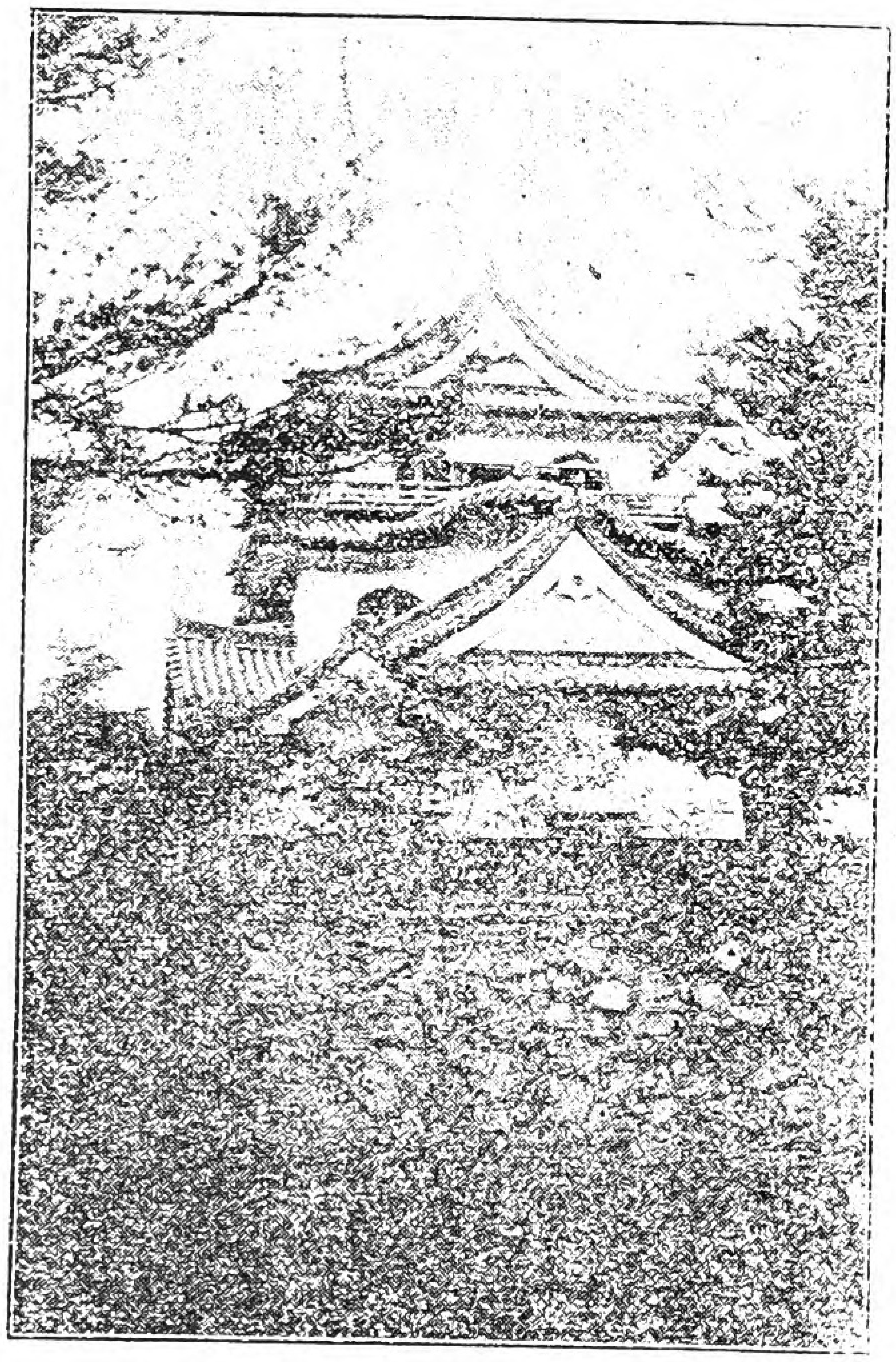
と呼んで書物を渡すと其男は靜に席に歸つて行つた。女は地名辭典を卓の上に持ちあげて、渡して置いた紙を貰つて、高い卓に少し肘を凭せて、何か更に借りる書物の名を書き記して差出した。別の手に小さい罫用紙の片に何か書いたのを持つて居た。それが、ちらと私に見えた。田山花袋――島崎藤村――國木田獨歩――と横に書いてある、小說を借りるつもりかしらと思つて、其顔を私はぢつと眺めた。

私も其の女も暫くの間立ち盡した。右の方の、筆記ばかりして居た男が、疲れた眼を私等にそゝいだ。頬と居睡をしてゐた八字髯の人が、その隣に頭をこくりこくりさせて居た。

カーキー色の窓おほひの下をくゞつて、風がそよろと入るともなく吹き入つた

過度の心の勞働に我身を我身とも思はれぬまで疲勞れた時、私は地下室に降りて行つた。――食堂は其地下室にあるので、私は、甘味いやはらかいパンと、香氣をもつて熟しきつた紅い林檎とを求めて、快い食慾の後に、更に働きを續けやうと思つた。

袴を着けた若い學生が上つて來る、摩違つて階段を降りた、電燈は、瞬くやうに搖曳する樣に、私の疲れ傷んだ心靈を沁々と照らした。白い兩方の壁が美しく浮き出した樣に暗光色に染んでゐる。



近江彦根城　彦根　佐和田しよ子寄

私は、パンと林檎とを手に持つて、薄暗い地下室を曲つていつた、此世の色とも思はれない、靜な、安かな、柔い電燈のぼうと光る食堂の椅子によりかかつたと、其處には、一人の女が、食事を終へて、湯を呑んで居た。私は其の女の顏をぢつと見た。地下室の薄暗い靜な中に、ぱつと女の顏は白かつた。眉のあたりに濃情な影をひそめて、賑なやうでそれで淋しい女であつた。湯を呑み乾して了つて、差俯いて祈る樣に、――祈つて居るのでは無かつたが――白い頸と髮との形が、彫刻んだ何かの像の樣に見えて、女は長くうつむいた。

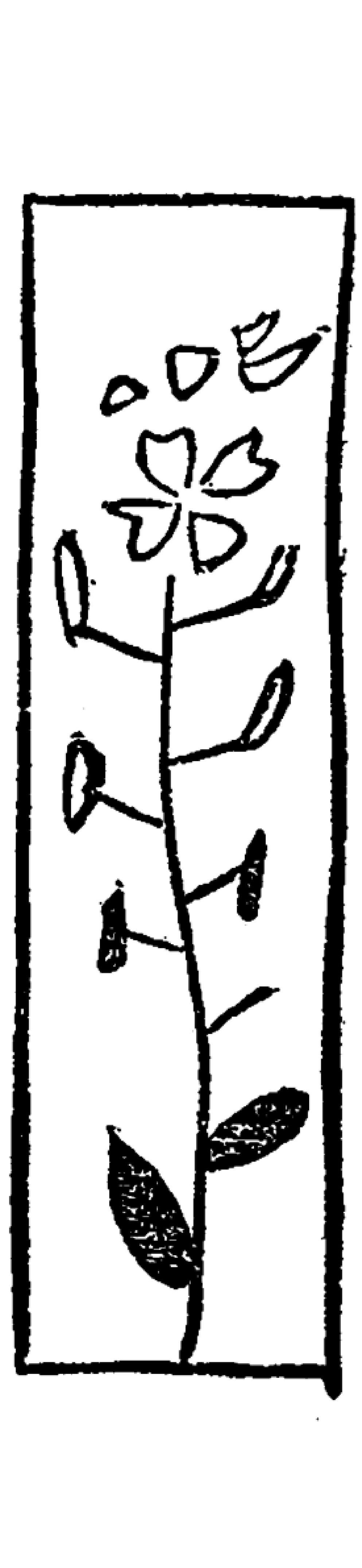
ゆくりなく私は思つた。此女は何を胸に考へてゐるのであらうか……林檎の汁を吸ひながらも、私は其れを考へて見たくてならなかつた。然し、私にはまだ東京の女の心裡を思ひ見る力はなかつた。女のうつむいて居るのは遂に謎であつた。其の中に美しい眼を上げ

て、私の眼とひつたり合つた時、親しさうな笑が頰に溢れた——然れども、其笑は女がわざとでなく先天的に持つてゐる微笑で——會釋をして、足音も立てずに入口を曲つてむかふへ行つて了つた。

私の讀書時間は四時間に亙つた。公園の青葉のかげの寺の鐘が、ゴーンとゆるやかに鳴り出した。窓によつて外を見ると、もう暮だ、早くも夏の日は落ちた。歸らねばならぬ——と強く胸をうたれたやうに書物をかへしに行つた。

東京の花と云ひたい瓦斯燈電氣燈は、もう花やかに隈もなく町を照らして居やう、靜に椅子をよせて、婦人室を出やうとして見かへると、猶七八人の女は、差俯いて、讀んで居るのか、考へて居るのか、如何して居るのか——無言つてすくんでゐるその曲線の美しい横姿を、電氣燈は、煙つたやうに、それでもはつきりと畫いて居た。

斯くて私は又、地下室を潜つて、夕暮の圖書館から外に出た、内と外とは、流れてゐる空氣が全く違ふ、何となく重々しい壓迫から逃れたやうにも思ふ、顧盼つて、大きな倉庫のやうな建築を見た。



藤村夫人を思ふ

ゆかり子

島崎さんの奧さんがおなくなりなすつた、と最初新聞で見ました時、私は吃驚しちまひました、何しろこんな地方に居てお訪ねする事も出來ない。ですけども若しかすると、何かの間違ひかも知れない位に思はれて、否、強て左樣考へ度いと思ふのでしたが、讀賣のはなし種で、島崎さんが稻毛へ御旅行の御留守中、お產でなくなりなすつたと、くはしい事を承知しまして全く全くがつかりして了ひました。

奧樣の事を考へますと、私は悲しくて、平常から人一倍感情の激しい私はもう〳〵、ヒステリーになつて了ひ相です。

お產でおなくなりなすつた、可愛い赤樣を遺して…

…斯う考へると、女の身は、堪らなく悲しう御座います、全く人事とは思はれません。「全く人事ぢやない。」

此言葉について思ひ出があります。

あれは川上眉山氏が御自殺なすつた時でした。恰度六月の事でして島崎さんの何かのお作の中にも、五月から六月へ掛けて新緑のころになると、兎角人はいろいろの記臆を思ひ出し、種々の事を胸痛むまで考へさせられるものだ。と云つた事が書いてありますが、全く私共女達でさへ、何だか斯うしんみりと物思ひ勝ちに、良人なども夕方などよく椽側の柱にもたれて、蒼白めた淋しい顔をいたして居りました。

「川上眉山が自殺した！」

社から帰るなり良人は火鉢のそばで、云はうやうもない淋しい嚴肅な顔をして、むつゝり考へ込んだまゝその日は晩の御飯も碌に頂きませんで、すぐ書齋の方へ引てもつてしまひました。三十分、一時間コトリとの音もいたしません、若しや……と思ふと堪らなく心配になつて、書齋へ行つて見ますと、部屋の中央に寝轉んだまゝ、何を考へてか甚くむつかしい顔をしてぐつと向ふの窓の障子を見据ゑてるんです。恐くなつて茶の間へつれ出さうとしますと、

「大丈夫だよ、乃公は自殺はしない。」

とう〳〵其晩はそんな風で明しまして、二三日後、島崎さんの奥様にお目にかゝりますと、

「全く人事ぢや御座いません、宅でもあの晩は甚く考へ込みましてねえ、私は心配で心配で、以前もあなた北村透谷さんが芝で首をおつりになる、一體文學者は劍呑で困りますのねえ。」

だが其奥様もとう〳〵なくなつておしまひなすつた——。

産れ落ちるから母さんのない乳吞兒をかゝへて、その又片手にまだ聞き分けもない幼いお兒様をすかしながら、奥様の柩をお送りなさらなければならぬ、島崎さんの御心中、考へるとどうにもお氣の毒でたまりません。

これから後の御不自由、お涙。

おなくなりなすつた奥様が何彼と行き届いて、一點の申分もなくいらつしやつた丈けそれだけ、お殘りなすつた方々のお涙もまた一倍で御座いませう。

本當に奥様ほど忠實に、家庭のためにお盡しなすつた方は御座いますまい。

身をあげて島崎さんの犧牲となすつた、私は斯う申

してはゞかりません。

三十八年だと覺えます。あの有名な「破戒」をお書きなさるため、島崎さんが信州の小諸から大久保にお越しになつて、其頃恰度お身おもな奥樣と、三人のお子と、都合五人の御家族が、ちんまりした植木屋の家を借りて、極めて質素な生活をお初めになりました。極めて質素な生活と申上ても、其頃もう已に、新體詩人としての島崎藤村の名を御存じの皆樣は、それは詩壇の明星とまで騷がれる人として比較的質素なのだらう位にしかお考へなさらないでせうが、事實島崎さんの生活は、一ヶ月二十五圓と限られて居たので御座います。

一ヶ月二十五圓。

都會では學生一人の生活にも、兎角不足勝ちで御座いませう、其二十五圓で、文壇の名士一家五人の生活。

それがどうもがいてもそれ丈けの金しか得られないと云ふのなら仕方もない、あきらめもつきますが、島崎さんのは左樣ではなくて、信州小諸にいらつしやれば、學校の講師として其方からの收入もあり、詩文の創作に對する報酬も決して少い額ではなかつたのを、二ヶ年間勞作を要する「破戒」の執筆を思ひ立ち、おまけに書肆と關係して、其出版をおまかせになりさへすれば、御勞作中、月々きまつて、ゆつくり生活の出來るだけは書肆からおくる事にもなりますのを、殊更自費出版として、やつと二十五圓でやつて行くことになすつたので、淺墓な女の身としては、何もそんなにまでして困らなくても、と云つた愚痴も出勝ちなものですが、奥樣は萬事島崎さんのなさるまゝ、不平らしい事と云つては仰有らず、質素なつましい生活に甘んじて、下女を廢し、すべてを儉約になさいました。

私は今でも、大きなお腹をかゝへて、大久保の家の井戸端で、苦し相に洗濯しながら、お兒達の御世話に氣をお配らなすつた、奥樣を見るやうです。

「奥樣は御變りもいらつしやいませんか。」

矢張りその頃の事、島崎さんにお目に掛つて斯うききますと、

「妻はね鳥目になりました、――氣の毒です。」

例のしみ〴〵した調子で云つて、嘆息なさるのでした。

併しそれも昔語りになつて、今では島崎さんも結構な御身分におなりですし、苦しかつた大久保時代のお作「破戒」は日を追ふて、版を重ねるやうになりまし

[illegible]相變らず家庭は質素で、奥樣は何一つおごり[illegible]しい事はなさらない、相變らず御自身お洗濯をなされば、一生懸命家事の御整理におつとめなさるのでした。

ですが大久保時代の苦しみに引續いて、永い〳〵間の勞作を終へて、やつと「破戒」の出版が出來たと思ふ、其喜びの直ぐあとに、折角八つ九つまで育てあげたお兒樣が、引續き三人もおなくなりなすつた時の奥樣の御愁傷、島崎さんには「破戒」がある、藝術がある。だけども〳〵……。

私は奥樣の心持ちを察して、今更らなかずには居られません。

後世島崎藤村の名を傳へるものは、併せて其悲劇的の家庭を傳へるでせうか、悲劇と云つても、人爲的でなく、凡てが運命の爲に支配されてゐるといふやうな氏の家庭は、一層氏をして考へ深く、冥想の人としたでせう。悲むよりも、考へ、考へる度に氏の藝術は華やかな若々しさよりも、生きるといふ第一歩を踏みこえて、更に生きなければならぬ境を描くやうになるでせう。



電車に乘る女のさま〴〵

加藤筆子

▲朝の割引に乘る女

割引電車が明神坂を下りかけた時、「松野さん」と少し甲高い女の聲がした。先刻からぶら下る釣革もない始末で、押付けられて居た私は、やつと入口の戸に摑るだけの活路を開いて偶と振向た私を呼んだのぢやないが、十八ばかりの海老茶袴が此方の丈の低い束髮のを手招して居る「あらッ」意外といふ體で傍へ寄らうとしたら、キーと齒の浮く樣な音で電車が曲るはづみを喰つて、よろ〳〵となつたのを呼んだ方は手を延ばして「おゝ危ない」と支へながら

「久らくね、皆樣お變りなくつて」

「え、有難う」

「何處へ被入るの」ヂッと相手の服裝に眼を付ける、

「あの、遞信省へ」

「さうですか」と妙に取すました品をする、其癖自分の人品も上つた方ぢやないのだけれど、この人は特に斯ういふ人込の中なぞには、容體を構へる性分らしい車内は魚臭い匂と人いきれとに、濁つた重くるしい感じを與へ、聲高に調子はづれの話聲やら囁きやら、車掌の黄い聲など雜然として入り亂れる。

松住町の停留所へ來ると、乘る人下る人の小葛籐が始まる。

「貴方、もう乘れません、後の車に願ひます。」と運轉手が職人風を押出すやうにすると、

「可つてことよ、すぐ下るんだから、どうにか這入れらあな」

「それでも滿員ですから……」

「中の方は隙てるぢやねえか」

中々押問答がやまない「おーい出さないか」「構はねえ突飛ちまへ」「車掌何を愚圖々々してるんだ」と乘客は各々に怒鳴る。

「困つ了ふわね、私遲參になるわ、松野さんの方は何時なの」

「私の方は八時ですの、まあ何してるんでしやう……」

二人は氣が揉める樣だ。役所なんどは全く時間が八釜敷から、實際から暇を費されては迷惑だらう、遲刻が一日でもあれば、三期の勤勉手當に影響を及ぼす相だから、時間や規律に捕はれた女は憐れむべき者ではないか。約七分にして動き出した。昌平橋、神田局の前へ來ると、松野といふのが、きよと〱しながら人の中を分けて出樣とするので「鳥渡、今に止るぢやありませんか、危ないわよ」

「いゝえ私まだ切符を買はないの」と心配さうに云ふまだ電車に乘りつけないといふ風だ。

「そんなら貴女、さう慌てないだつて、須田町で下りてから、買へますわ」「さう……」と不安な顏で其處へ立往生。

「須田町！九段兩國、日本橋深川方面はお乘り換へ」例に依つて、黑山の樣な乘客だ、此中で見る女は、女學生二分、事務員交換手七分、外一分の割合。前の新宿行から下りて、街頭の柳の蔭で、甲斐絹の洋傘をひろげた女は、横をつめた高い前髮。お召まがひに、紅入友禪の帶をお太皷に結んで居る、これは松屋か三越の店員と觀た。

一番先に下りは下りたが、松野といふのは、切符を

買のに、鳥路々々して居ると、も一人が「此方々々、松野さん早く〳〵」と面白づくに急きたてる、いよいよ面喰つて半泣の體を、お構ひなく、チン〳〵と其電車は出て了つた。

松野がやう〳〵切符に有付いた時は、友の困るのを無視して加之に「チヨッ」と舌打して、馬鹿にしたやうな北叟笑をしながら海老茶袴は、さつさと行つて了つた。

▲電車の中でよく喋べる女

縮れッ毛を束髪に結んだ三十恰好の細君、張子の虎の樣に首をふりながら、相手の銀杏返しを摑まへて、至つて單調な味もない話を、だら〳〵と續けて居る。

「近頃雪子さんの御樣子をお聞きですか」



「いゝえ……さうですねえ、お正月でしたか、向島でお目に掛りまして……」

「さう、おや私の方が近頃ですよ、此度貴女立派なお服裝が出來てね。」

「あら」

「そりあ見違へる樣にお成りですの何しろ旦那樣が大變お設けになつた相ですからね、お仕合せですよ、あの方も……貴女とは慥か御同級だつたのでせう、だからさ、ちつと行つてお遣りなさいましよ、奢らしたつて可いんですわ」と衣紋をぬいで、

「何有、おき知れますよ、そらあの橋を渡ると、今度不動樣が出來た、すぐ横になりますわ」

「えゝいづれ伺つて見ませう」

「ですけれどもね、まあ雪子さんも子供のない時分が花ですよ、私だつて貴女子供が出來なけりや、かうお婆さんにもなりませんわね、ほゝゝゝ子供といへば宅の妹のおはねにも困つて了ひますの、えゝ〳〵姉の方なんか片なし」と又一時首を振つて、

「此間もね、お復習をしなくちやいけませんつて申しますとね、姉の方は、はいと溫和しいんですが、片方と來たら一向平氣なもの、敏ちやん何故勉强しませんと叱りますと、母さん私もうよく覺えて了つたんですもの。でせう、餘り小面が憎いからいきなり本を突付けて讀ませたら、でもまあすら〳〵と讀めるんですの……奈何して私に似てきかない氣の子ですからね」

調子付いては、電車の響にも消されぬ高い音聲で、この細君は遂々神田橋外から神保町まで絶えず喋りつゞけた。

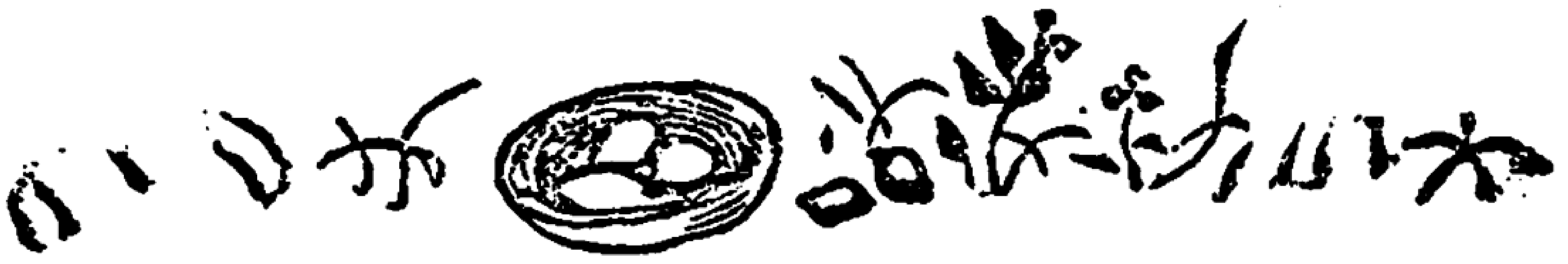
△美人と酒くさい息

番町の葉櫻が青々と繁つてる間からきら〳〵とお濠の水が光る、電車の窓から、うつとりと眺めて居る美人があつた。高島田に前差しの青貝が、螢の樣にピカピカする、雨飛白の薄ものに、空色の帶、帶には細い銀の鎖りが搦んで居る、白い芙蓉の花の樣だと私は思つた。處へ半藏門から、印半纏を着た、赤い顏の男が乘つて來た。

「えゝ動きます」車掌がチン〳〵と引くはづみに男は蹌踉けて、酒臭い息を吐く、濁つた眼を見張つた時忽ち白芙蓉を射たと見えて、むづと其傍へ腰を下した。

宛轉たる蛾眉は曇つて芙蓉の花には雨を帶びた。流石の私も客觀するに忍びなかつた。けれども男は恐らく、這麼事は千載一遇らしい、益々頑强に腰を据ゑる。

美人は最初、彼が熟柿の樣な匂ひを避んが爲め、手巾で鼻を被ふた、向側に空いた處があるけれど、なまじに、此處を退いたら、這麼風體の惡るい男だもの、どんな云ひ掛りをつけるか知れないと、美人はほとほとと弱りきつて、何卒早く下りてくれますやう……といつた顏付で、麹町から大木戸まで一緒だつたが、まだ男は下りない、さうかうして居る内、醉漢は女の香水の匂ひを嗅ぎながら、いつのまにか居眠りだ、ふら〳〵としてぐつたり寄り掛る、美人は泣さうな顏をして、堪らなくなつて橫をむいた儘、外ばかり見てゐる、電車はおかまひなしに風を切つて走つてゆく。



森

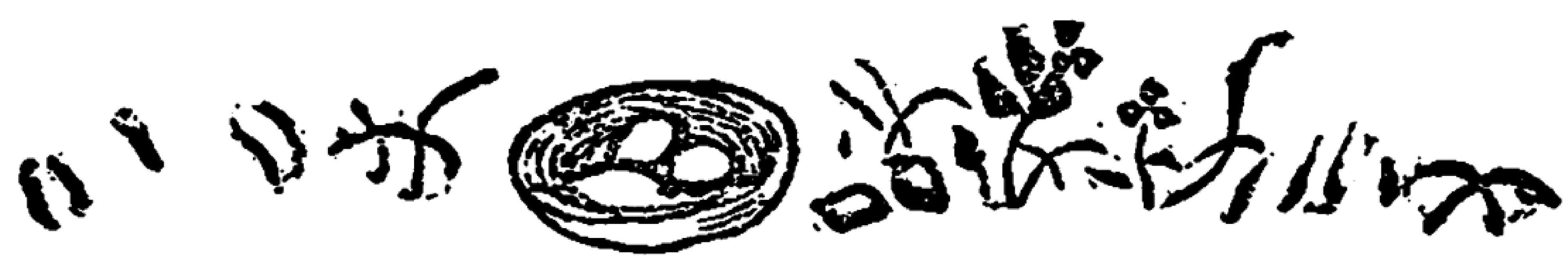
小川未明

祖母は、孫の小太郎に對かつて、さう毎晩遊びに出てはいけない。此頃は、月が好いからといつて何處を遊び廻つてゐる。昨夜など歸つて來たのは十時過であつた。あの頃になるまで何處を遊び廻つてゐた。今夜からは、きつと出てならない。若し出るやうなことがあれば、戸を閉めて家の者は眠てしまふ。お前一人は、何處へでも行つて眠ればいゝ。決して歸つて來なくもいゝ。其の代り、狐が出るかも知れぬ、これから山に雪が來るから、狼が里に出ぬとも限らない。お前は狐が出ても、狼が出ても怖しくはないか。怖しく思はないなら、私の言ふことを聞きたくなければ聞かなくてもいゝ。お前は何が面白くて毎晩遊びに出るのだ。

小太郎は下を向いて、祖母の顏を見上げなかつた。祖母は、もはや六十の上に出てゐた。頭髪が眞白で、顏に小皺があつた。口をゆがめて孫に話してゐた。秋の暮方の日は、西に傾いて、倉の白壁が薄紅く色彩られた。柿の葉が眞紅に輝いてゐる。

祖母が家に入ると、間もなく母が傍に來た。圃から歸つたばかりで、短い衣物を着て、草鞋を穿いてゐた。頭髪は縺れて、衣物には土の香が新しい。

此頃は晩になると霜が降る、此の寒いのに毎晩何處へ行つて遊んで來る。お前が歸つて來ないまで



は、お婆さんは眠なさらない。お前が歸つて來るまでは、幾度となく戸口に立つて彼方を見てゐなさる。

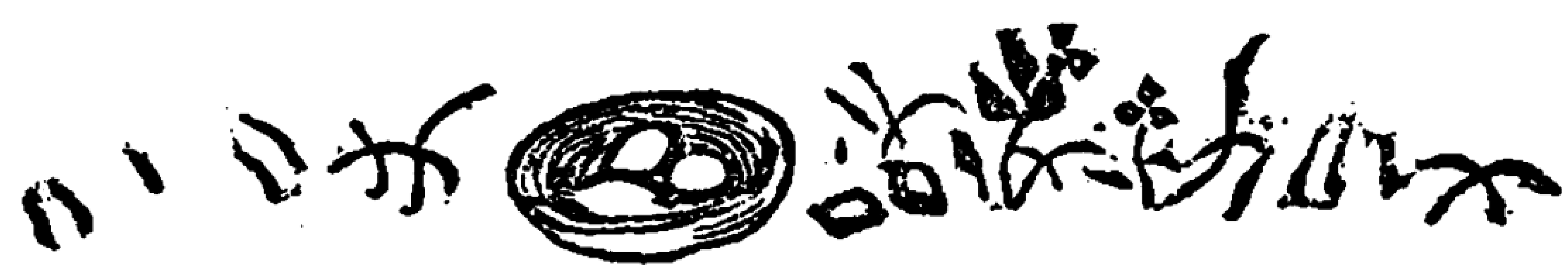
『まだ小太郎は歸つて來ない。親不孝の兒だ。斯樣に家の者が心配してゐるのに、今時分になるまで何處を歩いてゐるだらう。…………小太郎はまだ歸つて來ない。』

と、幾度となく出て見なさるか知れない。

私も、お婆さんが氣の毒になるから、何、さう心配なさらなくとも、もう直き歸つて來ますから、お休みなさいと言つても、今時分何處を歩いてゐるだらう、何處かの河にでも落ちて死んだのでないか、其とも友達の家で病氣になつたのでないかと言つて、少しも落付いてゐなさらぬ。此頃家へ歸るのは、毎晩から遲いのですから、心配なさらなくともいゝからお休みなさいといふと、お前方は、子供を可愛く思はないか。かう、毎晩、遲くまで遊んでゐる譯がない。惡い友達が出來たに相違ない。またあの兵藏と友達になつたのでないか。兵藏は親が碌な者でないから、兒供も彼樣に惡險しくなつたのだ。あの兒といつしよになつて歩いてゐるのでないか。兵藏は柿を盜んだり、芋を盜んだりする。其といつよしになつて遊び歩いてゐるのでないか。皆なお前方が仕付けが惡いから、今迄穩順かつた小太郎が、かうなつたのだ。とお婆さんは私まで叱んなさる。

昨夜だつて、餘りお婆さんが氣を揉んで、自分で杖を突いて、お前を探しに行くといつて出なされるものだから、私が提燈を點けてお前を探しに出た。

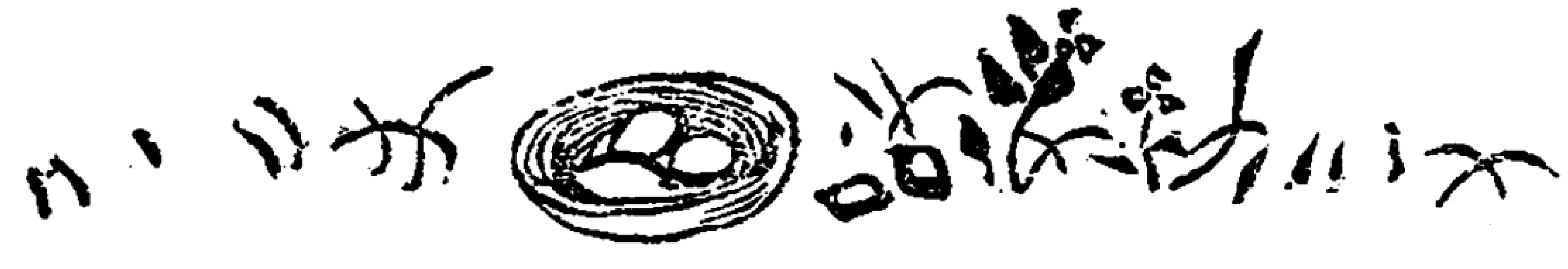
お前は覺えてゐるだらう。あの時、私があの淋しい、晝間でも餘り人の行かない細道を歩いて、若しや狐にでも化されてゐるのでないかと考へながら行きかゝると、彼方から黑い者が、此方へ歩いて



來る。私は、氣味が惡かつた。ちようど月が雲に隱れてゐた。何だらうと思つて、漸々、近づいて見ると其の黑い者がお前でないか。…………ほんたうに、あの時分お前は何處へ行つて來たのだい？………何故、其れを言はないのだい。私も、お婆さんも、お前は誰かお友達と歩いてゐることゝ思つてゐた。あの時分誰が他に遊んでゐるものがあるか…………やはり、お前獨りではないか。私は、驚いた、私はきつと、お前が狐に化されてゐるのだと思つた。どんな氣持でお前は歩いてゐたのだい。而して、あんな淋しい森の方から、とぼ〳〵として歩いて來た。誰があんな淋しい森の方に遊んでゐる。このことを話せばお婆さんが心配なさるから、默つてゐたが、森の方に誰かいつしよに遊ぶ友達があるのかい。何故お前は默つてゐて其のことを話さないのだ。今夜からは、必ず出てならない。日が暮れたら遊びに出てならない。夜になると寒い。直に戶を閉めてしまふから…………母親は、家に入つた。

やはり小太郎は、下を向いて默つてゐた。やがて日が暮れると、圃から父親が歸つて來た。姉や、妹が、籠を負つて歸つて來た。夕飯を食べると何處からかこほろぎの泣き聲が聞えて、月が、明るく窓を照した。

妹は、山で見て來た栗の話をしてゐる。紫色に熟つて、枝の先が撓んで下を向いてゐるのが目に見えるやうに物語つてゐた。姉は母に、今夜柿の皮を剝いてしまふなど〻話してゐた。父親は廐の方に行つて、草をやつてゐる樣子であつた。祖母は、爐邊に坐つてゐた。折々、投げ入れられた枯葉に火が移つて、ぱつと赤く顏が浮き出た。



小さな兄と妹とが窓際から月を眺めてゐた。兄は十三で、妹は十一であつた。

妹は、青味を帯びた瞳を見張つて、

『好いお月夜だてと。』と、小太郎を顧みて、

『兄さん、あの色は青いのでせうか、白いのでせうか。』といつた。

『あの色は白いのだ。』と小太郎も並んで月を眺めてゐた。

『妾には青く見えてよ。』

『あの色は白いのだ』

『何故、あの色が青くないの？』

『青いのがだん／＼色が褪めて白くなつたのだ。』

『おや、やはり始めのうちは青かつたのね。』

『あゝ、青かつたのだ。』

『兄さんは青かつた時の月を見て？』

『僕は、青い月を森の中で見た。』

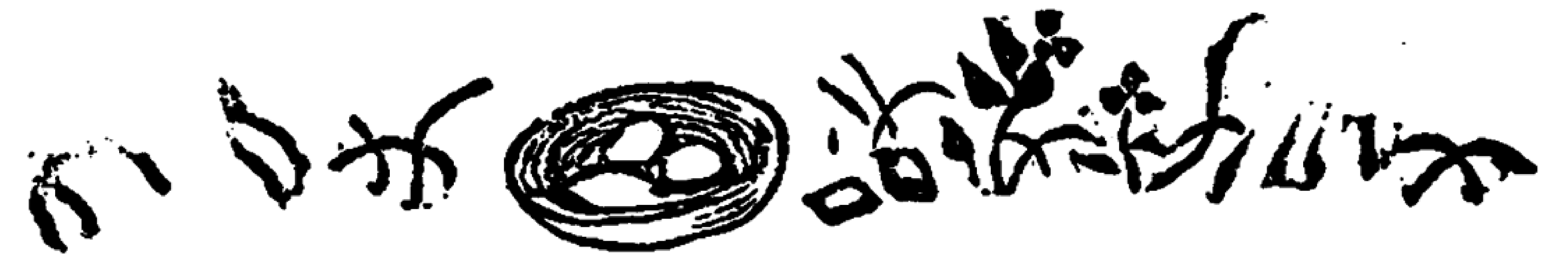
『少し暗くなつたやうだわね。』

『あんなに月が光つてゐるでないか。』

『妾には、ちつと暗くなつたやうに思ふわ。』

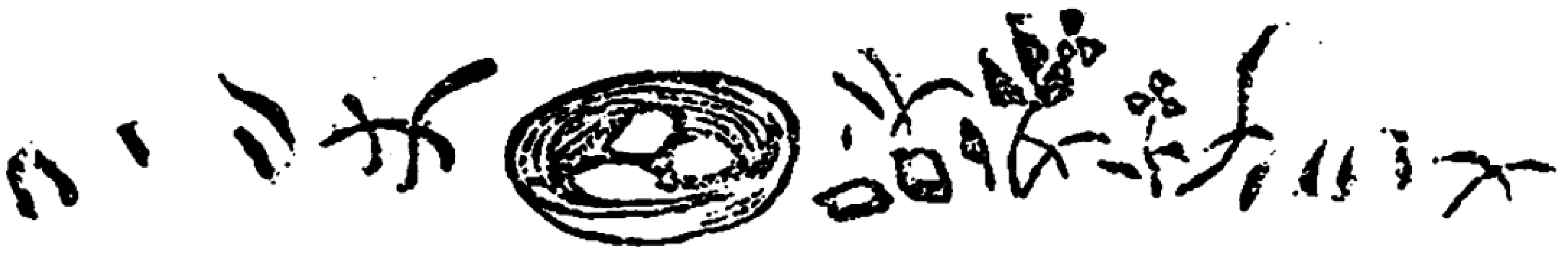
『きつと目に見えないやうな、淡い雲がかゝつたんだ。』

『兄さん、兄さんには淡い雲が見えて？』



『白い淡い雲が見えるやうだ。』
『何處に？』と妹は小太郎の肩に手をかけて、ひたりと寄り添つた。而して、青い瞳を晴れ渡つた空に輝く月に向けて、瞬きもせず見詰てゐる。
『妾には分らなくてよ。』
『あゝ、もう消えちやつた。』……と小太郎も眤と月を見上げてゐた。
『さうね、やはり月は白いのね。』

二人が窓際に立つて話をしてゐると、此方では祖母が、母や姉といつしよになつて話してゐた。其處には、母が平常織る機の道具があつた。ランプを點けずに、月の光りが窓に當つてゐるので薄明るかつた。機の道具が黒くなつて見えた。祖母は、眼が惡くて遠くが分らなかつた。月の射し込む窓の方を見てゐたが、
『あの窓際に立つてゐるのは誰だ。』と聞いた。
『小太郎と妹ですよ。』
と母がいつた。
小太郎の姉はかういつた。『今夜ばかりは、小太郎も外に出られますまい。不思議に此頃は晩になると外へ出たがりますね。きつと月がいゝからだと思ひますよ。』母はかういつた。『お婆さん其樣に氣をおもみなさらんでも、今夜は小太郎は家にゐます。窓際で妹と月を見ながら話をしてゐます。あれも小供ですから遊びに出て面白いと毎晩癖になつて出るのです。出れば家へ歸るのを忘れてしまふ。何



處の子供もさうです。此頃は、霜が降りますし、風が寒いから、風をひくといけないといつて先刻も私が叱つて今夜は出てはならないと言ひ聞かせましたから、家にゐます。さう氣をおもみなさらんでも宜しうご座います。』祖母は、頻りに體を動かして、窓の方を氣にしてゐた。

『私には、小太郎が見えないが、彼處に立つてゐるのは妹ばかりでないか。』と祖母が言つた。

母と姉は、いつしよに振向いた。月の光りが射し込んで來る。其處に小さな姿が月光を浴びて立てゐる。白いリボンが見えた。

『小太郎は、陰になつてゐるのでせう。』

『いゝや、彼處にはゐないやうだ。』

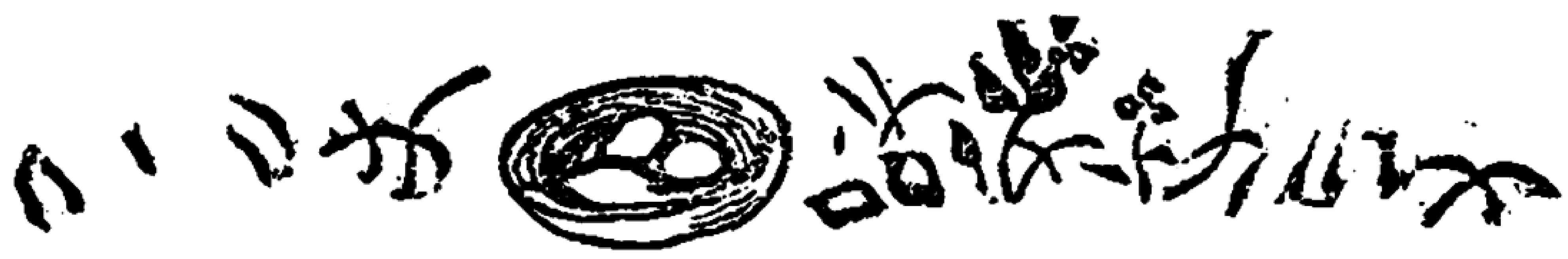
母は立ち上つて窓際に來て見た。月の陰になつた壁際に寄つてゐるのだらうと思つて來たが、壁は近寄るに從がつて鼠色に見えたが、小さな姿は見えなかつた。窓際には、たゞ一人妹が立つて遠くを見てゐた。

『小太郎は何處へ行つたい。』

と母は妹に聞いた。

妹は、かういつた。

兄といつしよに月を眺めてゐると、何處からか小太郎と同じ年頃の少年が窓際にやつて來て、小太郎を手招いた。小太郎は始めのうちは默つてたゞ少年を見てゐたが、少年はハーモニカを出して小さな聲で鳴らした。其の音は身に浸みるやうに冷たく、透き徹つた。好いうちに悲しみの籠つた音であつ



た。
『君、またあの森へ行つて吹かうぢやないか。』
と其の子供は、窓に立つてゐる小太郎をさも怨めしさうに眺めてゐた。すると、小太郎の眼には、いつしか涙が輝いて、
『僕は今夜出られんもの。』
といふと、其少年は、さも怨めしさうに、此方を見てゐたが、
『君、またあの森へ行つて吹かう…………』
といつた。
小太郎は、急に悲しくなつたやうに身を戰はすと窓から飛び下りた。其の少年は、さも嬉しさうに小太郎に縋つた。二人は互に手を肩に組み合はして、ハーモニカを鳴らしながら、彼方の森の方へ行つた。——
其夜は好い月夜であつた。母と姉と妹と三人が、月の照らした道を歩いて、森の方へとハーモニカの音を探ねて歩いたが、何の音も、人形も見なかつた。
やはり、夜の十時過に小太郎は何處からともなく、獨りで淋しさうな樣子で歸つて來た。

* * * * * * * * * * * * *

其から一月經たぬうちに、小太郎は病んで死んだ。（四十三年八月二十二日作）

お才の國

(黑百合續篇)

横瀨夜雨



丸い光の輪が天井に映つてゐる、炬燵の上へ吊したランプはもう白茶けて見えるやうになつた。

夜明に寒くなるよと嚇かしたS君は、頭も髭も布團に埋めて動きさうにもしない、鷄はさつき鳴いた。

三枚のかけ布團のうち一枚だけは願ひ下にして、彥太郎同様炬燵へ足を入れてねなすたら？と勸めた細君の親切を斥けた、ばちかして、てきめんに寒くなつて來た。

手をのべて上の毛布をたくしあげる、少し出すぎた夜着の衿が鼻にかぶさつてひやとする、けれど重いからなほしようがない。

欄間の刳物にちらと次の座敷の灯が動いた、襖にさはる物音もする。K子さんが起きたのであらう、ねくたれし髪を梳くにしても、手さへ龜む曉である。

夜着に呼吸がかゝると小さな水滴になる位は常陸にもある、冬の常陸は雪は滅多に降らぬ代、西風が寒い。何を探すか鴉がよく田へ下りる、地鼠は穴に潜みて出でねど、鶉のかくれ家なる草は枯れて、列を爲して南へ南へと飛ぶ雁の聲は朝毎に聞かれる。烟絶え塵をさまりて天地はむしろ「青」の一色に歸す。

まれに降れば、犬の叔母さんがやつて來た、ほオとはやしては縁側を跳りあるいたものだ。母と共に馬に乘せられて八重十文字に降る中を田圃にかゝつて手も足もどゞめいろ(紫がゝつた土色)にしたこともある、誰だつたかに百舌鳥の瞼を絲で縫つて貰ひ、觀音堂のはだかの木(猿すべり)へ宿らせて、黏を袖へつけて雪でこすつて落さうとあせつたこともある、學校のかへりにひとり降りつめられて堀も橋もたゞ眞白になつて野の中を村を目あてに辿つたこともある。來るべき運命の非なるをさとり得ざりし十二十三の頃は、悲痛にのみは囚へられてゐなかつた。

そして雪がふると姉さんとよく燈籠をこしらへた、手をまつ赤にしながら幾個も幾個もこしらへるそばで「これ、灯をつけンのかい、どこへ建てるの、ほとけさま(佛壇)?」とうるさく聞くので、まあちやんは何でもくどぎゝだねと叱られては、おてさんはおばアさんの眞似しておてると甚不平だつたことも覺えてゐる。われ〳〵姉弟にはかねのどびんで通つてゐる錫の急須へ入るだけ雪をつめて、炬燵へかけて、おてさんもう溶けたらうで見てくれと櫓の下ばかり氣にして、蓋が凍りついて取れなくなつた時だつたが、かはる〴〵齒でぐるりを嚙んだこともあり、三尺ばかりの桑の燃えさしを釜所から持出して來て縫絲をつけて、先きへX形の木ぎれをしばりつけて、縁側から雪を釣つたこともある。

度々降つて一年に三度、二尺から積ることは、十年に一ぺんも無い、筑波の紫は三冬なほ色を變へぬから餓ゑて梢に啼く猿もなし、二月菜の花咲き、三月すみれが匂ふ、春ははやくより常陸少女を醉はしめて、姉は十五にして人に嫁いだ『受くればたまる沫雪の、輕

きを打ちて丸めなす、雪燈籠は脆くとも、灯入れて君の眉を見む』

K子は靜なる女である、海無き國に生れていまだ淼漫たる水の大いさを知らぬ女である。北大蓮華、東鉢伏、山はこの人を守りて、風も雲も雨も霧も、路に跳ぶ蛙の聲も、草にからむ晝顔の花も、皆其夢を靜かならしめたのであらう。

天上の星の悉く北に拱り、人間水の東せざるは無きが如く、K子も亦まさに行くべき路に行かうとするのである。

お母さんのようには慣れてないから上手にしめて上げることができませんけれどゝ言ひながら、肩につかまらして帶を卷いてくれた、手を曳いて、てうづの湯を汲んである緣へ誘うてもくれた。

寸斷されしわが心をおもひ、靜かなる女のしづかなるあこがれをおもへば、寂しいかな自分は世にはぐれたる一人子である。

三山、秋の水凍みて
凋落きざす木々の色
木立の奥のふかぶかと
見よ矗として立つ白かんば
ま白き脛、細き腕に木暗背負ひて
朝は「休息」奪はると
暮は「くらやみ」攻め寄すと
戰きつゝ慄へつゝ
幽なるどよみつくりて連るを

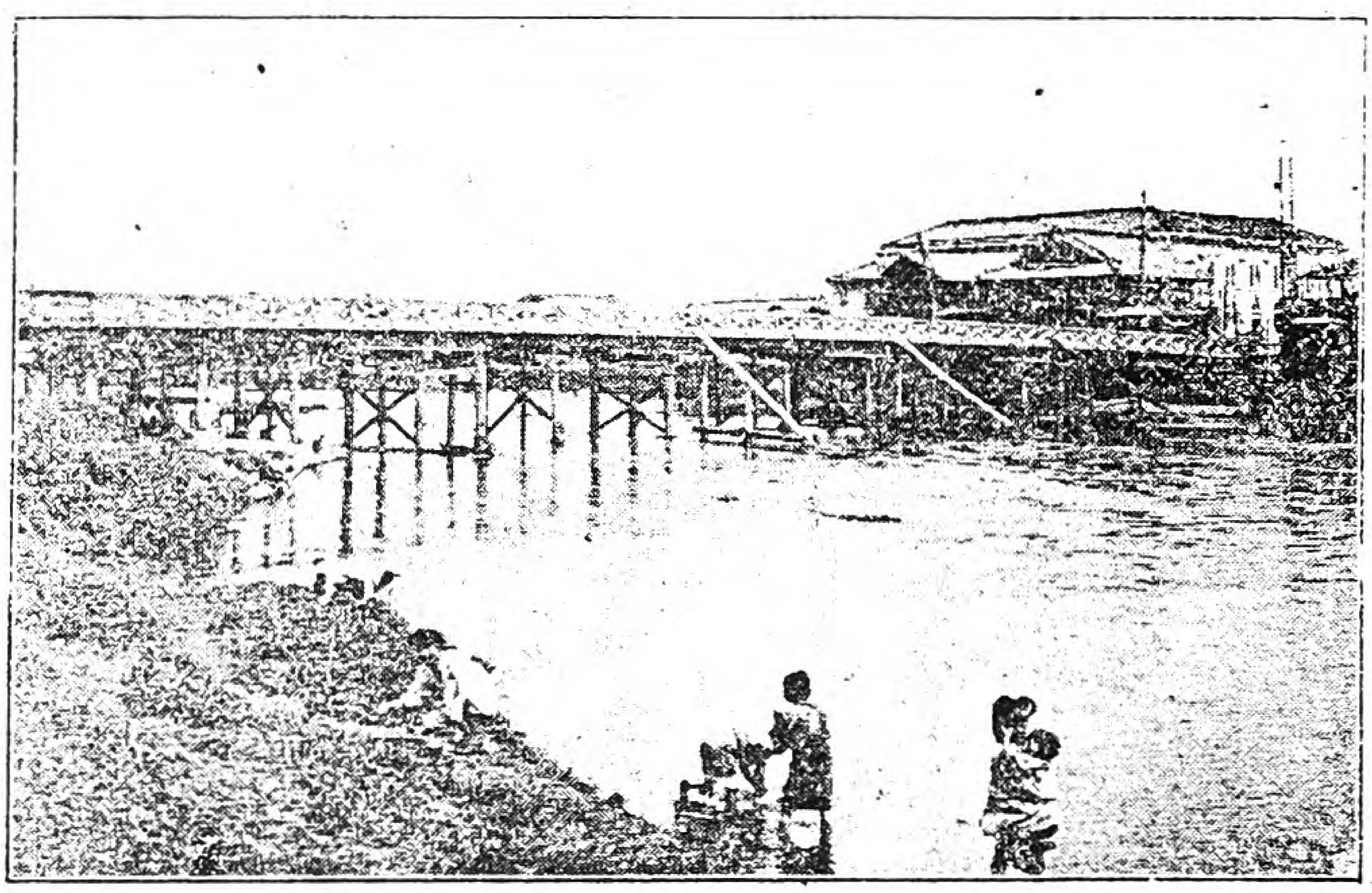
黒き森
そこゝに毀みありげに
覆するパラヒンペーパー
明方の萬象に
川霧は白々と

黒き森――黒き森――

強きキスにわが瞳ひたと吸はれて
痛かりき涙流れき
しかはあれど

ほのぼのと黒き影に添ひ
眞白き、然して
なげき隙なき姿浮び來ぬ
誰か知るこの明方を——
紅きといふ溫きといふ
すべてを包める少女ありて
野のたゞ中に裳すそとり
しづかにをどる魂を
際涯なき宇宙の心に調じ合して
溶けも見む念願有つとは

是彼れなり。
釧路の沖の龍巻に
放らかされし海百合の子



福井市足羽川九十九橋　撮影　田村とよ子寄

七つは君の家におちて
乙姫の手心の

玉と曇る七人の
中の姉と生れけむ
わが母のひろひしは
一粒なれば今年迄
君と違ひしはるあきの
寂しかりけり一人子は

核ごと溶かす山梔色を
山の花なる桔梗色を
紫といひ黃といふと
敎へられつゝ不思議やな
君は敎へし人なればか
戀築くべく生れ來て
すぐに二十の年となり

今、笄を髮に挿し
花ふり花ふる灯の中に

羞かしさうにおはします
冗談に書たノートを見せると、いきなりひつたくつて、「あなたは私の『眞』まで疑ふのですか、よくいぢめるのね、けれどちつともうらめしくは無いの」と言ひ言ひペンシルを走らして、

海渡り行くての女
心の鞭の強きを見よ
命傾けなげきよる
人の一人われからすてゝ
神もかくれし吾心
遠く離る

見つむれど行手はろばろ
三千里外、すがらんは情のみ手
吾は母ともなりぬべき
人の一人つひにはなる

離れ去んで悲しき思ひ
母あれど、父あれど

指輪に寳石の數入れて贈りてす人
唇を紙にうつしてさゝやく情
それらには心うつらず
たゞ海の外に
強きますらを、
強く立つべく
われは行く

とうたふ。
滅びんとする青春の命をおもへば、しづかなる女にもこの涙なかるべからず、鸞鳳の圖を心に描いて花くれなゐなるエデンをのみおもふ女ならば人いかで泣くべき。
吁空想の天地は奈地、しづかなる女も終に行く。
「私は女だから女にくみしたい、あなたのイリユージヨンを破つＲたさんは本たうの女ではない、Ｙさんは

危ない人、杼の鐘を衝いて葬りの歌をうたうた方はどなたか知らないけれど――と言ふ、「女の中にもまことの人がある、まことの涙を有つてるのもある、あなたはすべてを否定なさるけれど、一たび人を欺いて足れりとせず、へい氣で他に適く人があつたら、あるとき／＼は羞しさに死なゝければなるまいとおもひますみんながみんな娼婦ではないもの、個性を認めて下すつたらどんなに嬉しいでせう、けれどもうあなたの心は人を疑ふうたがひに充ちていらすでせう、いつはりの誓ひを立てた女は、またいつはりの結婚をも敢てしたけど、かへりみてむかしの戀を思つたらどの顏を他に向けませう、それでも十年二十年の後には子どもに貞操といふことをしへるでせうか」といふ。

自分は應へなかつた。鉛筆を拾つて『神は彼をゆるさん』と書いて止めた。K子はじつとペンシルの尖をみつめてゐた。

* * * * * * * * * *

暖かき光を追ひて三冬なほ花咲く竺志に行ける君よわれは呪はれし命を護りて野篠生ふる信濃に來れり。昨日は秋和の人を千曲川の上にたづね、今日は紫の帶したる桔梗ヶ原の子と別れ、而していまお才が國に赴かんとす。

昨夜月清かりき。天飈絶えて纖雲うごかず、烏の首を高く吊りたるくすり屋も見き、萬龍の眉も目も雨にさらさるゝ酒やも見き、行人稀なる町を過ぎて鹽尻の在に入らんとせし時、七日あまりの月はわがひとりの路を照ししなり、唯看る宵海より來るを、いつくんぞ知らむ曉雲に沒するを。

天は吾れを容れず、地もまた吾をいこはしめず、人つひにかくさんや、あゝ人つひにかくさんや。

君が病ひの癒えん事を禱る。

家中骨

ドクトルS兄

お才が「三國峠の阻路を越えて歸るは何日ぢややら」

と歌うた頃は北越鐵道は通じなかつた、新婚後たゞちに起ちて石油事業に身を投じたる兄も、沼田より三國峠を越えて北の方古志の野に下りたのである。今自分は吾妻白根の山々に白く置ける雪を仰いですたれたる街道の冬けしきを想うてゐる。が「躍りこめ蹴こめ下駄の前齒の折れるまで」をどり狂うて、月下を過ぐる行旅の人――わが長塚節君を驚かした中津川盆地の煙も見えず。汽車は千曲川の溪谷に沿ひ、山を繞り山を巻いて、まつしぐらに北に走つてゐる、國境近くに戸隱が聳えてる筈だと、左の窓を睨んでゐたけれど、近きはたゞ白く遠きは黒幕のやうな雪雲につゝまれて山ははつきりしない。

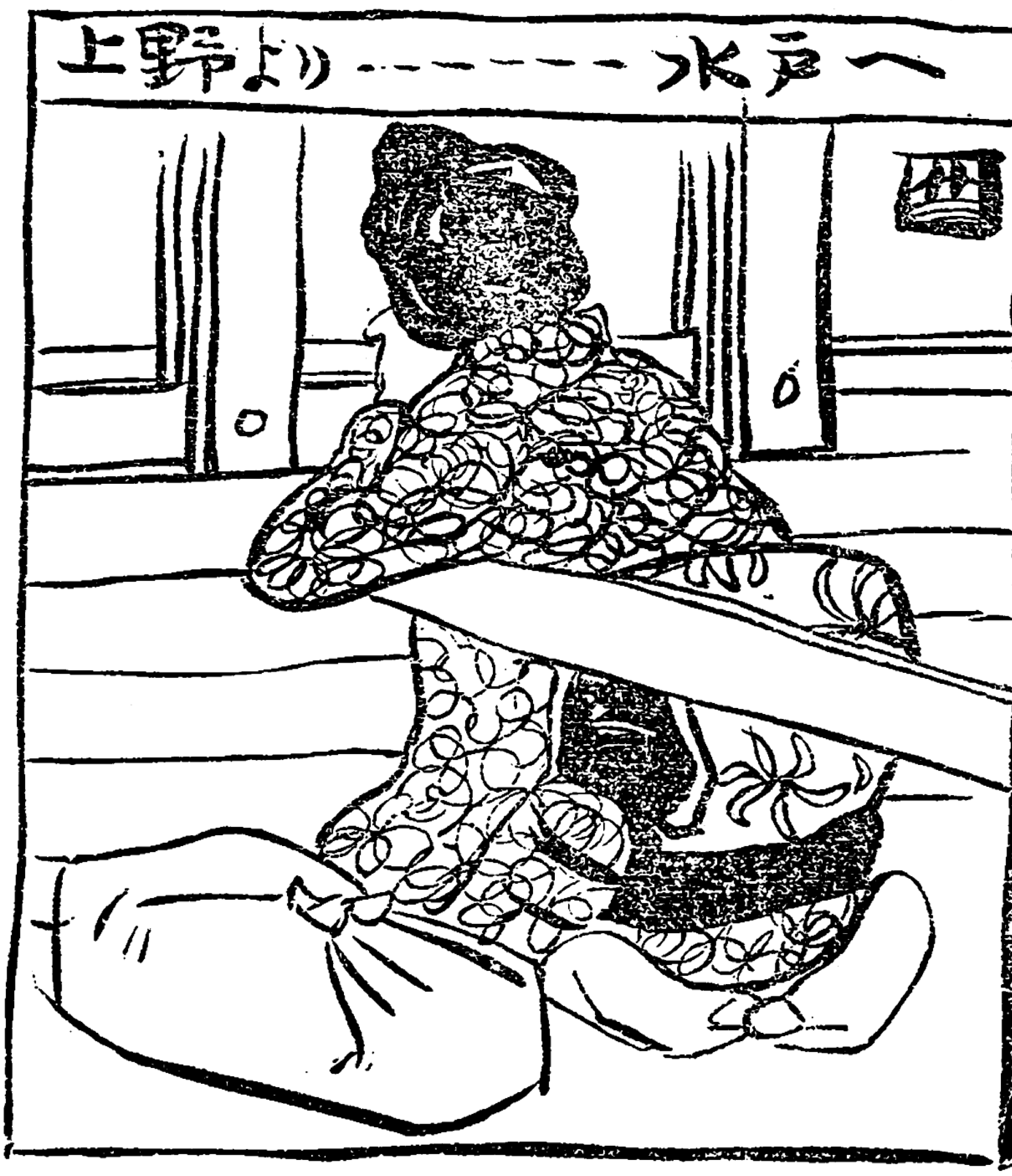
「昨日の輕井澤が勿體ぶつた圖たら無かつたね、奏任驛長で候が聞いて呆れらア、これで以てわれ〳〵迄劔を下げたらよく見えて海軍だ」「さうさ大臣もつまらぬことを考へたからね」「繰延もいゝがあまりけちけちして服まで古物でがまんさせろはひどい」などゝ其筋の役人ばかり乘り合ひて、お客さまは自分ひとりだ、左側に毛布を敷いて坐つてた一人が、一枚だけ明けばなしになつてるガラスを上げうとするけれど氷りついて動かぬのでやつきとせゝつてるのがある、いつか雲晴れて頭を出した高い山を指して、あれがあの黒姫ですかと聞くと、さうですと言つたのか、さうぢやないと言つたやうに聞こえた。

驛長連は長野で皆下りてまた一人となる。『巴里』をひろげたり閉ぢたり、一つには山も川も見のがすまいとするから、眼はとかく窓に引かれる。どこまで行つても右の山は低く、左の山は高く且深い、左の方が遠いからであらう。

柏原に入る、雪が積つてる。關へ來ると停車場の木柵が埋つて近い人家はまん丸く雪の上へ据ゑたやうに立つて家根の雪と軒下の雪の間にやつと壁が見えるだけ、煙一つのぼつてゐない、人の動いてるのは停車場の中ばかりだ、それも驛夫が三々五々腰まで漬つてあちこちするだけだ、大きな聲をするものも無い。

高田。高田は長岡と相族つて雪の名所として知られ

てゐる。案のでう汽車が動かなくなつた。直江津から來るのを待合すのだともいひ、線路が埋つちまつて雪かき最中だともいふ。着いたばかりには蓄音器を持ちてました羽織の人、何したのか顔中白布を巻いた外套の人、プラットホームまで見送りに來てシーヨルも髪も雪片だらけになつて立つてる美人、その前へこれはまたうんと立ちはだかつて裾をひろげて雪を消してる婆、湯タンポを自分の足元へ搔きよせてあたつてるのも紳士なれば髭のさきへ氷れる水涕を傳はらして知らずにゐるのも紳士である。撫肩の寒さうにして窓の下に立つてるいてふ返しは、どの紳士に目をくはしてゐたのか惜いてとに見おとした。



藁の蓆を半裂にしてチヤンチヤンコのやうに仕たのを着て頬かぶりしてる男があつた。藤蔓で編むだのであらう大きさは鍋蓋ぐらゐで、圓い中を八重にからんで足の下に穿いてるのもある、滿洲の馬賊が穿きさうな重くるしい藁沓をどさりどさりと踏み鳴らして行くのもある。

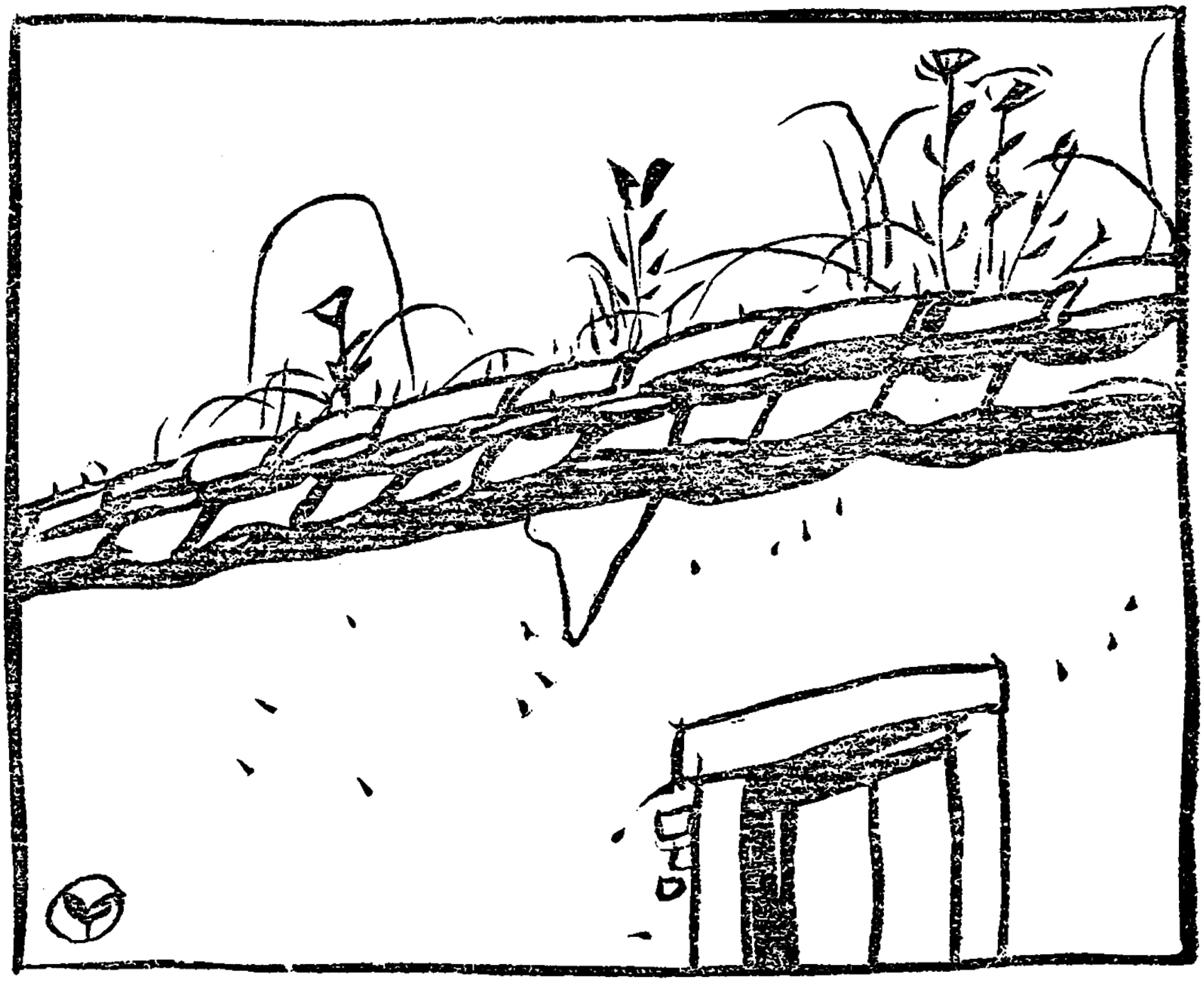
わらぐつを見てふと業平を思ふ、忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは、馬ぢやない牛でもない、どうしても藁沓だ。

　ところどころに立つてる雪除けはきりぎりす籠のやうで、ギリヤク土人の家とも違ふことは違ふが、横に重ねた板のすき間から雪はめつた吹きこむから、柱は上から下まで片かはだけ一様に白く、やはりすき間だらけの天井(屋根?のうら)にも吹きこんだのが白くくつ着いてゐる。ガラスに當る雪片は分明に六稜角をあらはせど、すぐ溶けた氷の小片となる。スチユームの湯氣でぼつとする内面のガラスは拭いても、そと側の氷片は手がつけられぬ、牡丹の花のやうに大きなのが降つたり、粉となつて渦巻いたり、照つても降り、曇つても降る。

　行く行く人家の屋根には人が乗つてゐる、穀押に似た物で木で造つた四角な杓子で雪を尺立方位づゝに切つては投げ下す、箒で掃くのは天から降る灰かぐら、灰かぐらは下から上へ昇るものだけれど、兎にかく白たへの雪を埃あつかへにしてるのはあつたらやつだ。あゝして庭へ家の棟よりも高く積んで、春風春水一時に來らば人家は海の底に沈まねばなるまい。

　汽車は小便たれ／＼行く牛よりも遲くなつた。或停車場では踏み固めた雪が鏡のやうにすべるといふのでプラツトホームでない所へ止つた、驛夫の或者は例の藤蔓で編んだ鍋蓋を穿いて胸まで埋まつて雪を踏づけてゐる、足を揚げてづと踏むと雪に大きな穴が明く、泳ぐようにして踏んでるうちに切りどほしができる、初め頭だけのが胸が出て、握りかためたかなこぶしが見えて、全身があらはれて來る、裾に袖にへばりつく雪は足を二三度踏みならすとばらばら落ちるのであつた。

　直江津からは海が見える筈だと思つて、雲はれて日ざしあきらかなる窓の左側をのみ注意してゐた、蓮だか葦だかの枯葉があをい水にそよいでる堀割があつたきり、町の一角を突破したれど海は見えず、松原がただ雪の中に續いてゐた。(つゞく)



とけたる帯

原田琴子

秋風もこの少女には戀人のわがまゝほどのをかしさにきく

羽をもつ世の少女より地の上を這へるわれこそやすらかに居れ

少女あり涙するなどあはれげに人はいひけり心しらずて

紫かくらき色かは知らねども文字のよければわが袖にしつ

み空なるあなたの世にもこの思ひさゝげてゆかんさびしからまし

すら〳〵と帶のとけたる心地しぬ思ふことと皆告げ得たる時

君が手に抱き止めたるこの命細き腕にいかでさゝへむ

何ごとも神に額づくわれなれどみづから得たりこのいはひづま

若き子はさながら羽を持つごとし大地をすらもあきたらずてふ

天がける術をおぼえしそれよりは日に七度もおちにけるかな

こゝにまで我を誘ひし償に百年をしも誓はしめける

わが心花みだれどつむ人もあらねば少しあらしをも吹け

そよ吹ける風にもゆらぐ柱もてたてたる家にわれの住まへば

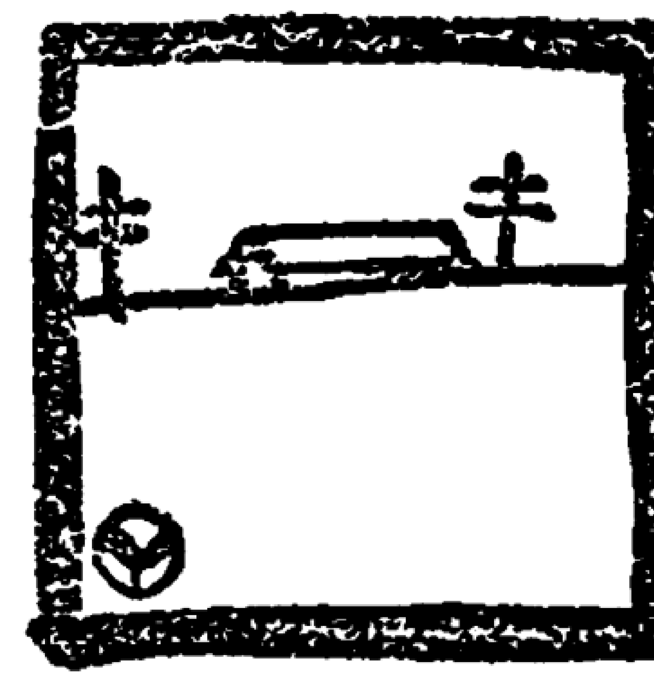
大なる驚きも來よそれまでは相まくらまき寢通さんかも

ねたみとは人を思へるかず〳〵の小さき心ゆあふれたること

思へども尙ほそのみ手にふれぬ間は十の指のたらはぬ心地

何げなく髮にかざしゝわが花の火ともなりつるおどろきをする

いかばかりうつけたるらむこの花のなえたる頃に摘みに來し君



母

物集芳子

宵の内うと〳〵とする枕許へ母樣が例の發作が起つたから直ぐに來て下さいと呼び起された、榮は寢間着のまゝで解けかゝつた博多の平絎けをぐる〳〵と卷き直して、慌てゝ蚊帳を潜らうとすると蚊帳の裾が額にかゝるやら束髮に引掛るやらして、立つてゐたピンでいやといふ程地を突いた、痛かつたから指先で頭を搔きながら何本も角が生たやうに立つてゐるピンを手探りにさしかへた。

母は自分の部屋の雨戸を開けさして兩手を疊について俯向いてゐた、榮は半ば夢心地でバケツに水を汲んで馳け出したので裾をすつかり濡して了つた、夫れが歩く度に肌に付いて氣味が惡かつた。

「餘程烈いんですか」と手拭を絞り乍ら聞いてみたら母は只だ無言つて首を一寸振つたぎり肩で息をしてゐる、橫になるのを苦しがつて坐つてゐるから額の汗が皮の坐蒲團の上に落ちて光つて見える、冷めたくした手拭を心臟に當てゝゐると氣味が惡い程鼓動が烈しく今にも此儘奈うにかなつて仕舞ふんぢやアないかと恐しくなる、日頃怖れてゐる痲痺よりも破烈しやアしないか知らと思はれる、けれども是れ位は每々の事で馴れてゐるから斯うしてゐる內には段々落付いて來るだらうと心では思ひながらも不安で堪らない、醫者を迎へにやらうかと幾度も思つた、甚麼に苦しいんだか、どういふ風なんだか聞いて見度いけれども常々發作の起つた時は決して傍から物を云つては不可ない、何も聞いて吳れるな返事をしやうと思ふと只だ思つたゞけで直ぐ苦しみを增すからと云ひ聞かされてゐるから、榮は無言で母の顏ばかり見詰めてゐた。

水を汲みかへて來た小間使に暑いから北側の雨戸も一枚開けさせた、風のない惡く蒸す晩なので凝としてゐても汗がにじんで來るやうだ。

小一時間餘りして漸く少し落付いた、後から煽いでゐる小母だの小間使だのにもう此處は好いから寢るやうに云つて吳れと低聲に母が云ふ、榮は母の言葉を受けついで御苦勞樣難有うを幾度も繰り返して無理に皆寢かして了つた、母も少し橫になつて見ると云ふから

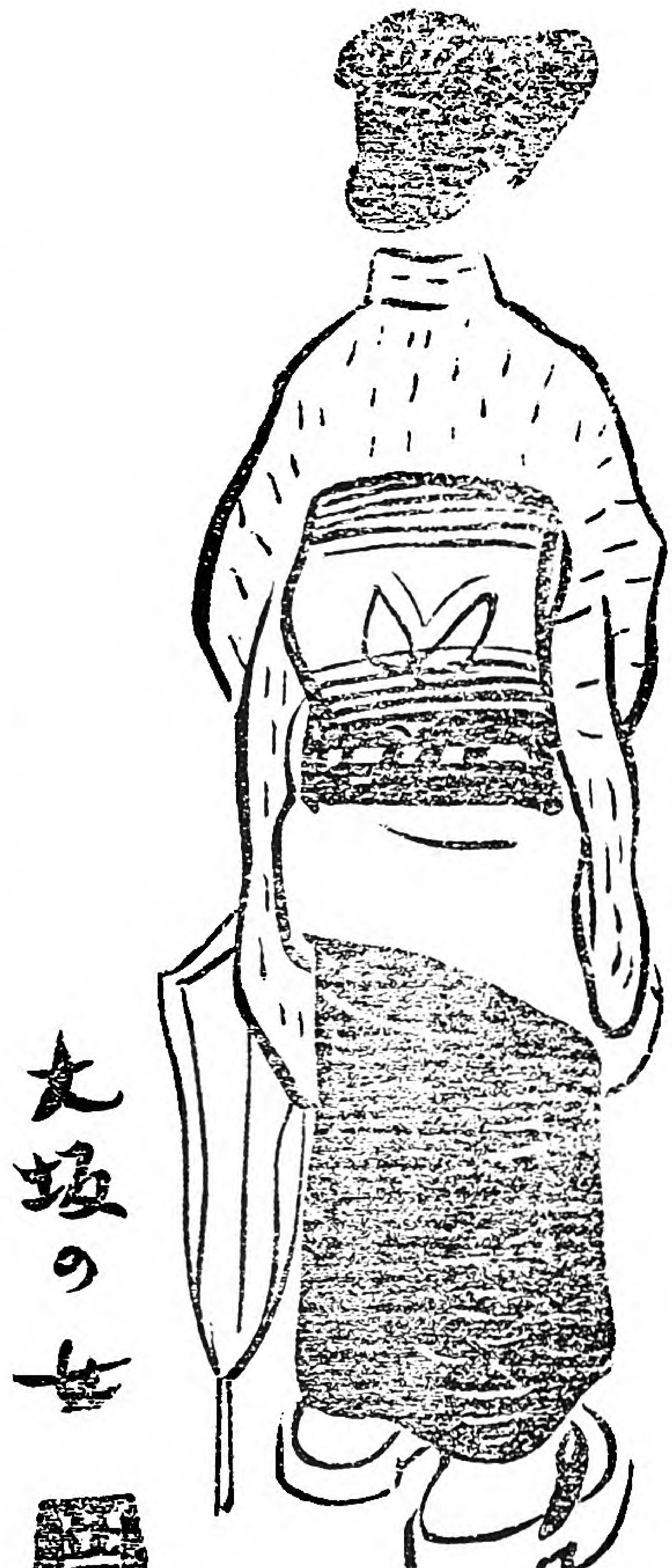
薄い夏蒲團と枕を持つて來て體を動かさないやうにそうつと橫に寢かして、手拭で顏から襟を拭いた、骨立つた頰がごつ〱手に觸つて何だか心細い。

眠つて呉れゝば好いと思ひながら蚊帳を釣つた、洋燈臺を床の間の上に載せて薄暗くして緣側の柱に倚り掛つて坐つてゐた、杏の樹がよく茂つて庇の處まで重り合つた青葉で軒先が一層暗くなつてゐる、紫陽花の花だけが茫然白く見えて何だか人が立つてゐるやうな氣がして氣持が惡い、ぼたりと杏だか桃の實だか地に落ちた音がした。

榮の生みの母が亡くなつてから三年目に現の母が來て既う彼れ是れ十六七年位になる、母が來た當時は子供の目にもよく肥つた血色の佳い丈夫さうな人だつたのに斯うも弱々しく瘦せて仕舞つたかと思ふと何とも云へず寂しくなる、夫れに引き換へて母の總領の喜代子といふのだの、龍子といふ次のだのが人並よりも丈も延びてメキ〱大きくなるのを見ると、誰れかが云つたやうに親木が枯れて行くのが如何にも憐れに思はれてならない、榮は母が來た時分の事を思ひ出して懷しいやうな氣がした。

五つの年母が熱病で亡くなつて七つの秋母が來た、「お母さんは何處から來被るの」とお祖母さんに聞いて見たら、切下げに被布を着て朝から晩まで和歌ばかり考へてゐるお祖母さんは耳が遠いからにこ〱笑ひながら、戶棚からカステイラを一切半紙に載せて榮の膝の上に置きながら、「こぼしちやア不可ませんよ、佳い子だね」と頭を撫でる、「あら然うぢやアないわお母さんは何處から來被るのつて承ふのよ」と耳の傍へ行つて大きな聲で云ふとお祖母さんは微笑みながら幾度も點首いて、遠い遠い處から、今度お祖母さんが榮さんをお膝の上に載せてお腕車に乘つて連れて行つて上げますよ、本鄉から小石川牛込其又先がお母さんのお家よ」とお祖母さんは云ふ、其時の話で今でも記憶てゐるのは母の家へ行く途で澤藏主稻荷といふのがあつて、昔其處には澤山狐が居て今でもゐますよとお祖母さんは云つてゐた、以前ある宮樣のお椽の下とかに住んでゐたとかだつたのが、ある年の冬酷い寒さに狐のお母さんが女の人に化けては宮樣の御出入りの綿屋へ眞綿を買ひに行つた事が知れて、追ひ出されて此のお稻荷樣へ引つ越したのだつて、子供の少さい子狐が皆白い眞綿を頭からすつぽり被つて、お母さんの後に從いてお引越しをしたといふのをお祖母さんは自分が見

たやうに話した、お祖母さんと母の來た頃の事を考へると屹度此狐の話を思ひ出す、母が來てからもよく此話は聞いたものだ、始めて母の里へ遊びに行つた時に兼て聞いてゐた澤藏主稻荷の坂を通つたら急に恐くなつて母に摑つて了つた、其癖何處かに眞綿を被つた可愛い子狐が遊んででもゐやアしないかしと思はれた、家へ歸るとお祖母さんが「狐に逢つて來なすつたかい」と云つて笑つた、すると母が「奈うして夫れ處ではありません、ゐたら一疋お友達に連れて歸らうと思つたんですけれども榮さんが恐がつて顏を隱して車夫に早く馳け出して呉れなんて騷ぐもんですから、狐の方で皆吃驚して逃げて仕舞つたんですよ」と眞面目になつて云ふ、お祖母さんも「然うだらう然うだらう、ゐない筈はないんだから」と笑つてゐた。



其話をして呉れたお祖母さんは國へ歸つて中風で亡くなつて了つたし、母は斯うして五年越し病んでゐる何時になつたら平快といふ當もない母に云はせると只だ生きてゐるだけだといふ、子供達が皆一人前になつて呉れたらもう怎麽にして苦しんで生きてゐるのは厭だと云つてゐる、發作の起る度毎にもう今度は今度はと思ふよと母は寂しい顏をする、心臟の瓣膜に故障があるのだから迚も癒るといふ望はないまでも注意さへ怠らなかつたらと思ふから、何有に用心さへすれば那麽事があるものですか、頓死する人の事を考へて見れば解つてゐるだけ餘程好いと氣安めを云つて置く、氣安めと知りきつてゐながら然う云ふと力強い顏をして、まア用心さへしてゐれば大丈夫なんだからねと云ふ、慰める者も慰められる者も只だ用心さへといふ心細い言葉を賴りにし

てゐるのだ。

恁麼事を考へてゐると突然大きな聲でお經が始まつた、榮は吃驚して何だらうと思つたら夫れは隣家に二三日前から預けられた狂人だと分つてほつとした、平常は溫順しくつて普通の女と少しも變りはない、お世辭が好くつてよく赤い襷なんか掛けて張物をしてゐる見た處は少しも狂人らしくないけれどもお經を讀むだけが違つてゐるのださうで、夜中であらうと朝であらうと氣が向けばお構ひなしに大聲でどなり始めるのだ

母も其聲で眼が覺めたらしく白い夜着が動くのが蚊帳越しの薄灯に見える。

「榮さん私は最う好いから寢て下さい、眠むかつたでせうねえ」と母がいふ。

「晝間寢みますから眠い事は御座いませんよ、もう治りましたか」と聞くと、

「少しはね」と母は太息を吐いて、

「其處に然うしてゐちやア蚊が大變でせう、何なら私の蚊帳に入つたら好い」とねむさうな聲で云ふ。

「いゝえ此處の方が反つて涼しいの、私が起きてゐますからお母さんは眠るやうになすつて下さいね、もう直き明けるでせうから」

「あゝ既うさうだらうね、ぢやア一寸でも橫になつて下さいよ、夫れでないと私が氣になつて眠れないから」と云ふ、何でも云ふなりに逆らはないやうにしてゐないと直ぐ又發作が起るといふから云ふ通りにして雨戶を閉めた、急にむつと暑苦しくなつたやうな氣がする

「ぢやア灯も消して行きませうね」と母を一寸覗いて見ると靑褪めた顏が一層寂しく、疲勞きつてぐつたりしてゐる、明日起きて見たら又見違へる程眼がくぼむのだらうと思つた。

手燭を持て廊下を步いてゐると臺所の方で泣いてゐた小猫が人戀しがつて飛んで來て足にまつはる。

「誰れ、あらお姉さん」と妹の喜代子が聲をかける、障子を啓けて猫をそつと蚊帳の中に入れてやつた。

「又お母さんが惡かつたの、私些少とも知らなかつたわ」と云ふ。

「もう好いの」

「さう難有う、眞個に眠いわねえ」と眼を細くして笑顏をした、床を竝べた隣に龍子は正體もなく丈夫さうな顏をして寢入つてゐる、夫れを見ると何とも云へぬいやな氣持がしたから障子を閉めて終つた。

「難有う左樣なら、眠い眠い」と喜代子が寢返りした。

秋の歌など作る參考

前田夕暮

古き歌集の中より、秋の歌九首を拔き、評釋してみる。九首が九首みな傑作といふではないが、兎に角代表的の歌を選拔したつもりである。

○

源俊頼朝臣

うづらなくまのの入江のはま風に尾花波よる秋のゆふぐれ

作者は金葉集の撰者、大納言經信卿の男である。此歌は金葉集中の秀歌として、彼の定家卿も、幽玄におもかげかすかにさびしき體なりと言つて褒めて居る。まのゝ入江は眞野の入江で、八雲御抄には近江にあるとしてある。歌の意は、鶉の啼く近江の眞野といふ入江の濱風に、尾花が風のまに〱靡いて恰度波がうね〱としてゐるやうでそれが秋の夕暮の事とてまことにさびしくあはれであるといふのであるが、有繫は金葉集中の秀歌ほど有つて惡くはない。何處か漂渺として居る。所謂作者の小主觀のかげのない佳い歌である。

○

藤原忠隆

風ふけば枝やすからぬ木のまよりほのめく秋の夕月夜かな

これも金葉集の歌であるが、一體金葉集の歌は、八代集のうちでも最も輕快で、すらすらとして居て、それで居て輕佻といふではなく、所謂その當時の新派であつたと思ふ。此歌なども、非常に新味がある。意味はよくわかつて居ると思ふ、風が吹くので、木の枝木の枝が搖れ亂れる。その靜に搖れてゐる木の間から、ほのかに夕月がさして來るといふのであるが、如何にも自然な調子で、靜かに搖れてゐる木の間から月がほの白くのぞいてゐるのが見えるやうである。私は金葉集の秋の歌の中で此二首が好きである。

○

曾根好忠

あさぼらけ荻のうは葉の露みればやゝ肌さむし秋のはつかせ

荻の上葉においてゐる露をみると、ひやりと肌に凉味をおぼゆる。あさぼらけ、空には秋の初風が流れてゐる。この歌は感覺の非常に細微な處がある。デリケートな感じかたがしてある。官能的な詠みぶりであると思ふ。

○

山家集

をしめども鐘の音さへかはるかなしもにや露の結びかふらん

いか程名殘を惜んだ處で自然の推移に人力を加へることは出來ないもう今宵は鐘の音がすつかり冴えて冬の響きが籠つてゐる。おほかた露が霜に結びかふる夜頃であらうと想像した作である、が、山家集は何と

言つてもよい。何處か脂粉の氣を脫した處がある。

○　山家集

よこ雲の風に別るるしののめに山とびこゆる
初かりの聲

橫雲の風に別るゝ黎明と言ふので、秋そのものゝに觸れたやうに感じられる。「山とびこゆる初かりの聲」と言ふのも耳にあり眼に見ゆるやうな心地がする。新古今集時代の作者であつたら、雁とびこゆるとはしなかつたらう。きつと啼きこゆるとしたに違ひない。此場合啼き越ゆると、とび越ゆるとはその表情に於て大に差ひがある。とび越ゆるとして初めて西行の尋常一樣の歌人でないことが理解る。箇性の閃きのみゆる作である。

○　源道濟

ひとりゐてながむる宿の荻の葉に風てそわた
れ秋の夕暮

簡素なうちに情趣のある歌で。それでゐて何處かしみ〴〵とした處がある。此歌などはまことにシンプルな感じを歌つたので、誰にでも詠まれさうであるが、却つて小主觀が出たり何かして詠みにくいものだ

○　藤原國行

しろたへの衣の袖を霜かとてはらへば月のひ
かりなりけり

白妙の衣の袖に霜がおいたのかと思つて、手で拂つたら、それは月の光がながれてゐるのであつたと、些か驚いたやうな心持の含まれてゐる作である。これ當時の新しい技巧である。如何にも面白い處はある。感じは宜いに相違ない。然しながらバックがない。箇性が隱されてゐる。

○　後拾遺集

いとどしく慰めかたき夕ぐれに秋とおぼゆる
風ぞ吹くなる

如何にしても慰めることの出來ぬ、さびしい夕暮に、うすら冷たく吹く風は、思はず秋であるゝ感じられるといふ意の歌である。秋とおぼゆる風が此歌の價値をより以上に高めて居る。此場合衣手さむくなどと詠んだら全然破壞して仕舞ふ。秋とおぼゆる風。その簡素な言葉の中に漂うてゐる情緒を思はねばならぬ、作者は源道濟である。

○　萬葉集

わが背子のかざしの萩におく露をさやかにみ
よと月は照るらし

かざしは古へ、男女とも木の花や枝を插頭にしたので、此歌も、わが背子がと言つて居る。後には背子を主として夫をさして呼んだのであるが、萬葉時代は、夫にかぎらず、凡て女性が男性を親しみよぶ語として居た。その背子が插頭にした萩の花におく露に月がさやかにさして居るさまを、餘情をもたせて歌つたもので、萬葉時代の古雅な情趣を忍ぶことが出來る。

たまらず佳い歌と言ふではないが、離れがたなき餘情を味はしめられる歌である。



短篇小説

水野葉舟選

○繼子（天賞）

松田うめ子

白く乾燥しきつた道をもう可成り長く續いた。お衣は汗ばんだ湯巻や、着物が脚へ、ベタ〳〵とからまつたので、潮染めの裾を、まくつて赤い帯の間へはさんだ。

だが、右手に抱へた、紫の包みは、小さいが角ばつて、形の割に大變重かつた。で腕が痛くなると、自然と殆ど無意識に、それの結び目を持て、ぶらさげて見樣とした。と、眉のない若い彼女の繼母は屹度それを見つけて「ほれ〳〵、そい重い物を、メリンスの風呂敷で、下げて持つ奴があるかよ……」と、癖だが、鼻へ厭やと云ふ程小皺をよせて、かう云はれると、お衣は、はつとして、皆迄きかぬ中に、反射的に抱へ直した。其母親のお松と、云ふのが、おたばこ盆に結て、古嗅い洋傘をさして、引ずつて歩いてゐた。彼等と少し離れて、雇女のお初は、ヒヨロ長い身體を前へのめらして、青い大包みを脊負て、また齒の新らしい下駄へ其のほてつて、赤くなつた足を突かけてゐた。八月の太陽は、ヂリ〳〵と、強烈な熱度で、彼等の脊中を射た。道ばたの草と云ふ草は、皆埃を浴びて生氣なく俛れてゐた。四人は四人口をきる勢もなく、押し默て各々が自分は自分と云ふ風に、なりもふりも構はず、バツタ〳〵引ずつて歩いた。其毎に白いむつとする樣な埃が揚た。唯もう、見るに眩ゆい樣な、強烈な日光――風はそよともない、木蔭もない、お衣は懶い眼をあげて、まだ逈かに〳〵續いた、白い行手を眺めて、

云ひ樣のない、乾きを身體全體におぼえた。幼いお松は、時々其苦痛を母に訴へた。「まだかな、暑くて〳〵馬車へでも乘りたくなつたあ、馬車へよ、ね、此度來たのへ乘るよ、××村迄は安いだらう屹度……」と、母袖を引いて、せがむ妹の顏と母親の顏とを、お衣は熱心に眺めて、もつと〳〵せがめ〳〵と、心の中に願はぬわけにはゆかなかつた。「あゝ……」と母親の返事はてんなであつた。當てにならぬにしても、お衣は何となく次の馬車が待たれた。さうした希望を得て、幾分か現在の倦怠を忘れる事が出來た。する中ピーボーと幽かに〳〵ラッパの音が聞え出した。お衣は「あつ來た」と、思はず口に出し微笑した。と忽ち一臺のガタ馬車は、彼等の後ろから、砂を蹴て驅けて來た。「來た〳〵……」とお衣もお松も活氣の聲をあげて、道ばたへ立ち留た。お初も、長い身體を伸ばして、振り向いた。併し母親一人は見向きもせず、相變らず步みをつゞけてゐた。

「お母さんや、來たつてばさ、乘らないのかよつ……お母さあん……」とお松は金切聲を振り絞てゐる中に馬車は、高い蹄の音と共に、嗅い埃を蹴て、驅け過ぎた。「堪へなく〳〵、もう半道とありあしねいによ。」と、母親は鼻へ小皺を上せて云た。お松は惜し相に拗ねてぐづ〳〵ふくれて步いた。「此の汗たら、何うだらうよまあ……」と、お初は、頸すぢに、にじみ出た汗を、薄ぎたない手拭でぬぐつた。お衣は、埃を浴びた髮の毛が汗と共に、頰や、うなじへ亂れかゝるので、苛々する程暑つ苦しく、蒼蠅さかつた。ゴムの櫛で、格好も何も構はず只グイ〳〵かきあげた。而して彼女は前より一層、强烈な疲憊と倦怠に陷た。せめて此持物でもなかつたらとも思た。あつても自分一人なら、投げ出して、座て了ひたい思ひをした。する中此度は、酷く咽喉の渇きを覺え、何か、うるほす物をと思たが、そこには古井戸一つ見當らなかつた。お衣は堪へかねて、妹の傍へ引きよせられた樣に、よつた「あ、松ちやん、妾い咽喉が、から〳〵に渴いてゐるの、何か呑みたいんだけど……」と、疲れて張のない聲で哀みを乞ふ樣な調子で云た。「妾いだつてもさ、もう直ぐ町へ出られるよ、そして氷でも呑まして貰へばいゝよ。」

「あゝ氷でも水でも……」とお衣は妹を通して母にねだつて貰ふのだ。お松は早速母に、氷を〳〵と云てせがんだ。母親は、「蒼蠅へね、あいよ分つてるてえによつ。」と云たのをお衣は、よくきゝとれなかつた。併し

妹の表情によつて、許された事と思た。で再び妹を通して返事を慥かめるのは堪へた。氷々と思て歩む中單調な道も漸やく二つに分れた。そこで母親は初めて立ち留た。

私は序だから街で一寸くら買物して來るからな、お初お衣もその先へ歸たらよからうよ、持ち物があるからな。かう云た時お松は右へ曲る角へ笑顔で立てゐた。お初と共に左に曲たお衣の赤い頬へ、泪がぼろ／＼流れた。光熱の刺戟に腦はツン／＼痛んだ。いつも少しは水のある流れへ手巾をひたすつもりで行くと、もう乾ききつて、底には徒らに光た石ころが眼を射た。お衣はもう萎えきつた身體をば漸やく家迄運ばせると、持た包みを投げ出して、母がめつたに許さぬ、ザラメを多量に茶碗へ投げ入れ、井戸水の冷いのを、つゞけ様に、ガブガブと渇した口へつぎ込んだ。お初は赤黒く焦けた胸を井戸傍でふき乍ら、お衣のする様を眤と見た。お衣は座敷の眞中へ投げ出す様、寢て



（天賞）落椿　水戸　須磨子

見たが又今の自分の行爲に對する新らしい不安を覺え矢張り泪ぐめた。

○大島行（地賞）

一條光子

「若し彼方へいつて何か不足い物があつたら、すぐ云つておよこしよ、そして何時でも歸りたくなつた時に歸つてくいばい〻」

「え〻三日位で歸つて來るかもしれませんよ。」

こんな事を話乍ら母と私とは河ぶちを靈岸島の汽船宿へと向つた。私が一人旅をする事は今度がはじめてなので母の心配といつたら一通りではない。うるさい程舟の中の注意や、百も承知して居るやうな事を繰り返して、いろ〳〵と云ひきかせてくれる。

舟宿に着いてからも母はもしや知人が來ては居ないかと思つて待合室をキヨロ〳〵と見まはして居る。私も口には平氣らしい事を云ひ乍ら、若し舟に醉つた時にはどうしよう、いやな人と一所になつたらどうしようといふやうな一人旅の不安は充分であつて母とおなじやうに室を出たり、入つたりする人々の顏を一々檢査して居た。

「大島行の切符を賣りますよ、こまない間に早く來てお買ひなさい。」といふ聲が聞えたので私は急いで其方へ往つた。切符を買つて、もとの所に來て見ると、母は兼ねて知り合ひの鈴木といふ傳道師と話しをして居る。

「あ〻大島へおいでですか、あの、叔父さんの所へ、はあ、それぢやあおともいたしませう」私はこんな言葉をきいて飛び立つほど嬉しかつた。

「どうぞよろしうお願ひいたします。何しろ一人で旅をいたします事は、此度がはじめてなのでございますから」一人の初旅も十九ではちと價が下ると私は思つた。そしてこんな大きな者を控へてあんな事を言つてくれなければい〻のにもと思つた。

「奧さん、舟まで御送ですか、では入場券を買つて差上げませう。」と氣のきいた鈴木は、母が紙入れからお金を出す間もなく札賣場へ走つた。母はさも安心したらしく

「鈴木さんによくお願ひしておいたから、之で私も安心した」と言ひ乍ら私の側に腰をかけた。鈴木は母に青い入場券を渡し乍ら、見送り人は後から行く事等も親切に敎へてくれた。私は自分で持てるだけの荷物を

持つて鈴木の後から艀舟の方へ下りた。母も小さい體を人込の間にもぐらせ乍ら艀舟に乘つた。

舟は徳山丸といふ汽船で東京と大島との間を往來する舟の中では一番大きなのであつた。船客の多くは東京へ買出しに來た島の人や、見物に出かけた漁師やが大半で避暑客は極く僅かであつた。

「上の室はいつぱいですから下へ、下へ」とボーイの云ふまゝに私等は下の室へよぎなく入つた。

薄暗い、臭い、推しつぶされさうな室！私は入つただけでもう歸りたくなつた。それは、此室に入つて十時間の航海をしなければならない事を思ひ出したからである。

「もう母には會へませんでせうか」と私は鈴木の入つて來るのを待ち受けて聞いた。

「えゝ、もう駄目でせう、よく氣をつけるようにつてお言傳でした」

「あゝ、さうでございますか」と口には言つたものゝ、急に悲しくなつて來て、何處にか出入口はないかと方方を見まはした。丁度荷を積む所の戸が少しばかり開いて居たので、其處から首を出して外を見ると、丁度母も艀舟で陸の方へ槽がれながら此方を見て居られた

私は無意識に幾度も頭を下げた。口はきかなかつた。

着物を脱ぐ人、着替へる人、船室は暫時の間喧しかつた。それが靜まるとすぐ金盥が出た。向側の船頭らしい男は「もう、わしは、初めから醉ふものときめてあるだよ」と言ひ乍ら、シャツとサルマタで寢そべつて居る。鈴木は今月中に譯さなければならないといつて暗いランプの光に目をしばだゝかせ乍ら attic phicosoplur を讀みはじめた。一二時間たつた頃前の船頭風の男は自分の側に金盥を引寄せた。私はもし、ゲーゲーいふのや、臭い香をかいだら、きつと自分も醉ふに違ないと思つたので立上つて鍋蓋位の大きさの窓から外を見て居た。そして新らしい空氣を出來るだけ吸ひ込んだ。私は左右に眞黒な體を自分勝手の方向にむけて、手をひろげたり口をあいたりして、だらしなくいびきをかいて居る人々の有様を見て、逃げ出したいやうな氣がした。だん／＼胸がむか／＼し出して來て生唾が吐いても吐いても出る。若し鈴木に面倒をかけるやうな事があつてはと思つて、さうつと、しんげん袋を枕にして横になつた。舟はだん／＼搖れて來る時々は頭が舟べりにぶつかる位に。私は今にも吐きさうになつて來た。ボーイが大きなバケツをさげて、吐

いた物を、始末に來た。そして、鈴木と、今夜はめつたにない大暴風雨だと話していつた。

「あゝ」と一つ大欠伸をして誰かゞ

「もう相模灘にかゝつたぞ、さあ之からだ」と云ふのを聞いた。そして舟がドンと一搖れ搖れた拍子に今迄私の咽喉の中を上り下りして居た物が急にドッと出た鈴木は「とう〳〵やられましたな」と云ひ乍ら本を置いて、しづかに背を撫てくれた。私は

「もう大丈夫でございますから」と云ひ乍らグッグッと云つて居た。私は鈴木の親切が心から嬉しかつた。けれども、若し此時にもつと親しい人と一所であつたならば苦しみばかりではないかもしれないと思つた。

私は

「相模灘はまだなか〳〵でございませうか」ときいた

「えゝもう三十分はかゝるでせう」と鈴木は時計を見ながら言つた。私は何だか出鱈目を云はれて居るやうな氣がしてならなかつた。

うと〳〵として目がさめた時にはもう夜が明けて、舟は大島に着いて居た。船客は口を揃へて昨夜の暴風の話しをして居る。鈴木は本を鞄に入れ乍ら、

「もう着きましたから、あなた先に甲板に上つて、氣分を癒していらつしやい、僕が後から荷物を持つていつて上げますから」と言つた。私は小さい包を一つ持つて上に出た。人々は皆憾めしさうに、穩やかな海面を眺めて居た。

○お祖父さん（入賞）

信濃　優　梨子

今年八十五になる、耳の一寸も聞えないお露のお祖父さんは、今朝も何時もの樣に薄暗い內から起きて、庭を塵一つない樣に掃いた。そして眞中の少し大きな飛石の上へ立つて、曲つた腰をウンと延した。

自分の脊よりも長い竹箒を、傍の大きな樫の木に立て掛けて、片々づゝ脊中へ手を廻したお祖父さんは、テク〳〵と茶の間の方へ行つた。そして

「さア〳〵起きないかや、お靜もお露も………。もう疾くに夜が明けたぞよ」と、古い雨戸の外から、弛みのある聲で云つた。中からは何とも返事が無い。耳の聞えないお祖父さんは其麼事に頓着無く、すぐ引き返して裏の前栽へ行つた。

「お祖父さんの早いのには困つて終ふ」と、母のお靜もお露も、何時もの樣に今朝も床の中で云ひ合つた。

「大儀だらうからお前はもう少し寢てお居でと、お靜は娘に云つて、ぐつすり寢込んだ後の倦さに堪へない樣に、大きな欠びを一つして起きた。

自分許り寢ても居られないといふ樣に、お露は六月許りの重い體軀を、さもさも持て餘した樣に、のそりのそりと起きた。

縣廳へ出勤る養子の光次は、四五日前に出張してまだ歸つて來ない。

お釜の火をやう〳〵焚きつけた頃、お祖父さんは、夜露で濡れた美しい瑠璃色の茄子を、大きな節の高い手に五つ許り持



（地賞）動く人　芝區　弘子

つて來た。そしてそれを、酷く釜の火が熾つてお靜もお露も顰め顏して居る、勝手の板の間に默つて置いて臺所に落ちて居る芥を二ツ三ツ拾ひながら座敷の方へ行つた。

「さア又お祖父さんのお勤めだよ」と、お靜は長い火箸でお竈の火を繕ひながら、濁つた聲で云つた。

「毎朝々々お勤めのお對手させられてはウンザリして終ふわ。お祖父さん獨りでお詣りして被居れば澤山だのに」と、お祖父さんの耳の聞えないのに馴れて居るお露は、平氣で大きな聲で云つた。お靜はそれを叱るでも無く、眞實だ

といふ様な顔をして聞いて居た。

お祖父さんは一杯に明け放した八疊の座敷の眞中にペッタリ坐つて、今更の様に自分で掃いた庭を眺めながら、少し粉になつた煙草を吸ひ始めた。二三服吸つて、終ひにポン〳〵と幾度か詰つた煙管を吐月峰に叩いて見たが、好い鹽梅に吸殻が落ちないので、煙草盆の小さい火箸で堀り出した。漸く落ちた吸ひ殻は、チーと音して白い細い煙りを立てた。

南無阿彌陀佛々々々々と、口の中で唱ひながら、其煙草盆を持つて立つたお祖父さんは、煙草盆を床の間の上へ載せて、すぐ右側の大きな佛段の扉を明けた。

古い位牌が二つ三つある佛段の中は、お香と線香の煙りで黒く燻つて居た。それでも眞鍮の蠟燭立や花立は、お祖父さんがよく磨くと見えて、綺麗に光つて居る、お祖父さんは各々火打石で火を起して、四つのお燈明を燈した。そして、

「佛様の御飯は未だかや」と勝手の方を向いて云つた此聲を聞くと、大抵の朝はお露が小さい眞鍮の茶碗へ盛つた御飯を、默つて持つて來るのだけれども、今朝はお露の姿が見えなかつた。

お祖父さんは少し待つて居て見たが、待ち遠しくなつて、「什麼したや」と云ひながら、勝手に見に行つたまだ御飯を移すには少し早いけどれも、またお祖父さんにくど〳〵云はれるのが八釜敷と云つて、お露は御飯を盛つてお祖父さんに渡した。默つて受け取つたお祖父さんは、

「さアお靜もお露もお詣りするだぞ、今日は誰の命日だと思ふ。私の祖父さんの命日ぢや無いか、さア〳〵早く來てよくお詣りさッしやい」と云ひながら出て行つた。

お靜とお露は又始まつたといふ様に薄ら笑ひをした

「明日は曾祖父さんの命日、明後日は何祖父さんの命日、お祖父さん見た様な事云つたら毎日命日だわ。」とお露は遠慮無く普通の聲で云つた。

奥からは、チーンと鐘の音の後から、毎朝聞かされる門徒宗のお經の聲が、低く朝の空氣一杯に廣がつてお釜の鐶をガチャ〳〵やる勝手まで、よく聞えて來た

「又叱られない内に行きませうネ」と、お露は流し元にお釜を洗つて居る母を促した。

「さうさ、遲くなると後が面倒だからネ」とお靜もすぐお露の後から勝手へ出た。

濡れた手を拭き〳〵、二人はわざとお祖父さんに見

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

月経帯の大王

特許安全帯

強き方も決して粗相せず



御婦人方が生涯無病でお過しなさるには月經の處置が最も大切な事は申上る迄もなく從來の様に脱脂綿等を挿入なされては經水の滯るのみならず綿ノ纖が殘り屹度子宮病ヒステリ等ハ病源となり醫家の嘆かる事です安全帯は藤川藥學士發明消毒安全吸收力脱脂綿の數倍で博士の甚く賞用さるゝ月經時に重寶便利な如何程經水の多い方でも粗漏する事のない起居動作極安全又なり又産後や白血長血痔漏等に妙です

本舖 安全堂
東京本郷區湯島天神町三丁目二番地

大阪市西區阿波座上通り壹丁目角 洋々堂分店
關西發賣元

定價
安全帯特甲一筋壹圓貳拾錢、特乙八拾錢、並四拾錢、一筋ニテ二三年使用出來升
安全衣は一打入一箱特甲金六拾錢、特乙金四拾錢

市内ハ藥種化粧品店ニテ販賣致升
小包料ハ一組金貳拾錢一組増ス毎ニ貳錢増シ候

御製 正二位伯爵 土方久元閣下謹書
御歌所寄人大口鯛二先生題歌 埼玉師範學校教諭有馬與藤次先生選註

最新刊 ポケット入

教訓和歌通解

天金小本 上製全一冊
定價 金四拾五錢 郵税金四錢

本書はあらゆる和歌より最も處世教訓に叶ひし物のみを選び本文に語意略解を附し君臣親子夫婦朋友神祇國體文事武事奉公忍耐光陰雜事等に各分類し倫理教訓の資料たらしめ他方に於ては和歌を學ぶ者の參考書たらしめたり宜しく子女を思ふの人、道を思ふの人は男女老幼の別なく是非本書を備へられよ

發兌 東京神田裏神保町二 振替東京六一八八番 崇文館書店

埼玉縣師範學校教諭 有馬與藤次先生註解

ポケット

頭註十六夜日記通解
頭註方丈記通解
頭註土佐日記通解

●各冊新刊 小形上製美本各冊全一冊 定價各冊金卅八錢郵税各四錢

特色 本書は細密なる頭註を施し嶄新なる詳解を附し携帯の便を計り小本洋綴の美本とせり

發兌 東京神田錦町二の五 振替東京三四〇九番 一二松堂書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

好評 女子文壇第二增刊 製本發賣

都會の婦人

表紙口繪挿畫 竹久夢二氏筆

◀五月十五日發行▶

定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

◎女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名

日比谷▲上野▲不忍▲神田▲神樂坂▲芝公園▲西片町▲根津▲洲崎▲谷中▲銀座▲魚河岸▲深川其他

◎都會の渦捲に漂ふ若き女の眞情……婦人執筆

▲濁つた室に輝く電燈▲入京記▲鬪ひ疲れて▲熱涙冷涙▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう▲心の活動寫眞

◎都會の實際的生活

▲生活の階級▲卒業式の前▲バザーの當日▲某子爵邸に遊ぶ▲お孃樣のお供

◎東京の地と東京の女……諸大家談

▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士

▲詩に表はれたる都會……河井醉茗

▲婦人席にて……さわらび女

▲東海道線……一色醒川

▲西の郊外より……水野千枝子

▲南の郊外より……荒川澄子

▲上野より（對話）――うす雪

▲湯屋の三助に不快を感ず▲開放されたのか落伍したのか▲欺かれたる工女の懺悔▲東京、大阪、京都

◎創作 小說。散文。詩。和歌。俳句。

◎都會を步める女の印象

▲植物園で逢つた女（北原白秋）▲僅に殘れる印象（水野葉舟）▲街の夕月（森川葵村）▲三人の女（吉井勇）▲油繪に入る女（木下杢太郎）

◎日比谷大神宮結婚式の記事……

◀東京市京橋大鋸町 女子文壇社發行 （振替口座東京壹七九貳） 最寄雜誌書店品切ならば發行所へ申込を乞ふ▶

▶婦人雜誌中に嘗て見ざりし新しき材料に滿つ◀

女子文壇 八月十日 第三增刊 ・好評・

地方の婦人

紙數二百餘頁挿畫澤山 **定價貳拾錢** 郵税壹錢五厘

▲地方婦人の自重を望む……下田文學士
▲女が中心になつて働く……横井農學博士
▲行ける處まで行き得ない……田山花袋
▲女性の自然の觀かた……小島烏水
▲天然の美と婦人の美……大下藤次郎
▲海豹島の婦人生活……岩野泡鳴

◎下京の女……兒玉花外
◎杉坂峠……澤村文學士
◎私の故郷……尾上文學士
◎伊豆の海岸より……中村文學士
◎琵琶湖……しのぶ
◎雲雀鳴く野より……横瀨夜雨
◎淡路の生活……一色醒川
◎海岸……河井醉茗
◎旅より友へ……川路柳虹

◎色彩的區分したる大阪市の婦人……みどり女
◎東京近縣の女の特色……遊蝶花
◎神戸……縱溪柏
◎岡山……よし子
◎富山と岡山の女……下枝子
◎五年以前……山田邦子
◎都會より地方へ……きく
◎機の旅日記……町田靜江

▲小說 漁父の母……小栗籌子
▲小說 賣り桑……水野仙子

◎**煽風器** 目賀田男爵夫人、仲小路遞信次官夫人、中野武營氏夫人、辻村靖子、岸すみ子、中村若子、遠山稻子、武田貢、松岡いと子、其他名流婦人の地方婦人話、旅行談など

◎**都會に憧憬るゝ若き女の叫び**……數篇

▲**山岳、海岸、町村** △石油の噴出△蠟の旅△熱海△房州△秩父△高尾△揚梅の里△大江山の鑼△山城の北△善光寺△岐阜△山形△裏日本の一部△越後の海△越後甚句△北海道の一漁村△浪花節△外數項

◎本州の南北兩端より(薩摩の村落より、北見の漁村より)

◎農村の處女が最も活動する田植時(伊豆、伯耆、近江)

▲諸國通信

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社** (振替口座東京壹貳七九番)
最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

青年雜誌
秀才文壇

◎十月一日發行
第拾卷拾八號
◎一冊（郵稅共）拾四錢五厘
◎三ヶ月分增刊共四冊六十三錢
◎半年同八冊前金壹圓二十五錢

發行所 東京神田旅籠町一
文光堂
振替口座一九五五番

える樣に、少し前へ出て坐つた。而してさも有難いといふ樣に、形許りは謹しさうに手を合せてお詣りした張りの無い緩い聲でお經を讀んで居たお祖父さんは、一寸其方を見て何とも云はなかつたけれども、其顔に嬉しさうな柔かい色があり〳〵と見えた。

去年の春、光次を入婿つた時、

「いくら何だつて見立に丸髷に結ふなんて嫌だわ、什麼したつて嫌。其麼者何處へ行たつてありはしないもの」と泣いて嫌がるお露に

「馬鹿！何時まで島田なんか結ふ積りだ、今夜はもう娘じや無いぞ、見立には丸髷を云つて見るものになつて居るのだ、其麼今時の眞似などしなくても宜し、丸髷を結ふだ丸髷に！。誰が何と云つても私が承知しない」と叱りつけて、遂々丸髷に結はせたお祖父さんは恁麼小さい事にわけもなく嬉んで居るらしい。

「お母樣、今朝はお祖父さんが御機嫌がよささうですネ」とお露は、母の顔を見ない樣に眞直に前を向いてお詣りしながら云つた。

「あゝ」と母も瞳も動かさないで答へた。

「嫌だけれど仕方が無いお文章お上げなさるまで居ませうネ」と又お露が云つた。

「さうさたまにはネ。而したら今日は一日お祖父さんの御機嫌が好いだらうよ屹度」とお靜は快く同意した

そんな話の一寸も聞えないお祖父さんは、思ひ出した樣に鐘を叩いてお經をつゞけた。

「お前達は何時も今朝の樣によくお詣りすれば、安心して極樂へ行かれる」と朝飯の時お祖父さんは何時になくにこ〳〵して云つた。

「お祖父樣、私達はいつもよくお詣りして居たいのですけれども、用があるので仕方無しに下るのです。是からは成たけお終ひまでお詣りして居て、什麼か極樂へ行ける樣にお念佛申ます」とお露は半紙へ大きく書いてお祖父さんに見せた。

お祖父さんはそれを眼鏡も掛けないで讀んで、

「ウンさうか」と前より猶にこ〳〵して云つた。

其顔を見て、「お祖父さんの御機嫌を取るのは雜作が無い」と親子は云つた。

小說の批評

選者

△「友の日記」（備後淡月）　前以つて斷つて置くが、この批評の順序は投書が重ねてある順序で、他の意味はない。第二には自分は可成忠實に心づいた作に對して意見を書いて見るつもりである。この作はまだ

非常に幼稚だ。文章も古い。だが、全體として見方に何處かいゝ處がある。この作者は、もつと心をひそめて新しく起つた藝術を味ふ必要がある。

△「町娘」（鈴琴女）書き馴れた筆だが、書いてある事は氣がぬけて居る。この人はもつと力を入れたら、何か書けるだらう。

△「若き人」（あをば）書き出しはしつかりした文章で、割合にうまく行つて居たが中ごろからくづれ出してしまつた。筆は伸びて居るが心がまだ如何にも幼稚だ。

△「女」（土佐、桃の花）大變書き馴れては居る。書き方も自由だ。だが、この人は何かに惡くかぶれたと見える。妙にデカダンの女を誇るやうな心持——しかも淺薄な心持、も少しひどく言ふと、その心持を空想したものを書いて居る。如何樣な事を書いてもいゝ。自分はそれを言ふのでは無いが、もつと眞摯な心がほしい。

△「抱へ」（はま）すらつと書けて居る。誰れのよりも大膽な、自由な、垢ぬけのした筆だ。しかし事件に對して批判と言ふ事が缺けて居る爲めに力が弱い。

△「或る夜」（草葉の露）上手に書かうとするだけで、心持も何にも出て居ない。

△「繼子」（横濱、松田うめ子）力強い筆で實によく書いてある。この一小篇の底に沈んで居る、反抗、苦痛は人の胸を刺す。好小品だ。

△「黄い花」（小笠原ゆり子）この作は古い處がある。もつと新しく目を開ける必要がある。

△「雜種兒」（京都をみなへし）幼稚な作だ。この作に限らず、ここに投書する人の中には、投書は中止すると書いてある。この人の書いた言葉の中には苛ち立つた心持が見えるから、一言言つて置かう。自分は取捨をする上に於て、多少諸君に氣の毒だと思ふ事は、紙面のせまい事だ。從つて、或る度まで、犧牲を作るやうになる。しかし、これは止むを得ぬ事である。又、永い間幾篇書いても、幾度送つても手答への無いと言ふ事は人に失望させる事である。そこが氣の毒だ。しかし、諸君は自分をかへり見てその樣な場合に、尙ほ一層の努力をされて居るだらうか？、自分の心を養ふ爲めに、手本になる作を讀み、人生を味ひ、考へ、泣きしたと言ふ自信があるであらうか？……たゞ、如何したら當選するか、この一事で心が充滿してしまつて、それよりも根本の問題については、却つて無頓着ではあるまいか。何にも考へずに、たゞ甘い心持で小說を書く人が澤山ある。この人々は如何かして、藝術を深く味ふ、敬虔な態度で正面から見ると言ふ努力をせねばならぬと思ふ。これは單に小說がうまくなる、ならぬと言ふ位の事ではない。人間として、考へねばならぬ一の大問題だ。

△「追想」（羽前、那賀子）穩かな心持で書いて居る、そこがいゝ處だ。しかし、考へも觀方も極く幼い。

△「緣談」（栃木縣、松葉子）これでは駄目だ。お道樂にすぎぬ。

△「不平」（常陸、木村那賀子）この雜誌の投書を見出してから、よく讀まされる材料の一つが書いてある。女の誇り、それに伴つた女性の弱さ、それが極く有り來りの書き方で書いてある。だが、下手ではない可成新しい味はある。で、一篇を讀んで見ると、終の處に當選せぬ、時何

も投書にばかりされるから、この作も、從來の運命と同樣になるのならもし、そのやうな事がありとするならば、その人は道を誤つたものである。小說を書くのは、人の口吻を學び、事件を書くだけでは何にもならぬ。ものを言ふその人の心が、目が開いて居なければ、遂に、第三の人の胸に何も響かぬ。終りに、作者にお答へするが、自分はこの作もやはり當選させるわけにはゆかない。そのためにあなたが、これで投書を止すか、如何かに就ては、自分は干涉すべき事でないと思ふ。藝術がおもちやで（あなたに於て）ないならば、こんな、我儘な言葉は出まい。それ以上はあなたの自由の境だ。

△「大島行」（一條光子）いい作だ。女の心の香ひが感じられた。もつと忠實に、精細に船中を描寫したらよからうと思ふ。文章も自由で、素直でいゝ。

△「女敎師」（遠江、川瀨宮子）幼稚な作だ。

△「人の心」（神戶、山鹿菊野）陳い作。

△「葉書」（德島縣、野菫）大人しい作だ。も一息進んだらいゝものが書けよう。

△「ヴヰオリン」（名古屋、月靈子）無邪氣な悲しみが書いてある何時もながら書き馴れた筆だ。しかし、小器用になりすぎて來た。も一つ革命を起され度いものだ。

△「お祖父さん」（信濃、優梨子）田舍の或る家庭がよく書いてある。この人も上手になつた。つかまへる境もだんだん進んで來たが、まだにらみ方が足りぬ。その中から人の心を打つやうな、批判が足りぬ。これが缺點だと思ふ。

多數の投書の中から、以上の作だけについて意見を述べた。自分はたゞ、この雜誌の小說欄を見始めた時よりも、大體に於て進步して來た事を喜ばしく思ふで、以上の中から、以下の順序で取る事とする。

△繼子　△大島行　△お祖父さん　△抱へ　△黃い花　△ヴヰオリン　△女



（入賞）二少女　青森　松尾千代子

【秀逸】

○抱へ

はま

老母は眠さうな顏をしかめ乍ら、流石に眠いとは云ひ兼ねた。お母さんお休みよと、傍でお柳が勸めても、稼業に熱心な故かナアニと許り、火鉢の前に居眠つて居る。

お柳も睡さうな瞼を開いて、時々老母の顏を見詰めて居た。

昨夜はとう〳〵充分に寢られなかつたので、お柳の眼は腫れ氣味だ。

それも其の筈、昨夜は十二時を過ぎて、藝者逹がお座敷から歸つて來ると、お夜食を濟まし、床をのべて、皆を寢に就かした上、神棚の御祝儀を計算して、お柳は簞笥の錠を下した。

時計は一時を報ずる、まだ母は歸らない、新聞等出して見たが焦々として讀めなかつた。お柳は然うして待つうちに、二時も過ぎ三時も過ぎやうとした。

大方徹夜でもするのだらうが、あの老體を損じなければと氣遣はれる晝間の掻き亂された濁つた空氣が、漸く澱んで時計の針の運びと人の寢息とが、お柳の胸へと流れ込む。お柳は愈眼が冴えて、母を失つた者の不安、恐怖、たよりなさ、それ等を泌々と感じ乍ら、青蚊帳の裾をまくつて床に入つたが、中々に眠れさうもない。

もう曉に近いのに、まだ歸らない所を見ると、朝陽が高く登つてから人眼を盜むやうに、血走つた眼をキョトつかせて、家の樣子を氣遣ひ乍ら入つて來る事であらう。

懷中を空にして、屹度然うだ。

お柳は賭博好きな母を案じて、夜明けを待つた、すると、右手の高い小窓の節穴から、ボヤッとした白い光線が、三線許り流れ込んだ、それを見て漸う安心して、うと〳〵したのが小二時間だつたのだから無理もないが、お柳は又重さうな眼を力なく上げて、

『お母さん寢たらいゝぢやないの。』と叱るやうにつぶやいた。

丁度其の時、一龍と云ふ妓はお座敷から歸つて來た。割合に小柄な、圓い眼をして居る。一龍は若い胸をそゝのかすやうな、甘い香水の香を吐き出し乍ら、妙にキラ〳〵した丸帶を解きかけて、

『お母さん、明朝髪を結ひますから起して下さい、お忘れなく、屹度ですよ。』と老母に云つた。お柳は、人の氣も知らないでと云ふやうに、

『一ちやん、お母さんだつて眠むからうぢやないか、誰よりも一番後で寢るんだもの』

『あゝ然うでしたわね、お柳ちやんまだ私の髪、然う崩れてやしないでせう、明日はもたして置きますわ、ね、ほんとに氣のつかない。』一龍は當り障りなく云つてのけた。

それを聞いた老母は眠いのも打ち忘れたやうにヤッキとなつて、

『お柳、餘計な事お云ひでないよ、一龍は他の藝者と違ひますよ、大切な髪結ふのに、何の朝起す位、ほんとに餘計な口をきく奴だ。』『他の藝者と違ひますよ、が非道く其處に居た一同の胸を刺す。

お柳が一言二言返す中に、老母の聲は疳走つて來て、

『お前は一體、誰のお蔭で、娘で御座いつて云つてられるんだよ。』

『私は唯、お母さんが冬など早く起きるのは辛からうと思つてさ、それに身體にも惡いもの、何も私が家に居る人間ならそんな事案じやしないんだけれど、そんなに一龍さんが有難いのかい』とお柳は鼻聲になつた

『フン生意氣を云ひなさんな、一龍が中心になつて働いてくれゝばこそ』と皆まで母に云はせず、

『狐々さんをお拜む連中は然うだらうさ、親に金貸して證文取つて、その償ひを娘がするのは、當然ぢやないか、何が有難いもんか』

一龍は障子の影で、聞こえぬ振りで鏡を見ては居たが、途方にくれた

『私は一ちやんに不見轉させて娘で御座いッて云つてると云ふなら、此んな家直ぐにも出てゆくわ、これがお實父さんならば、屹度、一龍に食はして貰ふなら養家なんぞ出て了へつて、云ふに定つてるんだけど。』

お柳は舌を鐘らして小靜に訴へる。

小靜は女だから藝者になつた女で、馬鹿に大きい表情をする割に内氣

な女だから、

『お柳ちやん、そんなに泣いちや駄目よ。』

と小供でもすかすやうな、なだめ方をする。

『お養母さん達は、私を貰つた目算が外れたもんだから、今になつて面當て許り、いゝわ、いゝわ』と力を入れて啜り泣く。

お柳が泣く程に義父の聲が混つて、罵る聲は雜音になつて來る。

酒の息、香水の匂、物の古びた濕り、夜の狭い室内には、暫く夜の濁つた空氣がどよめいた。

○黄いろい花

牛込　小笠原ゆり子

夕日が榛の木に横樣にあたつてジージーと云ふどの木よりともわからぬ蜩の聲が聞える。今迄オイラン草や朝顔や色々な草花の植込の上になげたほそ長い榛の木の影がだん〳〵うすれていつて梢の色軒の色が濃いコバルトを加へてくると一ツ見え二ツ見えすんだ空にチラチラ星が見えそめる。

夕ぐれには御露はえんにこしをかけて夜の氣のたゞよふ中にフツクラと水晶の樣に浮き出す月見草を眺めながら果のない夢を辿る樣な心持で過去を思つた。

甘い戀の歡樂、濃色彩のある生活は長い樣で短かつた。

とんでもない事をして終つた……と氣がついた頃はもうお露の美しい性のほてりと姿の操とはとくに多くの男の爲にうばひとられて終つたあとであつた。

美しくかざつた人形が少女の手から手にいだかれて可愛がられた樣に御露も其可愛いゝほゝと美しい姿は多くの男にいだかれた。

そして古く損じた人形がやがて少女に顧みられぬ如くお露も又人形と同じ運命に生れた。

彼女を愛した男の内今おつゆがどんな風にくらして居るのかそれを知つてるものは恐らく一人もない事であらう、おつゆの青春の時代はたゞ華かな戀の花によつてかざられた、然かもそれが虹の如くいつ消えるともなく消えて終つた。

戀の渦巻からなげ出された彼女は極端から極端にうつゝたお露はわづかに過去の追想によつて生きた。

うらぶれた小さな裏長屋に住む彼の世帶道具もそれには一々忘れぬ記憶が殘つて居た。

「マア御師匠さんのはでな着物だ事」

無邪氣な弟子の一人二人にこんな事を云はれる程はでな着物なぞを時ひき出してきて見た、或る年或時或男に對に造つてもらつた、それもおつゆにはなつかしいかたみであつた。

お露はその時、その時の戀には決して僞はなかつた。

たゞ彼より飽かれ自分よりすて多く〳〵うつり變つたけれどおつゆに過去の追想はにくまなかつた。

一しきりけいこがすんでひつそりした夕方になると、御つゆは知らず〳〵昔が思出された、そして日がすつかりくれ果てた頃フト今の自分に返つた時程おつゆにとつて悲慘なみじめな時はない。淋しさ果なさ悲しさが一時に胸に迫つて來て身をもだへて泣くより外は知らなかつた。

「このさき私ャどうなるんだらう」

椽にこしかけたまゝ、ハタ〳〵とうちはで足もとの蚊をおつて居たおつゆはかうつぶやいた。そして心の内に通つてくる弟子の人數なぞをかぞへて見た。

寂さに向つて弟子がこなくなつたらどうしようとこんな不安も胸に浮んでくる。

「アーアそんな時に昔の戀人が訪ねて來てくれたらどんなにうれしい事だらう」

と果かない事もついねがつて見る。

弟子を相手にじようだんを云つては殊さら、はしやいで見る事もあるけれどすぐ其聲の下から淋しさがおそつて來て深いためいきが一人でに出てくる。

敗殘の世を送るには未だおつゆの心は若かつた。

日のくれ〳〵にきれいに御化しやうをした弟子のお君が訪ねてきた。

「オヤ君ちやん、よく來てね、マア髮の好く出來た事」

おつゆは美しい弟子の姿をしげ〳〵と眺めた。

「アラ否なお師匠さん……」

お君は一寸しなをつくつてもぢ〳〵して居たが、

「あのうお芝居に入らつしやらない事今から」

おつゆはたゞ笑つて居たが、

「お芝居なの、道理でおめかしなのね、そして御母さんとなの」

「イヽエ、アノーね吉野やの龍さんとよ……」

「エ龍吉さんと……アノ二人ぎりで……」

おつゆの目はひかつた、お君は師匠の顔を見たが二人で行つて惡るいのかしらと思つた、そしてなぜ師匠が面白くないのかお君には其心がわからなかつた。

「私も行きたいけれど今夜はよしませう……二人で行つていらつしやい……」

おつゆは強いて笑つた、そしていそ〳〵と出て行つたお君の後姿をねたましい心で眺めた。

月もなく風もないくらい空の向ふに時々いなづまがきらめいた。

おつゆは深いためいきをしたが立つて行つてかべにかけた三味線を取つた。

○門口

名古屋　月靈子

『明日は早くね、屹度〳〵待つてますよ』

立石さんは立止まつて、這う幾度〳〵も念を押した。お絹は浮々した心持で、えゝえゝと一つ〳〵元氣よく答へてさうして別れた。

幾重かに新聞紙でくるんで、其の上を又風呂敷で縛つて、ヴヰオリンのそれと形をわからなくした大きな包の端から、安つぽい弓の先だけが三寸ばかり外に出て居た。お絹は時々其の包の上へ手をやつて見たり、頭をのせて見たりして、いそ〳〵と歩いた。長い間欲しい〳〵と思つてた願が屆いて、明日つから愈々お稽古が出來るんだと思ふと、たゞもううれしさが先に立つて、お絹には何を思ふ暇もなかつた。

『氷』と紅の滲んだ、見すぼらしい提灯の下つた角を曲つて、知つた顔の多い職人町へ這入つてから、お絹は妙に胸がおど〳〵するやうに思つた。今まで勢よく袴の下から鳴らした日和下駄の音も、其所あたりからは急に引ずるやうに重たく響いた。

汚ない騷々しい、何所までも〳〵肌を露はしたお神さんや、卑賤な唄をうたふ角刈頭の、見透されるやうな家の立並んだ中に、一軒きり格子作りの落着いた淋しい家、其れがお絹の家であつた。お絹は門口で、明けやうかどうしやうかと暫く躊躇た。

（ヴヰオリンの一節）

詩

河井醉茗選



○夕錦花のかげにて（天）

府下　章子

夕錦花の紅き惱みにくちふれてあり
荒はてし崖をすべりて
赫々と夕日は。

白晝の光の下に
甘き思を藏みてありし
花の脣はほころび
ほの甘き香ぞ
軟らかにちらぼひぬる
美しき戀の綻び

赫き夕日のもと
花は羞恥の紅き額をふせて
微に微にキスの脣のはづかしく
顫ふが如く、ほのになみうつ、
其はての心に見出ぬる、少女の
軟きはづかしき口吻の微に夕日の
奥にふるうあるをも、
幻惑の美しき目路。

落日強く輝けば
はげしくもいきどほろしく
血のゆらぎあつく花は狂ひぬ
あゝ落日の溫たかさと花の熱息と
少女の奔放なるおもひと小野に渦ま
く、

幻のなつかしき美よ。
はやも薄るゝ夕日の中に
悲哀にくるゝ少女の陰影多き瞳と
かなしげに露にぬれては伏めする
花の姿と、
あゝ華やかの美の去りゆく瞬時の
沈みゆく老成なる美よ。

かくて去ぬる幾日來らん幾夜
夕日の小野には
花の息より少女の胸より
美はしき戀慕心はまひ出でゝ

いづくともなく落日の光に遁れさる
今、地平に落る夕日はぬすむが如く
おそれして花にくちふれ、はた
悲しげに花をみまもりて微に輝く、
其かげに淋しき喪心の思は
かなしげにひそめる――。

「夕錦花」も好いが「戀の綻び」は更に好い作だ若々しい胸がみなぎつてゐる、世に多き誰やかな愛戀の人よ、花に埋れて落日を仰ぐ時、試みに此詩をうたへ（評）

○若き日の歌（地）

和泉　金田代志子

姉に別れ母に逝かれ問はむも語らむも一人なる我れは夕の空に欷歔くギオロンの音にあこがれ又は血の如委えし雛げしの愛に深き日を戀ひ或はほのかに濡れて光れる孤燈を懐かしみつ、詩集を友に暮しける十八の若き日に歌ひ得し幾編の詩を來ん日の思出に投ず。

1 說く戀

暮がたの野路の寂しさ、
俯向きて一人とぼく
白き花摘みては捨てつ、
過去とゆくすゑ思ひ
悲しくも行く若き子に
君は說く、邪宗門戀の秘法を。

2 海の別れ

薄暗の包んだ海の上、
灰色の舟と舟とが
互に默して別れて行く――。
あゝ君よ、
吾れに背を向けて俯首れし君よ、
昨日の君の心が五月の空よりも懐かしかりしが、
今日の君の心は師走の月よりも冷たい。
別るべき君よ、
冷たき影を地になげかけて默せる君よ、
今日の冷たき君の心を我は溫むべき
勇氣なく
たゞ深き嘆きと悲しみに打震ひつゝあり。
さらば君、別るべき君よ。
面を上げて暗に漂ふ灰色の帆を見よ
背を向け合ひて、月出づる方へと
暗の方へと別れて行く――。
あゝ別るべき君と我
互に默せる磯の夜
冷たき海氣が胸にしみ込む。

3 堤

昨日迄吾れ知らざりき、
この花の斯く匂ふ堤、
色青きフォルゲットミーナット（勿忘草）
夕日受け悲しく匂ひ
かくて又村はづれより
病める如笛の音響く、
この音色斯く匂ふ堤
昨日迄吾知らざりき。

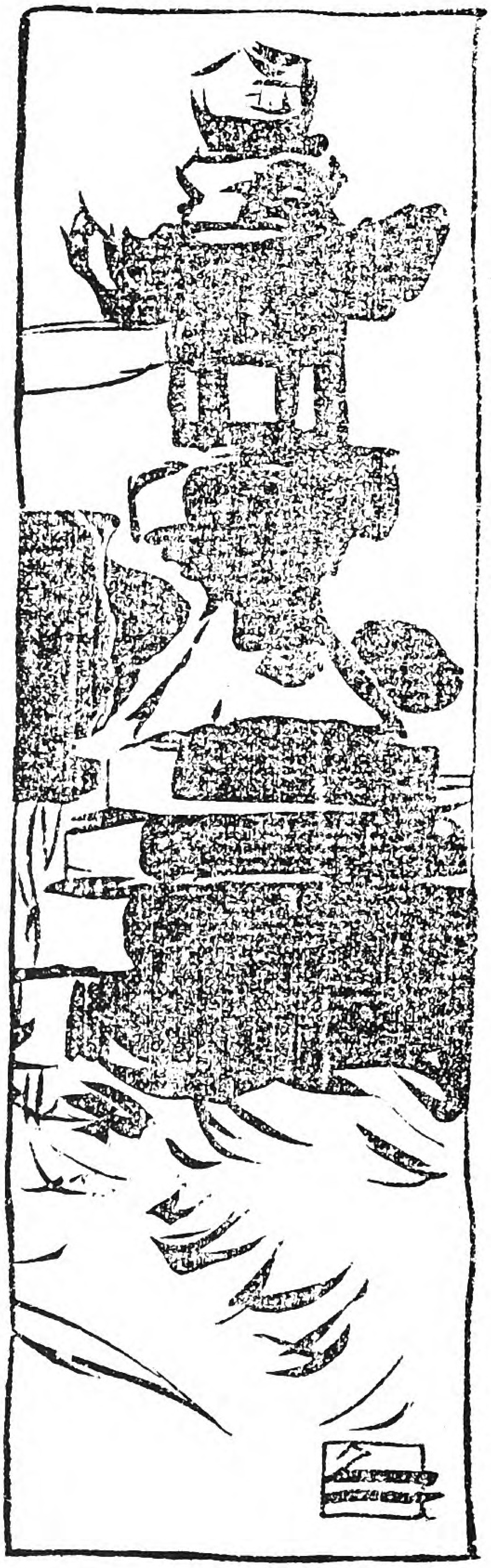
「堤」の感興「海の別れ」の情調、二つとも佳、但だ「說く戀」は空な作（評）

○草の上に立ちて（入）

越中　玉岡

しづかに
靜かに汽車は今——
ステーションを出で、
見え隱れながら樹の中を走つて行く
あゝ、ああ、綿の如く疲れ果てた身を
人はたゞ意味もなく、いづこへか急いでゐるらしい
私は物足りない胸を抱いて
じーつと後を凝視めてゐる

新緑の甘い香に包まれながら——
ふと何か鳴いたやうだ
なにだらう
わからない



杜　京橋くに子

たまらなくなつて、つと
仰向くとたん
青眞に晴れた空の果から
ま晝の夢が
うつら、うつら、うつら
ふり注いで

「甘い眠りを」と囁やくけれど……
私は求め得たさに悲しんでゐる
あゝ彼の聲が——
汽車は早や見えない、そして
煤煙の殘りが
雲のあなたへ
かすかにかすかに
うすれてゆく。

詩を想つてゐる人の心持は何處か違つてゐる（評）

【佳作】

○わが噂

みなとの女

あゝ、寂しい——
再び破壞した愛のくるわを

只一人さすらひ出たこの夕
これまで通つた事のない古寺の
破れ塀の影をとぼとぼとあるく
とこから來るだらう――秋の風か
乾き切つた唇で冷たい墓標に接吻し
て
破れはてた私の心に迷ひ入る
あゝ淋しい――限なう淋しい
あゝまた秋風が
今萬象は限りない悲しみを
たゞ一人さまよふうらぶれの子に
訴へるのだ――この夕――
私はこの思ひを――何に――誰に―
―語らふ
また一人とぼくとあるく
朽ちはてた白堊の塀に
薄い――まぼろしの樣な影がうつゝ
たのに
はつと驚いて――涙ぐんだ目で
空を見上げたとき
血の氣の去つた月が死んだ樣な
冷たい光で私を抱きしめて居た
再かべの我を見やうとしたとき
あゝ、はて――いつ――
誰がかいたのだらう―夢の樣に浮く
壁に印された我が名と故わかぬ文字
指で磨つても消えない
沈默して居る幼文字――あゝ
聲をあげて冷たい我が名を叫んだ―
―瞬間
ふと思ひ出した、我がうはさを――
涼人の物語にとなつた自分の噂を―
私はこの文字にもたれて泣いた聲を
あげて
我が噂は名知らぬ村の
名知らぬ寺の冷たい壁に
幼い子のあどけない字で書かれて居
るのだ
私は涙で洗ひ消さうと思つて泣いた
凡の物の沈默して居る中で――

感じが散漫になつて、主題がそれほど力强くひゞいて來ない（評）

○家を移る時

麻布　美耶

おほらかに歡喜の
めぐれる胸に
淡き悲しみの迫りぬ
幻に包める
住心安かりしを思へば
あゝ去りがての
執着ぞ殘れる
憂愁はつばさひろげて
情ひあたゝむれば
ほでれ來る追憶
振分髮の影宿るごと
おびえし玻瑠戸
はた、からかみの花模樣
もろ手上てまねけり

新しき追憶をきづかん、
新しき家
新しき庭
新しき胸
おゝ甦らん歡喜は
ひろやかにめぐれど
執着は去らず
かへり見つかへり見つ
なげきぬ。

舊き家を捨てゝ、新しき家に移るといふ歡喜と憂愁を歌ふのは、全く好詩材であつた、惜しい哉、充實せる内容を持たぬから情はあらぬ方に逸したやうだけれど、なほ後半は何となく情の迫つた心象が表はれてゐる（評）

○塵の路

播磨　みどり

今日も歩いて居るてく／＼と
塵の路を――
彼方を見ても此方を見ても
皆、灰色だ。
吁、こんな路にでも花が咲いて居る
可愛さうに――塵にまみれて
香もなく、色も褪せて、あゝ
此樣になつても、生を保つて居る
恰ど自分の樣だと思つて
一つ摘み取つた、そして
香をかいだ、やつぱり花だ、
いゝ香がする――氣高い香、
私は懷しい、そうと懷にをさめて
又、塵の路をてく／＼と歩き出した
遙か行途に黒い／＼路がある
あゝ私は、いつ、美しい路に
出られるだらう――。

一本調子でしぶるが、口語詩の純な所だ（評）

○活動寫眞の印象

石川　むらさき女

しめやかにおこるサキソホルンのなげかひに、
けたゝましうもすべて花電燈は消えたり。
ぎごちなき嘲りの聲――器械のまはる音、
油に黄に蒸せてあたりに漂ひ――
見る／＼はだけたる倦怠の霧の表に
鮮かにも又疲勞せる寫眞は搖ぎりぬ。
――闇の底より響く說明師の
わざとらしき聲に釣りいだされし如き
頭巾被れる老婆は双手固く組みて
たえず「わが父よ」を口吟みつゝ
しわぶき白き海邊に
殿に立てる十字架の前にひれ伏しぬ。
――觀客はみなひそやかに息す。――
すはや危げなる人々の瞳は
血走りて深き悲哀に蔽はれ
むらく立まよふ煙草の香と
油にじむ香料の咽びは
をのゝきつゝも沈みゆき
白く打ふるふ觀客の
神經の尖端の痛ましき鋭どさ！

技巧に苦心は見えてゐるが、田舍もの丶厚化粧と云つた風がある（評）

○夕べ

播磨　笹舟

土藏を照らして居た黄な光はいつか薄らいで淋しい／＼灰色の空氣に包まれた。
勞れた人々のだるい足音も次第に消えてあたりは靜かになつた。
夕暮だ――
泌み／＼深い悲しみが湧いてくる
私は無意識の樣に暗い部屋に横はつた
今日縫ひ上げたばかりの新しい蒲團の香ひがする。
ふとふれて見た、
ふわりとして柔かい　溫かい――
いゝ氣持だ、醉つた樣になつて神經がぼんやりする。

ふと店の方から華やかな火の光が
此暗い室へ薄くさし込んだ。
私の蒼ざめた顔の半面は弱い光に照らされて居る。
血も涙も枯れかゝつた、淋しい冷めたいからだは最早や光も温味も吸收する力がなくなつた。
あゝ淋しい。

情調の手ざはりは好かつた。（評）

○別れの前夜

茨城縣　流水女

十六夜の月の光が――柔かな流れの
上にもつれてゐる
うつとりした魂をのせて舟はゆく
スウ……スウ……スウ……甘き戀をさゝやく
程のしづけさ
乙女はあこがれの瞳にいつぱいの
思をたゝへて――月に白き情人の
面を眺めた
……かすかな笑は見えるけれど
あゝその男のうしろには
暗い影がたゞよつてゐるではないか
向岸の仄にうかぶひとつ家の
キスに疲れた息の様な燈火よ
あゝはかない追憶はその影からも流れてくる
――風が過ぎる――
淋しい沈默のあひだに乙女は冷い言葉を思つた
「しと〳〵と小雨が降つてひとつ家の窓の下の
長い草の葉が顫へても
あゝ君は去つてしまふ」

やはり散文の人だ、詩の人とは自ら異つてゐる（評）

○白と赤

本所　松本歌葉

カーテンの外は廣々と、今
眞夏の海は平らかに
輝く强熱の空とキスして
眩ゆい白帆は齒のやうに
なつかしい追憶は
藥の香に滿ちた胸を跳らす。

あゝ〳〵何時〳〵
この寂しい海岸の病院から
眞白なベットを捨て
白き看護婦白い壁に別れ
あの洋々とした綠の海を越えて
赤い赤い
强烈な都に行けるのだらう。
（轉地療養の折）

新らしい人の想ひは斯うなくてはならぬ（評）

○山彦

越後　枯尾花

叫べども聲するあたり、それとのみ覺えねば、行きゆきて道なき道をたどりつゝ一人ゆくかな。
穗すゝきにしのぶ小草の、みどりさへ、それとはわかぬ、身のつかれ。
ま清水のほとりによれど、冷たき汗に身はふるふ。
茨からたち多き野路、すぎて尙ゆきゆく程に、松杉檜をぐらきほどに、茂りつゝ、
なく音さびしき、なゝし鳥、
聞くにつけても我魂は、をのゝきふるひたゆたひぬ。我が戀ふ君が住家をば、さがしあてんとあせれども、をぐらき森に日は全く沈まんとして――、さすらひの子のつめたき胸に、落葉して
力弱くもとりのけん。
恐怖、悲しみ、憂き、つらき、思ひにうみし、かひなにては、其力さへ、あらざりし。
思ひ返せば其昔の、はなやかなりし君が手に、ものたまふのみよろこびし、また愛さしらぬ
少女なりき。
たらちねの母に別れし、其日より、
尙なつかしき彼の君と――
生暖かき追憶と――
思ひせまりて
不安のみ胸にあふるゝ、身となりぬ。

○切なき夕暮

東京　紫江

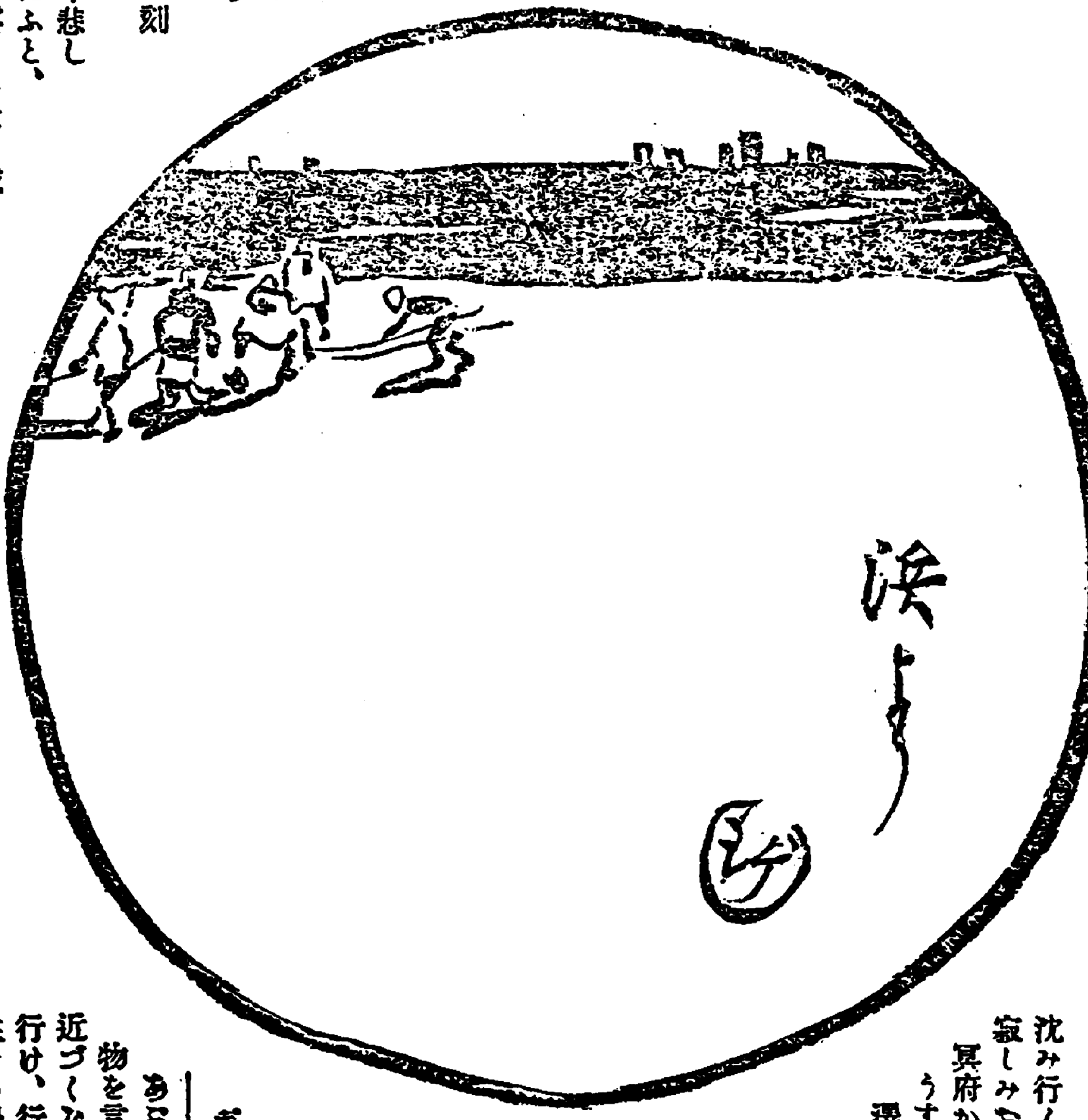
陰鬱な夕暮
工場の煙突から
職工の苦しい息？
黑い黑い煙が吐き出される
煤煙のむらがる空
いや増しに濁る大空
壓迫に疲れ疲れたやうな
恐怖不安！
おさへつけるやうな
重くるしい空氣

…るみる一杯になつた
…めやかに霧が降る——今に又雨か
…みぢから吹く風?
…にしみ入る木枯
高く低く死滅の歌の
太い電柱が唸る
怪しい黒鳥があれあれ
悲しい叫喚をあげて狂ふ
道行く人は皆眼に不安を帶び
疲れた影が閃めいてゐる
手足が慄へ出した
疲れ果てた胸の曠野の鐘が!
又してもうめき出した

○虹

青木たかよ

雨あとの雲はしる空に、かけ渡す虹のはし、弱き夕の日の光に、照りはゆるはなやかな色彩のたがための心づくしぞ終日相見ぬ今日の此世に、別れを惜む名殘の光りか、世の人の讃美は起り若き詩人のくろきひとみは、喜びの色に輝く、あゝされど、凋落の時は來りぬ刻刻と。
霧の如煙のごとく、消えてゆく悲しき天空を笑ましげに喜ばしげにふと、山の端に輝く小さきオレンヂの雲よ やがて滅ぶ身をも知らで
はなやかに、人の讃美の聲を聞かんと
あかき誇の色ぞ浮べる



濵より　京都　小林しげ子

○寂しみ

松江　清き花

沈み行く日の弱々しき光りよ……
寂しみおそひ來る灰色の雲低う、
冥府から吹いてくるかとおもはれる、
うすら寒い風がさつと吹くと、
澤山の落葉がぶつつかりて、碎けて、
又も集つて、どうと凱歌をあげる。
一秒——二秒——三秒——
凱歌のこゑさびれ行く……
夜の色四方をとざして、空には星影一つ見えない、木の葉のさゝやきもやんで、天地は、物音一つしない!
あゝ……寂しい、恐ろしい
何者にか襲れた樣に……
ポタリ……寂寞を破る音……
…
おゝ何の音?又してもポタリ……
生血のしたゝる樣にーたら〳〵と冷汗が流れる、
ポターリ……?

あぶないよ、あぶないよ
物を言ふと火がつくよ
近づくな
行け、行け、さつさと行け
生きる場所が違ふ

酔茗作『霧』より

新詩句

○赤い雲、鳥も皆行く、私も行きたい　尾張　華影

鳥も皆と云つた處が甚だ好い、何處となく處女の物に憧憬れる情がうつゝて居て、心に殘る句だ

○熱いわ、胸が火の樣よ　名古屋　胡蝶

原作此下へ「御覽なさい炎がたつわ」はよけいなこと

○美しい女でさへあれば男の胸は轟く　京都　松木絹子

○いやな蝶、青い花を尋ねて　岩手　邦子

○夕燒の雲、少女は戀を戀した　備中　篠原繁子

原作「少女の戀の樣だ」とあつた

○何にもいやだ、たゞ眠つてゐたい　京都　益子

○雨降る中、聲の限り叫んでみたい　京都　要司村福子

原作「雨の日」

○北向に座ると思出す癖になつた　岐阜　蔦の葉

○淡青いアーク燈が私の愁の樣にともつてゐる　和泉　金田代志子

○冷たい笑、水をかけられたやうに　福井　片山里

○黒い蝶が美しい灯を慕つた來た　伊豆　土谷すゞ子

原作「毒々しい黒い蝶」とあつたが此場合に形容はさして用なし

○瓦斯が來ない、暗い室に生命を想ふ　麻布　草雲雀

作者は洪水の時瓦斯が來なかつたので「細り行く瓦斯を見守つて人生の果を思ふ」「瓦斯の止つた町は星の世界と變つた」の二句を作つた、前者を採つて右の如く更正した、後者は餘りに意味がなさすぎる、もつと意味のあることが考へられさうに思ふ。

○山梔子に白い雨が降つてゐる　兵庫　紅雀

○暗いランプ表情を隱さうとする　青森　しげ子

原作「眞白い顔に露光る」とあつたが、露光るとは何ういふことか分らない

○白い柔かい雲、空が透いて見える　岩手　つゆ

○あれ月が心の奥まで覗かうとする　大分　山本春子

○いやな蟲、殺すのもいやだ　府下　葭子

一字を増すべからず、一字を減ずべからず

○赤い花が咲いた、黴臭い廢屋の庭に　鳥取　櫻草

原作「黴臭い森の中に」とあつた

○山も森も家も霧の海に浮いてゐる　大阪　渡瀬淳子

○何も彼も枯れた私、涙など勿論ない　小樽　淸田芳枝

○私は、私の乳房を抱いた　ゆめ

嘗て他に許さず

○朱の門の剝げた心の脫離　牛込　つゆ子

原作「剝げた門に寂しい秋風が吹く」は稍月並、なほした分は多少シンボルあり

○明るい都會の花やかな心持　大阪　夜會草

○長い橋に飽いて來る人を待つた　愛知　よし子

原作「橋の中ほどまで行つて淋しかつた」の方でもわるくはない

○風の音、家が搖ぐ、心も　失名

原作には「心も」と云ふ字がなかつた

○蝶が飛ぶ、秋の空の下に　信濃　うめ子

○謎でせう、分つてよ　はな子

原作「遠まはしに云はれても私には分らない」



散文

編輯局選

○叫びたい！（天）

名古屋　月靈子

丸い月の顔が、桐の葉越しに西窓に面して座つた私と、何時か相對する程に傾きつくした。更けた夜を、蟬が折り〳〵夢から醒めたやうに、ジーッと一聲、あとは亦もとの寂けさに返つて、風に煽られてパカ〳〵と慄へる洋燈の火のみが、徒らに淋しい。

恰度、青盧集のマリー、バシカアトセッフの目錄の半ばまで讀みさした私は、其の時急に立つて窓近く歩み寄つた。暗い心を月に背いて、凝と眼を瞑ると、

余は自らを愛す、唯自らを愛す。

と、かう繰り返して云つた、主我心の強い十八歳の少女の俤がまざ〳〵と眼に見えてくる。自らを愛す、只自らを愛す、口に出して云つた時私はおのづと身内の震ふのを覺えた。愛すとして愛し能はざる自分、内に燃えるやうな自我を抱いて、更らに其れに伴はない現實に泣く自分は何であらう。欺かれたる女よ！、あゝ醒めたる女よ、しかも醒め能はざる女よ!!から罵られても、どうする事も出來ない自分は何であらう。

余は哭するを好む、失望するを好む、悲しみ悩むを好む。

マリーは這うも云つた。けれど〳〵彼の女は、處女たる彼の女は自己以外に何物にも思ひ至らなかつた。泣くといつて、悲しみ悩むといつて、我と我のために泣くでなくて、悲しむでなくて其所になんの慰安があらう。私はもう自由なる人の叫び、さういふものに耳を傾けるには、今や餘りに妬み深い性を持つ。

といつて、我を沒して得たる我、囚はれたる境に私は何を叫びえられるだらうか。

顔をあげて見ると、月は何時か西に沈んで、あたり

は暗くなつてゐた。次の間から人をひくやうな寢息が洩れてくる、私は自由！と心に叫んだ、けれど其れは唯、過去を追懐する繰ゝ言にすぎなかつた。

沈痛なる叫び、これ亦一歩を進めたる自覺の聲です（評）

○松明（地）

西多摩　葭子

柔い草屋根だけれども家ごと大きな瀧の下へでも入つたやうな凄い雨の音にふと目が覺めた。あゝもうとても明日は出かけられないと失望するのがあたりまへなのを、淋しい待つ人もない故郷へなど幾日遲れたつて差つかへは無いのだし、却て鈍い官能を何かに刺戟されるやうな心地よい雨だと思ひながら、闇に開いてゐた眼を閉ぢて、再び夢につゞいてしまふ、とりとめもないことを思うてゐると、俄にかたんかたんかたんと材木のかち合ふ音が、どうどうと流れる水音とかけはなれて聞えてきた、あゝ昨日の夕がた大急ぎで河の中へ山を作つたやうに丸太で堰をしたあれがこはれて流出したのではあるまいか、誰もゐないのかしらと氣にかゝつてしかたがないから、蚊帳を出て雨戸一枚明けて見ると、そんなどころではない、かつかつとした松明が五つも六つもどしどし降る雨の中に見事にともされて濁流に浮いて川いつぱいに流れて來るらしい飴色の杉の丸太を、とび口へ引きかけては傍の田の中へ揚げてゐるのである。何しろ二萬何本かの材木を流すか流さぬかの境であるから、山地では一層貴い、折角青々とした稻の植わつてゐる田でも二枚や三枚は犧牲にされてしまふのである。つひまだこの間、金さんといふ男が一人で歌も歌はずに河鹿のよく鳴く日だつた、夕暮まで淋しさうに植ゑてゐたあの稻は、もう拔かれたか木の下へなつたか、向ふの水車小屋のかげから又一つ松明が走つて來た、こつちの方でも一つのが燃えきつたと見えて他のへ移しつけやうとしてゐる。人夫は百人近くもゐる樣子だが松明の加減で簑や檜笠が白く光つてちらちら見えるばかりであるけれども、一町も隔つてゐる庭の槇と椿の葉の濡れてゐるのへ映つて目の前まで明るかつた。

此君の進境も躍り歌ばかりでない、文章も目立つて好くなつた、飛躍飛躍、氣の乘つた時には飛躍せねば駄目です、ぐづぐづしておてはいつまで立つても目につかない、此處と思ふ處で一飛躍を試みると、それが何んなに多くの競爭者に勝つでせう（評）

○順禮（人）

備中　篠原繁子

すつくりと白衣服をつけて細き兩の手には鈴と杖とを持た順禮姿の幼き二人は幾日か歩み續けた、疲れた足を引きずりながら南へ〳〵と指さして行く、其當の

樣に美しい顔は焦げるが如き八月の太陽を僅に〳〵菅笠の下によけて居る、小さき力はいたくも足を痛めて姉にすがりつくを、勢出して歩みませうよ今日は町に出られるのですから、と手を取ていたはしげに尚足を運ばして居る、今日は只町に出られると云ふ一念に暑さもいとはず休まずに手を引きようて歩みを運び、段々と廣き道に出で、又尚廣き縣道に出て遂には黒煙吹き出す煙筒の數々見ゆる町の片はづれに近づいて行つた、仁丹の廣告次亞燐の廣告、頭をかゝへた腦丸の廣告、皆其大なるに驚いて何か囁いては微笑んで居る、街道から入口の淋しい町をも此二人には異樣に珍らしく感じられて、右を見左を見して這入つて來た、目醒むる許ん着飾つた美人が海軍服を着せた愛らしい子供をつれて、につこりと立つて居る、おや〳〵まあと二人は馳せよつて見ると、これは人形であつた、呉服屋の店先であつた、其廣い〳〵店には友禪や何や名も知らぬ美しい物が一ぱいに飾り立てられてあるに、あゝと許りよろめいた、奥深くキラ〳〵と、御殿のやうにまばゆげに光つて居る小間物屋、もうもうと甘いいきの立上ぼる饅頭屋、身體を搖するせんべい屋、赤く熟した桃や林檎をうづ高く盛上げた果物店さては、こう〳〵しい寫眞屋、此等の物に氣を奪はれて只うろ〳〵とのみして居ると、チリン〳〵前からも後からも自轉車が來る、俥が馳せて來る、荷車が來る郵便が走る、魚屋が走る、ぞろ〳〵と裝ふた人が行き



夏の花　新潟　村田けん子

過ぎる、もう眼がくる〳〵まうて倒れさうだ、物音一つしない山家にのみ住みなれた二人は始めて町と云ふ物にふれて只美しい物賑はしい物と云ふ事のみ深く印象されて、夢中で歩ゐた、そして町を幾まがり〳〵して又出て來たのは停車場の前であつた、驛を向ひに道をはさんでずらりと並び立てる高い棟の大旅館、二階に白い幕のチラ〳〵搖れて三味線の音朧ろにホヽホヽと女の笑聲する、ピユーと急行列車が止つた、と旅館からぞろ〳〵多くの客が出て行く、後にはハイカラの女が荷物をさげて見送つて見る、其人むれの後を二人は追うて待合室に來て窓から覗いた、薄羽織パナマ帽洋服姿の紳士、島田丸髷ハイカラの婦人皆盛裝して降りたり乘つたりぞろ〳〵賑はふプラットフオームを一ぱいに眼を開けて眺めた、やがて汽車は出る、降りた多くの客はずらりと並んで待うけて居る俥に乘つて、西へ東へ南へ北へと散ばつて去つて了つた、先刻見送つて出た旅館の女が卷煙草を喫しながら大手を振つて歸つて行く、其後姿を二人はぢつと見送つて居たが、ふと妹が姉さんと云ふと姉は無言に妹の手を取て引きずる樣に歩み出して、巡查出張所と掛札してある小さい家の影に這入つた。

初めて町といふものを見た順禮の子の心持を捉へやうとしたのは殊勝です、充分には描けてゐませんけれど、其着眼は一歩他を抽きんでました（評）

【佳作】

○杜の中

越後　田中まつ

「お母さん〳〵」私は續け樣に呼んでみた。優しい、戀ひしい、懷かしい、慈愛に充ちたお母さん………私は飽きる程呼んでみたいと思つて。

それは櫟と楢、山樫の杜の中、その櫟が一番丈高くて楢が一番低かつた。けれども夏の光り、強い烈しい白光を覆ひさへぎるには餘りあつた。

櫟の實……。秋になるとひとりでに赤う熟んで、ぽとり〳〵と地に落ち、翌年はまたひとりでに芽を出すどんぐんも、今は小さく、桃が被さつてあつた。

「お母さんにやらう」と思つて氣根よくむいてみた。

櫟の根本に甲蟲がゐた。角のある男甲、鋏みある鋸甲、男兄弟の澤山あつた私は幼い時……よく朝ひとり早く起出て、遠い此林にわけ入り、甲蟲をおさへてきては兄等にやるのが樂しく、そして賞め悦ばれるのが一種の矜りでならなかつた。

私はこんな事を懷想すると、もう羞くなつてきてならなかつた。そしてずつと杜の中を見廻はしたが人らしいのは私のうすい影ばかりなので、ほつと安心した。

「ふふふ」何んと無く可笑しくつて〳〵……。そして譯も無く地を踏んでみた。トッ………。その音が杜

のずつと奥の奥でエコーする。又た一と足し、續いてまた一と足し……。しまひには自分ながら馬鹿〴〵しくつて我れと我れを嗤つた。でもやめられなかつた、「もし誰れかがみてゐやうなら」と思つてやつとやめたけれ共、誰れもゐないと思ふと矢張り恣な心になる「何か歌つてみやうか知ら」歌つてみやうと意識すると今更らに聲が立たない……。

今度は元氣よく大股で歩るき出した。そして再び止つた處ろ、そこには白ろい野百合が芳芬咽ぶばかりに咲いてゐた。六十年、猶太の野に咲いた野百合の子々孫々……。けれどもそれより私は此乳白色、紅かい花粉、甘い蜜……それがこんな黒いきたないこの中に含まれてゐるかと思ふと感興が止度無くわく。

「折つてお母さんにあげやう」と思つたが、でも餘まりのあたらさに、とても折る氣にはなれなかつた……。

自然の描寫に新味があつて、杜の靈魂が活きて物言ふやうに思はれるのです、此作者、確に女性とすれば隱れてゐる人ではない（評）

○造り松

徳島縣　吉田紫花

○○樣の造り松も近い内に掘られて仕舞う……といふ噂は大分前から聞いてゐたが、今日はとう〳〵買主が荷車引いた人夫を多勢引き連れて掘りとりに來た

○○家は縣下でも有名な大家であつたので、十二棟の立派な白壁造りが佗しい片田舍の我村の中央にさながら宮殿の樣に嚴しかつた、門の正面には年を經た七本の高い松が同じ形に造られて一列になつて門を守つてゐた、そしてそれが實に村の目標であつた、私の家はその松から二丁程西へ隔つてゐる。

村中の子守や小供は其松の下を遊び場にしてゐたので、夜が明けると皆そこに集つて來て、こぼれ松葉を拾つては松脂をつけて下の小川に流して五色のやにが吹きでるのを見て嬉しがつたり、宵月夜の宵などには更るまでも鬼ごつこをしてそれに倦いて來ると皆が一しよに聲を揃へて、（お國一等は○○さんよ——門に七本造り松——）と唄ひ乍ら月影うつる松の下をいつたり來たりして脊の子を寢かすので、私はよく弟の守についていつては其松のどれかにきつともたれて皆が謠のふを只默つて聞いてゐた、いづれ五つ六つの頃の事であつたのだから深い考などあつたのではないけれど、村の誇を唄ふ——といつた樣な其唄が小さい耳に限りなく豐かに平和に樂しかつた、そして嚴しい大きな家も、七本の松も皆宇宙の續く限り永久のものだと計り思つてゐた、どうして十二棟もあつたあの家が一棟もなくなつて、廣い〳〵屋敷跡が蕎麥畑になつて、七本の松が今日知らぬ人に掘られて行かうなどとは更に〳〵更に夢にも思ひ知らなかつた…………名殘惜しき七本の松よ、買はれてゆくか——金に……

其儘に捨てゝ置いても獨り手に育つてゆくのに、遠方へ行つて仕舞つて、今は我村には居らぬ松の昔の主——○○家の人々は今どんなに思つてゐられるやら、門に出て見ると質朴な村人は鍬の手を止めて遠くから名殘惜し氣に松の梢を仰いでゐる。

多勢の人夫は、種々の道具を縱に振り橫に打ち呶鳴り返つて、恰も鐵石の心堅き忠臣の樣に盤石と動かぬ老松の根太骨を掘つては倒し〳〵口々に罵る聲は村の平和な空氣を破つて七本の松は遂に悉く橫に倒れた、……金力——腕力——アヽ何といふいやなみぢめな姿であらうと私は眼を閉ぢた、軀松は車を繫ぎ合したのに乘せられて多勢の人に押されて引かれて北の方へ〳〵と運んで行かれた、車に搖れ乍ら無數の可愛い松葉が一つ〳〵泣いてゐるだらうなど思ひ乍ら立ちつくしてゐると、野良歸りの村人はバラ〳〵と皆松の掘り跡に寄り集つていつて七つの穴のぐるりに立つて切に話し合つてゐる、○○家の榮えた昔を語つてゐるのであらう、……七つの翠蓋中天にかざして懷しかつたあたりは只天高く晴れ渡つて昨日の影もない。

斯う云ふ材料を、斯う云ふ風に大人びて扱ひ得る人は、あなたの外に一寸ありません（評）

○まひる

牛込　平塚白百合

八月のある日だつた。

赫と眼を射するやうな土いきれのはげしい、さうしてせゝこましい細い道をとほつた、たしか千住といふ處だつたらう。

三階造りの一風變つた家並が頭をおしつけさうに高くたつて、戶のしまつてゐる二階もあつた、赤い裏の夜具が干されてゐる欄干も見えた。

フッとあふぐと黒ぶち格子の障子をあけて二階に出た女を見た。

青白い、艷も肉の香も失せはてた殼のやうな淋しい荒んだ女であつて。

前から來た遊人風の帶のズルッコケた男に、

清ちやん、とこゑかけた。

細い腰をまいた緋チリメンの腰帶の色も褪てつた。

女の聲は鉛のやうに重くるしいいやなこゑだつた。

私はフト幼ない時味はつた嫌ひな〳〵無花果の熟んだ實を味はつた跡のやうな氣がしてべ〳〵するやうな唾をそつと吐いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

やつと大水が引いた。水びたりにされた低い家は疊や種々雜多なものを亂雜に初秋の赫とする日に干されてゐる。

○○橋の袂の小間物店で書上た計りの美人畫の看板が屋上に見える、五六の人は上向きになつて見てゐる

ペンキを思ひ切りつかつたのでなま〱しく、或處なんか皮膚病者の肌の色見たいのもある、色彩が光線を一ぱい吸ひ込んで光つてゐるさまは何となくおさへつけられるやうな眞夏を思ひ出させる。

並木の柳もず黒くなつた。

荒物店の左手にかゝつてゐるビラがヒラヒラあふられてゐる。

空は思切つて濃いコバルトに澄んで電車のカーブする個所から何とも云ひやうのない頭のうづくやうな音がビリ〱傳はる。

左に折れると埃をあびた赤煉瓦の建物が死んだやうにかたまつてゴトッともしない。

都會の疲れとでも云つたやうな情緒が何處となく漂つてゐる――。

以前から見るとあなたの作は確に進歩しました、新しくなりました



洗濯　呉市　五島あさ子

表面だけの紅粉でなく、心の壁も塗りかへて下さい（評）

○兄の使

葉子

扉をもぎ取つた、今にも倒れさうな門を急いで入つて大きな栗の木の蔭で流れる汗を拭ふた、萱屋根の馬鹿に大きな家、然し全體に煤けて黄色い壁の所々はげたのや、高い様、太い圓柱を見るとお寺？と思はれる、だゞつ廣い表庭一面は、草山の様に長い雑草が隙間なく生ひてゝ、私は落ちぶれたなあと染々思ふた。草いきれがボヤ〱する上を急いで歩んで、玄關へ行くとそこには、九十七になるお婆様と青白くやつれた菊様が、午過ぎの強い照りに當つて其長い草を刈つて居た、チラと私を見た菊様は、俯首いたまゝ草の茫々してる蜜柑畑の方へ入られて終ふた。あゝ四年前の豪家……菊様の心は――

急に胸がつまつた。弓の様な腰をのばしてニコ〱見てゐたお婆様、何やらクドクド語る。

「ヤア葉ちやんと」色が生白くて、ぞろりとした役者みたやうな優様が

お樣へ出てきたので「あの兄が歸りまして……………これを」と手をのばして洋封の手紙を渡した。僕も上野で、四月に逢つたきりだ、彼の頃は面白かつたの、其時の歌舞伎が忘られないのと座敷の將棋盤の前に退屈相に座つてる男の事も忘れて、幕引かずに語つて居る。それが私の頭より高い樣に立つて八字鬚を引張り乍ら、目鏡越しに見下して…………。

健樣。あなたの爲に名代の豪家も、今は見る影もない有樣で、ひい祖母樣迄も非道い境遇に被在るではないか、菊樣が可憐想ではありませんかたつた一人の妹が可愛くはないのですか、親から血の出る樣な金を絞つて香水を匂はしたり、自分でばかり絹物きて、お茶屋遊びするのがどんなに好い心持しますか。

私は大切相にしてる鬚も白髮もブリ〳〵むしつてやりたくなつた、七つばかりの水蜜桃を出して、持つてお出と追ひかける樣に云ふのを、後も見ず「家にもありますから」と洋傘の中で答へて、急いで門を出た。

九十七のお婆さんが草を刈つてゐるのは珍しいし、ハイカラの青年の態度はにくらしい、田舍にありさうな家庭、文章も面白く讀ませました（評）

○河岸の夜

京橋　鳥飼蝶子

星のこぼれさうな晩だ。水の色と空の色と一つになつて紺青色に澄み切つた底にも天の川が浮いて居る。ゆた〳〵と潮の香の流れ漂ふ水のあなたきらめく燈火のあのあたりが佃島、茫と霞んで影繪の樣に見えるのが相生橋、果てしもない青海原からでも吹いて來る樣な濕つぽい川風に洗髮が頻にみだれる。

橋の上を女が行く、中柄の浴衣を着た櫛卷の其後から柿色絞りの三尺しめたくわへ楊子のいなせな角刈の男が行く、石垣の下の宿船にふわりふわりと青蚊帳がはれて居る、ひた〳〵と水は靜に船樣を洗ふ。

あちらこちらの船の灯の流れ映つた上を掠めて黑い衣がツイと通る……槍は錆びても名は錆びぬ……濁つた聲が橋の下の闇に消える。

ゴム輪の車が來る。犬をつれた小僧が來る。向ふ横町を二人づれで新内を流して行つた。軒燈の暗ひ薄闇に吉原被りの手拭がほの白う浮いて何を彈いて居るのだらうか冴えわたる絲の音に泌々と聞き惚れて居た。涼しい風が吹く〳〵と橋の袂の瓦斯の火がはためく。

柳の蔭を箱屋をつれて潰し島田の肩の細い藝者が通る。高くかしげたお納戸色の着物の裾から白地に鹽繪の破れ芭蕉の大模樣がくつきりと浮いて見えた。

築地邊の夜景、一段の情趣を添ふ（評）

○去りにし友

大河内

綾江樣は、突然彼の美しい姿をかくして仕舞はれた。ヌビシヤへ、いつぞやヌビシヤなんて沙漠の樣な生涯嫌ねと皆が云ふた時、君は吁々矢張屑蹙められた一人だつた、其佗しい世界へ……曾ては吾クラスの花なりし君未來は交際社會の花と君自らも人も許して居りました物をマア何と云ふ激しい變化—不思議な夢を見る心地がする。あの華やかな希望もあの輝やかな若い誇も潔よく振り捨てられるには、幾日幾夜の悶が續いたでせう、にがい苦しい涙もかくれてゐませう。たつた一人の母君の涙さへも、遂にひるがへし得なかつた程堅い決心をなさつた、其處には悲しい動機も、深くわだかまつた事情も屹度在るでせうに、唯、かねての望みだからと、此短かい言葉の影にすべてを葬つて默して、一とせ前にはいたくも厭ふた世界へと我から去つたいたましい友の心、友の姿、私は悲しい矛盾を攻め樣とは思ひませぬ、思ふと只涙がこぼれます、熱い涙たゝふる胸を、若い血の沸る胸を抱かれる綾樣が住はれるにはヌビシヤはあんまり冷たう御座ますもの、あんまり寂しう御座ますもの。我々の世とは遠く隔つた其小さい天地は、山に野に思ふが儘に走らせて被入た御心を容れるにはあまりに狹いぢや御座ませんか？けれど、もう何にも申しますまい、水泡の浮世の夢から醒めた人の胸を心を再騷がせ度ありません、思出に泣かせ度くありません。別れる彼の時、神に身も心も捧げて祈つて綾は新しい生命を得ませうに、泣いて下さいますなんきつ

ばり仰しやつた、み聲は吁々流石に慄へて居りましたけれど、忘れられない、御瞳、清い信仰に美しう輝やいてゐるあの御瞳の光り……果して御望の光明の道が御前に開けたかと危ぶむのは餘りおろかで御座ませう。夫よりも是から、あなたが辿つて被行る長い道は淋しいでせう、寂しいでせうけれど、聖い慰安があるのですもの、私は泣きは致しませぬ、ね新らしい御生涯を祝福しませう……と強く左樣思ふ側から〳〵、水色の振袖ふさひし屑美しい人の傍と、白い被り物、黒い服寂しい粧のうら若い童貞が惱ましい額を垂れて聖母マリヤの前に祈禱に餘念のない姿と、こもぐ浮むで、あゝ私の胸は甲斐なう又も亂れ始めるので御座ます。

自註、ヌビシヤは童貞に成る人がまなぶ處で御座ます。

痛ましい人、もつと涙を注ぎたまへ（評）

○野に降る雨樣に

神戸　百合香

女の判任官が何になりましよう。

女の官吏が何になりましよう。

世間の人から冷笑されて、いくら自分では、天職で御座います、職務は神聖で御座いますと濟して居りましても、世の人はすまして下さいませず、どうせお轉婆者のあばずれ者としか思ふて下さいませんもの、全く女事務員は哀れなものですよ。

昨日も三ケ月ほど前に退職いて嫁だ友に此の樣な事を云はれました。「瀨尾さん、もう宜い加減に破れ袴をお取りなさいよ、いつ迄破袴に身を任！て、外部の壓迫を受けて居らつしやるの、やせても枯れても破袴さへ取て仕舞ばどこへ出ても赤い顔して小さくならなくつても、人並の顏して居られますよ、ほんとにいつまで破袴に身を任すつもり」泣きました、私も女です、虛榮を捨てたとは云へ十九の女ですもの、涙も出ますわ。

いつかも此樣な事がありました、宿直の夜でした、誰かの發言で海水浴に行く事に定つて、須磨の浦が宜いとか舞子の海が宜いとか云ふて居たのが、明石に定て、さて此度は衣類の方に話が移つた、やはり女ですわ……袴が宜いの、帶が宜いのと騷だ結果袴の方は少々お轉婆でも目立たないからと袴に決した其時

「袴も宜しいが今頃袴はいてうろ〳〵して居た日には事務員其儘現はれますよ、學校は暑中休暇ですからね、まあ〳〵事務員と見てくれゝば結構、どうかすると人相見のお嫁樣かと思ひますよ」

今迄帶は似合はないの袴が宜いのと騷で居た連中も、一樣にだまつて仕舞いまして淋しい顏して凝て仕舞ひました其後誰一人海水浴の話は云ひ出しせませんでした、此の樣なのですもの、全く哀れでしよう、どうかして世の人の御笑を受けまい、普通の女と見て貰ひたいと云ふ事は一時も頭を去らないのですよ。

女子事務員が世間の嘲笑を受けるといふことは確かでせう、是に辟易するのは矢張女は弱いからでせう、婦人の職業といふことが發達した來たら、こんな弊風は自然に無くなるかと思ひます（評）

○電車

鈴琴女

私は電車で同じ道を往復するのが單調で嫌だと思つた。每朝江戶川から兩國本所行きに乘つて、駿河台下で赤坂見つけゆきに乘り替へる、而して八重洲橋で下りる。

歸りは日本橋から乘つて須田町で九段江戶川行に乘り替へる、けれど此れも最う倦きた、電車の窓から見る街なら何屋の次が何屋とチヤンと覺えて居る。

新聞の廣告で女子文壇の發行したのを見て早速買つた。每日電車の中で讀む、停留所の呼び聲など一寸も耳に這入らない、只駿河臺下と八重洲橋と須田町と江戶川だけ耳に付くのは不思議で有る、然し女子文壇も讀み倦きた、始めから繰り返して讀む事今日で五六回。

隠見ただけで内容がハッキリ頭に浮ぶ。歸り途だ。吹つかけの雨に袴の裾がびつしより濡れた、生憎滿員なので、釣にブラ下がつて居ると、背廣服着た四十ばかりの智男が席を讓つて呉れた、腰を下ろすと妙なぬくみが生ぬるく全身に傳ふ、私は靜に眼を閉ぢた。神保町で停車した時私は硝子越しに外を眺めた、雨はしきりに降つて居る。目をそらす途端隣の人の耳の穴が目に付いた、二十五六の職人風の恐ろしく色の黒い男だ。私は不快に感じた、而して自分の眼の達く限りの人の耳の穴を見たどの人のを見ても暗い苛々した心持に成る。男でも女でも此電車に乘つて居る人の耳の穴は皆醜いと思つた。切符切りに來た車掌の顔と其のスイルを見た時耐られぬ程苛ついた來た、中途では有るけれど飯田橋でりて家迄歩いた。

耳の穴は振つてゐる（評）

○誌友訪問記（其一）

京都　名もなき花

或日の午後、夏のいら〳〵した日光を浴びて此間から企てゝ居た誌友を訪問しようと我家を出た。昨日自分の知つてゐる愛讀者と時折投書する人の所は手帖に控へておいたから、一番近い道順をと繰つて見た、投書家の少數は昨日ハガキを出しておいたから可いが、突然知らぬお文を訪れるのは變な物だなど考へて……A様、此方は一度誌友の寫眞帖に出てゐた人、早速訪れた。

私は一體何の爲に此日中の暑さも忘れて誌友を訪問するのか、東京にあつた誌友會を京都にも開き度いの一念で不束な身をかへり見ず一心になつてゐる次第、心細いといへば心細い、案外其方は優しくして下さる、會の事を話すと、仲仁寺の新趣會からですかとのお尋ね、變に思つて何ですかと問へば此間から新趣會の目黑とかいふ人が度々訪ねて、自分は女子文壇へ須美禮と云ふ名で俳句を投書してゐる、誌友が地方にも京都にも大分出來たから此十一月に女子文壇誌友會を開く心算だから入會してくれとて年若い書生風の男が來た、入會して暫時すると箇人的な事ばかり言送つて來て餘り失禮だから昨日退會したと物語られた、しかも捨置けないのは彼方此方の電柱に女子文壇愛讀者會十一月開會申込所目黑宛の廣告もしてゐるそうだ、誰のゆるしで名を借りたのか。參考にと會則及手紙など見せて貰ふとまあ見るも汚らわしい事のみ書いてある、私は一時に忌々しく思ひ其人を見とゞけてくれんと好奇心にかられ、ソコソコに其家を出て早速車上の人となつて仲仁寺へと急いだ、中門を潜つて四方を見ると、つい横手の門番とも思しき家に本田と軒燈が上つてゐるあゝ此處だなと思ひ乍ら戸の中の入口をのぞくと黑い板に新趣會申込所入會者は會費二ケ月分前金と朱で書いてある、尚よく見ると總務目黑露月と名札のやうにうす暗らい口に掛てある、心をきめて訪れようとすると急に胸がわく〳〵する。決心して入口で訪ふた、暫時して女の答へる聲が微かに聞えた。

元來京都には投稿家が少い、少い中の數人が熱心になつて會を開かうと思ひ立たれたのだから其苦勞や察すべしである、此記事は誌友會前記とも見るべきもので、會の記事は次號あたりに發表されるでせうが、却つて斯う云ふ別記に興味がある、讀者も亦好奇心を以て此つゞきを迎へるでせう（評）

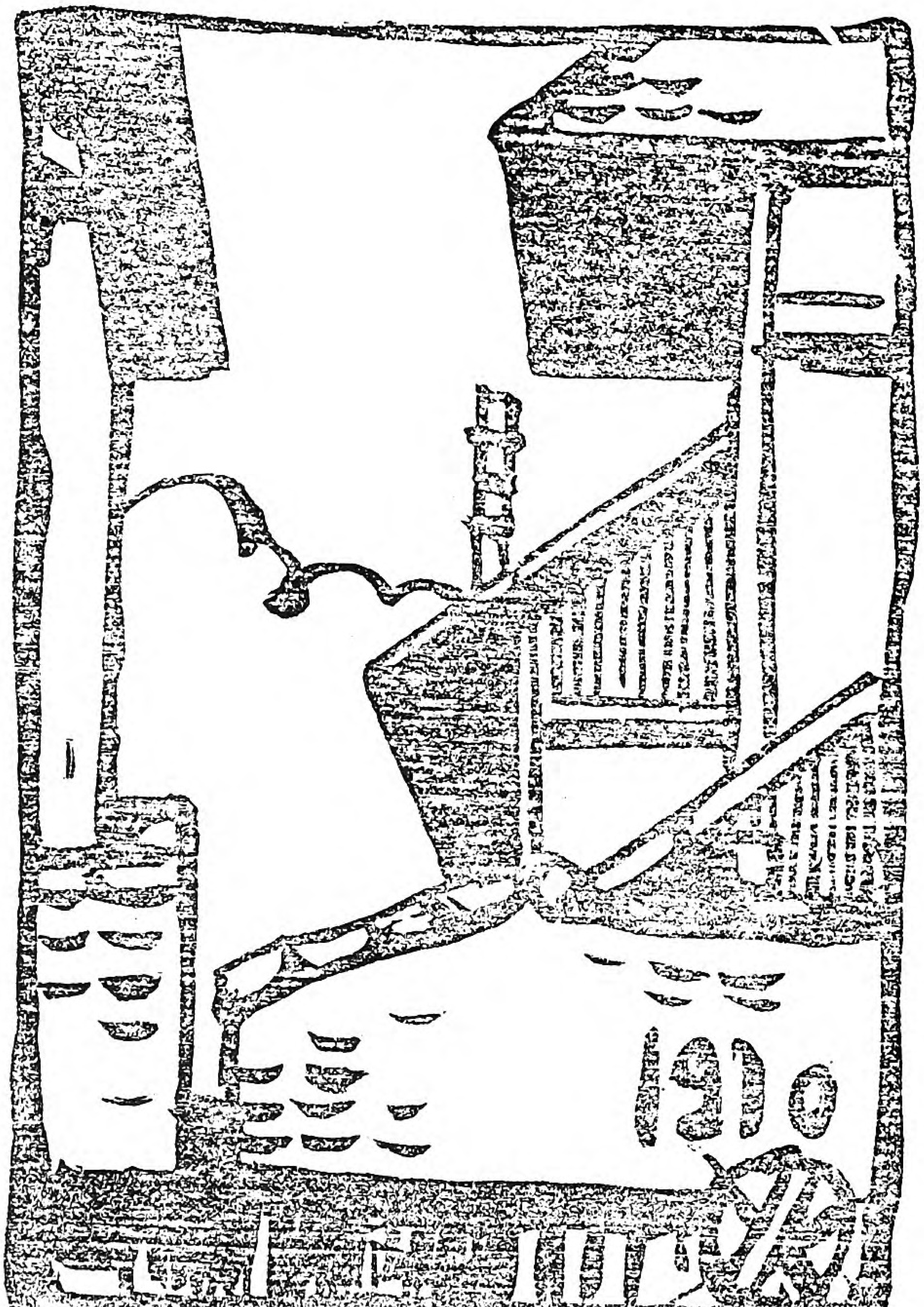
○蛇

京都市　藤岡ゐい子

門は朽ち壁ははげて所々雨の跡が青うにじんだ、古寺の前の小い川の畔、絲柳の川風にゆら〳〵とゆらいでゐる、根本に二本棒垂らした汚ならしい小供が五六人、てんでに長い竹を以て水面を見てゐる、久しくたづねなかつた友を訪れての歸り、何だらうと小供の後に立てのぞいて見た底も見えない濁つた水に頭ばかりが寫つてゐる「何所へはいつたんだい」七ッ八ッの子が云ふ「こゝだ〳〵」ゝ目のたゞれたのが竹で石がけの間を敎へる「こゝだい俺見たぞ」外の一人が云ふ「今出る〳〵八釜敷いつたら打つぞ」年上らしいのが云た、皆だまつて仕舞ふ、と石がけの間から小い蛇がちよろ〳〵と這つて出た、年上なのが持てゐた竹で蛇を引

かけて力の限り空へ投上げた、投り上られて蛇はビシャリと道の眞中へ落た子供は皆バタ〳〵と其方へ走つて行く、年上のは頭と尾を持て「かうしたらめつたに、どうもしやしない」外の子供は感心した樣にじつと見てゐる、ふと思出した妾の十の時まだ東京にゐる時分、それは風が激しう吹いて木の葉がバラ〳〵と淋しい音を立てゝ散る日だつた、武ちやんと二人隣のお庭で遊んでゐる時、何所から來たか小い蛇が松の根を這てゐた、武ちやんは之を見付て「殺せ〳〵千代さんも手傳てくれ」と竹きれを妾の所へ持て來た時、青い顏して椽の柱にもたれてゐた武ちやんの姉さんが「そんな事するんぢやありません、逃してお遣りなさいよね千代さんといらつしやい蛇のお話をして上ますから」と優しくいつたので、二人は蛇の事なんか忘れて姉さんの傍へ腰かけた、姉さんは色々の話をしてゐたが此時「痛い」と云て胸をおさへる、妾はそれが氣の毒でならなかつたがふと母さんが何日も「隣の姉さんの傍へ行んぢやありませんよ、行たらすぐ病氣がうつつて死んで仕舞から」と云てゐられるのを思出して急に恐しくなつたので其まゝ走て歸た、十日程してこちらへ引越して來たあれからもう九年になる、姉樣はどうしたらう、あの時姉さんは今の妾と同じ年の十九、若くして不治の病に苦んでゐた人、あゝ妾も十九だと思ふと何だか心細くて又しても青白い姉さんの顏が……妾はたまらず乾ききつたみちを、夢中でかけ出した。

二つのことを書くのは、何うしても一つの方を省略しなければなりません、どちらも同じ程度に書いたのはまだ初心の所爲でせう（評）



二階　徳山兼重よし

○雨の窓より

夢浮橋

音もなくびろうどのやうな百日草の花びらに注ぐ夏の眞晝の雨をぢつと眺めて居ると過去の事が順序もなく胸に浮いて來る、あゝ嫌だ過去つた事を、忘れようと目をつぶると反對にいまはしい古い記憶は一時に攻める樣にわいて來る、あゝ、私はやけになつて其所にあつた邪宗門を取り上げてぱつと開ると五八ページの夢の奥の所が出た、すると終りまで讀んで見たけれど何と書いてあつたか

一寸もおぼえてない、先のいまはしい影は私の腦中をほしいまゝに走廻つてる、いやだいやだどうしてかう忘れられないんだらう、かうして一日一日過去の苦痛を増して行つて私は死まで苦むのだなさけない性よ。
誰でも好い誰でも好いから此脊中不意に三つばかり打つてくれゝばいゝ私は一時だけでも忘れたくつて聞いてるんだのに、あゝいつそ大暴風雨でも起つて世の中のひつくり返へる騒ぎがなればいゝ、いや其れよりか地球と何かと衝突して吾も人も草も木も一層微塵に打碎ければいゝ、あゝだけど出來ない事は仕樣がない、いつそ私は人の來ない山の奥へひつこみたいわ、あの方丈記にある樣な所へ、さうすれば煩さい人の聲も顔も見ないですむ、欲の聲も情の叫びも聞かなかつたら苦い記憶は過去に殘らなからう、さうだ山でなかつたら野でもいゝ、靜な〳〵人まれな所で羊でも飼つて一生を送つたらどんなに氣安いだらう、何時でも機會があつたら、と私の意志は叫ぶ、と胸の何處かで不孝者と聲がする、ハッ不孝者、私が、私が、あゝすみません御母樣私はたしかに不孝者です、御母樣は私を可愛がつて育てゝ下さいましたね、御父樣だつて、其れに私は自分から愿歴ひねくれた人間にわざとなりました、いゝえ其ればかりではありません私は自分の精神の安靜を得るが爲に慈深い御兩親を捨てゝ去らうとしました、兄妹の無い私がもしも〳〵居なくなつたら後がどうなるでしよう、御免下さい御父樣、私は不孝者といふ名をおそれます、おそれるが故に御兩親御在世中はどんな事があらうとも柔順な片腕として御事へ申します、どうぞ御安心下さい、私が惡う御座いました、私は口の中でかう云ふた、むしように落る涙を有合ふ手紙の反故で頑固にふいた。
私は弱くないつもりだ、弱くつておそれたんじやない道理に從つたんだ考へて見ると矢張私は苦い夢を見かへしながら無形の綱にしばられて、人間並にある軌道を辿らねばならぬ運命を持つて生れて來て居る、仕方がない、どうともなれ、あゝいつそ何か大事件が起ればいゝな、私の心を慰めてくれる樣な……。

これも女子の弱點（評）

○溺　死

水戸重子

何時も暗い淋しい所も今夜は不動尊の縁日で赤い提灯が燈いて、白い顔、黒い顔、がゾロゾロ歩いておる、石垣橋の近くへ行くと大木がコンモリと繁り合つて、暗い橋の袂でかゞりをたいて橋の上、土手の上は、人の山、大變な人ね釣りをしてるのだらう、行つて見ませう、人と人の間から川を覗くと、泥水がもの凄い音してゴウゴウと落ちる、若者が二三人胸の邊迄水に這入つて、何かさがしてる、先の方にも五六人舟に乘つて、消防の提灯をかざしてる、かゞりはどんどんたく、何うしたんです、前の方に聞くと、七ツになる小供が明るい中に落ちて未だあがらないです、まあ可哀相に、先きより水が増しましたからね、黒い少し大きい物が流れてくると、ヤア來た〳〵、皆熱心に欄干から體を突出して見る、何だ馬鹿馬鹿しい塵か、此の流れぢや下へ流たんぢやないかな、何とも分らないね、一はねい何所から落ちんだらうね、水門の所さ、彼所から此水ぢや深さが一丈もあるからたまらないね、がやがや話合つてる、錨で下をさぐつたり、網を打つたりするが芥計り、父母兄妹が今頃は狂氣の樣になつてるだらうと思ふと、何かして早くさがしてやりたいと、だんだん前の方へ出て、川の面を凝視てると、眼が潤んできて、提灯も、人も、水も、ぼんやりして、ぶくぶくと、水を飲むで蒼くふくれた小供の死體にすがり附いて、泣いてる母親の樣が浮ぶ、終に自分でも何だかわからなくなつた、と思ふと、あぶなう御座います、後から手を引張られて、ハッと氣が付くと、女中がしつかり手を握つて居た。

○洪水を見る記

麻布ふじ紫

雨雲の重く垂れた町を電車に乘つて本所の叔母樣の許に水見舞に出掛けた。
車内には屈竟な男が異樣な扮裝して長い竹棹など持て矢張浸水地に行

しのが多く乘つて居るので自分も其難場に行くのかと思ふと今更ながら胸が躍る。

既橋で下りて見ると川向から遭難者が陸續と橋を越えて來る、幼な兒を抱へた見すぼらしい女や、杖にすがつて、よろぼひ來る老人などの悲慘なさまを見てしみ〴〵あはれと言ふことを感じた。

橋上に立て見ると隅田川は黄濁の波を揚げて何物も呑み盡さうと言ふ勢で滔々と流れて居る、橋向ふは一圓に水が漲つて家々は半ば浸されて悲しさうな軒が低く立ち並むで居る。其間を筏など泛べて人々が往來して居るのを見た刹那、私の心は妙に閃めいた、限りない力を有する水の勢よ!、滾々と流れる濁水!滔々と漲れる河水!恐ろしい事ではあるけれども此の水の溢れ溢れた後に何か新らしい或者が來るような氣がしてならない。

ふと我に返つた。恐ろしい夢を見た樣な氣がして、あたりを見廻したけれども人はたゞ忙はしさうに西に東に走つて居る、先ほどまで降つた雨はいつしか止んで鋭い光が雲の切れ間から浸水した灰色の家屋の上にさして居る。私は辛うじて叔母樣の家に着いた、叔母樣の一家も二階に避難して居らした叔母が此の秋はと、樂まれて居らした庭の菊もあはれ泥水に覆ひ被せられて何處にあるや姿も見えなかつた。

○可憐の少女

京橋　千代子

私はお新ちやんを見るのが大好きだつた。あのひどく人を引き付けるぱつちりした眼を一寸向けてにつこりと、輕くおじぎをされるのが無性にうれしい、で毎朝小供が學校に行く時分窓から外を眺めて居るときつと妹の志保ちやんと手を引きあつて、其後から女中が包を抱へてついて行く。あの活潑な活々とした輪廓の正しい姿、黑み勝のぱつちりと涼しい眼が殊に人を引き付ける、踊を習つてるだけどこか身體のこなしがきびく〳〵して居るやうに思はれる、其房々とした眞黑な髮をいつも引きつめたお下げに結んで、紫紺のお袴に筒袖でも長い振りの袂でも、何を着せてもしつくりとよく似合ふのが、これもまたおかつぱで何から何までお揃ひの志保ちやんの手を引いて………。私はそれを見る度に淚の出るほど可愛く思ふ、そして何か言葉をかけて見たくて堪らない、けれどたゞ唇がびく〳〵ツと動くだけで聲は出ない、我ながらもどかしい、必ずいら〳〵する、けれど、なぜかあの可愛い〻姿が眼に映ると聲が出ない、何とは爲しに胸がせまつて……。あのにつこりとする美しい瞳の底に無限の淋しみがひそんで居るのではあるまいか、今にもう少し成長しなつてから別れた父親の事を想つた時、私のやうな淋しい子になるのではあるまいか………。

可憐の少女よ、いつ迄も花のやうな美しい無心の少女でおいでよ、私は彼の女の年毎に美しく姿のとゝのつて來ると共に、悲しき影のひらめきを見るのではあるまいかと思はれてならない、あゝやがて其悲慘な身の上を悟つた時、神のやうな無心の心に暗き影を宿すのではあるまいか可憐の少女は今日もたゞにつこりとおじきをして行つた、私は思はずお新ちやん!と強く強く叫んで胸を抱いた。

○寢臺の上

東京　雪子

夜(涼しい風の吹く七時頃であつた)東明館前を下りた私は駿河臺の坂をお茶の水に向つて歩いた。

下通りの賑やかさに較べて此の通りは淋しいものであつた。

金杉病院の前を過ぎて、右へ折れて、佐々木病院の前に來た、中へ入つて「吉井さんに」と云つて二階へ上つた。

二階の角の小さい室に、吉井とみゑと札の出てゐる前に行くと姉さんが出て來られた。

「御容態は、御悪いさうですが」といへば「もう駄目で御座います何卒逢つてやつて下さい」と姉さんは涙に濡れた顔をそむけつゝ病人の寢臺を指した。

友はかすかな呼吸で眠つてゐた、肉落ちた顔は骨ばつて昔のおもかげはなかつた。

あゝ惡魔は日毎に此友の美しい目美しい肉美くしい色美しい心を奪ひ取つて行き、最早今宵一夜の分だけしか殘さなかつた惡魔は徐々に手を延しつゝある、姉さんは此間の經つのが悲しいといつて泣いて居られた。

人間の力は弱いものとつく〴〵思つた。

「起しませうか」いはれたのを止めて殆んど骸に等しい友の姿を再び見守つた、そして心のうちで。

「もう何を云つても通じないかも知れませんがあなたとはこれで逢へないでせう。

が、人間といふものは弱い意氣地の無いものね、こんどの世といふ場合に出る時はもつと強いものになつていらつしやい」かう云つた時、友はふと目を明けだ、そしてぢつと私の顔を見たと思ふ間に、物云ふ隙もなくまた元の樣にかへつた。

お母樣や姉樣の悲しみ給へるを慰めて、夜更けぬうちにと病院を出た、電燈の光青く夜靜かにして。

○弟

伯耆　新田文子

妾の弟は、今年、滿十一年六ケ月ですが、年よりも、子供らしい心の子供らしい顔の子です。そして短氣な少しの事が無性にうれしく又、悲しいのです。夜は大抵妾と机をならべて、算術か何か額に汗をいつぱいかいて居て、眞面目に熱心に、勉強して居ます、學科のうちで何一つとして、不得手なものがないです、そして恐ろしい程、想像の强い子です妾とは、度々口論をはじめますが、始めは隨分好い樣薬で、向ひますが妾が一寸強く出てやりますと直ぐ折れて姉さん私が敗けたつて直ぐ肩にさばりついて、丸い黒い〳〵目で妾の顔をぢつと、見守るのです。そして、少しでも妾が不快の風や、立腹の相など現はして居ますと、それは〳〵一層強く肩を抑へて勘忍を――勘忍をつて、目には露さへ浮べるのです。けれどアー好いともつて其時、心よく笑つてやると、大滿足で學校の話なんかを、聞きたくない程に饒舌り續けるんです。

ちよいと秀さん(弟の名)何が一番嫌ひつて云ふと、ニヤリと笑つてゐるが、やがて赤いはづかしさうな、顔して、小さな聲で丸い顔つて云はれるのがきらひつていふ。ほんとに秀さんが顔は丸い、それに眉毛迄三日月形をなして、居るもんだから、家中の者が、二日目には、まあ此の子の丸い顔――など笑ふのです。大方秀さんには、之れが無性に嫌に氣がかりに思はれるでせう、けれど時によると、その時、元氣よく、如何にも意志強固な風に、丸い顔だつて好いわ、學問がよく出來て、立派な偉い人にさへなればなど言つて、少しも氣にかけんかと思へば、又そんなに丸いかしら……なんて、心配さうに馬鹿に沈んで居ることがあるんです。鬼に角、をかしな子だつて家中のものが、笑つて居ます。

○夜半の隅田川

東京　若菜子

時計はさつき一時を打つたけれど暑くて寢られない、うちは片手に寢返り計りしてゐる、妹はと見ると枕をはづしてふみぬいてゐる、そつと掛けてやつて徐に蚊帳をまくつて部屋を出た、お椽の戶をそつと音せぬ樣に一枚繰つた、と月がさつと椽に差し込む、草履はいて庭へ下りた、拭つた樣な空には十六日位の月が段々と照つて數知れぬ星がまたゝいてゐる、私は露に濕つた飛石を傳つて川岸の方へ行つた、竹垣に朝顔がからんで蕾が十五六もう少しで開きそう、紫陽花が房りと重さうに咲いてゐる、木戶を押して棧橋へ出た、月が水にうつつて銀波を漂はしてゐる私は岸につないだ小舟に乘つた、舟はゆら〳〵とゆれて水がぴしや〳〵といくつも〳〵大きな輪を畫いてだぶり〳〵と岸をかむ、向の堤の新綠の間々に燈火が點ぜられて水にうつつて實に美しい、吾妻橋の上は電燈が所々點ぜられて人も通らぬらしい、上の方は小松島のあたり只黑う往來の舟もない、向の堤を車の提灯らしい燈火がフワリ〳〵と飛んで行く岸邊につながれた舟も皆寢入つたのか只音もなく時折吹く風が銀波の上を辷る計りだ、私は舟の中に座つてうつとりと此景色を眺めた、晝のはこり臭いのに引替へて此の靜けさ、私は今更の樣に感に堪えなかつたに、となんだか肩のあたりがひやりとするので舟から上つて木戶を閉した。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　西多摩　三ヶ島葭子

灰色の空をはづかにのぞくかの青より落ちし君が髪かも

○（地賞）　大阪　植村艶子

我戀は彼の大空のあさましきいなづまのごと消よと言はなくに

○（人賞）　愛知縣　淚崎照子

二年を羊守りつゝへてもける悲しき戀の忘られぬため

【佳作】

○　豐後　菅原芳子

ものたきて君を待つなりコスモスの白き花ちる夕ぐれの家

○　麻布　美耶子

もの思ふ少女にあらず我が胸はくれなゐの花おほらかに咲く

○　麻布　ゆき子

淋しかる人よと友が來ずなりしゆき子が家のなでしこの花

○　廣島縣　谷川喜代美

我が胸をいつかふさぎしかなしみの雲をはらふと黒瞳きぬ

○　麹町　牧野嵐水

わきまへぬ少女なるかな琅玕の冷たき家に住まむと願ふ

○　小石川　渡邊京子

天雲のすがたに似たるわがこゝろ西す南すいとこゝちよく

○　日本橋　松岡千代子

あなものう世の聲のする窓に皆黄金の戸をたてゝすめ

ども

○　下谷　林　久榮子

さら／＼と落葉ふみわけ君まてば只あはれなり秋のゆふぐれ

○　京都　須美禮

ふかれゆく一かたまりの落髪にさびしさみゆる秋の夕かぜ

○　滋賀縣　磨志緒

山梔の花さく窓にマンドリン奏づればくる人なりしかな

○　山形縣　鈴木久子

星の空秋は悲しや今はなき母のみ魂のありかと思へば

○　山口縣　あやめ

少女子が秘めたる戀をかたりたる心地ぞしける夕立のあと

○　横須賀　猪狩ふぢ子

秋かぜの起ると共に日は落ちて只淋しげに鈴蟲の鳴く

○　下谷　佐藤幸子

ひなげしの燃ゆるばかりの紅の其花をしも好みたまひぬ

○　露子

漸くに戀の火色をのがれきてくろ髪切りし二十四の人

○　丹波　小草子

秋のひるひとりみはかをさまよひてなき人おもひなくゆふべかな

○　破竹子

せめてもと返す文箱に紅薔薇そへし心は知らずもあらなむ

○　神戸市　川西よし子

わが里は舟人おほし少女子はいそばた近く夕暮れて待つ

○　駿河　琴月

雨晴れて靜けき川の岸の邊にみだれて咲ける山吹の花

○　福岡　坂本あさ子

おもやせてほのかにたてる淡暗のまぼろし悲し逝ませし姉

○　大連　柿本千枝

白ばらの花を日毎にはぐがごと我世は此處につきんとすなむ

○　大阪　芳花

君とわれ相見てうたふ天の川かささぎの來て橋渡す頃

○　福岡縣　たか子

わが戀は樂しかりぬるつかの間も悲しかりけるつかのまもすぐ

○　備中　篠原繁子

堪へ難き思ひつのりて夕暮を尾花咲く野にのがれ來しかな

○　松江　清き花

別れてふ事をおもへば仰ぎ見る星の光りも胸に冷たき

○　福島縣　熊れい子

吾れを戀ふ人は月の夜わが窓の下の小道に笛をふくかな

○　松江　葉子

男の子等はみな僞りのものなれば髮ひとすじもゆるさじなわれ

○　伯耆　新田文子

吾が戀ふる人の姿のよからぬを友は笑へど忘れかねつも

○　廣島縣　井上正子

曉の涼しき風に舟やればおとして開く紅蓮の花

○　信濃　岩波むら子

なつかしき君とならびて白萩の花咲く路に今宵も行かむ

○　名古屋　花子

彼の君と暑さ忘れて木の蔭に語りし去年の忍ばるゝ山

○　横濱　小豆澤しげ子

君みればいともはなやぐさくら咲く彌生の日にもわが心似て

○　北豊島　竹内美津子

美くしき黒髪みだす姉君のみとり淋しき夜半の燈火

○　群馬縣　高橋ふみ

日はくれぬ月見草さく窓ぎはにこひしき人と語りあふかな
○　諏訪　紫子

ふと君が御手に觸れし刹那よりひらけそめけるわれの天地
○　秋田　愛子

ゆふされば綠の岡に一人ゆき初戀に泣く少女子のわれ
○　佐分華影

時計てふあやかし娼家に居て若さを吸ふと悲しむ少女
○　栃木縣　松葉子

一人寢の燈消えて秋の夜の鴈の聲きくここちよさかな
○　西茨城　田村はつ子

白百合の香へる窓のうたたねに女神の宮をとひしゆめ見ぬ
○　靑梅　荒井喜子

人事と思ひながらも尙我は少女子なれば涙こぼるゝ
○　岡山縣　小西文香

うばたまの闇にさまよふ罪人に悔ひあらためよもち月を見む
○　出雲　百合子

夏の日の牛に曳かする荷車のたゆげなるかなわれのやうにも
○　大阪　辻井信子

夜のそらの天のかはをばながむればわが故鄕も水ゝ音する
○　京都市　本鄕はるの

うら波のうちよするなる老松の樹蔭にいこふなつ少女ども
○　近江　眞塚夕ケ

磯寺の夕べの鐘の音たえていさり火見えぬ沖のあなたに
○　千葉縣　佐久間くま子

一やうに打つ伏し居りし草や木も夕立ふりてよろこべるかな
○　京都市　松原きぬ子

夏雲のひろごるをみて悲みをふともおぼえぬ旅はものうし
○　韓國　五月雨

又の世は男の子となりてわれに似る弱き少女を慰めてまし
○　熊本縣　橋本いち

あらし吹く梢はるかに鳴く蟬の聲よりもおつる山のしづくか
○　德島縣　野菫

くるま下りて戀しき人と一言を云ひかはしたる夕がほの花
○　麻布　艸雲雀

やゝ長きまつげのさきのうるほひは見るさへかなし語り給ふな
○　京都　百合花

風なきに牡丹の花のしぼるるは戀しき人の病むにあらぬか
○　京橋　鳥飼紫子

夏瘦せて夕顏かざすくろ髮のわれは人妻鈴蟲をきく
○　鳥取　松浦春江子

くろ髮の少女子に吹く秋風や鈴蟲啼けば心淋しき
○　京都　をみなへし

いさゝかの事にも涙もよほしぬ露と消えにし母をおもへば
○　下谷　橋本奈美女

身ふるはし罌粟の花散る夏のひる赤き笑をもらす日のもと
○　岐阜縣　西尾弓子

秋の海淋しく潮の音を聞くと離れ小島の人の文來ぬ
○　丹後　壺内文子

わが心ひと知れるより淋しきは君が心をわれ知らぬこと
○　中村園枝

いなづまのおそろしき迄明るきに靑葉ことごとくひるがへる見ゆ
○　波の花

うき人は今日も來れりねたければ逢はでかへしつ森にかくれて
○　伊豆　伊賀かね

默しつつ箸を動かす五人のはらから見れば淋しうなりぬ
○　奈良縣　田村みどり

夕されば向ひの寺の鐘の音に山茶花白うほろほろちりぬ
○　伊豫　たつ子

なつかしき戀しき君よしたはしの君よとばかりみ名は知らなく
○　牛込　平塚白百合

野の原の黑き木立を中にして音なくせまるたそがれの花

○

よき夜の星にも似たるおん瞳永久に戀ひつゝ死なむおのれは
會津　仙　子

○

夕鐘は鳴りぬみ空に星出でぬ雛の花は白くかをりて
筑後　柴田百枝

○

紫玉よし青玉もよし何れをば摘らんとおもふ少女子のわれ
三島　村瀬常月

○

ふる里の君は言ひにきいつまでも冷たき床にひとり思はむ
茨城縣　流　水　女

○

夕舟や棹はさゝずて眞白なる玉藻の花の中流れゆく
東京　紫　涌　江

○

君戀しかく思ひつゝ眺むればそゞろ曇りて小雨降り來ぬ
上野　茂木よしえ子

○

今はしもひとやの中にとらはれて身じろぎも得ぬ悲しき少女
京都市　三宅壽賀子

○

黑き蝶幾度おへど去りやらぬ日は死の影をおもひおそれぬ
前橋　み　ど　り

○

十重二十重藤の花もてわれ巻かれ千尋の谷にすてられし夢
宮城縣　齋藤きく子

○

雨止みていとも靜けきたそがれの萩の本にてこほろぎの鳴く
白　蓮

○

一日たゞ君を見ざればわが心わびしかりける悲しかりける
小豆島　坂井富美子

○

友は來ず姉は居まさずわれ一人物思ひする萩ちる家に
近江　里　の　夕

○

闇の夜の岩に砕くる荒波も涼しかりけり汀に立てば
三島　舟　子

○

人故に斯く荒び行く心などゆめ痛ましと思ふならねど
丹波　大槻幸子

○

さゝ浪にゆられて浮ぶ三日月の影の涼しき夕ぐれの磯
神戸市　上月玉子

○

君が頰のわが頰に觸れし三月の二十六日忘れ兼ねつも
長岡　露　子

○

一度は消ゆべき我れもこゝにあり流星一つあな闇におつ
京都市　う　た　子

○

この人が君を見ぬ日といにしへの褒似の笑みをいづれまれなる
大阪　露　花　子

○

初夏の若葉の風の通ふ家ゆめの中にも君を見るかな
日暮里　房　子

○

久能寺の鐘のひゞきをきゝて居ぬ人か戀しき秋の夕ぐれ
駿河　木上すみれ子

○

夏の日の眞ひるは潤しかつ靑しことなきまゝに遠潮を鳴く
淡路　千　鳥　女

○

言ひしれぬ悲しみおぼゆ黃昏の街に少女の足音をきく
埼玉　野原夕花

○

肉を喰むおそろしき魔を我と我が養ひてある少女にやあらぬ
京城　中尾艷子

○

月の夜の萩咲く道の露踏みて君と語りぬ一とせの前
大阪市　野澤紫水

○

君おきず都の空を眺めては身の幸なさを一人なげきぬ
千葉縣　石井よし子

○

戀をわれ悲しきものと知りし時白露の散るしら萩のちる
廣島縣　谷川松枝

○

ある時は美しと見えある時は死の如く見ゆ天上の月
筑前　笹　つ　ゆ

○

たびねする南のはての夏の夜の西瓜畑に歌の聲する
日向　八田孝子

○

むらさめにしとゝに袖をぬらしたる少女の姿らうたかりけれ
美濃　梅　香

○

うら若き血汐を神にさゝけむと戀に死なむと云ひし人われ
若松市　罪　の　子

○

月かげのうすくにほへる其の部屋に二十歳の友は泣きて語りぬ
小樽　淸田芳枝

後志　平手渓子

○小夜更けて我故郷を眺むれば冷たく天の川のはふかな
上總　板倉豐子

○雲の雨あとなく晴れし松原に時鳥啼く初夏の國
すみれ

○春のくれ君ふく笛のよき聲にひそかに散りぬ海棠の花
眞野聞葉

○故郷を思ひ戀ひつゝさすらひの一日もくれぬ二十四の秋
長崎市　永井主子

○さくらちるましろき風に暮れてゆく遠方にしも水の音する
秋田縣　白ばら

○姉君と空をながめてなつかしき濱邊を思ふ夕まぐれかな
横濱　橋木まき子

○いくたびか披きつまきつほゝ笑みつ戀しき君のいく尺の文
朝露

○まつ風の音しづかにも夜のふけて月すむにはにものをこふらん
福岡　建部艮久子

○逝きし子がはれぎの衣をとりいだし母のひたなく秋のひるかな
陸前　小岩やなぎ

○恐れずと思ひながらも少女子はこと呟やきて君と見ぬかな
北海道　由喜

○わが心笛をいみじく吹きませる君を見しより緋の花の咲く
青森縣　しげ子

○月の夜をそゞろに行きて歌よみて人の子は泣くこほろぎもなく
高知　秋野とよ子

○思出は絲のごとくにみたれたり杏竹桃に秋の雨ふる
伊勢　渡邊まさ子

○窓によりておくれ毛なづる若き子にものを云ひけり初秋の宵
石狩　王子　きよし子

○わらくづを拾ひ集めて焚きし火によく似て居たる戀なりしかな
越後　岩本芳子

○なにとなく只なにとなく泣て見ぬ潮の香たかきふる里の磯
愛媛縣　たけ子

○十九にてやがては母となりぬべきやつれし髪に秋風ぞ吹く
越後　早津心水

○もの言はぬ名が御胸をはかりかねふし目になりぬ初秋のかぜ
伊豆　土谷すゞ子

○秋立つと人の云ひけるその日より少女の胸はさびしくなりぬ
岡山縣　入江曉花子

○秋風のそよぐ小窓に身をよせて戀しき君を思ひつゞるかな
小石川　井口久我子

○三條の橋のきぼしに月させば清水寺はまぼろしのごと
尾張　加藤胡蝶子

○今宵また君と逢はんとこの月にさまよふわれの寂しき心
岐阜　蔦の葉

○年のうちによろこびあると陰陽師云ひしことすらたのむはかなさ
栃木縣　丸山房子

○蜩や二十女の物思ふ松が枝にして暮るゝまで鳴く
加藤美香子

○水やりてあした咲くべき朝顔のつぼみ數ふるしろ妙の袖
和泉　金田代志子

○暮れて行く海に孤燈の薄色に光れる如き戀ひなるかな
奈良縣　中富よしみ

○このおもひ君に云ひ得ずわれひとり牢獄の窓になく心地する
韓國　富迫稻子

○祖母上と山の御寺に籠りつゝ朝々に見る白蓮の花
三重　池野ふじ浪

○誰かなけし瀬に花瓣の流されて打ふして居る川原なでしこ
金澤市　桐の葉

○悟りてはすべてを常とし給ひぬあまりに君は悲しかりけり
備前　落月子

○むらさきの香こぼるゝ袖ふりて舩あそびせし朝日川かな

三重縣　ふみ子

○よく妬む少女心のをかしさに妬まれんとて又も行くかな
福井縣　片山里

○みづからのやつれし姿人事のやうにあざける兄なりしかな
京都市　要司村福子

○一言は遂に胸をばさしてけるかよわき蝶は罪の子となる
京都　町田てる子

○うき文も君が御筆のうす墨にあかず眺むるものごりなき哉
播磨　放浪子

○かへらんか行かんか家に知らぬ里安きすみかを知らねばまどふ
美濃　河村文子

○はなやかに紅葉の中を軋り來る女の馬車に夕日のうつる
濱松　平岩白菊

○うら淋し落葉の窓にはら〱と澀き言もらす夕時雨かな
長野縣　宮坂明子

○闇の夜も少女が家の窓うらに尺八鳴らす男を見ずや
遠江　うた子

○夕がほの花のしづくの白き手に受けてもらぬを君はよろこぶ
岡山市　立岡房野

○君が家の樫の木の間に影消えて夕月細う蝙蝠の飛ぶ
和泉　清子

○横笛の涼しき音の流れ來てたつ身涼しき村外れかな
愛知　中川撫子

○破れたる笛をいだきて唯一人思ひ出のこる木のかげにきぬ
伊勢　露木雅子

○嫌はれてはほこりがに笑む清き子の姿に似たる白蓮の花
京都　町の小女

○一日に七たび衣を撰び替ふ少女なりしも母とよばるゝ
東京　大西しのぶ

○右左二つの路に惑ふ夜は螢飛び居る右の路行く
森紫香子

○雨の日の物わびしさにはり窓の露の玉などながめつゝ居し
茨城　川和田初子

○疲れたる身を横へて夕暮れのそぼ降る雨を見るが寂しき
能登　熊野百合子

○何事とわかねど總身わなゝけり白髮の女ものを言ふ時
深川　生澤きく女

○雨晴れてぬれ石かわくま夏日の光りの下の紅芙蓉かな
新潟市　吉田ふみよ

○ふとさとの事を思ひぬ張板に紅の絹張られたるを見て
下關市　松山瀧子

○色黒きいさりをたちは砂白き濱邊に網を引けるしののめ
秋田縣　紅雲子

○寄りそふて若き二人の語りゆく小川の邊りそよ風ぞ吹く
下谷　花房美枝

○暗がりに物をさぐらむくれの如求めがたきに心は泣きぬ
和泉　田中夏子

○蟲の音を君と聞きつつ涼むなる軒端に近く夕顔の咲く
備前　落月子

○男とは針のすきまも見出なばたわけ入らんとさぐり居るとか
麻布　藤村ゆき子

○夏來れば故鄕戀し千丈の岩を流るゝ水清き國
長野縣　淺田いと子

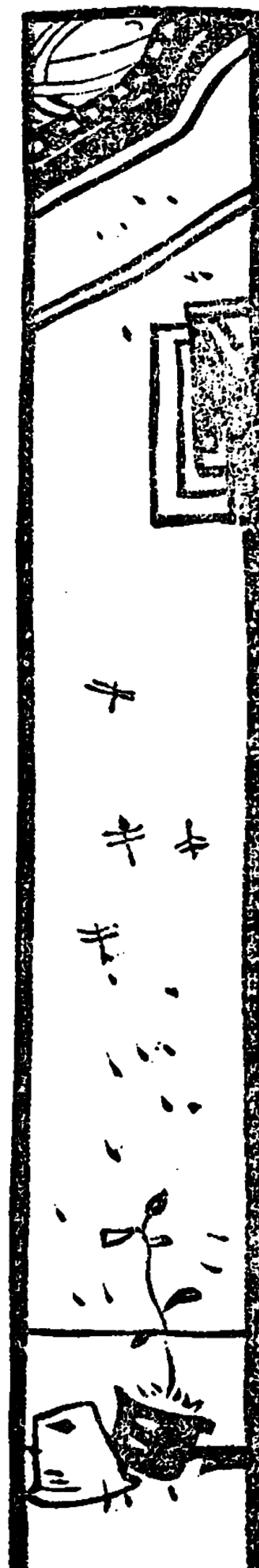
○靜かなる町を搖らがし黑馬車はいま罪人をひとやに送る
陸前　小岩やなぎ

○彼の人が笛ほこりかに鳴しつつ河添堤くるがよろしき
能登　白井志保子

○悲しげに都大路を歩みけりうれしきこゝも下に見ながら
小樽　清田芳枝

○神の世をふと思ふ時君もまた惡魔と見ゆれ天地の中
沼津　渡邊とよを

○谷川のきしの白百合咲そめて瀨の音涼し月の夜を來よ



日記

○暗き日（天）

はやぶさ

二十五日、午後。縁側に夏ふとんをしいてしどけなく坐つた膝の上に、ぐたつとして綿のやうな形して猫がねてゐる、重い暖かい感じがしびれるやうに傳はる。絶間なくざわめく緑葉、あひかはらず不安な空。

お隣の物音が聞える。さつき人の心に、美しくふくらんだ前髪を、よく表情する日を思はせる柔かい甘へたこゑがした。「いゝお庭ねい、萩があるおもとがある」と。萬年青？ちよと訛のある語音をきゝ咎めたのである。葉蘭のことだらう。その時敷石や苔や並べた鉢にうすい日が射してゐた、正面には石燈籠の火袋ばかりおいてあつて、萩とさつきがかぶさつてゐる。いつでも其中から淺草のあやつりで見る骸骨がをどり出したらと思ふ。

横瀬夜雨選

やがてその人は細い聲で唱歌をうたひはじめた、机の前にゐたお貞さんがこちら向いて妙な笑ひやうをした。

「これかねこれはきりぐすが喰べたんだ」と八百屋がいふ、青い丸い岩のような面のところぐ黄いろな唐茄子の小さな傷を、何ともいへずなつかしくなつた、静な夜の畑の片すみでこそくとどんな音がしたらう。それをきいたのはきりぐすの中間ばかりだらうか。

夕方唐茄子を切り割つてマチの箱へ入れて駒鼠のお二階へおいとくと、三つで喰べることく、後肢でちよつと立つて器用に大きなものを抱へて電氣仕かけのやうに頭をうでかす、私はそれをよねんもなく見入つた、疲れた目にやりところない思ひに。

「ねお母さん活動寫眞へ行きませうよう」夕の空は暗くかき曇つて又一しきりさつとふつて來た。けさより

眉をひそめていらした人の面は今もの凄いほどに見える。自分の頭は重く痛く熱して來たのに、あゝどこからその甘へた調子がでたらう。「え、お天氣になると、きつと」赤ちやんのやうに一度ならずなだめられて、外へ出るのはいや、遊びに行くのはきらひといふのも心からばかりぢやない、おとなしくぢつとしてゐるより外仕方がないんですもの。自分の望は大概夢とならないではない。と無理なりくつをつけて胸の底からあつい涙がおしあげて來た。おさへてゐた感情の堰がきれたのだと思ひながら、強まり行く雨の音をきいた。

夜、日記を一帖かきなほす、半にして更けて疲れた筆をおい時た、机の上の駒鼠の箱の玻璃の面から、自分の悲しい瞳を見つめてゐられたのでふるへた。

二十六日、雨、寢坊。

暗き日の極、いゝ極など思ふまい書くまい。けれど新しくない窓の障子の紙の色は、終日どんなに佗しかつたらう。それに對ひゐて汚れた硯の中で箒のやうな筆のさきをこねて廻す、いやだ〳〵。

窓ぎはに、ふとんしいて何かと母さんが仰るので、「春」の岸本が髪を剃つて漂泊の旅に出る所を明けてお目にかけた、あとで悔いた。「なぜそんなつまらない事をするのだらう」いたましい新生の光景をかう批判なすつた母さまは、別世界の方だつたもの。

九段兩國の電車が行く。あの清らかなお堀のほとり、みどりの木かげ、英國公使館の前、ひろ〴〵と都會の美しさを見せる九段の坂の上、果もない匂ひと音と人の渦巻に入る神田の通り……それらを背景に西の人らしい睫の長いパッチリした眼が輝く。きちんと襟を合せて薄色絽の帶を高く締た人のメリンスの單衣の胸に光る……あゝわがあこがれ心。

お店へ湯貰ひに行く。帶はやつと貝の口に結んだまゝ、汗もふきあへず濡れた敷石の上をころぶやうにして走せかへる。動悸の高い高い音をきゝながら、沓脱の所に腰かけて、ぢつと外を見つめてゐると、沈み行く心と共にれいしあさがほびなんかつら、それらの上にふりそゝぐあめもだん〳〵暗くなつて行く。

「女等の立つる誓ひは笹の葉の黒鴉のしとに値せずあり」今にして女子禽獸論に左袒せざりしことを悔ゆと公言して憚からぬ人をおもふ、呪はれたる女……侮辱されたる女……腹が立つけれど、柔かなうつくしい涙の漂うてゐる二十八宿をくりかへし見るとき。誰かいたましく破られたお心に泣かぬものがあらう、「もう戀にも生きられぬ心です」と泣いた樣はやがて海を渡るといふ、落ちついた容子の姉さんのやうに思はれる菊

子さまさへ「悔は大野の春の草、さとりは小野の秋の草」と亂れた悲みを歌つたこともあつた……。

よく泣いたり激したりする人、永久の誓ひを立つる人、その刹那は眞であつても、やがて虚僞となつてしまふのが女である。

人間には、いつたい永久といつたりちかひを立てたりする權利はないのではあるまいか、『黒百合』に信じぬと書いてあつたからとて自分は怒るほど女といふものに尊敬をはらひたくない……。

吾儕は人として此の世に生れて來たものである、まづこゝから出發せねばならぬ。

あゝ彼の青年の王子は、いかに憂鬱に沈んで熱帶の森林の中を彷徨したらう、一人誠實な煩悶者が遠い昔にあつたといふことは心強い。

いかにわれらの生涯は寂しくとも苦しくとも眞にこの意味を知つて、且それを味ふことができれば幸福ではないか。

狂ひもせず叫びもせず、ひたすら孤獨憂鬱の中に絶對觀照の態度を持して灰色の一生を送りしツルゲエネフ……

これらの言葉はどんなに私を心強くさせたらう、すべてわが知るかぎりの嬉しい意味深き言葉の發見者はみな人ではあるけれど女ではなかつた、あゝ一人だつて女ではなかつた。

學校では人に對する貞操を敎へても、自分に對する貞操、みづから欺かないといふことを敎へてはくれなかつた。貞操は婦人の生命なり、一たび不潔の念を起さば婦人の生命は頓死したりと知るべきなりといふ、人間の清浄無垢といふことも不潔の念といふこともまことは明確な判斷にくるしむ言葉ではあるまいか。

自分の考へは不徹底な淺いものであるかも知れぬ、けれどそれが十七の時の眞であつたら、自分の思想は現實の一部として存在の意味はなければならぬ。と思ひ〳〵寢苦しき夜の夢を追ふ。あちら向にねたお貞さんのはた〳〵と動かす團扇の風が、熱した頬に觸れる。

私は痛いほど枕に顔をおしつけた。

規定を越ゆること殆三倍なるにも拘はらず、採りて天位に置くはこの君の年少くして詩に文に天分ふかきを知ればなり。年齢夢の女と相しき、冷静太田きし子にひとし、詩人骨の芳しさは山田邦子に及ばねど、實力はまさに長曾我部菊子を凌がんとす。醉茗投稿家月旦を作りてたま〳〵この人を忘る、うらむべきなり。

夜雨の歌を引きて女子のちかひをかなしむ一段は削るべくしてわづかにのこしたるもの、『黒百合』は事實譚なり、百の辯解もゆるすあたはず、わが心に秋の蕭條を吹きこみたるもの一人は有りしなり、可憐なるはやぶさよ、わが爲に彼の賢なる女を冷笑せよ。

○さるすべりの花の頃（地）

横濱　冷花

お葬式の日に伯母がしめた紗綾形の帶、丁度あの色の空である。それには何のかけかまへも無い樣な雨が破裂した叱責の樣に青葉の谷を鳴らして居る。赤土の

水たまりに忘れられたブリキの如露に、ポタリポタリ不斷にそゝぐ水が、七分目程たまつて居る、今に一杯になる、今に一杯になると、心がおびえる。

名をよばれて「ハイ」と云た、煤煙の様な返事だつたと立ちながら思ふ。お裁縫をしながらM伯母様に赤ちやんの出來た事を伺ふ。日を追うて一身に集つて來る、物質的幸福に心足り、幸人としてひとも許し、われもゆるし、何時からとも知らず、抱き初めた私の人生觀の常に對照となられるその伯母様である。十七を頭に三つを末の、五人の中に、赤二つの紅の袖のひるがへるを思うて見た。母様にはたつた一人の妹と云ふ事も今更らしく考へられた。今日はお産と云ふ事が大變華な、幸福な事の様に思はれて、母様のお顔をふと見た私の胸も淋しかつた。あたりの空氣に黴の様な匂と、色と、黴の様な音樂があつた。

午後から安井様に行た、目の惡い御隱居が此度越した家の事を「犬病院の中にあるんですか」と聞いた、「御近所に長屋が澤山ありますか」と聞いた「お廣いんですか」と聞かれた時「いゝえ狹くて汚いんで御座います」と、力ある詞を何故殘さなかつたかと後で悔いた。

淡い侮辱を感じた後から、冷笑が追ひかけて、てんぐらかつた心持を抱いて格子を出た。

殘敗の色の見ゆる柳の下を少女が行く、はしよつた裾を左でつまんで、番傘をさして居る、肩上げの廣い白地の肩の邊りの色あせて、桃色のザンザラを結だ銀杏返しの輪がかしいで居る。

足元に氣を配て居るのかやゝうつむいて居る後姿は小い人の胸の中を思はせる「さようなら」と心で云て、教會の角を折れた、一人になると足駄の齒の曲りが氣になり出して、とうとう其事を思ひつゞけた。

才人また出づ、多望なるかなわが日記欄。

○インキの文字　(人)

夢の女

靜かに更けた夜だ。月がいゝ、姉の枕元で窓に凭れて小説を讀んでゐると、おやすみですか、と聲かけてしづかに人が窓に寄つた。隣室の人だ。眠れないのでぶら〱してたのです、と言譯しながらはなしかける。

海が好きですかと訊くから、えゝといふと、常陸の國にいらつしやい、鹿島の海の肥えた魚のとれる村に御案内しませうといふ。大洗の濤は荒いでせう？ときいた。筑波のふもとの大寶村を知つてますかときいた。知つてるといふ。

いゝ月だ、と獨言しながら窓の人は歸つて行つた。

おそく看護婦長の許にゆく。長い廊下を踏む音が高く響いて硝子越しに病室の白い窓掛を洩れて搖るゝ灯のさびしさ。板敷にしのびやかにうすい月がさしてゐる。

厚い青葉を透いて星が照つてゐる。光りがゆれる。人は皆なやみの聲をさめて眠つてゐる。花も葉も重たげのうなじたれてさめてるのは私ひとりだ。（芝にて。）

歩いて行くかと云はれたけれど、いゝえよしませう私は眠くなりました。と立つて窓を開けた。巨人のうめきの様な遠い電車のひゞき、はなやかな遠くの町の灯。渦巻く都會の夜のともしは、華かに美しく動いてゐる、耀いてゐる。若い人達の憧憬と燃ゆるかゞやきにつゝまれた都會の町の灯よ。嘗つてなつかしく戀しく、あこがれと希望の瞳をもつて眺めた日は、私にもあつた。



少女　麻布　津川ふみ

何か御はなししませう、と無言の人の冥想を醒まさうとしたけれど、重い沈黙はいつまでも續く。机にあつた寄生木の夏子の手紙をよんだ。

「常陸へ行きたいと思はないか」、と突然きかれて「えゝ行きたいんです」胸に涙が湧いてきた。

さびしい夜だ。

「明日横濱に歸らうか」

「えゝかへりませう東京はいやになりました。」されどこゝを去れば又父の家に歸らなければならないのだ。ながい放浪の旅に出たい。鵠沼の波の音がきゝたい。人は寢やうと云ふけれど、私ばかりは起きて居やう。（麴町にて）

晴れた日は盤梯の高い姿を眺めて思ひます。あの山陰には湖畔がある、懐しい湖畔がある。

欺かれた怨恨もいかりも忘れて、私はやさしかりしむかしの人をたゞ慕ひます。いつまでも。吁君は彼灯の中に……。

友から文を受け取つた。吁、之は泣いて暮すのだ、と泣いたのも過去となつた。舊戀の地に歸つて、昔のまゝの森のすがたは見れど、離れた人の心は永久にかへらぬ。あゝ北の湖畔の友よ、私はあなたのために泣く、やがてあなたの家のために嫁ぐ日が近づいたなら……運命は弱い女をよけい弄んでゐる。弄ばれしはひとり私のみではなかつたのだ。

夜は獨り二階に籠つた。ふるい日記を出してみる。明日程ヶ谷に行きませう、停車場に待つて居ますから。三月三十日。

これのみは濃き赤インクでにじんだやうにかいてある。程ヶ谷、なつかしい町の名だ。青葉につゝまれた清水湧く家に、わすられぬひとりの人が居る。

ふとんの上にあふむいて、闇にひとつの星を見いでた。（家にて。）

姉を護り、人に侍し、友をおもふ、三容三態おの〳〵異なるを見よ。新人君順境に立ちてすらなは光ある文字を作ること か くのごとし。老いずおとろへず長く詩を忘れざる。人たらばわれまた何をか憾まんや。

釣鯛

△妹が箱庭を拵へかけて苔を採りに行たあとで、家も人もひつくりかへして綺麗に敷いた砂の中へ猫が何やらをして行つた、まあ感心だ事。（草雲雀）

女三の宮の飼つてた虎（といつたかどうだか知らないが、手飼の虎といふ哥もあるから虎ときめとく）はヒロインにあれだけ重い深い關係をもつたにもかゝはらず其おとし物のことはどこにも書いてない、鍋島の猫も人間を喰つたことは聞いたがついへッついの中が匂うたともいひ傳へては無いやうだ。この君今これを書く、現代的婦人なるかな。

△今日も說敎聽きに行く（くずのは）

柔術も習ひましたと吹かれて驚いて逃げた男は作戰が拙かった觀音樣のついそばには本願寺もあつたし、と今ごろ手を組んで口惜しがつてるかも知れず。

△やれデコかくしがとれて辛からうの、一錢ほど女つぷりが上つたのと（女郎花）

初島田をいふのは一大冒險なのだからひやかされるのはあきらめること。

△頰かぶりを外しながら（よし子）

唄うて曰く盆の十六日踊らぬやつは木佛金佛石佛

△寂しい片田舍に私は吸れるごとく君に從うてきた、私の運命は如何なるのであらう、一昨夜は、君とならば共に共に死むでもよいと思ふたが又父の手紙をよむとこの罪を告白して父母に詫びたくなる、君に話せば又近代人ぢやないと笑はれるだらう、おこられるだらう、あゝ、つまらないのは戀である、つまらないもの

になせ醉ふたらう、あゝ、つまらない……今は、もう、君を見たくもなんともない。（八田孝子）

ハス先生、つまらなさすぎてお氣の毒見たいだ。書いた人が果して女かどうかはこゝでは言はぬ、自分は八月の洪水に追はれ來て、今海のほとりに日を送つてゐるのだが、一日那珂川の汽船發着所で創作に出る某々が三人の女學生を連れて、船で歸る一人の男を送ると て男も女も交るがはる握手をする、船の出もせぬさきに手巾を振るといふえらい光景を目にした、握手位したつて何だとおしやる現代的のお方には失禮だけれど、おれの妹だつたらどうしてくれようと思つた、白蓋おほつぴらに男に手を握らした其孃さん（？）達の名は知らないが、男は土浦のもの、霞ヶ浦洪水土浦が全滅すると親父君は血眼になつてる最中に御子息樣は御覽の通りの現代的で、考へると涙がこぼれる、玩弄物となりてみづから甘んずる女は論外だが、あんな不眞面目な事をやつてながら文學を口にする連中の氣が知れない。自分はつくづく狠に喰付るゝ妹の無いことを幸福に思ふ。

△「先生」可愛い聲、かけて來る、やつちやんだ、山田邦江樣の御妹さん、今尋常三年、色白の丸顏、眼のくりつとした笑くぼの可愛い――「遊動圓木へ、ねえ先生」引張つてとんとんはねてる。やつちやんを見ると決つと星ヶ岡の寫眞の高江樣を聯想する、それから……（すま）

窓谷の跫音！邦子の弟妹は十人の多きを數ふ、令妹ひさえ君も時々本誌に名を出すようだ、知らず家門の秋今如何。

△おゝ和夫さま！そんなにまでこんな私を（黑）

こんな殿御と添臥の身は姫御前のかねぞやとくどいた八重垣姫か、それとも早くかへつて頂戴なの浪子か、濃情の人何ぞ多き。

△持前の低い鼻め、今日は赤い顏と共に益高くなつた（アイ）

低い鼻をわざわざ廣告せずともよさゝうなもんだ、もつとも今日は高くなつたとあるから、或は必要かも知れぬ。

△お緣をソヽクサ、ねてゐた玉の足をふんだニヤニヤニヤン！おおいた!!（美津）

靜かにおし。何です女のくせして！

△姉樣は「ねえ千いさん私絹しぼりか何かの帶が一ツほしいと思ふのだけれど、しぼりは縫ひにくいはね、羽二重にしやうかしら」とにこにこしていらつしやる。アヽ私は、私は何にもほしくないのと思つたら俄に熱い涙が込み上げて來た、弱蟲弱蟲と我と我が心を叱つて見ても駄目。堪へかねてつと座を立つた。空には夕月がうつすりと……（千代子）

どうしてあなたは素なほな子になれないのでせう、孤兒はたよりないものだけれど……とだけ思ふ。くらきより暗き路にぞ迷ふべきはるかに照らせ山のはの月、君が上に幸あれ。

△律樣私あんまり嬉しいのでお茶碗をはいて母樣にお目玉頂いてよ。さうかいぢや其時お目玉を下すつては却つて御困りでせうつて言へばよかつた。あらそんな……（二葉）

公然とふざけてゐるのだから目玉位あたり前だ。

△笑ひ聲がするのでもしやと行て見ると、原稿をよんでゐる、兄さんいやよと引つたくつて（千鳥）

この意氣あり、以て女子文壇の花形役者たるべし。

△辻さん熊本の言葉は餘程むづかしいものですねえ、とお仰るから、先生は大變に御上手ぢやでざいませんかと言つたら、いえまだ駄目であります、昨日敎會の永山さんがお出なさりましたのでビスケットを出して

お勸めしたら「すけんけんきやん」とお仰いましたがね私如何してもわかりませぬ。ホヽヽそれはねえ先生「好かんけん食はん」と云つたんですよ、ホヽヽ未だおわかりなさらないんですか、「好きませぬから食ひませぬ」と云ふ事ですわと申上げたら、さうでありますかと云つて。（みを子）

狐のなき色の問屋だけあつて、いろ〳〵の言葉があなたのトコにはありますね。關東では（また關東ではをいふやうだけれど）きれいだから喰へましねい、きれいだから喰はねいよオと言ふ、但華族は別と知るべし。

△地藏堂の踊を見る、あら祖母樣私の腰卷冠つてと人中で言ふのがあれば、へひり腰しで笑ふのもある、ヤアレと手を上げる拍子に漬物豆など袂からこぼす人もある、袂はまるで福袋のやう、何がはいつてゐるかわからない。（ち）

婆さん連の踊だけあつて色氣よりは食氣といふ所だらう、田舍者もかしこくなつた。

△立てば大豚坐れば芋蟲歩く姿は蟹の横這（さつき）

新聞物だね。

△蠶を呑みながら母さま（朗子）

蛇ぢやあるまいし……待て待て蛇だつて蠶はのまない。

△急いで机につッ伏した、おい〳〵とゆり動かすけれど大鼾をかいてやる、仕ようがないなアとお坐りになつたらしく（小田切きん子）

旦那樣をいぢめる方西にましを君あり、東にこの君あり、どつちが横綱になるだらう、行事には手がつけられない。

◎次號豫告◎

敗殘……若杉濵子

宮城野の萩……旅行く少女

餘白無き爲に割愛せる秀逸左の如し

△ありのまゝ（土佐桃の花）△ある日（備中篠原繁子）△午前（周防松尾しづか）△淡き日（横濵千鶴子）△田舍女の一日（さと子）△ある一日（下たて木村なか子）△寺にゐて（下妻新井きみ子）△浦富に遊ぶ（鳥取さくら）△心の靜まらぬ日記（羽前𠑊蜂子）△夏の午後（大阪福井まさご）△又あの汽車（備中小見山春子）△朝（田井葉子）△宵祭（村松田中まつ）△訪問記（山口屋根の草）△なんとなく（麻布美耶子）△日記中より（信濃ゆり子）△低氣壓（金澤桐の葉）△草とり（越前片山千里）△日記の一（武藏三島よし）△金曜日（小石川淡星子）△感謝（仙臺夕がほ）△病上り（前橋みどり）△大掃除（大阪渡瀨淳子）以上次回の選に加ふることあるべし。

【秀逸】

○日記

紅百合

雛子をてとにおぶはしてだしてやつてお居間の掃除にかゝり、うちにおいでの時は後の用におはれてつひぞんざいになりがちだから、けふはゆつくりかたづけませう、手傳ひにきた花が「おやくもが！」と叫んだので朝のくもは緣起がいゝのだからころさないでおくれといつてにがしてやつた、今夜多分おかへりの筈の

夫の上を思うて！、つやぶきまでし終つて机の前へ坐つて見る、い丶氣持だ、籠の秋草を一寸なほして水を入れる。

新宅のおうめさんの聲だ！あ丶、またしても……、「あんな男ではなかつたけれど嫁がきてからすつかり人が變りましたよ」こんどは姑上のお言葉、手にとるやうに。

胸はきりでもまれるやう、としよればかくまで邪推の深くなるものか、夫には實の母上、なんで私がそのかたの惡口を夫につげられやう、それをともすれば私が夫にたきつけて母上を邪魔にする、と思ひ、ひがめたまひて……。

あ丶何事も夫が御存じ世の人皆は鬼ともなれ。

氣をとりなほして仕事にかゝる、いつか北川先生がお孃さんもうお乳おやめなさい、滿一ヶ年後は母乳は薄くなつて營養になんかなりやしません、とおつしやつたからそれからおかゆや玉子や牛乳を呑みならはしてけふからはやめやうあしたから、まあ今月一杯はなんてだん／＼のばしてゐたけれど夫のお不在を幸ひおかへりになつて「そりや感心だ」といはれたい、是非けふから實行しようと決心する。

乳くびの先へクミチンキを一寸ぬる、折からねむくなりしと見えてかへつてきた、おことのせなかからおりると一所に膝へすがりついてパイ／＼といふ、かほ見れば決心もにぶる。

勇氣をだして、もうパイ／＼はにがい／＼だからよしませうネといへば「いやよ／＼」といふ一寸乳のくびへ口つけてプッとふきだして大きな聲でなきはじめたお丶可愛想に／＼さあ抱つこして上げるからねんねするんですよといへば「パイ／＼ニガイ／＼イヤ／＼」とくりかへし／＼いひながらねてしまつた、あまりおとなしく意外なのでかへつていとしくなつて胸が一杯になり子守唄の末がくもつてしまつた。

住所も姓名も無いから當然沒書にするのだが、まじめに書いてあるので採る、乳首に苦味丁幾を塗つて子供を泣かすなんて若い奥さんだけにひどい事をする、とは思ふけれど御賛成の上とあれば仕方が無い。

○雨日記

赤坂　靜江

十三日、今日も亦雨、幾日かうして降り續けるのか全く厭になつた。新聞は洪水の記事で一杯になつて居る。母樣の被居る方も大分被害が多い。汽車は不通でいつ着くか知れないが、家の方は御心配なく水の危險がなく成つてからお歸り下さいと端書を出す、外に高崎へ五枚、甲府と濱松へ一枚宛輕井澤の先生方へ。

夕方新聞が待てないで、行きすぎた日本の號外を呼び返して買つた。權現堂の堤が切れたと云ふ。市中は瓦斯の供給が絶えた。牛込の小母樣の處など明朝早々から御飯たくにもお困りだらう。

夜よく寢入つて居ると玄關で大聲に誰かゞ呼ぶ、里

の起きる氣はひも無いから手早く帶をからげて出た。外套着た方が「隊長殿」と云つて厚い一枚の紙を出すと、不意に父樣が「當番何か」と仰有る。「水害救助の爲め非常呼集であります」、息切らして苦し相な聲、「何個中隊か」「第一大隊全部であります」「よし承知した」敬禮すると亦走つて去つた。私の身體は不思議な程に動いた。單衣袴は勿論ハンカチーフ迄忽に揃へて、里を起して長靴の上にゴム靴かけさせた。父樣のお支度は三分に足らなかつた、書召して未だ雫のたれるゴムマントを後からお着せ申して山形のしるしのある將校用の提燈に火を點け樣としたら、此の風ぢやもつまいと仰有る。

一寸の間も待遠いと見えてコツ〱靴の踵をくつぬぎに打ちつけて、急しい音さして被居たが遂々「清吉に正馬へ鞍置いて後からすぐ隊へ持て來いと云へ」と仰有つたなり、篠つく雨の中を早足に門の方へ行かれた。私は高く洋燈をかゝげて照らして居たが思ひ付いて、「お時計は」と云ふと「持つた」と大きな聲でお答へなすつた。早足でなら當番の報告の濟まぬ内に隊にお着きだらう。

戸じまりして時計を見ると二時四十分、間もなく引き出された蓬萊は雨の中に勇ましく嘶いてカツ〱と次第に遠くなつて行く。

再び床に入つたがもうどうしても眠れない、洋燈を明るくして取るとも無しに夕刊を手にとると、今迄少しも氣附かなかつた茨城縣〇〇郡〇〇村の浸水…………、私は夢中で机の引出しを探りさまワク〱しながら何を書いたやら一葉の端書を認めた。

外の雨は益々烈しく雷も混つて聞える。母樣はどんなに御心配遊して被居るだらうと其れも心懸りだし、何やかやと考へる内眼の中が熱つくなつて終つた。今私が疲れて終つては仕方がないどうしても眠らうと枕をかへすとき、四十日四十夜降り續けてのあの洪水の樣に成るのかも知れんと不圖思つた。

洪水の夜の一部がよくあらはされてゐる、こんな時悠々閑々と落ちつかれては隊長殿も困るがあぶあぶしてゐるのも困る。

○雨の日

麻布　草雲雀

朝より煙か霧の樣に降りそゝぐ雨は悲しく胸に迫る、不安は悲痛の聲となつて小雨のまゝに愁の調べに聞えた。私は泣いた。暗き心と降る雨よ、身も心も共に流す樣に降れ、解がたき苦悶にともすれば針の手は遲れがちに心は暗きを逐ふ。泣くまいと噛みしめた唇はいつしか解けて人なき折はまぶたを拭ふ。『あなた方には自分の苦悶はわかるまい』と仰有る〇〇さんの上も思ふた。若くして失戀の痛苦に泣き給ふ人の上も思ふた。けれども今の私の涙は人の苦悶を思うて泣く涙か、我が身の周圍に纏れ纏れし苦しみの涙か、あゝ私は語るに忍びない。

子として送つた年二十有一と數へた過去は私にとつては餘りに重たき束縛であつた。身は單調の生活に倦きても心は複雜の暗鬪に泣いた。一人怒濤渦巻く中に佇める私は弱き人の子であつた、過去は病に因はれ人に因はれて今華に笑ふ御僞りの笑みである、子として親に捧ぐる愛は涸れた涸たけれどもお母樣あなたが優しい笑顔に心の解決をつけ兼ねます唯一度烈しく、強く、叱つて下さい、今、兄樣が強く閉た障子の樣に強

しきあたつて下さつたら、迷つてる解決もつきませうに、優しいお心の笑顔の母樣を捨てゝ放浪の生活に入りかねます。烈しく強く幼なき子を叱る樣にこはいお顔をして叱て下さい。

こはいお顔を思うてお心より離れます。……

急に強く降り出した雨は天も地も碎けよ裂けよと激しい響を立てゝ降る心にかなつた樣に一入痛快と叫んだ。あゝ私が得た友も餘りに若く餘りに世しらぬ人であつた。共に語つて泣くには餘りに若いと思ふた。あゝ心の冷ゆるまで全身の冷ゆる迄でと俯伏した冷たき夜風の身に泌むまで泣いた。

隨分と激しい少し激しいのを衒ふ氣味があるけれど、潜熱は火とならねばおかぬやがて光炎萬丈の花やかさが見られるかどうか兄さんが妹はもう動搖期を過ごしましたよと語つたのを見ると、どうやら降參しさうでオメデタウ



人形の母　府下　鈴木きよ子

○ゴンドラを思ふ

小石川　つゆ草

ザーッ〱。小止も無う眞直にふりしきる雨聲にねそけて幾度も〱寢返許仕たあげくとろつとねると、水々ッ……嬉し相な弟の叫に起された。柳町に續く縱の往來と氷川に續く右の道とは赤黑い濁水に浸されて一面川に成つてゐる、米屋の路次口から蓬々流れ出す水が往來のと一つに合はうとして、押返されてクル〱渦を巻き恐ろしい水勢だ。水をらざく人は皆な太い青竹や棒を杖にする、乳の邊迄づぶ濡だ。洲の樣に殘されたうちの門前に刻々人が集まる、彌次馬もゐる、坂下から來て困つてる女の群も。氷川は床の上四尺だぜと一人が云ふと、柳橋が落ちた、新聞には舟で炊出しを運ぶんだ、ゆうべは荷片づけで寢なかつたと口々に云ふ。ひどい〱とこぼし乍、年一度は水厄に逢ふものと觀念して移らうともせぬ町の人達がをかしくも氣の毒にもある。久し振で底迄澄み切た青空を仰ぎ眩しい日光をあび、勢一ぱいな蟬の歌をきく。十時過白く乾いた敷石にポタポタ雫を垂らして郵便屋が來る。官報と端書二つわたし乍イ僅が此歴に遅れてと云ふ。新聞も遅れた慘膽たる水害地の記事で埋つてゐる。四十年以來の洪水と書いてある。道理で例年よりはずつと門近く水が寄せて來たもの、でもうちは高いから案じることもない。本通も出水電車不通と聽く。今日こそ地方婦人が賑りに行うと樂しむで居たのに詰らない、越後と宮城は幼い思出のある土地、善光寺も朧の記憶に殘つてゐる丈、それ丈餘計に早く見度くて成らない、章ちやんは出したり入つたり、小舟が行くの巡査のくせに鋏もつらずおまけに跣足で歩いてるのと、一々注進する。夕方、石屋の角迄減水したが其先の家並は朝から戸をたてたなり、又今宵一夜水に浸つたまゝ心細く明かさなければ成らない。御湯から出しなに栗の梢透かして、クリーム色の細月を眺める、星も澤山散らばつてゐた。暗く成ると水の濁も解

らず、濃く罩めた靄の中にボーと紫ににじむでる灯の光が水に映つて搖れて、延びたり縮だりしてゐる。靜かだ……私は偶然、西の國の水の都、ゴンドラでゆきゝする其美しい都の夜を想ひました。(八月十一日)

ゴンドラを想像するだけそれだけ水を怖れぬ餘裕がある、小貝川がきれた上に鬼奴川が押して來るといふので終日終夜鐘の音を頭上に聞きながら不安に明し暮したわれ〳〵の苦勞は御存じなかつたらう。(村に鐘が無いので何事かの時には宅の警鐘を鳴らす故にいふ)

○桃代の母様

神戸　百合香

大きな目を明けて天井を見つめていらすので姉さまお顏を洗ひませんかと言つてもまんじりともせぬ、姉さま姉さま御返事がない。みどりさんと小さな聲で呼んで見るとこちら向いて何アにと御しやる、どの樣に興奮していらしても沈み切ていらしてもみどりさんと呼べば必返事がある、母樣が伏見にお歸りになる時つけなすつた名なので忘れないと見える。食後机の前にちやんと坐つて何か考へてゐる樣子。心のおだしから ぬ人とどうして見えよう。じつとついてゐると涙がこぼれてくる。『あら桃代、まあ何をしてるの、お母さん〳〵、早く戸を明けてちやうだい。しめてはいけないのよ、乳母、乳母つてば。』『姉さんみどりさん』。『ハイ』『何をおつしやるの』えつと靜な水のやうになつてしまふ。『姉さま桃代は可愛くはありませんか、早くよくなつて下さいな、姉さま桃代の年幾つか知つてらして』『知つてるわ、一寸待つて』と白い指を一つ一つ曲げて數へても〳〵いくつとは言はない。

桃代のことなんかいひだして、わたし……父も兄も逢はずおうちから來る手紙も見せぬやうにしてるのにとひどく悔いる。

夕方三等室の前を通る。二十幾盤かの廣間に八人一しよに居るのでめい〳〵思ひ〳〵の事をしてゐる。一年も同じ室にゐながらちつとも友達にならない、一人一人顏は違へどくらへる須磨の松風さつ〳〵たる鹿にあつもりが笛の音を聞くは彼等である、淡路島山けぶり靜けき月の夕を人魚に誘はれて海に行くも彼等である。面白の春雨や、手を柏つて花の散るをはやせど人面を背くるは何故ぞ。夫を忘れ子を忘れてゆく〳〵なき風に戀すれど人とがめぬもふしぎではあるまいか。みどりさん！百合香はいつまでもいつまでもあなたにつき添つてゐるわ。

作り物ではないらしい、三等室の八人が一人一人どんな遊びをしてをつたか獨合點に略したのは惜い、新聞などによく見る薄つぺらな精神病院參看記と別なのだから、もつとよく書いてほしかつた、姉さんのおもかげも正直にいへばはつきり出てゐぬ、恐怖の目一つうつしてないのだからじれつたくなる。

○雨の日

牛込　平塚白百合

三日も四日も降りつゞいて心がくさつてしまひさうだ。細目にあけた戸の隙から野分の前後見るやうに木の葉が一枚〳〵葉裏をかへして、東京學院の大椎の梢が大ざつぱにゆれるのを見ると何となく凄い。

一帶にねずみがゝつた空にひく〳〵梢に引かゝりさうに灰色の雲がたえず後から〳〵と、しつきりなしに何かに追はれるやうに動いてゐる。

銀のやうだつた細雨がザーッと音をたてゝ細引を引いたやうにドシャ降りになつた。物置のトタン屋根にあたる音がさわがしい。

地の上、屋根の上、しぶきにボーと烟つてダリヤの赤い花が影畵のやうにちら〳〵する。

新聞の活字がだん〳〵茶色がかつて見えなくなつた。隨分くらくなりましてね！。丁度濵町の倉座敷見たい。アーでも住んで見ると氣にする程ぁやないがね。

平氣でお叔母樣は縫物をしてゐらつしやる。もう何十年も縫ひ付けてゐらつしやるので手がひとりに着物を縫つてしまふらしい。

袖だけ手があいたらお縫ひなさいよ。エーあんまりくらくつて縫ひ目がどうでしやうか。

くらいのにかこつけて今日のやうな氣のつまる日はにげをはつた。と云つてわざ〳〵來て縫つて頂いてゐながら、見てばかりもゐられる

いし。母樣だつたら我儘云つてもすむのだけれど………。
お姑樣の前へ出たつもりで殊勝らしく針をもつた。
袖丈のヘラをつけやうとすると、一尺六寸五分にしかならない。
お叔母樣大へん袖丈がつまつてゐますのねー。
いつ迄長くしてゐるつもり、姑持になるのぢやないかねー。
云はれたのでハツと思ふとボロ〱と涙が出た。何の涙がわからないさうともしらないお叔母樣はのん氣さうに歌舞妓座の佐倉宗吾の話しなんか初めた。

今日はちつとも氣がのらない。
兩袖ぬつて時計を見ると丁度十一時。片寄せて臺所へ立つた。
雨はまだ二三日で上りさうもない、細くなつたり太くなつたり風に亂れて板にあたる雨垂の音が蛙の遠音のやうにコト〱聞える。
ピチ〱やける魚の番をしながら嫁いでゆく家を思ひ夫を思つた。
私の一生ももう定つてしまつたのだ、もうカタには入つてしまつたのだ。大きく〱も小さく〱もなれないのだ。
清がお香の物を出しながらもう二十日計りでございますね。と云つたのが非常に胸につかへた。
母に死別れてまた父に別れて、家をはなれねばならぬ女ー。女はなんと云つても損んな生れ付きである。

『何の涙かわからない』また虚飾が殘つてはいけない、見え透いたうそといふと語弊があるが、あなたのように多數の人から燕はれてる方は眞似をする者が出るので弱る、此の二十日以内に結婚なさるかどうかは知らないが。

○日記葉月のうち

美濃　葛の葉

ひやあ、十二時、もう眠る〱俄に眼が痛なつた、扨てと今日の出來事は?、さう〱朝清子の七夕ごとを手助つた、夕景から新家へ行つて提灯の火などつけてやつた、誰が書いたか、チヽハヽ、パヽ、と書いてあつたが大方丈だらう、清子の七夕に姉の手でコメママメアメ、と書いてあつたら、其下へ父樣の字だ片假名やがきた、とひよろ〱の字で。母樣に話してたらそしたら母樣が、お前の初七夕の時、オマツハカボチヤガスキナリ、と書いたので皆して笑つた事があるよつて一昔半も前の事ひつぱりなさる。八月十日、晴。八月十一日。昨夜雨が降つたといふ露の朝、海水浴としやれた或友から繪端書が來た、惡く言や一枚一錢宛の割増と言ふ格、旭晃さんから敎育新聞を下さる、午後、かよちやんが子供三人で寫つた寫眞を持て來て下すつた、三人ともそれ相應に氣まゝしてる、淸子が一番まづい、口開いて。

十二日。雨が降つたけれども雷はなつたけれども、少しのすきあひにかよちやんへ行つて來た、だつて此間二日半日行かなかつたら、病氣ぢやないかと手紙持たせてくるんだもの、處が病氣でも無いのにと、むきになつて學校兒童が無斷缺席でもした樣に、大いに詰られるんだから、だつて九星の廻りが惡かつたもの、とすくんでいや、人を馬鹿にしてたらあと怒りやる、くはばら桑原、でも女雷は一時ひどいと人も言つたが自分も思ふ。

十三日、雨ふりのいやな日、東海道線が大荒れで東京とは汽車不通といふ、かうなると妹の上が心配になる、雨はうるさへ、世をどうするつもりだらう、天道樣がちと處か大いに恨めしい。もういゝ加減に晴れさつしやい。

シトバカニシテル。タヾシオマツハカボチヤガスキナリノオマツハ
オトミノカキチガヒヂヤアリマセンカ。

○夢の記

伊勢　露木雅子

八月朔日、お天氣は大丈夫らしいがどうも暑さうな日だ。今日は何もしたくない日?。何故?と問かれては一寸我心にも答へ樣に困るが、今曉自分は厭な夢を見た。其のせゐか、どうも胸底一種の不興の念を兆して、どうしても不愉快だ。自分は去年の今頃旅に在つて樣々の夢を現にして味はつた。其當時一人の青年からはしなくも思はれて、其れは〱熱烈な戀の詞、甘い涙戀ひ愁への數々を卷き込めた幾尋の文を送られた、けれども自分は表に其人を冷視して遂に切なる念ひを耳にしなかつた。

然れどあはれな戀ずる人の眞情は深く〳〵同情して、人なき所を好み求めて、そこで涙の袖をしぼつたが、自分は理性に囚はれた愚直なる人の子であつた……あゝ彼の青年、今年は如何なる想ひに耽つて居るだらう等、今も始終仇ならず思ひやる人と昨夜手をとつて水清き邊りをさまよつて、二人の胸にひそめる相憐の歌をさゝやき合つた。然れど我れはなほ彼れに身と魂を捧げ様とは整はなかつた。あゝ夢の國に入りてもなほ戀の美酒に醉ひたはむれる事を許されぬ自分は幸か不幸か？午後四時過ぎ、藤棚の蔭で夢のぬしの文がらを燒く。

ゆるく吹く西風にあふられて一しきり〳〵燃えあがる紅炎を見ながら其人の一言一句を無意識に繰り返へしよむで、我れながら冷い涙の袖に散るをはらひかねた、あゝこれで我が篋底はかるくなつた、が此心は依然として重苦しい物を以ておされて居る。

はからざりき君にもまたこれ傷心事あらんとは『黒髮長くやはらかき少女心を知るや君』と詩人はうたふ、君を驚かしゝ人は花を折り機をよぢて日も足らざる輕薄兒ならんのみ、死ぬといひよる男あらば死ねと言へ、狂せんとすと告る者あらば狂せしめよ、男性にして女性に求むるものは到底下劣のやからなり。許さゞりし君の戀を祝福す。

○蠶の休めるは

松本市外　辰　美

今日は秋蠶も三眠したあめ色して丸丸と太て皆そろつて頭を上げて居る所の可愛さ、けれど此樣な優しい顏して居て蠶程恐ろしい蟲はあるまい一年の生計の八分を蠶にをはせてもだまつて受けてゐるかはり一度其御きげんを取りそこねたら最後あの優しい口で家も倉も田畑も一のみにしてしまふのだもの。

蠶室の北窓を開くといく枚かの桑畑つゞき、其向うに奈良井川が青々見える、奈良井川の向岸はすぐ城山だ櫻散る頃房樣と遊んだ、吁あの時が少女としての房樣と最後の遊山だつた、一番の高峰三ノ城の松の間から見おろした奈良井川、其上を北へ北へと靜かに流れ行く三四のイカダ、白布ではちまきしてイカダにのつてる人の黒い顏。

共にイカダにのつて日本海に行き海に沈んでしまいたいと淋しく笑た房樣、吁其房樣はすでに人妻となりて三月、悲しいかな友情は日に月にうすらぎつゝ行くものを、いつだつたか五月雨の符從兄樣がつく〴〵と仰せられた『人妻はほんとにひゝやかなもの、あなたも遠からず其ひやゝかな人のひとりになるのだ』とあの時何とか云ひたかつたけれどどうしても言葉が出なかつた、涙が先に流れて。

夜××樣へ手紙を書く。

奈良井川を溯れば廣丘に太田きし子在り、さらに七里の鳥井峠を登れば淨鏡忽地にひらいて、秋しづかなる諏訪の湖を見ん、山田邦子の故鄕なり、（其生れしは長曾我部菊子吉田こま子とおなじ阿波なれど）信濃は才人輩出の地、君さらに起たずや。

○初秋の一日

東京　富　美　子

おゝ美しく成りました悉皆見違へて了つたよつて、まあ厭だ、伯母樣は私を手遊のやうに彼方へ向けたり此方へ向かしたり、見上げ見下して感心する。人間だから好いけれども、機械だつたら必度工合が惡く成つて了ふわ、でも初めて結んだ文金島田に翡翠の挿込重く、裾を引いた紋付に、品好く立て矢の字を負はされて見れば、さすがに平常のやうなお轉婆も出來ず、務めて神妙に、母樣の傍に香箱つくつて小さく座る、ほんに束髮とは違ひまして溫和しい好いお髮で御座います、まあ可愛いゝお嫁樣が出來ましたつて乳母やはほく〳〵もの、おゝ厭な事許が……うつかり口元迄出かゝつたのを、母樣が一寸稻光りをさせたのでやつと呑み殺して了ふ。唐紙が開いて從兄の賢樣が入つて來る。やあお文ちやん素敵だねえなんて、突然赤坂見附で電車が衝突したやうな聲を出す御本人だけあつて今日は特別粧して居る、どつかり座り込まうとするのを伯母樣に注意をされて奥へ行く、父樣や皆樣に固くなつて挨拶をして居る樣子つたら、日頃私の大切にして居た花壇のダリヤを牛蒡拔きに引つこ拔いて了つたり、お部屋へ遊びに來ては一月習つた計りのヴワヰオリンをゲコ〳〵いはしたりする人とは、どう見ても受け取れない。

論文

編輯局選



○『地方の婦人』批評

其一（天）

月見草

此は私が地方の婦人に一度スーッと眼を通して感じたまゝの事を筆にするのに過ぎません。此度の表紙は實に好い。アッサリして奥床しい所がある。口繪には矢張り當選者のを入れて頂き度かつた。

先づ所謂名流婦人の月並なのは取つて置として、地方婦人の自重を望むは、御尤もな御説と存ます。海豹島の婦人生活は、面白かつた。私も一度行つて見たい樣な氣がする。雲雀鳴く野よりは、何時も乍らしんみりした筆致には直ぐ引付けられて仕舞ふ。沈んだ氣になつて讀む。常陸では田植の歌は其う歌ふのでせうが、私の村でも似たのがあります。「腰の痛さよ、せまちの長さ、四月五月の日のながさ」。と云ふのです。九州と常陸と離れて居乍ら似てる所が面白いと思ひました。河井先生の海岸の內、紀三井寺から和歌の浦、其女性的な靜かな所に二三年行つて見たいと思ひます。其に續いて淡路の生活も宜しからうと思はれました。雨の日の柑子の匂ひ、實に詩的ではありませんか。大阪市の婦人は、眞面目な健實な筆致です。都會より地方へ、菊子樣はもう都會を御厭きになつたかと驚ろいた。然し失禮な言草ではあるが、二三年も御出でになる內には同化されて再び田舍が御嫌になる事と信ずる。富山と岡山、富山は知らぬから云はぬ。岡山女の落ち損なつた洗髮に至つては、實に同感に堪へません。或は誌友の君達は怒られるかも知れぬが、一般の事をさすのです。其ネチ〳〵と負惜しみが強く

て、其くせ交際なんか非常に上手だ。一體が中國人は輕薄だけれど、廣島岡山あたりの人は殊更にひどい。田植時の活動は、いづこも同じ秋の夕ぐれと云ひ度い。樺太あたりの紀行を之だけ書こなすのは、仲々の御筆と感心する。諸國通信、××町よりは筆はどこか輕薄だけれど、材料が一寸風變りだつた。

熱海、章子様のは實に好い文と思ひます。何處か詩的に新らしい言葉を使つて書き上げた所は、何時も乍らいゝと思ひます。其に續いてはずつと、誌上知名の方の御筆故惡からう筈がありません。

早蕨様も、何時も乍らしつかりした筆です。あたり一面石油の匂ひでもしそうな。樹上生活、事柄が面白いので興味深く覺えました。神聖な御職業に御成功を祈ります。善光寺は忠實な寫生です。越後甚句も面白い。「來いと云ふたとて行かりようか佐渡へ」餘韻の長い好い歌だと思ひます。月夜などに聞いたらさぞと思はれます。其他伊勢、山形、岐阜等其々違つた地方の色彩が現れて、其々興味深く感じました。

葛の葉様は作らず飾らず、思つた通りぽんぽん仰しやるので私は何時も此方の御作を拜見する時は、笑ひ乍ら讀む事が多う御座います。

都會にあこがれる婦人の心持は、桃の花様の御作を通じて、一般の若い女——地方の女學校を出て、女子大學へでも入學したいと云ふ様な——の心持が能く現はれて居ります。其他も似たりよつたり、先づ地方の女學校でも出た者は、一般に一度は東京に二年なり三年なり行つて見たいと云ふ傾向があるやうです。教育ある若い女の流行病？でせう。

要するに此度のは地方の婦人其々の色彩が淡い乍らも能く出て居て永久に取つて置いてもいゝ雑誌が出來ました。都會の婦人よりも一層成功した者と申して宜しいだらうと思ひます。

此次のには當選作家の寫眞は是非入れて頂き度いと思ひます。現れたる作と、寫眞と比べて見るのは大變興味深いものです。

たしかな評といふよりも、面白い評でせう、話上手が人の噂をしてゐるやうで、思はず聞き惚れます(評)

其二 (地)

丹後　永瀬みどり

地方の婦人といふのだから大體は想像が付いて居たが、實際はそれ以上特色のあるものであつた、けれども「都會の婦人」にあつたやうな、華かなスッキリした感は得られなかつた。先づ大下藤次郎氏の天然の美と婦人の美の中、自然の景色が佳い處は美人が少なく、景色の惡い處に美人が多いといふのは面白い現象だと

思つた。泡鳴氏の海豹島の婦人生活は興味を持つて讀んだ、そして膃肭臍を監視して居る婦人の經歷、生活等をいろ〳〵と想像して何かから神秘な感に打たれた。小栗籌子様の小説、漁夫の母は海近くの漁村の有様、魚賣の婆さん等がよく現れて居たが、何等新しい意味は無かつた。水野仙子様の賣り桑は佳い作ことに摘んだ桑を掛けて貰つてる邊り目に見えるやうでした。それから誌友の人々ので菊子様の都會より地方へは、地方から都會を慕つて出た人の、暫く立つて切に思ふたことがよく出て居ました、菊子様!!どうぞすべての壓迫に打ち勝つてます〳〵進んで下さいませ、陰乍ら君の御成功を祈つて居ります。



釣魚　埼玉　野原夕花

下枝子様の富山と岡山の婦人は、ちと誇張しすぎてゐるやうに思ひます、私は富山は知りませんが、岡山には久しく居ました、けれど垢の落ちそくなつた洗ひ髪といふやうな感はしませんでした、一寸話し等しても對手の人に柔かな感じを起させます、けちで妬み深く怨みつぽいとか美しい帶や着物を著けたいのは婦人の通有性ですもの、あながち岡山の婦人のみではありますまい、額の生際だつて富士額とかぎつては居ません、廣い人の方が多

い位です、又食物を儉約し見榮だけよくいつたり、へそくり金をこしらへたりするのはある一部か、下流の人にばかりだと思ふ、何しろ人口が十萬程あり、其中には性質の惡い人もあり他國の人も居りますから、さう一概には云はれません。

靜江樣の機日記、いつも乍ら珍らしく拜見しました。山岳と海岸には創作がゝつたものが多かつた、中でも章子樣の熱海が佳かつた。早蕨樣の石油の噴出、目ざましい活動の地ですこと、井戸から石油が幾十丈も高く噴き上げるつてどんなに壯觀でせう？石油の香、機械の音を一日聞いて居ては堪らないだらうと思ふ。都會に憧憬つゝある若き女の叫び、北斗星樣のを讀んでは、あゝ現代の女性はわざはひなるかなと、叫ばずにはをられますまい。白露子さまの嚴格に過ぎたる家庭、御同情いたします。

汀樣の船中より身を投げんとしたる其後の私は、もつと身を投げやうとした時の心地を、くはしく書いて欲しかつた。其他、各地の狀況風俗、人情等の通信であるから皆面白く讀んだ。

和歌は選者にもよるからか知らないが大抵、情熱派ですね、同じ情熱派でももつとサッパリしたの出來ないものでせうか。小品文の朝靄——吉田樣の——靄の奥には美しい花が咲き懷しい人が待つて居るやうな、氣がすると有つたのはよかつた。妄評多謝

先づ公平な批評です（評）

其　三

美濃　葛 の 葉

▲地方の婦人は地方の婦人、都會の婦人は都會の婦人とそれ相應に兩者共特色があるのですから、どちらがと方寄りは分も無い樣に思はれます。

▲淡路の生活「拜領」て詞が大變氣に入つたから私はこれからちよつ〳〵使つてみ樣と思ふ、母さん是私に拜領よ、實際に當つて使へるかどうか。

▲琶琵湖の總容積は二萬〇九百三十三立方で之を概算したる富士山の土の量に比べると琵琶湖の水の量より三十七倍多い、とは呆れました。

▲海豹島の婦人生活、首卷一枚七十五圓、八十圓といふ臘肭臍、居る處には居るとみえますね、而し此樣　淋しい、不斷見て居る婦人の心持？、つたつてさうですねえ、何と思ふでせう。

▲雲雀鳴く野より、朝鮮皇帝となつて統監督根荒助の首を斬ると夢みた、これが所謂横瀬式と申もの。

▲嚴格に過ぎたる家庭、實際お氣の毒です、父樣が叛らしい母樣を迎へなさらずばかうでもないでせうに、けれども白露さんあまり貴女が弱く出なさるからいけませんよ、もつと自分といふ者を重んじていゝと思つ

た事はお控へなさるな。

▲石油の噴出、如何にもその樣を眼前にしたなら驚くに相違ありませんが、長くはいやです、香ひが。

▲房州の渚、畫家は啞であつた、何となく引つける樣です、文章もやさしい。

▲山城富士の北の麓、噫、左樣でございますか、と兩手をつかせみ書振り、木の花さんの御人格お慕はしうございます。

▲小說賣り桑、こいつ奴、頭を叩いて泣かせる親のあたり實景妙です。

▲漁夫の母、おりよう婆さんがとぼ／＼後についた、なんていゝ描寫でせう、全體に生氣がもつれ溢れつといふ筆つき。

▲伊勢女、ちと自惚的なお筆つかひぢや無いでせうか、法螺も吹かなきや鳴りもひゞきもしませんけれど。

▲楊梅の里の樹上生活、私は樹上生活をとりちがへて夜分も寢むのかと思ひつゝよんで一寸あんぐり。

▲高尾、筆子さんがずるつと辷りなさらないゝがと、あゝ筆子さんぢやなかつた美波さんでした。

▲私の淋しい心を察して下さい、實際お察し致しますけれどもあなたも一時に上京熱がういたとみえますね。

▲都會より地方へ、戀しても相擁くべき東京ぢやないと、よう仰有つた東京は／＼……私も同感です、御自重なさいませ。

▲五年以前、はたちともなれば、の歌がすき。

▲炎熱、御息はのが好、神代より、のが好き、世の常のをみなの如くは、一寸味はふといゝ氣がしない、善惡のそはともかくもくらがりを、のは作者戰場に向ふ身で何を仰有るやら、舞扇しづかにたゝむ、いゝ歌あらどうしよう行の制限、表紙もいゝ口繪も內容も、一一申て居られません、ほんとに讀み終つて樣々の印象をとゞめ得たのを喜びます。

一部の人には好んで迎へられる文字です(評)

其四

(「都會より地方へ」を讀む)

大阪市　渡瀨淳子

「都會より地方へ」を中心として地方の婦人の首都にあこがれる心の一端を窺ひたいと思ひます。

原作の意に從つて都會は唯東京と限ります。又地方と云ふ言葉の中には地方都市と地方町村とを含んで居ますが、暫らく首都と共通點の多い地方大都市は措いて、主として首都と田園との交渉に就て論じ度いと思ひます。さて事實統計でもとつて見ましたならば、地方婦人の東京觀は存外冷かな淺いものであらうと思はれます。其町村を支配する地方都市を通じて朧ろげに見るに過ぎませんから、極言すれば「東京は日本一の大都會で　陛下のおはす所死ぬ迄には一度見て來たいものである」位の考への人が、却て大多數を占めて居るのではありますまいか。然し斯の如き女性は例令夥しくあらうとも首都と直接心の接觸を感じて居ないのであるから、此場合に何の關係もないのであります。唯此處に此等地方都市を縱に貫き、田園を橫に斷つて、一部の女性がある。其女性の胸には

以上の婦人の想像を容れない一の激しい流れがあるのであります、此潮流は卽ち種々の方面よりする首都の憧憬であります。私は之を單に虛榮、妄想の發現とせずに靜に考へて見たいと思ひます。

我が長曾我部樣は勿論此女性の一人であります、此種の女性の精神は純潔で無邪氣であるか其れだけ生一本であり熱烈である、田園の萬象は其滿足を買ふには餘り偉大で沈靜である、此人達は此偉大なる自然の眞相に直に同化する程の大精神はなく、さればとて茫然と日を消す粘液質の人の群れの中に化するにも忍びず、其精神發達の程度に於ては、田園の凡ての人と物とがけだるそうで眠たそうで荒みきつてつまらなく感じられる所から、更に强い烈しい刺戟と色彩とを要求するのであります、紅、紫、金色の都、輝く瞳、縮つた口元、すらつとした容姿、きび〱した會話、あでやかな表情の間に身をおいて、芳烈な香りを心ゆく迄味ひ度い。創作と雜報と乃至はスパークの如く來り去る都人とに溯立たされたる情緒が、一度胸奧深き琴線に觸るゝや、女性の發作機能は極點に達して、矢も楯もたまらず首都を慕ふのであります。現實の外に超越せる哲人は兎に角、現世の文化及時代思潮の快い呼吸なしには生の苦痛を感ぜずには居られない、個性の薄弱な女性が、此傾向を有つ事は蓋し止むを得ない事ではありますまいか。

あゝ首都、東京、そこには恐怖すべき暗黑面があり、罪惡と誘惑とが經となり緯となつて、人之に陷り陷れられる事は知つて居るが、自分は此に陷らずあまつさへ此を見る事なしに、首都の光明の間に希望に滿ちた生活を送り得ると固く思ふのであります。

遂に其熱情が周圍の障碍を破つて上京の段となるや、赫耀たる光明を夢幻裡に望みつゝ、墓場の樣な山河より逃れ出る幸福を喜び、羨望の眼を注げる友達が、我汽車我汽船動くと同時に現代より葬むられるかの如き哀憐を感じ、快心の笑をこらへて、一歩首都に踏入るゝ時は、唯無性に嬉しくて下駄の音まで異ふ樣に思ふのであります。斯して幾多の長曾我部樣は上京するのであります。

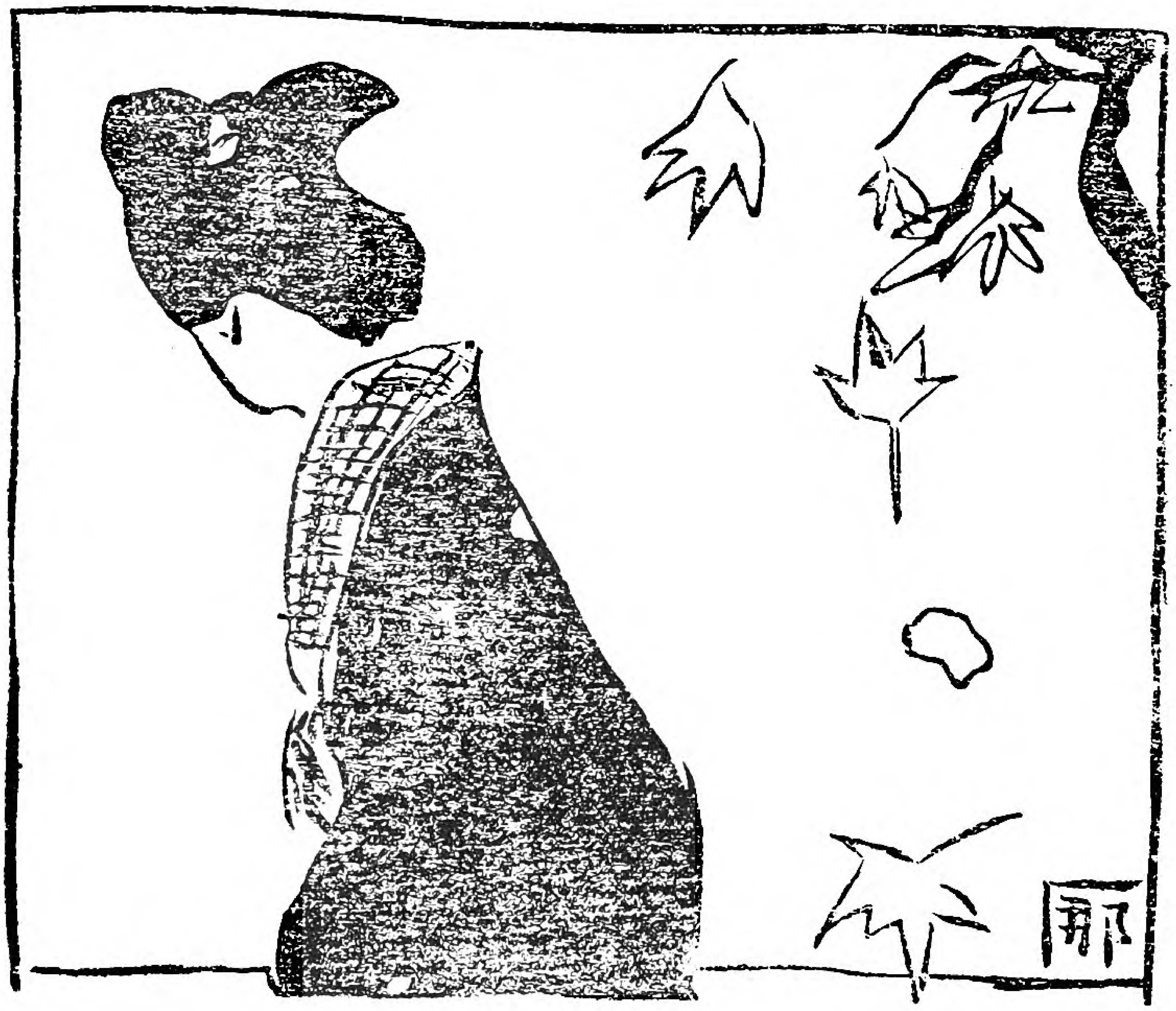
さるに半年一年滯京の曉、あの憧憬れた首都の感じが菊子樣の「都會より地方へ」となりて望鄕の涙と共に迸り出る此心機轉換の消息、我々は深く考へなければならないのであります。

來て見れば富士の山も何とやら、失望は回顧となり、沈靜に歸した心を以て沈靜なる田園の萬象を忍べば、造花の無限絕大の力と時との極限を悉したる悠々たる天地は、尙迷へる女性に廣大なる慈悲相を垂れ「歸れ擁かん」とする。さらば懷かしき舊山河に退かんか、首途の誓を如何せん、尙更血の少ない友達の「仇は斃れたり」と云はん計りの嘲りの眼光を如何せん。のみならず自分の失望せるは首都の一部で他の何處かには夢想せる如き境のあるべきを信じ、なしとするも其存在を假定し、此にあこがるゝ事に依て、我心の甘心を買はんとする、此ふだんの矛盾の上に立ち、此悲痛を抱いて都大路の强烈なる刺戟と色彩との間に彷徨せる幾多の女性を代表する一人から「唯一の意地、それが私の生涯に、血汁を焦す燒印を捺しました」。「私を信じて下さい、どうぞ、永久にさうあつて下さい、野の道から動かないで下さい」「歸りたい歸りたくない、弱い者の結末は採りたくない、我が廿年來捧げたる寶玉を泥土に任した殘念な感じはするけれど。這般のもつれ〱たる告白を聞くに至つて、地方の婦人の感は果してどうあらうかと私は社會の婦人に反問したい。慄然として驚くでせうか、愕然として醒める事でせうか。

翻て思ひますれば、從來も斯の如き回顧、悔は度々筆にせられたのであつた。男子の中にも暗黑と失意とに堪へず、敗殘の身を提げて帝都を辭するに際し、卒讀に忍びない告白を公にした方も少なからずあつた、識者は此地方女性の傾向を憂へた、抑壓此れ事とする女子敎育家は勿論べからずを主張した、其れにも拘はらず、首都を懷ふ田園の少女は絕えなかつた、のみならず激しい勢で增して行く、此女性が變にこじれると「涙脆いくせに怒りつぽい非常にへんくつな空想家」(磯のや樣の言葉)

となる、親泣かせの娘となるのであります。對岸の火事ではありません、現在我が文壇の「地方の婦人」にも此傾向は明に認取せられるではありませんか。都會より地方へ「五年以前」「私の淋しい心を察して下さい」「行きたい〳〵と思ふ一念」「擂鉢の底の様な土地より華かなる生活を慕ふ」寂しい心」、あはれ此聲、此叫び。私は地方婦人の眞率な生活の記事と共に之を「地方の婦人」中最も力のはいつた讀むべき作とします。そして多くの讀者も亦東京婦人の避暑日記の一節や、東京婦人(一度は東京に住ひ又は覗いて來た人、地方人でありながら二言目には東京を振廻す人)の風俗人情記より、熱心に讀まれた事と思ふのであります。芳烈なアルコールに醉ひて尙酒を呼ぶ聲、醉覺めの水を欲する聲、アルコールを求むる聲。此叫び、偉大なる精神の救ふ所となつて、地方婦人のあぐる凱歌の聲とならん時は、何時の事で御座いませうか。長曾我部様始め、私の謂ふ一部の女性の方々の精神をお察し申して、私は唯斯く叫ぶのであります。若し夫れ、具體的議論に至つては、記者様其他世の識者の敎へを、人も私も共に謹しんで承り度いものでありま す。

恐しく眞面目です、鳶餘つて筆足らぬ憾はありますが、論旨は至當　した、



秋の日　羽前木村那賀子

です、「地方の婦人」を讀んで此感を抱かぬものは遲鈍です、作者は菊子女史の一文を借り來りて滔々として地方婦人論を述べたが、之を言ふ一面の理は確に存在してゐます、只疑ふ、此作者男子ならずや(評)

其五

越後　曉花

批評なんて生意氣な、失禮は平にお赦し下さいませ、其内容大體は比較的刺戟性の文字や現代かぶれのした文章の些いのは本誌編輯の主意から出た結果でせうが、都會婦人を美しいばらの花としたならば地方の婦人は清流の汀に咲いた八重山吹のやうな心地が致します、田舍を描寫する紋切形、卽ち田舍乙女の白手拭、赤い襷と云つたやうなのがひら〳〵と誌上に見えるやうでなりません、赤質朴な俗謠の餘韻も嬉しく思ひます、要するに一讀地方趣味があらはれて淸い心地が致しました。無修養ですから先生方のは申上げますまい。「いろわけしたる大阪市の婦人」以下三篇、下枝子様の「富山の女」「岡山の女」いづれも老練な筆致、こまかい觀察、描寫の巧妙只感服致しま

希くは下枝子樣の仰せられたる通りの本場美人の越後處女をかいて頂き度い、オホ……「都會より地方へ」彼の純潔な、眞情燃ゆるやうな菊子樣の斯うしたお作を讀みましたのは始めてゞありました、坐ろおいたはしくてなりません、噫都の地は溫和な田舍乙女の血を凋らす處ではありますまいか？菊子樣幸に御自重遊ばしませ「五年以前」老熟したお筆で圓滿にかゝれて心やすらかに拜見されました、お次は、田植時の田舍や早乙女が、遺憾なく描寫されて、若い兩性の僞はらざる眞情もうれしい、短篇で讀み惜しいけれど短かい所に生命がある、「南北兩極より」南地の親友、北地の親友よりの薄色の封筒に卷きこめた鄕里案內のやうで懷しい、また共に達筆氣のきいたお筆にかゝれた「そりの旅日記」井の蛙的の私には遠い北地の異彩を珍らしくよみました、章子樣の散文詩式のお筆に「熱海」は華かに讀まれます、しかして新らしい空氣が漲つて居る、「高尾」さつぱりとして粹なお作、一寸小說のやう、あらッ誰方のお筆、筆子樣の、さう道理でね、――弘子樣の「石油の噴出」意氣昂然たる文章、同國なんですもの幾倍もひいき目でよみました、寸分の隙もない才筆、柄目木のあたりが見るやうでありました、新津石油の消息は新聞紙で承知して居ります「もゝの里樹上生活」新鮮な山里の特色がみえて居ます、紫花樣のお作としては、お筆に些したるみが見えるやうでございますけれど私は嬉しいと思ひます「越後の海」朝の海のなつかしさか泌々とおもはれます「善光寺」紀念公園は別問題として有難一點の善光寺を面白く美しくおかきなすつた優梨子樣の御文才お羨ましく存じます、私も參詣した折京都の講中の參詣をみました、蔦の葉樣のはいつも愉快に拜見される、初めの方等はほんとに奇拔「岐阜」の樣子がようわかります「積んだ荷物は米と酒」まア面白いみだしですね、其外ことごとく好くかいてありますが筆が廻りませんから是でやめます、妄評多謝。

八方美人的に褒めましたね、お國が美人の本場だけに(評)

其六

伊勢　露木雅子

「地方の婦人」の生れ出た事は、私共地方の女には實に嬉しく賴もしい現象である。其の滿足は限りなく深い。さて下田文學士と橫井博士の兩說は自づと襟を正さしめる適切な勸告と眞實な批評である。花袋氏の說にはやゝ淺薄の恨みがある(同氏の意見として)。木下氏の天然の美と自然の美は、さすが畫家だけあつて、着眼もまた藝術的である。尾上柴舟氏の故鄕に對しての御記憶をよんで、誰しも故里にはやさしい、あどけない追懷も、忘られぬ憧憬をもつてるものと思はれて何となうほゝ笑まれる。泡鳴氏の「海豹島の婦人生活」には、まづ島の名の耳新らしきに動かされ、次にそこにすむ女性の內情の知りたさに、心をかたむけてよみ了つて後、何だかつられた樣な氣がして馬鹿らしかつた。夜雨氏の「雲雀なく野より」、いつよんでも美しい憂愁のこもつた力ある詩歌的の文字には、どうしてもチャームされ了ふ。それに花外氏の「下京の女」も中々面白くよみ返す。

煽風器！風通しのよきも有り、また左程ならぬも有れど、兎に角時節柄流行の飾り物と見れば不可なし。

小說―小栗夫人の「漁夫の母」は實によい。ほんとうに其周圍の光景を目のあたり見る樣な心地がする。いつか風葉氏の「無爲」を讀んだとき同樣の背景が用ひられてた樣に思ふが、「賣り桑」も達者なもの。

醉茗氏の海岸は全く浪の響きを傳へて居る。殊に曾遊の地なる「ちぬの浦」「住の江」「江の島」等が最も印象が深くつて興味がある。驛鈴の時世後れなのも却て趣味が有る。みどり女の「大阪市の婦人」は餘程浪花通の人ならではと敬服。神戸は未だしき節のなきにしに有らねど。東京近縣の女の特色」は實際うまく見透して居る。

「都會より地方へ」—長曾我部菊子！若き女心の一筋に纏ひ慣れた都に來て後、初めて起る自然の聲、叫び、涙、其他色々の感情を例の才筆できれいに書かれたのだから、思はず感動されて再三くり返した。

五年以前！山田くに子—此人のはいつも高く笑つて低く、淋しく、目の光り、月の影、燈火にそむいて泣く樣な感情の鋭い文であるが、本號のは餘り特色が出て居ない樣だつた。が最後の短歌はすぐれて居た。

富山と岡山の女下枝子—ほめてけなして、けなしてほむる筆達者と？。

農村の處女が最も活動する田植時—では伊豆と伯耆が宜い。近江の方はあまりてらつてから嫌味がある。表紙と相まつて面白いページである。

南北兩端よりふたつ乍らよし。

樺の旅日記—靜江、夕日の影さびしく蒼い氷丘に映じる時に、若き人の胸に充ちくたるサブライムの念を、くり返し愛誦してはともなき我を騒がす、胸されど木の葉の亂れ落つる樣な物寂しさに。從姉に送つた書簡は水野氏に喜ばれ相なかき方、今更ながら敬服の外なし矣。

諸國通信では和泉の南よりが一等だ。　××町よりは其思ひ付のよい點に於て勝つて居る。

山岳と海片では熱海が最も好き、高尾と房州の渚は短編をよむ樣、越後の海は素直な文だと思つた。

地方の現在—之には最も鮮やかに地方色が表はれて居る。野の花、はる子、早蕨、ゆり子の諸子のが良い樣に見えた。

若き女の叫び北斗星！嫁いだ當時の我執の逸早く失せたるさへ不思議なるに、不得要領の泣事の解しにくき事よ。以後の數編にも多少矛盾の點多きは、眞情を吐露したるにあらで、文字を自由に使ひ過しによるか、あゝ若き女よ、まじめなる筆と偽らざる文彩を思ふまゝ傳へて、人の心眼を明かしめよ。

多少見當違ひもありますが、先づ大體には分る方です（評）

○嫁御樣へ

備中　小見山春子

私の村の大工の母親が參りまして伜が昨日から上ります本當に御勝手が惡るかつたでござりませうと言ひました私は吹き出す程可笑かつたですがむしろ氣の毒で俯向きました此母親は何日も明日の事を昨日と申したり娘の事を伜と申したり致します惡いと知つて直せない馬鹿でもないし敎へても覺えられない老人でもないのになぜあんな事云ふんでせうしやんとした息子も嫁も居ますのになぜ敎へないんでせう、息子は氣が付かないにしても小さい事にも氣の付き易い婦人況して嫁姑の間で私はきつと嫁も氣が付いてるんだろうと思ふんです私は嫁の人となりも大概合點しました若し言ひ惱い事なら夫に內證で斯うもなされあゝも仰るけれど斯々と敎へてお上げ下さいませと申たらどうでせう、又嫁だから迚眞心からお姑樣斯うなさいます方があゝ仰います方がよろしい事はないでせうか私がこんな事申上げお言葉をおとがめ申さんでも御意見致すんでもムいませんからお怒り遊ばさないでどうぞと徐に徐に哀願したら幾ら邪見な姑でも馬鹿でない限りは邪推して腹を立てる事は無いだらうと思升言葉の過失位は扱置何事でも徐に眞心から諫もし敎へもして只管に夫の體面に係るからと申たら一時ば不機嫌でも良心に耻ぢてきつときつと自分の心持も知つて覺えるだらうと思ます若し腹を立てたり非を發くと云つて不和になつたら私は平常から嫁たる人が姑への仕へ方がわるいんだらうと存じます何につけても嫁樣達の御苦勞の多い事に御同情申し上まず嫁入つて行かない姑のない私の眼からお可哀相だと十二分も姑樣へ引いて申上ました感じたまゝですからお嫁御樣の方々間違つてたら遠慮なく仰つて下さいましよ。



書簡文

編輯局選

○別れし友（地賞）

前橋　みどり

こちらは、もう秋草が咲いて、秋の日らしい夕日の入方などは、庭の木立にカナ〳〵がきて、可愛らしい聲をたてる樣になりました、妙樣の方も、きつと同じ事でせう。

私はね、前橋が小雨のふる淋しい日は、濱松も、矢張り雨であればいゝと思ひます。雲のない月の晩は、濱松はどうだらうと思ひます、妙樣……なつかしい妙樣、私はまだお別れした後、一日も忘れた事はありません。今日も、この手紙を書き初める前、町をずつと一廻りして來ましたの、何かお知らせする事でもあるかと思つて……。

前橋も、少しはよくなりましたよ、馬車が電車に變つて、きれいな新道も出來ました、ハイカラな洋館が幾つも建つて、共進會の準備も、大概とゝのつた樣です、妙樣、九月か十月に是非一度お歸り遊ばせな、懷しい故鄕の變つた樣子もおもしろうございます、そう〳〵。あの菊屋の八重樣がね、お嫁にいらつしやいましたのよ、評判の八重樣も、もう人妻になつて終つて、それでおしまひですね、女つてほんとにつまらない者、私は出來るだけ、處女の時代をながくして、せめて空想にでも、樂しい夢を長く見て居たいのよ、あゝあの招魂社の堤の上を、落花にうたれて語つた夕が忍ばれます。

この次のお手紙に、どうぞ御歸橋の有無を、お知らせ下さい、お待ち申して居りますわ。

書振は平凡だが、何處となしに懷しい色合が出て居る。飾らない自然の感じが嬉しい

○歸省して（人賞）

石川　むらさき女

花樣、ひどく暑くなつたわねえ、變つた事もなくつて

？私ね少し脚氣の氣味はありますけれど大した事もないの。家へ歸ったもの丶つまらなくつて仕方がないわ。何を見ても平凡で刺戟がなくつて僅に活てるといふ意識を持つてるだけなの。此頃の夜はいゝでせうね。あの瓦斯の光りの華やかな、かうしつとりした夜の街にしなやかな女の人の姿が夢のやうに浮いて見えるでせうね。明るい灯に逐はれて暗い田舍へ來た私は貴方と最後に歩いた夜の事――薄黄い霑ひのある月光が沈靜な水のやうな空を通して川の面に漂ふてゐる時の――を思ひ出して獨なぐさめてゐますの。かう物音一つしない室に座つてゐるとふと瓦斯の下で見た白い顏や色のいゝパラソル傾けてゆく若い人の印象がはつきりと浮び出るの。だけどそれが消えてしまつたあとの淋さつたら……本を覗く氣にもなれなくつてよ。此あつけなさは私の充實してゐた肉のゆるみそれなんだわ。故郷の美を説き故郷を誇つてゐたのは昔の事よ。今はたゞもう明るい、埃の中に塗れてゐたいの。まあ相變らず愚痴ばかりね、けふはこれで左樣なら。

人眞似だが兎に角或る感じが出て居る。只人眞似だけに深く徹底した處がない、全體の色彩が離れ〲に浮いて見える。

【秀逸】

○落つる涙

待宵草

たゞいま旅宿につきましたところで御座います。客舍の窓に雨が淋しう降つてゐます。噫くみ樣！躑躅が咲いたといつて、御便下すつて、夫とまゐりました日の思出もいまは悲しい哀愁の一曲となりました。夫の死は一昨日死屍が鐵嶺丸の船板の一片と一所に上つてまゐりましたのでたしかになりまして、けふはその受取りにまつゐてゐます、今夕六時二分神戸發下關行に乘る考へで御坐ります、あゝ一人の旅、昔懋しい事で泣いてのみすぎる事なんでせう、噫運命と思ひましてもたゞ夢の樣で御座います。昨夜は獨り冷い床の上に泣き明しました。又冷い棺を抱いてかへる日の事や行くさきの事思ひつゞけては一思に死のうかなどゝ切ない情にせめられましたが、つひに船が神戸に朝方つきました、たゞもう船中で或は甲板で海を見たり浪の音をきゝますと、狂氣の樣になりますのよ、あゝ久美樣！妾のさびしい生涯をどうぞ〱哀れと思召して行末永く舊に倍して御助け下さいませ、生れるべき子を立派に育てますのも又夫への務と思ひます、何卒た盡力とのみます久美樣！行末長う……。

際物に硯をつけたのと稍態とらしい技巧の跡が見え透くのはイヤだが一寸領かせる處もある。一體に書簡文凶作の此頃、これなどは先づ上の部だらう、破太鼓は餘計の事だから除いた。

○嫁ぎたる姉へ

東京　若紫

お姉樣お樂しみでしよう。もうたつた一月ね來月の今頃は義兄樣の大聲や姉樣の笑聲で嘸ぞ賑やかな事だら

うつて今朝も母樣が仰しやてでした。先日マルセイユからの御手紙にね、この前の便の時お義兄樣のお歸りを姉樣も靜江も樂しみに待つて居りますと書いて差上げたもので、靜ちやんの樂しみに待つて居るのは僕ぢやなくてお土産だらうですつて！隨分ねえ、さうしたら又宅の兄樣つてば、當らずと云へども遠からずですつて、餘り憎らしいので、ぢや兄樣刮目して待つていらつしやい。私ベストを盡して義兄樣のお歸りを歡迎してお目にかけますつて申しましたらね、僕なら眞平眞平御免蒙る、靜江の歡迎なら芋にかぼちやに團子をうづ高く積上げて……と手を振つて踊つて居るの、本當に家の兄樣位口が惡るい人ありはしない。きつと口から先に生まれたのよ。而して徒つ子ね、今日も暫らく伺はないからお姉樣の處へ行つて來ますつて仕度を始めたら、母樣がお留守だからいけないつて（自分が淋しいもので）下駄をすつかり隱してしまつて、カビのはえた靴まで下駄箱にないのよ、ね、ですから姉樣惡からず、今日だけお許るしゝて頂戴、あんなに堅くお約束しておきながら本當にすみませんけれど、今の次の日曜には雨が降つても雪が降つても必つと〳〵、若し下駄を隱されたら五十錢用意してハダシでも上りますわ。

大體これ位ならば無事也。但しどの文章を讀んでも、兄樣といふものは兎角類型的で、だゝつ子で、憎らしい兄樣に出來て居るから面白い。あゝ人生兄樣の身となる勿れ、噫。

○越後平野より

越後　田中まつ

都の此頃を如何に在します。

私の此頃は仲々忙しい盛りです。廣い平野、見渡す限りの梨子畑と、アップル、よねもも、葡萄園――今なれば桃が爛熟の盛り時であります。私は毎日野支度で桃の採取、落ちアップル拾ひ、日和のよい日は梨子に紙を被せて蟲害の用意を致します。時たま施肥も致しますわ――慣れゝばきたなくも無いものよホヽヽ、。

村落五軒、財産皆幾町歩かの果菜園、中には牧畜、瓜、西瓜、甘藷、南京豆等栽培の副業をやつておる人もあります。地は砂地――ですから殊更ら、霜、風、雨の心配に仲々安心のみではありません。

だけと、かうした果菜園、牧場の上を――あれ御覽眞夏碧りの大空に、白い柔らかい和毛のやうな雲が悠々と。蟬の聲、小鳥の聲――夕べ茜なす西の空を打ち仰いではテキサスの野邊も偲ばれます。

あれ、北越線の鐵道が縮田へ着きました。「カメダーカメダー」あなたは此聲を聞いて此驛に下りてお訪ひくださいませんか――。そして憧れ慕ふ都の印象を深かく〳〵お印しくださいませんか、此の憧れの子に――。

別包は水蜜桃であります。上海種で私の試作ですから御風味ください。粗末のものですが、先づは近況お知らせ旁々さようなら。――（平塚白百合樣に）――

テキサスの野を偲ぶのは結構だが、憧憬とか印象とか騷いで居る貴女に、果して施肥をきたながらない膽力があるかどうか疑問だ。イヤこれは失禮。

○又肩揚をしました

福井縣　片山里

あんな大きな、なり（姿）をして、まだ肩揚を下ろさぬ氣がしれぬ、と或人が私の事を話して居るのを耳にしましたから、歸へると直に、母はまだ早い○○さんのは嫁さんでさへ下ろさずに居なさる、と申しましたけ

れども聞かずに、下ろしてしまひました。心の中では左樣、ませたといふかなしみでせう、さみしう泣きたいやうな氣がしました。それからと申しますものは、五日も六日も、誰に逢つても、すぐ肩のあたりを見られるやうな氣がして、恥かしくつて家から出られませんでしたが、今日は仕方のない用事がありまして、小芳さん許へまゐりましたら赤ちやんを抱いて居らつしやるのでせう、ですからよもやと思ひましたけれども、貴女の？と申しますとはい、貴女は？とお尋ですから、ホヽまだ一人ですのと申しますと、男さんですか女子さんですかと有仰いましたので、いゝえ、まだ嫁にまゐりませんの……こんなのつぽですから……と申しますと、其方がお樂ですわ、と心の中からお云ひのやうでした、けれども何だか恥かしうございました、それから又家へ歸つて肩揚げをしました。鏡を見ますともう二八位はあつてもよい顔ですけれどホヽ……。清江樣へ

何も子供が何人あると聞かれたからつて、一旦下した肩揚を又するにも及びますまい。それとも福井縣には、一つ凡そ處女たるものは肩揚をすべしといふ縣令でもあるわけですか。



二人づれ　新潟　村田けん子

○黑ん坊より

備中　紅薔薇

峰さん羨やましかなくて、座つてゝ海が見えますの。歸省して十日目の今日もう眞黑ですの、寮の窓から裏の池を見て「海つてあんなもの」なんて云つていらしつた誰れかに、こゝが見せて上げたくて堪らないの。私文が下手だから形容のどつさりした眞にいゝところを書いて上げたいんですけれど、駄目！考へてると筆でもポキポキ折つてしまひたくなるのですもの、もう止しませう。その代りいゝ話があるの、昨日ね弟を連れて貝を拾ひに行つてね、岩の上を歩いてたら、水のたまつた所に白い物がゐるでせう。行つて見ると、どうしたのか章魚坊主が泳いでるでせう。獲らうと思つてね、グッと握ると、ズルッとして氣味が惡るかつたから、投げやうとすると、まあ何んと思つてかくつついて離れない。「アレッ」金切聲したら弟が飛んで來て

「やあ見せ物」つて手をたゝくの。口惜しまぎれに一生懸命に引き離して、頭を抑へて海の中に投げてやつたの。氣味が惡るかつたわ。面白いでせう。月見草咲く吉井河畔に乳色した大空仰ぐ時なんて云つて寄越したつてビクともしませんよ。ア丶腹が立つて、腹が立つ程羨やましかつたら本望よ、そして出ていらつしたら、この上もない事。母樣にしつかりおねだり遊ばせ。

まア此邊が罪がなくてよからう、所謂形容のどつさりしたのに中てられるより『筆でもポキポキ折つて了ひたくなる』方がいくら眞情があつて嬉しいか知れない。

○兄樣へ

秋田縣　小高幸子

御なつかしき兄樣、今どうしていらしやるの。御勉强、それともどこかわるくはなくつて、あんまり御便りがないもんですから私心配してゝよ。でも御手紙を上げても御返事なしです者、ずゐ分ひどいのね、都にゆくと人がわるくなるの、夫だとこまるわ、後生だからわるくならないで下さいね。あのね、兄樣、兄樣が家にゐた頃は邪魔をしたりいろんな事をしては、兄樣に泣せられていたんだわね、だもんだから私、兄樣が早く都にいつてくれゝば好いにとオホヽヽ御免遊せ、でもほんとうにさう思つてたの、處が大違ひよ、兄樣がいなくなつてからは、それは〳〵淋しい事お話にならないわ、夫れにね、日數立つにつれて兄樣のとこ戀しくなつてきてたまらないの、だから私兄樣がこんどの休みに、きてもおとなしくしてはめられる樣にするわ、其かはり修學旅行なんて外にゆかないで家にばかりゐて頂戴ね、お願よ、私あんまりなつかしいもんですから、つひ下らない事ばかり書いてすみませんでした。此單衣兄樣のだと思ふて、腕によりをかけてこさへたのですから、お氣にあはない處は勘忍して着て下さいね、さようなら。

兄樣へと云ふ手紙文は隨分來るが、どれを見ても怪しい兄樣で閉口だ、併しこの兄樣は確な兄樣らしい。强烈な近代的の色彩はないが兒に角兄妹中のいゝのは結構だ。

○日曜の朝同鄕の友に

小石川　阿部露子

今日は日曜です、朝起きたのは丁度七時でした、朝顔は朝露を浴びて、つや〳〵と咲いてゐます、あゝ何て美はしい、罪のない花でせう、けれどわたしの現在の心境としては眞の美はしさを知ることが出來ないのです、ぼんやりと机に向つていろ〳〵のことを考へて見ました、華かな都、美〳〵しいお友だちのゐる都、電車の走つてゐる都、國にゐた時分の思出は夢のやうに浮んで來るのです。

思はずやつれ衰へた、この腕をさすつて見ました。

刺戟の烈しい都會、誰も彼も皆物質にあこがれてゐる、吾々が國にゐて想像したやうな美はしい都會は、つひに見られないのでせうか、烈しい生存に疲れたわたしの瞳には、絶えず國に殘した、母親の顏が映つてゐるのです、靜江樣、わたしはこんな淋しい女でしたらうか、今は日曜でも皆樣のやうに樂しくは遊べません、こんな時二人で○○寺をさまよふて見たいのです、ぜひお出で下さい。

もう一息感情が出て居ないが兒に角心持は分る。併し物質に憧れなければ人生只死あるのみだ。東京の町にはいつでも花電車が走つて居ると思つてると當が違ふ。

○子猫の生れしとて

相模　千能子

玉、一昨日愛らしき子猫二疋生み候、一つは三毛一つは黑斑、お約束によりいづれをなりとおえらみ遊ばされたく候、名付役は是非貴女に……とのお望みなりし故、一寸昨夜家族打ち寄り、相談せしを公然の名付式披露以前ながらお洩しいたすべく候。

漱石氏好きの弟は、晴れやかに先登第一に、夏目さんが好いと申し候、往來に面せしあの洋風の貴女樣のお室よりお優しきお聲もて、花壇の花にたはむれかかる愛猫を、「夏目さん〳〵來い〳〵」とはどんなもの――「詩的だ」、と兄はランプ見つめて笑ひ候。

「尾が長いから姓は長尾――かハヽヽ名はたま子、三毛子――長尾玉子孃・これが好い、素的に好い、此れにすべしだ、淸さんにさう云つて呉れ給へ、僕が名付親になつて長尾玉子姫とつけたからつてね、アハヽヽハ」軍人の高聲なのは普通ながら、此れは又一層のどら聲、例の山田さんにて候。

いつぞやの新聞にて小石川の新渡戶先生のお宅に、おらせられ候某樣の若樣の御愛犬に、アダム、イブ、と呼ぶ二疋有之しよし、中々振るつてる」、と弟の驚歎せしこと有之候、西洋種の多く入り込み居る故か、當時は、エス、メリーなど多く見受け候。

お手許にお愛育願ふには、まだ暫く時日も有之候まゝ其の內、第二の相談會相開き、好く〳〵熟議の上無病長命、紫檀のお机、さては文庫など荒しまはる惡つくきおねずの番を、よくいたすやう、頁き名祝はんと、まづは……

今頃「夏目さん」や「長尾玉子」など云ふゴロツた名前を附けられる樣では、猫が可哀想だ。もつといゝ名を考へてやつて下さい。

○歸鄕して七日目に

福井 北利子

貞子樣私の初めて歸鄕した日は、何とも言へぬ嬉しさ。妹の靜さんは村口まででておてくれたし、母は私のすきなお團子をこしらへる爲め、赤いたすきがけにてあつちこつちとてん〳〵舞ですし、父は後庭にてかちかちと何してと思つたら、いまにも身體がをれぬまでの竿で、私の第二の好物の桃を長い竿にて落していらつしやる。皆私の樣な不束者が一人歸つたばかりに、家內中が大さわぎ。皆の心を察した私は唯うれしくて〳〵、貞子さん泣きたい程でした。久々にて家內の顏を見て安心したのと何となくきらく〳〵とで、苦界から樂界に入つた樣に一息つぎました。何萬里いつたつて三千世界には故鄕程よい所は又とありません。貞子樣お喜びなさい、決して旅は好む物ではありません。私一生外へ行かずに永久に父母の許にておまえておたいです。毎日お客取扱ひされてすきなものを食べさせて下さる親を後に見て行く事はできません。ですから此度はおひきだされるまでは家におます、だされた其節はお知らせしますから、それまではお文を此の地に下さいね。

歸鄕して七日目とあるから嘘でもあるまいが、頓てこれが八日目、九日目になると、田舍は刺戟がないから厭だとか、華やかな都會の印象が忘られないとか云ふ樣になるのだから驚く、おヒマはどつちから出るのだか後證の爲聞いて置きたい。

○里の姉樣へ

丹波 須美子

姉樣其後は誠に、御無沙汰致しまして申譯も御座いません、義兄樣も頁ちやんもお達者ですか、此頃よほど朝晩は涼しくなりましたね、暑いつもりで夜分など、油斷しておるとよく風邪をひきますわ、姉樣私はね、此頃店へ出ておますの、大分馴れました、けれど未だ未だ、駄目よ、よつぽど調子よく、お客樣にお愛想を申したつもりでも、後で、主人や長吉(小僧)に笑はれますわ、友禪類を切るのに一番困りますのジヤキ〳〵と、どうしても、うまく、切れないんですもの、六つかしいものですわ、昨日は丁度仕入荷が着きましたので主人と長吉と、三人で符牒を付けてましたら、彼も、是も好きな柄ばかりで、吳服屋のお內儀さんがお客樣になつたつもりで、彼方を見たり此方を見たりして、うつとりしておてしかられましたのよ。

先達、里歸りの時頁ちやんが、坊と同じ名の、叔父さん叔父さんつて、よろこんだのが、あんまり可愛いかつたので、頁ちやんに、似合ひそうな絣飛白でも送つてやらうよと、頁雄が申しましたから、粗末な品ですけれど送りますわ、また〳〵十月の氏神祭りには是非歸して貰ひますから、其の時ゆつくりお話しませうね、義兄樣やお隣のお伯母樣にもよろしく。

初々しいお內儀樣ぶりが見える。

○日中の街家より

橫濱 千鶴子

幸子樣何てお暑いでせう？夏の街！とても綠陰淸涼なる地に御成長遊ば

したあなたには御想像もできないでせう。午後の强烈な日光は建てこんで透間も無い家並を包みます。植木鉢の土は赤くかさ〳〵になつて縱橫に破われ、花や葉はぐつたりと萎ほれます。前の瓦屋根は黑く、てか〳〵と光つて異人墓の大理石の或分子が赫と照つた光線に反射してきらきらとまぶしいやうです。道の代官坂も往來が絕えて、今迄馳せ違つて居た人々の雜沓の混亂した車輪の響もありません。只時々土人の樣な猛惡な顏した男に無理に引張られて、口から泡を出して腹に波うたして上つてゆく可憐な馬を見るばかりです。一體に寢入つたやうにそよとの風も吹きません。蒸暑い空氣は容赦なくせめつけて、汗はだら〳〵出て身體がぐつたりしてしまひます。そして湯屋の烟筒から立登る煙が眞直に黑くもや〳〵と青い空に登つてゐます。今しがた錠劑屋が來ました。彼の獨特の音をさして、人通りの少數い晝の街を氣忙しく重い空氣を劇振さして晝寢の夢を破つてゆきます。まあ此汗……然しこれでも日沒後になると鹽分を含むだ大陸的の微風が吹いて來て、今迄の暑氣が一掃されて了ふと、荒い浴衣に赤い帶、美しく化粧した夏の美人が見られます。それは〳〵詩的ですよ。まづは之れで。

　暑苦しい夏の情景は現れて居るが、少々しつこい。

○新夫人に

茨城縣　田村はつ子

奥さまお目出度、大變お姑さまがお氣に入りだつて、評判よ、私迄うれしくつてよ。御樣子もすつかり奥樣風におなりで、お品の良い事。私五日でしたか、笠間に用事あつてね花子樣のお內伺つたのよ、そして二階で涼んで居ると、向ふから、素的な令夫人が見えますのよ、どなたかしらと思つて近づくまゝに見ると、貴女樣。まあ丸髷の好くお似合ですこと。うつむいて、しなやかにお步み遊ばすスタイルは、ジャスト、文學士のアダムよ。花子樣の兄いさんたら、しみ〴〵見とれて居りましたが、あんな妻君もつた方は、幸福だつて、ほんとうにさうだわ。いろ〳〵おうはさして、おすがた拜見致して居りましたの。御存じなかつたでせう。ねい、君子さま、あら！奥さま、私、一度伺ひたい事があるのよ、ですから、明日午後から伺つてもよくつて?、長居はなるべくしないことよ、お邪魔すると旦那樣に惡いから、ホヽヽ、お返事すぐに頂戴な、使はお目もじの上、Hの君によろしく。

　そんなに冷かすものぢやありませんよ、今に貴女も丸髷がよく似合ふ樣になるのですものね、……それとも最早貴女も奥樣ですか、長居をすると何方の旦那樣に惡いのだか知れたものぢやない。

○エンゲージなる君に

群馬縣　高橋ふみ

夏蟲の聲喧しましき折柄兄樣にはいつも御健勝の段何よりの事と存じます。昨日の御手紙によれば、學校の御都合にて御歸宅遊ばさないとの事、私ほんとうに失望してしまひましたわ。御部屋の窓の月見草も人まち顏に咲きほこつてますの、御兄樣　御賞詞のないのを恨みながら此の夏は終るのでございませう。もう東京は非常にお熱いでせうね、此當地でさへも熱くつてあつくつて勉强なんか少しもできませんの。今朝涼しい內御兄樣のお袴縫つて居りましたら、あなた御存じでせう、あの萩香樣、あの方がいらしつてね、さんざんに私をおひやかしなすつたの、もうあなたすぐ新ホームをお作りなさるのですもの、あまり我まゝにしてはいけなくつてよ、早く初結の丸髷姿が拜見致したいなんて、それはそれはひどい目にあはされましたのよ。お父樣もね少しお酒の度をお過しなされると度々こんな事をおつしやるの、私は正雄君が法學博士にならない內は、どうしても死なない、お前の未來は博士夫人だなんて、一人でよろこんでいらつしやるの。どうぞ一心に御勉强なすつて、錦をかざつてお歸りの程を、お待ち申して居ります。時節柄御身お太切に遊ばしませ。

　かいなでの甘つたるい情緒を書いたものだ。甘い歡樂も結構だが、田舍砂糖の惡甘いのには閉口する。

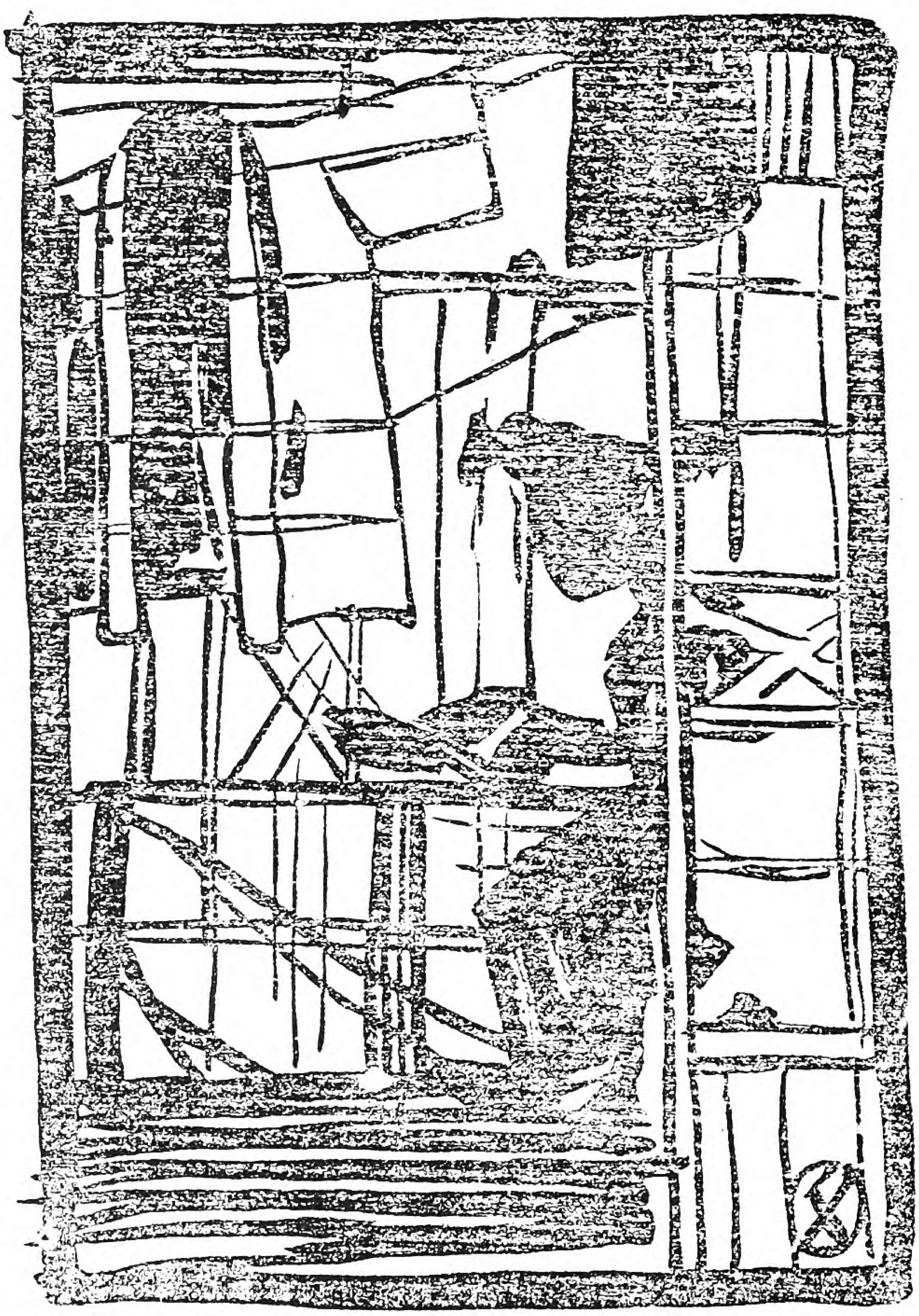
○東京の兄樣へ

岡山市　光緣子

今日はしとくと雨が降つて居ます。其忙しい窓によつて兄様を思ふて居ます。こんな日には兄様は東京にどうして居らつしやるでせうと、私の心は限りなう兄様の身を逐うて居ます。

私は兄様へ手紙を書かうと思つて、窓をしめやうとしますと黄ばんだ稲の間を郵便配達の黒い影が此方へ走つて來るのが見えます。「手紙!」と叫んで、きつと兄様からだ、きつとさうだと二階を下りました。雨にぬれた脚夫の外套の下から出したのをちらつと見ると私の胸は美しうさわぎました。だつて待つて待ち佗びて居た兄様のですものね……。どう封を切つた事でせう兄さま!幾度も繰りかへして讀む私の、手紙持つ手はふるへました。喜びに!限りなへ喜びに!

どうぞ勉強遊ばして下さいませ。成功を喜ぶ少女が中國に居る事をお忘れ下さいますな。どうぞ身體を大切になすつて下さいませ。きつとですよ。お忘れなすたら、私は私は恨み申します。では兄様、さやうなら、兄さまさやうなら。



機織る人　麻布　中西遂子

次の歌を差上ます。

君見ぬを欲りする時に淺間しき魔共來りて心のろひぬ

この兄様は稍怪しい方に属する「きつとですよ、お忘れなすつたら私は、私はお恨み申します」には浪さんも三舎を避けさうだ、や、氣壓が低い、低い。

○寫生に添へて

大分　齋木ます子

浪様其後は如何、私ね昨日故郷の川邊を寫生しましたの、實に可笑しいのですけれど御送します。でも之を御覽遊ばして何が書いてあるんだかなんて仰つては嫌よ、之でも私一生懸命に書いたんですもの。夕方の七時頃よ、太陽が丁度西の山に沈んで名殘の雲が紅く匂ふて川には小波が立つて居る所ですわ。そら寄宿舎の運動場の隅でよく二人で好きだつて云つたあんな雲よ、でもそう見えて。向ふの涯に靑く茂つた雜草を其儘水に映つた所に白い着物きた人が居るでせう。父よあれは。今頃はね少さいあゆが揷れますの、それやお甘い事よ、それからずつと左の方の野原ね、そこにはいつも可愛い撫子や、萩が咲いてますの、そして月のよい夜にはもう鈴蟲が鳴きますよ。夕方には私きつとこゝに來ますの。



短文　編輯局選

○眞晝の恐れ（地賞）

尾張　佐分華影

八月の太陽はくわつと照りつけ乾ききつた土は浮いて見えるやうだ。馬に日よけをした大きい荷馬車が三四臺つゞいてゆくと地がふかく〳〵と震動する足元危き氣がしてとゞろく地に手をつけて見たおゝ此の下には瓦斯の鐵管が埋つてあるのだ、と思ひつゝ私は家へ入つて町ゆく人を數へた。乾いた土の上には輕い塵埃が立つた。

評　感じはよく出されてゐるが新らしくはない

○白露（人賞）

横濱　小田切錦子

病室の窓を開ると、何時も、小笹山に、白雲が棚引いてゐる。熱病のお花さんは、見る度に、母樣あの山に雪が積つて居るのね、私一塊食べたいわと、せがんだのは昨日まで。今朝の明方お花さんは、戸板で小笹谷から擔がれて歸つた。

評　靈山の雲細雨となつて到る。

【秀逸】

○あかるい日

平塚白百合

姉樣と並んで白い着物を縫つてゐるあかるい透き通るやうな光線が一ぱいさし込んで、合歡の花が銀の針を並べたやうに耀いてゐる。風がくるとゆれる。光る。小鳥の胸毛のやうにばら〳〵する。庇と植込との間から見える白紙程の空に蜘蛛が一疋あみをはつてる。見てゐると、ズン〳〵空へのぼつてゆくやうだ。

評　白日の神秘此間忽焉として萬物皆奇異

○大水

信濃　優梨子

「ヤマクヅレテカヘレヌ」と、出京した父が高崎で電報を打つてから、もう四日になる。雨は未だやまない。縣下大水害の慘狀、と大きく書いた新聞の字が著しく目につく。

郵便物は一切來ない。此原稿も屹度〆切りまでには行かないだらう。まア此降り様は……。花壇のダリヤが皆倒れた。鐘鑄川の泥水が凄まじい音を立てゝ流れて居る。

評　可憐なる乙女よ御身は唯それにて十分なり。倒れしダリヤを傷め。

○桑つみ　前橋　みどり

態々、くけて來た、赤い友禪の、襷をかけて、新しい手拭を、姉様被りに、幾度も、しかへした、さあこれでいゝ、大きな籠を脊負つた、里の後へついて、畑へ行く。

太陽は、未だ、昇らない、淡いもやの中に、遠く赤城の山々が、夢の様に浮き出して、緩い、桑摘歌が、身にしみて、懐しい。

評　景情兼備、好小品

○雨のみちにて　仙臺　夕がほ

雨は又加つた歩み勞れて波の呼吸をして馬は立つた十三の馬子は自分の頭から手拭取つて拭いてやる何か荷を脫して自分で負ふ馬は嘶くと「おおもう二里だで歩てくれよお母アに叱られるだに」と云つて空をみた馬は頭をたれて靜かに歩み出した

評　讀み去て愴然

○夏の月　小石川　渡邊けふ子

清く冴えた夏の月が、ふわり〳〵と浮てゐた黑い雲の中にかくれたおゝ月―夏の月――あゝして私のやうに泣くのではあるまいか――黑い雲、あの黑い雲は、月のハンカチーフではあるまいか。

評　月はその泣くもの、爲めに泣く、半帕なしにあらはに泣く

○午後　岩手　みどり

午後三時半。日は赫々と西縁の障子に照つて庭の梅の青葉の影を寫して居る。風吹く毎にゆらゆら靑葉の影が、大きな緋に見える。ジツと見て居ると、靜に、孤兒院の樂隊の奏する、樂の音が聞える、靜に、いかにも勞れたやうな音だ、私は孤兒の身の上を一人一人想像して見た。

評　たづきなき思ひ、やるせなき感！

○私の影　筑後　柴田百枝

水色の空に美はしい星は輝いて無限の神秘をささやく頃、いと幽に淡く淡く、今にも消え入りさうな風情に、暗へ暗へと咲いてゆく烏瓜の花、嗚、その夢のやうな姿―その姿、私の影ぢやあるまいか？

評　暗へ暗へと咲いてゆく、心傷ましき哉

○錢湯　小樽　組子

二時頃の錢湯は靜かに何處を見てものんびりと明かるかつた。動搖を與へるのは惜しいけれどもする〳〵沈んだ。湯加減は熱い、が胸の血も温たまらう。陽炎の様な湯氣が次々と立ち昇た窓を見てると白い雲が捨てゝ行くぞ捨てゝ行くぞと叫ぶ様に走つて行く。柳の絲が二三本右の端から見えがくれしてゐる。

評　盤臺の姿さんは居睡りの體

○ほうづき　周防　屋根のくさ

早く起きてほうづきを見ると昨日よりか必と目立つて赤い、主として夜のまに熟れる事は疑ひないらしい、是がそも〳〵神秘的で嬉しい、次は婉逸に、かくれて眞先もいで朝の靜かな庭で殻をさく事あゝ其時の音よ、香よ、何がなし愉快な、口へ入れてならすよりも赤い玉をもんで居る方が何だか樂しみな。

評　纖細なる觀察

○合歡の花　三ケ島葭子

もうお湯でさんざ濯いだのだけれども頭を冷したさに井戸端へ行つて盥の水へ濡毛を放たうとするゝ高みから合歡の花が一房浮んだ。お隣の軒のざくりの枠には、白い絲が厚くからまつた

まゝ。いつか髪など夜でなければ洗へないといつたお清さんはお晝食にたつたらしい。お清さんは去年死くなつた先生の娘だけれども。

評　この「けれども」は十分に利かず

○微笑　石川　むらさき女

涼しい日だつた。ふと食物を運ぶ蟻の道を生垣の下に見つけた。つくばつてぞろ〳〵並んで行くのをじつと見てゐた私は一寸木片で道を斷つて見た。蟻は吃驚して動かぬ――罪な事をと思つて木片を取ると又ぞろぞろ歩いてゆく私はニツと笑つた。

評　エライ事をしてやつたと思つて

○緣日　神田　久保とし子

薄く曇つた夜であつた。散歩の歸りがけにフト三崎神社の緣日を行き過ぎた。讀賣りの書生が例の浪さんの歌を、どなつて居る。植木屋のカンテラから黒い黒い惡魔の吐く血の其れの樣な油炎が上つて、何となく心持が惡い。行き交ふ若い男女の瞳が何物かを得やうとして居る。

評　そして氷店に入つた。

○こゝろ　草　雲雀

人の嘲く戀を捨てゝ孤獨に終るは、餘りに愚だとは思ふ。けれども招くがまゝに從ふは弱い女性の心を顯す樣で私はいやだ總ての人の後姿を見送つて一人孤燈の下に沈默を守つた時に過去の執着に泣く自分の心を描た時は、人の知らぬ、冷たき笑の頰に上つた。

評　斯の如きは七分の弱點を匿さんが爲めに十分の弱點を露はしたるもの、併る勿れ〳〵



傾國　茨城　小堀とし子

○嵐の夜　さくら

さしも烈しかつた雨も風も一晝夜の戰鬪につかれてか一息ついた、其間に私は川へ水を見に行つた、惡魔の翼に蔽れた樣な空は獰猛な樣を示して居る、何時狂ひ出すか知れない。危險な場所〳〵へ篝火をたいて集つてる人々の顏は炎に映えて惡鬼の樣だ、渦巻立つた濁流は紅蓮の炎を含んで沿々と岸を嚙み岩に狂ふて私の足の下を飛んで行く、壯快――、私は同じ死ぬなら恁麼所で死んで見たいと思つた。

評　壯快、但し衒氣はとらず

○豆煎り　鳥取　櫻草

今日は、お母さんがお留守だから、妹らのお八つに豆煎りを初めた。パチ〳〵とはぢけては顏に飛ぶ。一そ口に入れと、大きな口をあけて居て煎てると「御免下さいまし」婦人會の幹事のお方だ。お臺所では、豆がポン〳〵はぢけて居る。豆の焦げるくらゐは構はないが、お鍋がはぢれねばいゝがと氣が氣でない。

評　それはお氣の毒さまな御笑止な

○睡い日　德山町　兼重よし

蒸し暑い睡むさうな日だ、横になつて本を見て居ると、蠅が飛んで來て手の端へ止る、追ふとぶうんと飛んで二三遍回りながら今度は本の上に止つた、蒼蠅と思つたが懶いので、追はずに居ると、暫く手をもんで居たが、遂々向の方へ飛んで行つた

私はじつと其の後を見つめた。蠅は次第に目の中に幽れて行く。

評　四國へ九州へ臺灣へ——早き蠅の行方よ

○ちゝ　伊豫　邸獨

私はちゝと云ふ名が大好です。オアーと生れて三歳迄母の乳を呑んで育ちましたが母が死んでからは何事も父樣、父樣とお慕ひして居ました昨年女學校へ入學してはじめて天の父樣を賴む樣になりました嗚呼ちゝ如何になつかしい名なんでしよう。

評　アバ父よ、仁慈はこれに盡く

○あはれな菊　安藝　まつ枝

背戸の井戸端踏石の間に、毎日水を浴せられては踏れ〳〵て、根元の葉すつかり落ちた一本の菊、やつれたがまゝ日一日と育つて今は邪魔になるので、引拔いて捨てやうと思つた晨可愛い其は〳〵優しい綺麗な花が二輪咲きました、オオ忍耐な菊よ其日からふまぬ樣に水を汲みました。

評　努力の勝利、而もその榮や幾日、愴然黯然

○蠶　白露

乾いた手拭で顏の雫を拭き〳〵二つの繭の住居を訪ねると、まあ、喫驚、箱に大きい穴があいて繭は藻拔けの空、一つの方は行へ不明。憎らしい鼠の牙にたふれた可憐の蟲、這麽運命と知つてゐたら好奇心に育てもすまいに、一本の小さい桑の木も丸坊主にせずともすんだものを……。空家の箱は取り亂れて形見の蠶が悲慘の當時を忍ばせる誰に對して詫び樣もない。

評　卅年の徒勞に比すれば物の類ひもない

○油蟲　朝鮮　露萩

不機嫌な夫の上を思ひ倦んで居る夕、膝の上にパッタリ油蟲が飛んで來た、徐々這上るので激しく搖するとコロリ死んだ眞似をするいまいましく庭に投げつける、薄暗の中にピシャゲた樣な音敷石に當つたのだわ、少し胸がはれた。

評　それは金ブン〳〵だと思ふが、朝鮮では油蟲と云ふんですか。

○川面　名古屋　胡てふ

欄干にもたれて波にくだける月をジッと見入つた「戀にこがれて——泣く蟬よりも——、泣かぬ螢が——」しめやかな櫓の音に船唄が聞える何んていゝ聲だらう、——泣く蟬よりも——、透きとほる樣だ、何もこんなに苦勞する事はない、いつそお船頭のお嫁にもらはれて、あゝして暮したらどんなに氣樂だらうと、いつそ羨やましい。

評　太佳

○野の平和　信濃　つゆ

野は金色に照り映えた。遠村から暮の鐘が響いて來ると今迄讃書に餘念無かつた牧童は思ひ付いた樣に立ち上つて頰を脹らめて歸りの笛を吹く〳〵、と彼方の草蔭からも此方の水際からもムクリ〳〵と白い羊が起き上つて暫くの間に此の小い監督者を取りまいた。あゝ明るい油繪——

評　かう云ふ理想境も一通りは來る

○友の墓前　淡路　菊子

月見草が幾つも咲いて居る奥都城に立入つて辛と捜し當た友の墓前に今携へて來た白百合の花を手向ると、幾多の乞食の子等が集つて來て花を欲さうにする、私は懷の銀貨を取出して與へると、年長らしいのが「錢を貰ふたから花取れんのやぜ」と諭すやうに云つて居た。

評　それが乞食の道德でせう

○昔の親友　深川　武田松風

絹團扇縮心に斜に持ちながら、私を見詰て居る小柳さんの顏が、宵暗に透いて凄い樣に白い。雨後の一浴、颯と一陣、稲蕊の灯パット見る間に消えて、四顧眞の暗、戀の露がバラ〳〵と葉蘭の上に……。いつしか黃金の盃は煌き上つたと墨縮ながらも、思ひ切て前髮の張たルレザ巻の私と、根下りの銀杏返しの小柳さんの阿娜姿とが、分明と畫き出された。

評　哀感夢の如し

○女心　福岡　中尾豐子

弟と二人で庭の草を取つて居た。ト弟は、垣根の蜜柑を拔かうとした。或る朝、フト見つけて目印にして置いた、竹垣の傾よりも、今はもう二分許り伸びた。それでも未だ朝顏の芽生より低い。けども〳〵、一度は大きくなるんだもの「拔かずにおいてお吳れ」と私はいつた。

評　前途遼遠

○冷い水　大阪市　渡瀨淳子

暑い〳〵血が蒸發しさうだ、思ひ切つて浴び樣、もしひよつと人が來たら何うしよう、然し私は恐しいより尚暑い。冷い〳〵骨髓までしみ込む樣だ、涙が拾えたら

どうしよう、心臟の鼓動が止むだらどうしよう。

評　いろ〳〵御心配ですな

○手　備中　紅薔薇

「手だけ見るとお姫樣のやうだね」と義兄樣が被仰ると側から姉樣が笑ひながら「手のきれいなのはあまり自慢が出來ませんよ横着者の證據だから」って。私は柔い華車な手をぢつと見つめて何んとも云へぬ氣がした。恥かしいやうな嬉しいやうな。

評　又一種の虚榮心？

○月　群馬縣　梨の花

暑くるしい夜、雨戸をしめては、とてもねられないので、明けたまゝ蚊帳の中には入った、そして竹の葉越しにさし入る月を眺めて、樣々の思ひにふけった。ふと目がさめた、何だか澁が冷つこいやうな氣がするあたりを見廻すと月影が見える、驚いてしめてそして時計を見たら、まあ四時、もう起きるまでに一時間きり、それでもやつぱり床の中へもぐつた。

評　夢ありしや否

○泡沫　上毛　小澤蝶子

雷雨の爲幅二間許りの川は、濁り水が充滿になつてる。橋の上に立つて上の方を見ると、泡沫が澤山流れて來る、フト大きな二ツの泡沫が目には入つた。と二ツは近寄つた。ト喰附いて、更に大きなのが出來た。私や橋が小さく映つて見える。かと思ふとパチンと消えてしまつた。私はそれを妙に思ひ乍ら橋を去つた。

評　いかにも奇妙だ

○指輪　岐阜　くずのは

氣さくなおそのさん、夜向の指輪だらうと突然私に向つて、えゝ夜向ぢやない黄昏向です私の指輪は、夜電燈やアーク燈に輝らされたら鍍化の皮が、灯のない蔭方に匿をどしにするんですから、あらそうお直段は？鉛の値段です、いや眞鍮の値でせう。

評　匿をどしは奇抜

○世渡り　森　子

隣りの織屋の尋常二年になる子、先生から特別注意を受たとやらで、毎日母親が本を讀ます、感心にけふで三日續いてる、とトンと行きつまつたきり、どうしても出ない、詮方なく父さんを呼んで親子三人額を鳩めて考へたがとう〳〵解らずしまひ。どんなむづかしい字か知らないが。アヽあれでも世は渡れるものでせうか。

評　エヽ〳〵文字なんか何するものぞでせう

○お寺の客殿　丹波　須美子

お上人樣のお經がすんでから、本堂の隣の間の客殿を、見せてもらひました。室は十二疊で一間の床には、日蓮上人の御眞筆の軸と御開山の御眞筆の軸とが、掛けてあります。お祖母樣は床の前で小聲で南無妙法蓮華經々々々々々々庭から吹き入る風に、床の軸物が靜かにゆれてゐる

評　日影に遠く、抹香くゆる。

○夕立　向島　きん子

日は青々として雲間からきら〳〵と射て居つたが急に眞黒な雲が四方に閉ぢたと思ふ間も無く紫電一閃から〳〵となりひゞいた篠衝く雨は庭の朝顔をはたき落した此時奥の間に居つた弟は餘りのおそろしさに桑原〳〵を忘れてまんざいらく〳〵と云ふたので皆々大笑をしたのである

評　萬歳に限る萬歳〳〵

○或る日　長澤　木村那賀子

私がお隣へ一寸行つたら兄さんがしきりに紙襖の中へもぐりこんで居る、少し立つて、脊の破れた所から頸を出して「ベソ」を造つて居る、私は何をするのかと思つて見て居たら押入の所から太鼓を持出して。其へ上つたら破て右足が中へ入つた時の顔附つたら、だから兄さんを父樣は怜悧者〳〵いつて居る。

評　而も一通りの怜悧ではない、感心〳〵

○負けをしみ　はりま　みどり

お向ひの伯母さんがお隣りのお靜さんは先日旭館で音樂會があつた時、出てお琴を彈かれた大變上手でしたよつておつしやつたので私は何故か厭な氣がした、左樣ですか私等今、寄宿舍に居りますからね琴なんか見るのも厭になりました。

評　嫉妬を感じたわけですか

○青蛙　山形縣　鈴木久子

今夜も、青蛙が瓦斯燈のガラスの外を『ノサ〳〵』這廻つてゐる。何をしてるのだらうと、ジツと見てゐると、何處から這入つたのか、中に小さな蟲二三疋『ブン〳〵』飛んでチョイと止

る。其度蛙がチョイと食はふとする、ガラスに妨られて食へない。さうする事幾度。此んな事をして青蛙が明朝まで居るのだらうか。

評　落葉の緑流るゝやう、時々はベルの音もする。

○朝　　筑前　笹つゆ

東の空にほんのりと紅さしたのを美しいと見ながら、近所の眠りをさまさぬ様に町ゝ掃いた。東の方から荷車が威勢よく來た。と見 間に、折角、矢形に、ほうき目をつけた眞中にうねうねを二つ通してしまつた

評　かうして今日も活動が始まるのだ。

○山茶花　　鳥取市　久米邊敏子

アラ敏さんは生氣がついた様ですよと聲高に聞えたのは懐しい去年米子に嫁らしたお叔母さんであつた。私は静かに目を開いて四邊を見た。私を取りまいて兩親はじめ親戚やお友達が物悲しさうにうつとりと、外には咲き衰へた山茶花の一ひら二ひら……。

評　すべて夢の如し

○昔の戀人　　野ばら

「茂子様！早いものね、丁度一年、あつさの折柄折角御自愛なすつて、いよ〳〵ます〳〵御發展あそばせさらば。」美人のはがきにこれ丈、絶えて久しき定様の御便りとしては餘りにあつけない、私は氣が付いて五厘の切手三枚貼つてある處を、一々はがして見たけれど。――白かつた。

評　切手を剥がして見るなどは大分通な方ですねえ！あなたは話せる

○植付　　肥前　桃花

揷手は赤、植手は白、縄張る人は紫、運び手は桃色、後始末する人は黄、五色の手拭が朝日に輝いて數十町の官山はまるで色の山、あの杉が成長くなつて戸や柱になるのはさて何時だらうか。

評　なか〳〵風流をやるお役所だ

○お徳さん　　札幌　女郎花

誰でも容るゝさはるとお徳さんはスタイルはよいけれどあのお顔じやあねと口ぐせの様に言つて居るいつか小雨の降る夕方蛇の目の傘を一寸かしげてお湯がへりのお徳さんを二階から見てると後から北中生が二人お徳さんを指さして何か囁きながらくる私は振り向かなければよいがと一人で氣をもんだ。

評　つまらぬ事に氣をもむだもんだ

○小母さん　　栃木縣　松葉子

隣の小母様は大層玉を可愛がつて御飯も一所に食べますそれは未だしも手拭をかぶせてカッポレを教へます私は見兼ねて猫は化ますつて云つたら神經質の小母様玉に限ては化ませんとむきになつて怒つた、玉と晝寢して居る小母様の目つきのこわい事

評　「玉に限つて」は恐縮、これでは却つてをばさんの方が化けさうだ

○空想　　名古屋　花子

終日裁縫をしながら色々と考へて居る、如何しても上京がしたい、鈴子さんも、藤子さんも、行かれた花の都へ……あゝ私しも行きたくつてたまらない東京！花の都！如何な處かしら！あゝ一度行きたい、屹度い、處に違ひない、駄目とは知りつゝ、母様にお伺ひしたらだまつて彼居た、兄様たら「汝が上京したら倚はお轉婆になるよ危険ね」と厭な兄様！

評　お轉婆は可なり、東京は決して花の都ではない。

○月影　　失名

月は益々光を増したが私の影は未だ〳〵淋しい私より外にまだ此の月を眺めて色々に憂き事思出涙に袖をぬらして居る人も數知れまい月の光は幾年へだつても變りはないが人の姿はどかはりやすい物はあるまい。あゝ故郷の母上も共に此の月を眺めて居らるゝだらう――思は千々に増して、我知らず異様の涙が頬を傳ふた……

評　しかしその涙は矢張り鹽からいんでせう

○戀　　京城　中尾艶子

私はふとかう思つた女性の戀が春の日なら男性の戀は夏の日のやうだらうと……私は思つた春の日より幾倍か強い強いよろづの物をもやき盡す様な夏の日……イ、エ男性の戀……ではあるが夏行けば冷たい秋が來る春の次には熱した夏がある……

評　文明の世の中は戀までが理窟づめになつて來る



俳句

内藤鳴雪選

○(天賞)
蟲聞(むしき)くや弦(と)に末法燈明記(まつぱふとうみやうき)　越後　藤原鍋女

○(地賞)
夕涼(ゆふすゞ)み一人(ひとり)はほしき妹(いもと)かな　遠江　野菊子

○(人賞)
ちらばらに燕去(つばめさ)るなり秋(あき)の雨(あめ)　三田尻　白菊女

庭の柿くもの巣ながら實りけり　大阪　改野たけ子
尼寺の庭に咲くなる桔梗かな　備中　篠原繁子
夏柳岸に捨てたるボートかな　京都市　三宅壽賀子
朝寒の犬狂ひけり破れ扇　濵松　平岩うた子
朝顔の萎む姿や我に似て　京都　をみなへし
秋の夜や鹿の音ほそき五戸の村　奈良縣　田村みどり
沢の鴫に時雨てふ名や冬隣　山城　木の花
歎く人此處にもありて秋の暮　越後　金塚美代子
蚊帳の中月見て語る二人かな　大和　静子
うたゝ寝に高師が濵の夢路かな　京都市　要司村福子

夕立や羽破れたる黒き蝶　播磨　笹舟
風ある、夜や松原を灯のいそぐ　岐阜　萬の葉
思出の中に戀あり秋の月　和泉　金田夏蝶
山元や古寺こぼつ暮の秋　奈良縣　中富よしみ
夢さめて蟲の鳴く野をさまよひぬ　福井　北利子
湯あがりの浴衣かるげに町女　福岡　建部良久子
目を病みて藥師詣や秋の晴　兵庫　紅雀
一句して忘れ扇を戻しけり　日本橋　松岡千代子
夕立や田い草取りの尻の上　牛込　木村すゞ
さゝかにの絲にかゝりて秋の蝶　四谷　桝崎佐喜子
やり水の細き流れに夏の月　大阪市　植村艶子
行く雁や鳥羽に灯ともす家一つ　阿波　二葉子
初秋に鼓の名手逝きにけり　港の女
君戀へばみやまの奥に鹿の鳴く　群馬縣　美登利
蝸や教會堂の鐘も鳴る　赤坂　小杉みつ子
瓜番は女なりけり頰被り　麻布　糟屋やり子
夏やせや島田のおもき物思ひ　北豊島　竹内美津子
水白く流れて萩の徑かな　府下　大野りよ子
ほとゝぎす鳴き居る森に雨かゝる　横須賀　猪狩ふぢ子
秋立ちて古井に細き蚊のうなり　三島　舟の子

砂利道の錆き草鞋や旅衣　大津市　たつ子
幌殘る大門吹くや初嵐　越後　藤原法子
故郷や井筒は朽ちて萩の花　橫濱市　佐藤光子
きぬ〴〵の袖をふくなり秋の風　豐後　菅原よし子
旅の宿黃菊白菊眺め侘　備中　小見山春子
凉しさに扇子持つ手を忘れけり　和泉　金田淸子
夏草に歌よむ人のたゝずめり　靑森縣　しげ子
短夜を水櫻に友と語りけり　伊勢　渡邊まさ子
凉しさや船を數ふる丘の人　越後　吐月子
一群の雁や入江の夕月夜　岡山縣　入江曉花子
秋晴れや高く聳ゆる鹿野山　上總　山崎きよ子
蟬鳴くや夕陽遠き塔の影　越後　吉田紫栗
夏雨や大杉搖るゝ赤城山　上毛　小澤蝶子
舞姫の衣皆白き月夜かな　美濃　河村文子
竹籔のそよぎに薰る夏の月　長野縣　玉川星子
河下る舟に日傘の紺の色　韓國　富迫稻子
短夜は水に明けり時鳥　下關市　高野久
山梔子や垣根に遊ぶ鷄の雛　兵庫　蓼の花
柴栗を庇に干すや秋日和　白蓮
夏の日や松葉牡丹もうなだれて　神戶市　上月玉子
蟲干や兜の星に稻光り　鳥取　櫻草
草笛を風が送りぬ凉み臺　靜岡　乾美津子
五月雨や一山の味噌かびすらん　三島　曉村
縣女に白粉ぬらん更衣　千葉縣　石井よし子
初たびに袂ぬらしぬ露の路　大阪市　野澤紫水
攻めあぐむ城におくりし牡丹哉　本鄕　總江かづ子
若竹や寺に宿借る灸點師　越後　八田敏子
物思ふ胸の響きや秋の鐘　駿河　井上すみれ子
白菊の半開にして朝の雨　伊豆　鈴木芳江
電や磯に閃くうつせ貝　三島　舟子
夏川や花火揚がらず小夜時雨　後志　平手溪子

卯の花や月毛の駒の通ひ路　小樽　淸田芳枝
橋の根や茶屋一軒の夏柳　德山町　秉重よし子
谷淸く水に聲ある若葉哉　廣島縣　谷川松枝
あぢさゐや小鳥の來啼く草の家　千葉縣　鶴岡あきえ
此のあたり古戰場とや蟬の聲　韓國　五月雨
夕立や鳩は佛の膝の上　松江　淸き花
白菊のいよ〳〵白き夜明かな　ずみれ
名月や窓にこぼるゝ竹の露　二月
肌寒うなるほど晴れて秋の月　しら浪
霜白き畑に麥蒔く男哉　上總　板倉豐子
水吹けば風吹きにけり釣葱　赤坂　橋本ひさ子
小使す千仞の谷や夕紅葉　嵐水
一群は詩人なりけり夕凉み　出雲　百合子
藻の花を分け行く舟や朝の月　小石川　渡邊京子
病む友と語るや蚊帳の中と外　諏訪　紫子
夕顏や京の小家の竹細工　丹後　山本なつ
寺に入れば罪滅すらし露の秋　泣黑子
松風や襟を正して夏書する　三島　常月
白鷺の頸出してゐる靑田かな　下關市　山田くに子
拜殿の奧の暗さや秋の雨　越後　梅人
秋暑や人掻き暮るゝ漆山　越後　虎女
落付かぬ心を人の踊りけり　越後　櫻杖
毛見の笠庄屋の笠や飛ぶ蜻蛉　越後　泣子
山僧に逢はで木の實を拾ひけり　越後　竹子
よき人の小さき扇に風薰る　越後　月子
白雨や巧に動く驢馬の耳　麴町　牧野はん子
別れ路の袖吹き亂す時雨かな　麴町　峽川
苔靑き陵に百合の薰るかな　麴町　銀杏庵
秋雨やもの彫りかけし眞木柱　東京　うめ子
葉は枯れて瓢簞ばかり下りけり　千葉　袖月
朝寒み女の顏の白さかな　大阪　やす女

燈火

（餘興）

○水上の火（天）

牛込　平塚白百合

水につかつた儘とう〳〵夜に入つた。土手の上は蚊帳をつるもの、目印に高張をともすもの。ドンヨリした水は八日の細い月を砕いて火の消えたやうな夜です。ギーッと高張提灯ともした救助船が食物をつんでねつてゆく。その度に餓ゑた人はウオーとこゑをあげてうばひ合ひを初める。遠く見える鐵橋ではドン〳〵かゞり火をたいて、赤い火の前に五六人立つ影畫のやうな黒い人。水にうつる火の色は物すごく四方をてらしてゐる。

○灯の華輪（地）

葛の葉

私が今迄に灯しては消した灯の華びらは、何程位あるでせう、二十何年の間、一番多いのは行燈の灯の華、中にはらふそくもあれば燐寸もある、眼を射る樣なランプもあれば、煙にむせ歸るたいまつもある。いづれも私の現在を輝らして呉れた灯ではあるが、消すとどこかへ行つてしまふから、不思議でもあり、悲しくもあり、けれども一度灯されて世に出た灯の華であるから、其魂はころ〳〵とうろついては居まいかと思ふ。

○蠟燭の火（人）

兵庫　紅雀

今夜も又父樣は蠟燭の灯で障子や襖に止つてる蚊を燒いて被居る、チラ〳〵する惡魔の舌の樣な灯――蚊はまたゝく間に五六十匹も燒かれる、まだ死きらない半殺の蚊は恨めし相に疊の上にコロ〳〵と落ちて居る。私は蠟燭の灯を見るといつも幼時を思ひ出す。夫は、私が四五歲の頃だつた、お月樣が欲しい〳〵といつて泣いた、と母樣は直ぐ紅提灯を灯して下つた、私は中の灯がチラ〳〵して一層提灯が赤くなるのを見るともう嬉しくて〳〵すぐ泣止んだ事があつた、其時初めて私の幼い胸に蠟燭の灯の美しい印象をあたへた。私には如うしてか瓦斯や電氣のパッとした華かな灯よりもチラ〳〵する蠟燭の淋しい灯の方が

好だつた。けれども蚊を燒く灯を見てから私の美しい印象は次第に消えて今では何だか不安に堪へない、噫之も蠟燭の灯、彼も蠟燭の灯。

【秀逸】

○幼時　枯葭

私の九歳の春今の母樣は初めて男の子をお生みなされました。勿論私の弟ですから學校へ通ふひまにお守をしました、夕方母樣のお忙がしいのに泣いてしかたがありませんとき「ほらぶうが」といつてランプを見せるとたまげたやうな顏をしてだまつしてまひましたのが何より嬉しうございました。それから少し成長してから宵によく添寢をしましたが弟の眠りつくにつれて脊中をたゝく手も動かず歌の聲もだん〳〵細く悲しくなつて、知らず知らず目がぼんやりとして涙さへたまつてきます、すると次の間のランプの光が撫子のやうになるかと思ふとすぐ炎の花位になり、忽ち二つに別れて花笠のやうになつて、重つて又もとの通りになつたことなど、幼時の暖い華やかな哀愁とでも申しませうか、忘れられません。

○朝鮮　龍山　露萩子

夕燒も跡なく消えて、蘇み返る樣な涼風が吹き初むる、午後八時になると、京城からの直行列車は、先登に爛々たるアーク燈輝やかして疾走して來る、前のシグナル燈がパッと靑くなつて、汽車は釜山驛内へ侵入した、同時刻内地の便りもたらして連絡船の入港、彼我の客を交換する停車場棧橋上の喧騷は例へ樣もない無數の電氣燈瓦斯燈は花やかに輝き餘光は靜かな波上にサッと綾を織つて居る。

○新舊　淡路　菊子

征露の戰眞最中の頃寄宿舍では經費の都合で、一箇月間行燈を用ひた事が有ました、それも角の小さなので壁や柱に引掛て有ましたから「席貸」などとらく書する方も有ました。螢雪の例は有ても十六燭の電燈、急に行燈に代つたので机の前に座つても、眼を病さうで勉强など出來ず、日沒後單獨で室を出る人は殆んど稀で御座いました、一箇月の後再び電燈の燈つた時は眩ゆい位――

○魔の火　章子

單調な生活に倦み疲れて、夕方ぼんやり庭に立つ時、蒼黑い稻田を遠くこえて、魔法の館の樣にたてる赤い電燈會社の中にともる燈火の中で、紫の光白く極度に燃えてゐる大き

な火をみる時、私は何故か淡い哀愁にうたれて涙を流すのである。鐵道線路に沿うて崩れ落る、黒いコークスの中にともる、血の様な紅い燈火、それよりも極度に燃ゆる紫の火が此頃の私には一番なつかしい。

○忘られぬ其の火影

伊勢　露木雅子

私の寄宿舍に居ました頃は、消燈合圖の拍子木の音、其貴いタイムを刻々にきざむ樣な音を聞くと、何だか若い生命が縮まる樣に口惜しくていつでも兩の袂を耳にあてゝ目を瞑りました。然れど時には反抗心が高まつてどうしても寢られぬ夜には、他の部屋の瓦斯が消えて、若い女同志のさゝやきが絕えた時分に、靜かに床を離れて、机上の蠟燭をそつとつけて、長方形の裝飾鏡に照り返させては其の前で禁制の書を愛誦したり、美しい哀れな文字をうつしたり、長い手紙を認めては思はず卷紙を濡らしました。

○かけ行燈

常陸　木村那賀子

私の家の裏は見渡す限り田畑です、十五六町ばかり先きの處に田中稻荷と云ふお稻荷樣がありますす。毎月十日の夜にかけ行燈がつきます。こんもりと繁つた杉の神木に古いくすぶつた如うな行燈の灯が薄ぼんやりとついて居る處を遠くから見ると何とも云へぬ氣味惡さです。まして冬の寒い闇の晩等に便所へ行きながら見ると、急に自分の身の周圍が堪らなく氣味惡く怖しくなつて身體がすくんで了ひます。何の燈火が恐いと云つたつて、かけ行燈の燈火より怖しいのはないと思ひます。

○危險

兵庫縣　司波ゆく

いつもの樣に夕飯をすまして涼臺へ出ようとして居ると、奧樣が灯を付けてくれといはれたから、例の通り七八つの洋燈をずつと臺所の上り口に並べて一つ〱燈を付けた、と一番終にどうしたはづみか袖が洋燈に觸れて庭へ落ちた。私は驚いて其洋燈をふき消さうとしたが灯はなかく〱消えない其の中四邊に廣がつて天井へも燃え付きさうになる、丁度其處へぢいやが畑から歸つて來て大變〱と大きな皺枯聲で言つたので皆々驚いてかけ付けて下すつた。下女の竹さんはいきなり杓に水を汲んでかけた、と灯は益々燃え出す、先生や奧樣がそんな事してはいけない早く灰を〱と仰有るので、私はすぐ〱臺所から大きな常には持てないやうな火鉢を平氣で持つて來て火の無かつたのを幸パサッと被せた火は漸う消えかけたのでほつと安心したが動悸は未だ治らない、竹さんを見ると柱にもたれてオイ〱泣いて居る。私は初めて灯の大切な事を知つた。

○ぼんやり

熊本　波の花

まあ此暗いのに、といつも母樣があかりを持つてきて下さいます、けれども私はいやです、でなるべく細くして遠い所に置きますの、月でもおぼろがすきです、どんな仕事する時でも顏を照すのはいや、で困るのは夜の訪問、遂に相手の御顏を見ないで歸る位ですのよ、だからやっぱり古風な絹あんどんかぎふ提灯をなるべくぼんやりともしたのがすきです。

○忘られぬ燈火

牛込　すゞ子

黒い古机の隅に太い長い蠟燭が灯つてゐる。ボーと黃ろく弱く鼠色の室内を照らしてゐる、焰を見詰めてゐると、室内のものゝ輪廓が次第に明らかに見えてくる。焰がゆれると悲しげに洋書の金文字もビク〱と動き出す。恐ろしい何者か潛んでゐるやうに思はれて、いつも入れなかつたのは蠟燭の燈つてゐる兄の書齋でした。

○活動寫眞

葉子

學生割引券と半額のお金を出して、活動へ入ると、眞暗い中に多數の頭がうよ〱してゝ正面には鏡臺に向つた洗髮の美しい女が大きく寫つてゝ三越洗粉と大きく書てあつた。今のうちに南の棧敷へ、と案内の男に連れられ舞臺の寫眞の前を大急に通ると、パツと電氣燈が一時についた。はつと目がくらんで靜樣と小母樣を顧ると、ヤ妙々――君江君に房江君。なんて拍手されて……、生れてから此樣な恥かしい目に逢つた事は無い。あゝ惡らしい電氣……。

燈火五句

山頭火

燈火が動く、風は行つて了つた
火をつけて夜のコスモスを見た
燐寸の火、土に落ちた亡骸
紫の瓦斯の灯と、青葉の上の雫と
火の蔓がする〱と這つた



誌友倶楽部

交際を望む

○朝鮮より　誌友の姉君よ妾は本年五月より韓國馬山浦に淋しい日を送つて居りますが何卒御見捨てなく御交際を願ます尙ほ繪葉書寫眞栞等の交換を願ひます（韓國馬山浦京町二丁目第十七番戸、宇原貞子）

○記者樣及び皆樣に　記者さま、私は明治四十年五月に本誌上に御交際求めて九四ヶ年餘、學を卒へ故鄕を離れて當地へ參りまして、今なほ親しく御交り致して御姉さま二人御座ます、御一人は群馬縣の繁子さま、御一人は神戸の輝子さまで御座ますが、御二人共に實に御やさしくて、薄學女の私を實妹の如く愛して下さいます、一時的の方計り多い其の中に、此な賴母敷御姉さまを得ましたのは、全く本誌の御賜で御座ます、お互に深く〳〵感謝いたして居りますんです、此から後も一層文壇に親む樣誓ひました、私はいづくの國へまおりましても、女子文壇と婦人世界は拜讀致す決心で御座います、して四ヶ年間には隨分種々な事も御座ましたのでいつかは誌上にて諸姉上樣方の御笑ひ草に御目にかける心算です、又滿洲地方の名所も記者樣初め皆さまに御目にかけたいと思ます（淸國大連市浪速町三丁目三十七、森谷つたみ）

○古錢　古き穴ある錢お持ちの方は何卒お送り下され度寸志の御禮致すべく候（麴町區飯田町六ノ廿二、藤村眞）

○押し花にして　誌友の皆樣私は西のはてなる松浦河畔のかたほとりに淋しく月日を送つて居るものです　どうぞいつはりなき御交際を御願ひ申ます　そして皆樣今秋の七草の花眞盛りです　の御入用の方は御申こし遊ばしませ押し花にしてヱハガキスケツチの紙にきれいにはりつけて御送りいたしませう　和歌俳句など大好きですから駄句ですけれども押し花ハガキにかいて上げてもよろしうございますどうぞ御批評を（佐賀縣東松浦郡北波多村地藏木、松浦みどり）

○出京して　誌友の皆樣方よ私は妹と母國をはるはる上京した誠に不束なあはれな者です　いつまでも〳〵とはに御交はり下さいまし繪葉書御玉章御うつしゑの御交換をせつに御願申上ます　なほ本年度私立京都高等女學校縣立大津高等女學校卒業の皆樣よ　元私も皆樣と同じ學舍に居りました者何とぞ御まじはり下さい（東京京橋區木挽町一ノ十三池田方、百合子）

○皆樣にお願ひ　誌友の皆樣、妾は岡山の片田舍に淋しく日を送つて居るものです、今年學校が漸くすみまして內にばかり居るのです、どうか皆樣永久に御交際なさつて下さい、屹度喜んで交際を致しますよ（岡山縣上道郡三蟠村、小西文香）

○お優しい方に　皆々樣私はまことに不束なものですが只今大そう淋しうくらし居りますすどうぞ諸姉樣の中で御優しい思召しが御座いましたら御手紙いたゞきたう存じます下さいました御方さまにはすぐきつと御返事いたしますから（大阪市西區南堀江四丁目疋田方、翠葉）

○音樂好きの御方に　妾は大抵の和洋の音樂なまかぢりして居るのです　どうか御同意の御方があれば末永く御交りを御願ひ致します（大阪

市北野芝田丁一四八泉方、くつわ蟲）

○第四年から　私は第四年第二號からの愛讀者でありますから何卒此後は玉章の御交際をお願致します男子のお方はかたくおことわり申ます（丹後與謝郡世谷村字畑、隅垣信子）

○親戚の家にて　私は片田舍に住む誠に不束な一少女です而し本年六月よりの愛讀者です女子文壇の味と云ふ事がよく知れました。そして天下の諸姉樣に願ひます私は地方の女學校に三年ほど通學しまして只今は家に居る事も出來ないで親戚の家に手傳をしてゐます。あはれと思ふ方々は何卒御交りを願ひます（茨城縣下妻、宗道村、飯岡左門方、宮本しくえ）

○大阪の方　私は去年からの愛讀者ですがまだ一度も投書した事がありませぬので皆樣とは初めて御座いますがよろしく願ひます大阪の諸孃樣奮つて誌友會を起して下さい　くれぐれも御賴み申します（大阪萩の露）

○御なつかしい姉樣方へ　只でさへ淋しいこの秋に私はこんな淋しいく片田舍に友もなく只蟲の音の訪ればかりを聞きながらしよんぼりと暮して居ます　どうぞ誌友の諸姉さま方よ御交りを給はりたう御座います（滋賀縣神崎郡御園村、北川末子）

○男子斷る　妾九月號に交際を求めましたら送つて下すつた玉章や葉書が十五通有ります其中に男と思ふ物が八通あります　失禮かは知りませんが夫等の方には返書は送りません　又男の名で二人玉章を下さつた方が有りますが　妾は女子にて未だ男子と交際した事が有りませんからこれも返書は送りません　以前玉章なり繪葉書なり下さつて返書しない眞の女の方がおありなら最一度下名までお願ですよ　お詫びして改めて交際を願ひます　男子の方と一時的の御方にはお斷りしますよ（長野縣北安曇郡松川村一八四、榛葉保子）

○文學好き　なつかしき諸姉上よ、私は大の文學好なのでございます、そして廣く種々の本も讀んだのですけれど少しも上達しませんの、これからも出來るだけ修養して行かうと思ふのでございます　文才ある諸姉上よどうぞお交り下さい　妹として御導き下さいましな、一時的じやなく、ね（栃木縣安蘇郡佐野本町、湯本琴子）

○田舍から來て　妾は何にも知らない田舍から出て來た計りの者です、父も母もない〳〵姉さんもありません、どうぞ妹として可愛がつて下さい御玉章や繪葉書の御交換も御願致します（東京本所區横川町十九大野方、松島綾子）

○妹と思召して　私は八月まで妹雜誌少女の讀者でしたが此度本誌の愛讀者となりましたから何とぞ以後は妹として永久に御情ある御玉章頂戴な　御返事差上げる事よ只今仙臺高等女學校の二年よ　年やつと十八才になつたの……十二月生れのね、では皆樣どし〳〵御手紙をね、　毎日毎日ハーモニカと一所に待つてます（仙臺市二日町五十五番地石川方、西村郁子）

○初めて　私は熊本の市內に一人暮して何にも分りません不束な者ですが此度皆々樣がたの御中間に入らしてもらひたいのですが　どうか皆々樣よ御妹と思召しありて　繪葉書やりぼんの御交換を願ます（熊本市下通町三丁目四十二番地結方方、河野露子）

○轉居　わたくし事これまで通學致して居りますが都合にて下記の所にて寄宿致し居りますから何卒誌友の姉上樣相變ず御玉章おん交際を祈ります（大阪市南區天王寺石ヶ辻町五二九三竹田信太郎方にて、辻井信子）

○特に　左の方々へ特に御交際をお願申しあげます、御希望のお方は住所姓名を明記して寄越し下さい。大阪市、神戶市、及び外國就中、米國又は英國に住居する方、外國人にして日本語で交通のできる方、但し永遠に交際のできる方に限ります（大分縣速見郡東山香村小重見七二、與野峰子）

○越後より　愛讀者皆々樣私は越後のある海邊にて詩的生活をしてゐるものでございます悲觀的のお方でも樂觀的のお人でも其は問ひません一時的や利慾的の交際ではなく末長く親密にお交を致したいと思ひますから御同感の姉樣は何卒下名へお手紙を下さいまし（越後柏崎在下宿、村山嘉左衛門方、淸香）

○音樂師　私は音樂師ですが東京市內の皆々樣に一時的でなく永久に御交際を願ひますよ（牛込區市ヶ谷加賀町二丁目二十四番地、奧洋樂）

○朝顏の種子　誌友の皆樣朝顏の種子御入用でしたら女子文壇の如き好き雜誌か、繪はがき（五枚以上）を御送り下されば本年產の朝顏種子

を送ります（大阪市南區天王寺大道三丁目　松澤豐子）

●●●

○お別れ　皆樣私はね二三日の内に當地をさります心の變化はまぬかれませんが投書の自由も與へられるかどうかわかりませんけれども本誌は永久に私の友です（熊本、波の花）

●●●

○遠い方に　皆さん私も前號からの愛讀者となりましたの、どうか僞らぬ交際をして下さいな、そして河守の地方には愛讀者はないのでしようか、遠い處の人と交りを結びたいわネ、始めて投書もして置きましたの出て居るかしらん（丹後加佐郡河守町字金や仲田勝右衛門方、品子）

●●●

○英文にて　賢明なる皆樣妾くしはネ今度米國紐育州アイランチイクシテーの最も親愛なる友人から同地の上等繪はがき二十枚許り送って來ました依て其のはがきを諸孃樣等に御分配致し度う存じますの何卒至急御申込被下ませ但し御申込の文章は繪はがきに限り必ず英文にて記し御交換を永久にお願申ます（京都市河原町通り三條北入、粟津小波子）

●●●

○敎へて頂戴　姉樣方の中に「月影高く野邊は霜に、鴈ね渡る頃なれや、遠寺の鐘もかすかにひゞく、入相つぐる諸行無常」この歌御存じの方は古雜誌か繪葉書差上ますから御敎へ下さい御願ひ致します（呉市二川町三城道六ノ二、山本浪溪）

●●●

○いろ／＼　妾は片田舍の無學無才の者ですが玉草繪はがき、アミモノ、シヲリ、リボン、ハンカチイフ等の御交かんをして下さい亦交際して下さい品物を取りきり玉草を取りきりにして返事をやらないやうな事はしませんからなにとぞ亦朝がほの種（八種まじり）ほうせんかの種もあり亦エゾ菊の種もありますから御望みなら二錢御送り下さいましな三種皆送りますわ（上野北部長野町在日景町、富澤きく子）

○右の外手紙の交換其他交際を望まれる方が左の通りあります、豫めハガキか何かで双方の意思を疏通して置いて信實なるお交りをねがひます。（記者）

○大阪市　區石町一、一三二、櫻井枝葉女

○埼玉縣秩父郡皆野村、金子明子

○淡路野島村、國分光枝

○岡山縣小田郡笠岡町中ノ町、岡本みさを

○伊勢鈴鹿郡白川村、西本淑子

○伊豫新居郡氷見町大字新町岩見床内、工藤德子

○京都府相樂郡加茂村字錢司五ノ四、吉田とも子

○秋田縣南秋田郡船越町、那珂はつ

○伊勢鈴鹿郡白川村大字鷲山、早川利子

○茨城縣新治郡東村大字　山久保坪、酒井久子

○和歌山縣伊都郡九度山村、木澤てる子

○宮崎縣宮崎町、長谷榮子

○伊勢鈴鹿郡白川村大字白、若林美子

○大阪東區大手通二丁目百番屋敷、田野しか子

○備前八濱町大字吉澤町、佐久間綠子

○尾張海東郡永和村大字大井、加藤千代子

○石川縣金澤市八幡町、日下みどり

記者と讀者

○北海道、坂口喜久子さんに、圖畫は二寸に三寸の大きさです、年齢は書くに及びません（記者）○群馬縣雪枝さんに、茶の湯の記事を本誌に載せよとの御注文茶の湯も結構ですが雜誌に載せるまでもなく、斯道の書物が數へ切れぬほどありますから、それによって御自修なさるが宜しいでせう（記者）○くれなゐさんに、お妹さんと同封差支ございません、投稿はお出しになった翌々月の紙上に出ます（記者）○一少女さんに、お尋ねの大日本力行會は小石川籠町にあります會長は島貫兵太夫氏です（記者）○朝鮮、中井花代さんに、半紙へでも字詰は二十四字詰にねがひます（記者）○すゞきさんに、和歌や俳句は一人に一首づゝ、別の紙に書くこと、誌友くらぶは半紙でもハガキでも隨意です（記者）○仙臺、月見草さんに、御申の通りハガキでゞも又は紙に書いても本社編輯局にお送り下さればよろしい（記者）○日本橋、ふた葉さんに、新詩句でも半紙に書いて下さい（記者）○愛讀女さんに、折角のお望みですけれど、讀者方の御都合と編輯の爲に何うしても現在より、投稿締切日を短縮するわけに參りません、また短縮せねばならぬといふ必要もありません（記者）○琉球、築山しづ子さんに、東京音樂學校の詳細を御了知なさりたいとの事、詳しいことは直接同校へお尋ねになるのが間違ひもなくてよろしいです、郵券封入で規則其他問合せてごらんなさい記者）○滋賀縣、里夕。南總、夕ほし。備中、小泉山春子。

越後、莅戸賤女。松山、松子。近江、細野その。其外四五の方から繪ハガキを送つて下さつてありがたう、御挨拶も確に拜承しました（記者）○書き方の可否、其外お尋ねの通りでよろしい方及び原稿に添へて手紙を下さつた方は澤山ございますが、一々お名前は擧げません、其中の一部の方だけ左に芳名を記して置きます。石川、北利子。北海道、伊藤ゆき子。淡路、きよ子。増田茂登子。横須賀、渚狩ふぢ子。新潟縣、高橋みほ。池田はつ子。宇都宮市、安の子。森本とし子。うすい。靜岡縣、みどり子。白妙。紀伊、大津こゆふ。札幌、湧川ゆき。

持つてゐる書物
讀みたい書物

○文學書　妾の手許に、むら雲、花袋集、黒潮、紅葉集二巻四巻、鏡花集一巻二巻有りますが、皆樣の中に坪内博士の文學其折々、蘆花の寄生木、泉鏡花の柳筥、白鷺、露伴の玉かつら、かを　お持ちでしたら交換して下さい但し交換して下さる方は葉書で問合はしてからにして下さい（群馬縣新田郡木崎町赤堀村、小澤碩子）

○ツルゲネフ集其他　諸孃樣の中でツルゲネフ集　夢二畫集、有情無情、植物圖書、鏡花樣のなもと櫻、何れなり共御不用のがありますなら變りべりの絹ハンカチーフ數枚其他の品と御交換下さいませぬか又綱島先生の梁川文集御持の方が御座いましたら何なりと相當の品と御交換下さいませぬか御伺ひ申ます（横濱市北方町竹の花五百廿五、土馬貞子）

○増刊　私は本誌の愛讀者ですが五月の増刊都會の婦人と七月の本誌と八月とを少しおくれて本屋にまゐりましたので、もう賣されてありませんの誠に困りました、おなさけある皆樣の中で御不用の方が御座いましたら私の手許にある小說又は繪葉書にて御禮申上げますから是非是非お願申します（栃木縣芳賀郡山前村道祖土高松泰子）

○小說類　誌友のみなさま私の手もとに小說露、唯一人、頁人の自白、ハイカラ令孃前巻、愛娘に與へし母の書簡、竹籠、黒潮、女子作文法、濱子、怒濤、初戀、谷間の姫百合、奈落、落日、天才の末路、操、青春、二十八宿　美文作法などもつて居りますがみなさまの夢二畫集か續ハイカラ令孃か其他の小說と御交換下さいませ（府下大崎町字大崎二九四、鈴木きよ子）

○増刊　皆樣の內で都會の婦人か若き婦人をお持ちの方は私の地方の婦人と御交換下さいませんかお望の方は次號で住所おしらせ下さいますぐお送り申します（まさ子）

○ふるさと　皆樣の中に田山花袋先生の「ふるさと」御持ちの方は御送り下さいませんか、御禮には花袋先生の野の花か繪はがき差上ます成るだけ早く御送り下さるよう御願ひいたしましてよ（青森縣三戸郡五戸村、佐藤きく子）

○本誌　皆樣の中に本誌本年七月號と三月とが御不用でしたら一冊でも宜いですから私の秀才文壇、ハガキ文學、女學世界等と御交換願ひます猶は特許の圖書佛締器などあります。（靜岡縣濱松町榮區、平岩白菊）

○拜借　皆樣の內で紅葉全集魔風戀風お持の方は二週間程お貸し下さいませんか貸して下さつたお方にはお禮として乘や近江八景の繪はがきを差し上げますから（滋賀縣犬上郡西甲良字下ノ郷上野増平方、坂靜香）

○私は先月大和の野菊さまに三錢郵券入れて本を借りやうとしましたら何のお返事もないのです、靜岡の根岸樣にもだまされて、ほんとうに口惜いわ、僞りのない誠實な姉樣方に一葉全集、眉山全集、紅葉全集、がありましたら私の新不如歸、己が罪、乳姉妹、自然と人生、ハイカラ令孃と交換ねがひます（三重縣安濃郡雲林院村養宗寺方、吉田愛子）○何人樣か八月號の婦人世界御不用のお方が有ましたらおゆづり下さいませんかお禮は屹度致しますから（淡路三原郡賀集村、加藤香菊）○青春エンド金色夜叉終編お持ち合せの方は私にお貸し下さいませぬかお禮は地方エハガキ雜誌で必ず致します、又嫌でなくば私の古雜誌秀才文だん女子文だん、文藝くらぶ、日本少年などゝ御交換を願ひます、地方の雜誌ニユースの交換も望む所です（上毛佐波郡東村國定、森田久）○諸孃方よ本誌の姉妹たる「少女」二巻六八九號御不用の御方是非共御送り下さい御禮は本か細工もので必ず致します（東京府下西多摩郡青梅町森下、瀧島喜代枝）○誌友の皆樣方よ妾の手許に文學入門、文學概論、和洋菓子製造法、折紙製法、明治百家文集、殘紅（風葉）、作文辭書、俳句歳事記、新俳句撰、嵩野、乞食、夢二畫集、片戀、ミルトン、失樂園、イリアッド物語、ナイチンゲール、俳句入門、モンナワンナ、寫生

文作法、其他 文學書類 女子に關する書類が澤山ありますから 皆様の 絹ハンケチ、肘付、リボン、別離、南小泉村、奔流、星湖集、花袋集第二、秀湖小品、濤聲、出産、其他諸大家の新らしき作物と交換して下さい。妾は クリスチアンだから神にちかつて屹度御送本致します。(土佐后免局區内介良村、鍋島すみ子)○皆さんの内で 作歌入門新詩辭典、おもひ草、玉むし、藤村詩集、花外詩集等の和歌新體詩の書物を送つて下さる方には 妾の 持つて居る 玉ぶち、七つ星、日本大家論集、詠歌辭典、不如歸の詩、魔風戀風の詩、已が罪の詩、女夫波の詩、金色夜叉の詩、冠詞例歌集の内何れでもお望みのものを直ぐ送つて 差上げます、又雑誌の交換をも願ひます、又地方に大洪水がありましたから洪水の繪葉書を送つて下さい 右の内の書物か 又は 他の雑誌で 必ずお禮致します(越後新井町五日市早津喜作方、早津不言子)○皆様の内に左の本御不用でしたらどうぞお惠み下さい、思ひ出の記、一葉全集、みだれ髪、夢、富山房の名著文庫、小野先生の習字帖、玉琴、オルレアンの少女、和歌入門、俳句作法、青芦集等、お禮には左の本の中にてお望みのをすぐ上げます獨習毛筆讀手本四冊、不如歸、日本新辭林、すみれ集、手風琴獨習、乳姉妹前後、家庭料理の栞、心の日記、植物學叢話、已が罪前中後、文學入門や女子文壇一昨年秋から本年九月迄 少女本年の四本新國民女學世界ムラサキ秀才文壇 婦人世界等で必ず送りますわ 決して不神聖な事は致しません(秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤すみれ子)○誌友の諸姉様妾の机上に小説雑誌八十冊 其れに鈴木製のヴアイオリン有り 皆様方の不用な品と交換致します 尚帝國習字速成學會の習字帖不用の方はお送り下さい 相當の禮を致します(東京市本所龜澤町三丁目十番地 東洋合資會社々長宅内、みつ子)○誌友の皆様方 妾しは本誌へ初めて顔出してお交りを願ひます其れから 妾しの手許に只今ヴアイオリン及びハモニカ 小説金色夜叉其他雑誌書物數十冊 不用になつて居ります姉様方の不用物品と交換致しましよ(本所區龜澤町二ノ十橋本様方、ゆき子)○愛讀者諸姉の内 日露戰爭實記(育英社)三、四、五、六、七、八、十、十一、十二、二十、二十一、二十二、二十九、三十、三十一、三十六號より最終號まで 戰爭文學第一年四月の巻、同十月の巻、同十二月の巻、第二年一月の巻および同三月の巻より 最終號までを御送り下さる方には麗水著舞扇 及び小栗風葉著麗子夫人 及び罪の命を差上げます(駿河藤枝町字若王子、大石榮)○皆々様のうちバイオリンお不用の方がありましたら 私の 小説 伯爵夫人(終篇迄三冊)金色夜叉(終篇迄七冊)濱子、魔風戀風(全部)等 外に二十四音階のハモニカ(複音)などありますからお望みの 品だけとお換へ下さいな御願ひ致します。それから各地の史蹟 繪葉書お惠み下さい お返事はきつと致しますよ(越後東頸城郡牧村、中島みね子)○皆様いろいろ御寄贈下さいまして 有がたうございました、三月號をお送り下さつた 遠州のお方はお住所とお名が消印で分りませんでしたから お知らせ下さい、また「浪子の墓」のある二月號を御持のお方はどうぞお惠み下さいませ お禮には 女學世界、婦人くらぶを何冊にても 差上ますから(陸前宮城郡七北田村萱場、福晋女)○繪葉書もね そして魔風戀風の御有りの方は 御惠み下さいな(愛知縣豐橋市湊町、鈴木尾花)○誌友の君よ君が金色夜叉終編(風葉著)、月魄、思出の記、二十八人集等の御藏書と、わが平家ものがたり、金色夜叉、食道樂、千山萬水と御交換ねがひたく 脂山全集御もちの方は 私の紅葉集又はアラビヤナイト美辭學、エマーソン論文集 及草野集と 御交換下さいませ(次號で御住所御教へ下さいまし 直接に私のも申上げます)○皆様の中、夢二畫集、晶子先生の佐保姫、 高等女學校三年以上の教科書思ひ出の記等御不用の方は 私の持つて居ります少女界七巻一號より八巻四號まで、少女世界 三巻四號より五巻十一號まで、少女 一巻一號より二巻八號まで、女子文壇 第六年七號より九號まで、婦人世界四巻一號、七號、其他少年界、少女の友、少年と交換して下さいませんか 決して損はかけません、交換して下さる方は御一報を(大分縣玖珠郡野上村菅原小野、佐藤琴子)○皆様の内で東京女子師範學會より 發行します書物お持の方はおゆづり下さいませんかお望みなれば細工物、書物、小説でもお禮いたします おゆづり下さいますお方は左記へお希望なり 詳細お知らせ下さい、之を御縁にお交り下さい(神戸市下山手通八丁目六番、吉野梅子)○親愛なる皆様お手許に婦女界、少女の友、少女世界御不用でしたら私の本誌 婦人世界とかへて下さいませんか又家庭菓子製法、花むすび、乙女の秘密日記、和洋料理法お持ちの方は暫時おかし下さい お禮はきつと致します(伊豫國川之江坂本組出張所内、みさを子)○諸姉様方、私の手許に濱子、うき寢、新不如歸、新日本島、北海道名所繪葉書を 持て居

ります、金色夜叉、魔風戀風、お持の方が御座いましたら御交換を御頼ひ申します（後志國歌棄郡白井川局區内、平手けい子）○皆々樣の内で已が罪、金色夜叉、乳姉妹、想夫憐、筆子、少女の戀等をお持ちのお方は私の小説古賀市、枯野の雲、新小説、女鑑、女子文壇、女學世界、婦人世界、少女世界、日本の少女、少女の友、少女界、少年世界、少年界、乳姉妹の歌、古今歌集下巻等の古雜誌が澤山有ますから入用のお方わどれでも御交換下さい（埼玉縣北埼玉郡羽生町甲野絹子）○皆樣の内に女學世界の增刊マダム振り御不用のお方が有りましたらお惠み下さいませんかお禮には菊か桔梗の造花一枝お送りします但し御送附下さる前に一寸お報知下さいまし（本所區松井町三ノ十二狐田方、鶴喜子）○女子文壇去年五月十一月號と婦人世界本年二月五月號と婦人くらぶ一冊女學世界一冊不用なのが有ますからハーモニカとお取りかへ下さいませんか（米澤市粡川辻西、佐藤せい子）○私の手許に小説人生の行路、ハイカラ夫婦と他の雜誌が澤山有ますから皆樣の許に習字手本が有りましたら交換下さい（佐渡郡兩津町、田村紅葉）○諸姉樣の内で中古のヴアイオリン、手風琴、ハーモニカ及び家庭日記、女子文壇本年二月號お持ちの方は左記の書と御交換下さいませ、美文韻文作文辭書、國語漢文辭書、新選樂典大要、催眠術獨稽古、美文斷片、人の母、ハイカラ令孃、世路日記、さゞ波女子遊學案内、女子懸賞文集、名媛の學生時代、旅行とスケッチ、其他本誌、女學世界、婦人くらぶ、婦人畫報、等の雜誌數十冊必らず僞言は申しません（福島縣伊達郡梁川町、武田公子）○皆樣の内で新不如歸後不新如歸後不如歸夏子（全部）乳姉妹（前後）魔風戀風等お持ちの方がありましたら、妾の小説肉彈、コブシ、良人の自白、筆子（全部）紅葉全集、言海等と交換して頂戴なお禮として絹製寫眞掛しをり在米の兄樣より送つて頂いたオレンゴ新報先着十名樣へ差上げます（奈良縣山邊郡丹波市町大字山口𥔎萬次郎方、艷子）○誌友の皆樣、お手許に富代夫人お不用の方がありましたら妾にお讓り下さいませ（新潟縣佐渡郡小木町字登町丸山萬作方、丸山ヒロ）○誌友の皆樣私の手許に小説照子、鬼車、女子文壇、少女世界澤山不用ですから皆樣のリボン、ハンカチーフ各地の產物お送り下さいお禮に右の本でいたしますから男子はおことわりいたします（羽前米澤市越後番匠町加藤富次郎方、とみ子）○私の手元に文章世界、女子文壇、新庁町より、花紅葉、車窓の名勝觀、門の草、萩の下露等の書籍がありますお寫眞か玉章又は編物等を送り下されし諸姉樣に差し上げますから何卒何々の書とお指定してお贈り下さいな又寫眞（風景にてもよろし）を贈り下されしお方には別に妾手製の栞折を進呈いたします先着などにはかゝはらず差し上げますから何うぞそのつもりにて願ひます（茨城縣結城郡蠶飼村砂子飯岡隱居内、田中春江）○妾の許に金色夜叉、天うつ浪、思出の記、不如歸、七草集、ハイカラ令孃、魔風戀風、血の涙、夏子、筆子、女波男波、己が罪、青春、多情多恨、紅葉全集、其他多くありますから入用のお方は中學世界、女學世界の增刊、何でもよろしいから送つて下さい、ずぐお貸し致します（兵庫縣川邊郡長尾村口谷坂上留造方、みどり）○私の手許に文藝俱樂部、文章世界、中學世界、女學世界、ハガキ文學、婦女世界、新小説、等澤山御座いますが誰方か女子文壇愛讀者諸孃方中に小説や繪葉書（なるべく風景）等と御交換下さる方は有りませんか、小説中左記の者を御送下すつた御方には相當の雜誌を數冊送ります小説、寄生木、破戒、魔風戀風、あめりか物語、其他何でもかまひません（茨城縣稻敷郡鳩崎村佐倉、坂本貞尾）

繪葉書を好む

○美術史研究の資料になります樣な各地の寺院及古美術品の寫眞及繪葉書を望む特に京都奈良地方の諸姉にお願ひ致します男の方にても差支ありませんお禮には當地にて求めらるゝ相當の者を致します何卒澤山お送り下さいませ（仙臺市國分町二十二、鈴木春子）○繪はがき交換お願申した處皆樣から澤山お送り下さいましてまことにありがとう御座います殊に京都の志奈子樣曾津のいさ子樣には貴重の誌上をお借り申してお禮を致しますどうぞ皆樣ふつゝかものですが風景の繪はがきおもちの方は御惠送下さいませ（東京市本鄉區湯島梅園町四、岡野さと）○繪葉書御交換願ますお方には私は名古屋名所繪葉一組六枚差上ます（名古屋市西新町保知方、輝子）○銅像、岩石、瀑布、學校及び神社、寶物等の畫葉書、小説類、其他文學圖書御所有の御方は私の畫葉書、ハーモニカ、明、銀笛、圖書等と御交換下さいきつと御返禮は致しますから（伊豫宇和島裡町二丁目武村内にて、武村芳花）○誌友の皆々樣御交際下さいまして誠にありがとう御座

いました改めて誌上で御禮申し上げます此後尚繪葉書御送り下さい御禮には薩摩の名勝繪葉書にて御禮申し上げます西郷南洲翁島津公宅及び鹿兒島全景其外のにてスタンプ附先着の御方には妾の方の海濱の景色の寫眞御送り致します（鹿兒島縣指宿同春寮院、はるゑ子）〇妾も繪葉書を好みますが、中にも日本三景、及び三公園お持合せの御方樣は、たとへ一組にても、よろしう御座いますから御交換を願ます、御禮は當地名所又相當なる品にて屹度致します（上野長野原町茂木樣方、百合子）〇私は大の繪葉書好きよ種々なの澤山持って居ますから未使用のを交換して頂戴ね種類は何でもかまひませんが下等品はいやなのよ、未使用の外は詩歌や俳句の類をかいて下さい、又新刊の文學雜誌や婦人雜誌の交換も併せて願ひますわ（秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山、梅澤ふみ子）〇名勝繪はがき、御寫眞などの御交換をお願致します　岡山市浪花町六六箏曲教授所內、幸子）〇私は十五歲の少女で御座います先月號より本誌愛讀者の一人となりました、どうか誌友の御姉樣繪葉書及び御手紙の御交際を願ひますきっと御返事差上ますから（大阪市東區平野町二丁目五番地、吉田俊子）〇誌友の皆樣方よふつゝかな田舍者ですがよろしく御願いたしますとりわけゑはがきの交換を切に御願いたします（兵庫縣多紀郡福住村、細見綾子）〇千葉縣の流喜樣先達ては御繪はがきありがたうございました、先月號の誌上にて御知らせ申すはずでしたが最う期限がすぎてたので失禮いたしました御願の繪はがき幾枚にても差支御ざいませんどうか當地のと交換して頂戴な（兵庫縣淡路高等女學校合宿所、清水）〇誌友の皆樣繪葉書の交換を賴みます御返禮は八百萬の神に誓ふ（岡山縣兒島郡興除村大字中畦末友繁一方にて、末友庵惠）〇誠意を以て永久に繪葉書の交際を願ます、御寫眞なら小說、雜誌をも御送り申ます（靜岡市札ノ辻町角、瀧よし子）

個人消息

〇麻布、花子樣、美子さま、私の本名ご存じなの、どなたに御聞遊ばして？もうね、私投書するのはどなたにも內密なのでございますのよ、それでなくっても四面楚歌の裡に……イヽエもう只今私は都には居りませんの故鄉へかへりました、生憎洪水の最中で、龜井戸、平井間は渡船でした、お手紙も頂きたうございますけれど……誌上へ住所を書きかねますので、ほんとうに殘念でございます、星ヶ丘の事を申されますと袂をかんで泣きたくなります、先生をお責めなすって！まあ先生お氣の毒さま。巳年だものですから執念深くていつまでも一つ事が忘れられなくって困りますのよ、まだ見ぬ御二方樣の御幸を祈る（南總、夕ほし）〇夕ぼし樣仰しやるとほり美耶はもとの美子で御座ますが御交際は願はれぬと仰しやるのね、御多忙のため、事情のため果敢なう御座ます、短き文の中にも誠ある情はかよひませうに、私はまだふつゝかな少女で御座いますが御葉書なりと下さるわけにはまゐりませんか、日頃から慕ひ申して居ります（麻布霞町十八、美子）〇諸姉樣の中に東京の淺井つゆ子樣（本年二十三四位にて三十九年頃には京都全正看護婦會に同職を務めて居られた人）の住所及び近狀を御存じのお方が御座いましたらどうぞ本誌上でそれとも下名までお知らせ下さいましな、必ず相當のお禮は致しますから（丹波何鹿郡志賀鄉村字西方、大槻幸子）〇小松千枝子樣、八月に家庭日記一冊御送り致しましたに未だ何の御返事もありませんが御受取りになりましたか一寸お知らせを（はる子）〇仙臺のC・T子樣貴女桂島富子さんでせう？あなたとも卒業以來意外に御無沙汰致して居ります、お變りもありませんか？折りが有ったら母校を再訪して下さい、情が御有りなら御玉章下さい（茨城縣東茨城郡長岡村、川和田初子）〇京都の壽賀子樣思はぬ御無沙汰致しましたゆるし下さいましな又此の間は洪水御見舞下さいまして有難う存じました相にく父が遠方にいって居りましてるすな者でしたから大へん困りましたが幸ひ家人は皆無事に居りますから御安心下さいましな伺ひませば今度京都で誌友會をお開きになるさうですねさぞどんなにお樂みでせう私もかげながら當日皆樣の幸をいのり御喜び申上ます皆樣によろしく又當日の御使り御待ち申ます外地方の姉上樣方東京の皆々樣先達って洪水御見舞下さいまして有がたく存じました別に紙上で御禮申上ます（南千住九四四、吉田清子）〇靜岡の水野やす子樣、御無沙汰いたしました只今の御住所お知らせ下さい（濱橫市南太田町、中田元子）〇高知山內志津子樣其後御住所お變りなきや（羽前小松町、高橋たか子）

◀編輯通信

野口母堂の逝去

本社々長野口竹次郎氏の母堂勢以子は豫て老病を患つてゐられましたが、九月十二日午前十時五分眠るが如く逝去されました。行年七十一歳、社長野口氏及び氏の令閨、令息、令孃、氏の令弟野口安治氏、外に河井醉茗、佐々倉醫學士其他臨終の枕頭に侍して眠れる靈魂を護りました。母堂は越後長岡市に生れ、若くして寡婦となり、能く貞淑を守りて健實なる一代を送られたのでした。平素深く佛教に歸依されました から、彌く安らかに永眠されたのでせう。斯くて十四日午前八時自宅出棺、淺草本願寺地中善照寺に葬送しました、會葬の名士紳商約五百名秋風冷かに空曇りて、此悲しき朝は永へに人々の胸に殘るでせう。

○「今の婦人」　第四增刊「今の婦人」は、思ひの外好い材料が澤山に集つて來たやうで、係りの記者は目下選抜に忙殺されてゐます、例に依つて編輯に心を用ゐ、なほ眼先の變つた新しい記事をも揭げますから、是非とも今度の增刊は皆樣に見て頂きたいと思ひます。

○特別交換　「今の婦人」には誌友くらぶを少し改良して、特別交換といふ欄を設けます、書籍雜誌繪葉書類の誠實なる交換の紹介を致さうと思ふのです、詳しい方法は前號の本誌に揭載してありますから御覧の上、成るべく多く御申込を希望します、締切は本月十日です。

○京都愛讀者會　前號に發表された女子文壇京都愛讀者會は幹部諸孃の熱心と、多くの同情ある愛讀者に依りて、前月二十五日豫定の通り開催されました。それに就いて本誌主筆河井醉茗も臨席する筈でしたが、社長忌中に就き遠慮いたしました、會の記事は次號に發表いたします。

○賞品に就いて　本誌六、七兩月號の懸賞は九月上旬に發送濟みとなりました、期日より少し後れましたが、それは發送部の多忙と、洪水の爲に運送機關の不備を恐れたからです、中には催促された方もありましたが遲くなつても本社多年の實行は確かですから、決して御掛念に及びません。

○同じく　又當選原稿に住所姓名を書いてなかつたり、書いてあつても文字が不明瞭であつたり、郡市町村名の脫落があつたりして送れないのもあります、送つても戾つて來るのもあります、それらは皆樣の不注意から起るのですから原稿には是非明確に住所本名を書いて下さい。

○同じく　伊豫の躑躅さんに、六月號書簡文地賞に御當選でしたが、やはり原稿に住所本名が無かつた爲め、賞品は送れませんでした、其後のおハガキで分りました、早速送ります、其外原稿に住所姓名の無い方は、八月號では日記地賞野の百合さん、九月號では論文人賞大和靜子さん、短文地賞淺草ひなげしさん、餘興人賞後志平手溪子さん、地方の婦人ではさむしろさんゆくのさん、眞野圓葉さん、十月號では俳句人賞山口縣白菊女さん等です、以上編輯局宛に本名と住所を早くお知らせ下さいませんと、賞品が送れないわけです。

○餘興課題　次の餘興課題は

『十月九日午後五時より六時まで』

と云ふのです、つまり此日の夕方右の二時間にあつた事を書くのです、諸孃の爲したこと及び其周圍、何でも宜しいから右の時間中にあつた事で興味のある文章をお書きなさい、時日は必ず右の通り、外の日、外の時ではいけません。之を集めてみると、同じ時刻に於ける全國各地の諸孃の生活が分るので、聊か面白からうかと思ひます、豫め其日を忘れないで下さい（しめきり本月十五日、二十行限、懸賞例の如し）

誌友倶樂部改良案を募る

本誌の誌友くらぶは普く諸孃の機關として尤も自由な態度を取つて編輯して居りますが、盛んなだけそれだけ善くしたいと思ひます。盛んだからとて放任して置くのは、記者の本意でありません、で、從來の通りでも宜いが更に一層興味もあり、實益もある方法を案出したいと思ひます、記者にも考へはありますが、兎に角諸孃の意向を伺ひ、其上で逐次新案を實行したいと思ひますから、平素誌友くらぶに就いて考へてゐる方は腹藏なく其意見を明瞭に、確實に、具體的に聞かして頂きたいのです、勿論其文章は紙上に發表して、天（二圓）地（一圓）人（五十錢）の報酬を差上ます、原稿には誌友くらぶ改良案と書いて下さい、行數制限なし、締切本月十五日。

雜報

見えぬ物を見る婦人

熊本縣の御船千鶴子が世に所謂千里眼の能力あつて、見えぬ物を見ることは各新聞紙上にも報道されてゐる通りである、千鶴子は前月十日の夜、東京に入つた。實父、實兄、之に附添ひ滯在二週間の豫定で神田の館旅に投じた。

十二日は清浦子爵邸にて、十三日は舊熊本藩主細川侯爵邸にて透視の實驗を爲し何れも良好の結果であつた。

十四日には午後二時から番町大橋新太郎氏邸に於て晴れの實驗があつた、當日は千鶴子の透覺に就いて初めより熱心に研究せる福來文學博士を初め、山川、丘、田中館の三理學博士、呉大澤、片山、入江、三宅、今村の六醫學博士、及び井上文學博士等立會の上實驗をした。併しながら此日の實驗は失敗に終つた。

十五日は午前中に旅館に於て新聞記者立會の上實驗したが、此時は見事に的中して、壺中にある「心神過」の三字を正しく透視し得た。

同日午後は又同縣人の希望に依り實驗をした其時も木製漆器中に嚴封されたる「加藤清正」の四字　透視し得た。

十七日午後、旅館に於て再び十一博士立會の上透視の實驗を行つた、名刺形洋紙に文字を書き、茶筒に入れ、其茶筒を更に厚さ六分の板の箱に收め、紐を結び、封印を施して、千鶴子に渡した、千鶴子は別室に退き、約十分二十一秒の後、透視を濟まして解答をした、文字は「道德天」の三字で、此際は正しく的中した。此日は一回だけで、二回目からの豫定は千鶴子不快の爲め見合すことゝなつた。

究に角學者間の問題となつた千里眼も、天下の博士の前で試驗をしたのであるから、大いに參考となつたには相違ない。

偖て嚴封されたる箱中の物を何うして視ることが出來るかと云ふ疑問に對しては、未だ容易に解決も出來ないであらうが、先づそれを視る時の千鶴子の態度は何うかといふに、それは二回目の實驗のときに、井上博士と千鶴子との對話に依つて略、知る事が出來る、博士の談に曰く『自分は進で千鶴子と對話の必要を認めて、先づ透視する時の姿勢、又如何にして文字を視別するかと問ふた處、千鶴子は答へて、透視する以前に、最も正しき姿勢をなし、容器の上若くは横腹に兩手を當てゝ（此日は横腹に當てた）暫らく瞑目し、而して深呼吸をなすと同時に自我を辨ぜざる事約一分位も經つと思ふ頃に感受するもので、以前は目の高さ位の處に其文字が現れたが、近來は身體の模樣よりか、頭腦に現はるゝ樣になつたとの事である。シテ見ると、彼が容器に五感を觸れさするといふ事が、取りも直さず、此觸接が媒介して何物なるかを判別するので、先づ學説は研究の後として、究に角、彼は透視可能性の女と云ふ事が出來るであらう』云々。

又福來文學博士も、實驗の時の態度に就いて語つて曰く『何時も云つてることですが、千鶴子が精神統一をする時は、恰も針の尖で皿かなんかを支へて居る樣に、極めて微妙な働きをして居るので、若し微塵でも碍げるものがあれば忽ち統一に故障を來す。だから、非常に機嫌の好い時とか、自ら進んでしやうと云ふ時でなければ、出來ないのである、恁な風だから、側に人が居ても出來ないし又場所にしても馴れない所だと工合が惡い、只今は以前からの習慣で、實驗の際は一人で別室に入り、極めて平靜にして透覺す可きものを手に持つて遣るのであるが、私は出來るなら透覺す可きものを手から離させ或は之を別室に置いて透覺させたいと思つて居る。

又同博士は千鶴子の透視の能力に就いて、參考談として面白いことを語つてゐる、曰く『丘博士などの云ふ處に依ると、下等動物の中には人間の五感以外の不思議な感覺を持つてるのがあるさうだが、人間も歴史以前の原人は、吾人の知る事の出來ぬ感覺を持つて居たのではあるまいか、其感覺——メンタルポシビリチーと云つても好いし潜在精神と云つても好い——は、人類の進化と共に、次第に消滅して終つたのでそれが或機會に遭遇して、偶發露したものとも思はれる。或は恁う思ふ、今後幾萬年かの後に太陽が無くなつて、尚人類が生存する時があるかも知れぬ、其時の働く可き能力が人間に潜在して居るのかも知れぬ、とすれば遠い未來に發揮す可き能力が、何かの間違で時を早めて今働くのであるまいかとも思はれる、然し今假に左うであると云ふことは出來ぬ』

千鶴子が普通の人間と違つて、何處が體格に異つた處があるのではあるまいかと云ふ疑ひも起れば起る、それに就いては、入澤醫學博士が體格檢査を行つた、其結果も同氏の談話で分る曰く『實驗が濟んでから、千鶴子を診斷したと云ふのは、前夜來少しく腸を損じたと云ふのであつたからで、次に體格をも診斷して見たが、右の耳が少し遠いとの事であるけれど、夫は京都の專門家に充分診て貰つたさうだから、餘り精くは診なかつたが、眼を診斷すると曾てトラホームに罹つた事があるらしい、今に結膜炎を起して居る、夫から右の眼球が少し小さい。全體の體格は中等で、十歲以下の時に麻疹と腎臟炎に罹かつた事があるけれども、成人してからは病氣は遺らないと云ふ事である、婦人病も遺らなければ、ヒステリーの症狀もないし、精神病の血統もないが、耳の遠いのは遺傳性だと云ふ事であつた。斯う云ふ具合に體格上から見た千鶴子には、少しも異狀は認めないのである』

呉醫學博士は學術上から、各種の觀察を下して曰く『日本にも西洋にも、從來之に類したことは隨分あつた、學者の研究を企てた者もあるが、調べて見ると詐欺だつたり、贋物だつたり或は逃げて終つたり、立派に研究されたのは殆んど無い、今度の如く學者が多勢集つて實驗し透覺の事實を確め得たのは珍らしいのである。今後各方面から研究されるだらうが、其研究は勿論心理學の方面であらうと思ふ、然し腦の組織に變つた處でもあつて、研究されるならば心理學と共に、醫學の方面からも研究することが出來るし、又下等動物などに人間の五感以外の感覺があつて、それと似て居ると云ふならば、動物界の方面からも研究することが出來る。又ラヂユーム線とか、寫眞線とか云ふものゝ働きに關係があるならば、物理學の方面からも研究しなければならぬ。要するに、何故金屬などに包まれた中の物が見えるのか、少しも分らない、狐憑などが人の手に握つて居るものを中てたり自分の後に在るものを中てたりすることは催眠術などで說明すると、精神が其處へ許り集注して、他の物は見えず、それのみ見えるのだと云ひ、又厚い紙に字を書いて其裏から見えると云ふのは、紙は見えないと云ふ暗示を與へるから字が見えるのだと說明して居る、然し何故に紙が見えずに、字が見えるのか、それは分らない、或は千鶴子の如きは、精神統一をすると、平生働かない一種の不可思議な精神現象を呈して、何か分らぬ光線の樣なものが、包んだ物體を透して、目的のものと通ずるのではあるまいかとも思はれる。又或は透覺しやうと思ふ字なら、字から一種の分らない光線の樣なものが發してそれを感ずるのではあるまいか、何れにしても千鶴子の字を透覺する時は、字が目に見える樣に見えると云ふのだから、精神統一の際は、餘程視覺の中樞神經が、鋭敏になるものと思はれる、例へば「蟬」と云つても、人に依つては目に見た蟬の形を頭に浮かべる者と、耳に聞えるチー〳〵鳴く聲を思ふ者とある。千鶴子が透覺の際、字が形として見えると云ふ處を見れば、それが音として耳から這入るので無いことは判る勿論見えると云つた處で、視覺が働くのではなく、先づ或る感が働いて、それを感じ然る後視覺の中樞神經が形として見えるのだらうと思ふ。

其他諸博士の談話には、いろ〳〵有益なこともあるが、暫く此處には略して置く、兎に角心理學、醫學、惹いては哲學上の大問題であつて單に好奇心ばかりでなく、一般の人類が大いに注意して置くべき出來事であらう。

なほ進んで、些の疑惑も、遲疑もなく、千鶴子が見えぬものを見るといふやうになつたら、異常なる婦人として、女性間の一つの問題でもあらうと思ふ。

帝國劇場技藝學校卒業式

帝國劇場技藝學校にては前月十六日第一期生の卒業式を擧げた、總長澁澤男爵登壇して證書を授與した、卒業生は何れも將來の女優である卒業生總代として森律子男爵の訓辭に對する答辭を述べた、巖谷小波氏の演說もあつた、林伯爵の演說は女優に對する奬勵として傾聽すべきものであつた、其大意は『或る新聞には、西洋の例を引きて、西洋に於ける女優が、社會に害毒を流すが故に、我邦にても、女優には望みなしと記しありたるが、是れ甚しき誤りにて、職業と道德とは全く別問題なり。假令歐米の女優が然りとて、我邦の女優も亦必ず然るべしとの理なし、況や、此觀察は歐米女優の半面のみを見たるものなるをや、元來我邦にて、女優に重きを置かざるは、習慣の致す所、即ち德川氏が當時風敎上の一政策として、俳優に拘束を與へたる事あるが、習慣として傳へられたるのみ。此習慣の實例として、尙ほ一を擧ぐれば、是れ

も徳川氏の政策が、俳優を河原乞食として、卑めたる爲め、今日尚ほ世間一部の間には、俳優を卑み、引いて演劇をも卑むべきものゝ如く考へらるゝ事あるは滑稽なり、凡そ我邦の俳優が男子にして女子の役に扮する事は、一種の技能なりとの說もあり、是れ勿論技能には相違なかるべきも、決して天性には非ず、卽ち俳優は其役としての技藝以外別に女子になるといふ事たけ、餘計の負擔をなす譯なり。支那、土耳其は知らず、歐米如何なる國にても男優が女子に扮するは滑稽劇の外に無き事なり』との趣意であつた。

月の夜の印象

いつも見る雜木林は、黑蛇の尾の樣な長い僧服の裾を曳いて立つて居た。五六間向ふは水蒸氣の薄い膜がモヤ〳〵と視線の放射を遮り止めて、レールを越した御苑裏の家々の灯が腫れぼつたい樣なうるんだ眼をして、白い薄い瞬つたら優曇華の若い母親の翅の樣に、サヤサヤと輕い音のしさうなヴエールの薄膜から、ジツと此方を見て居る。其灯の眼が堪らない程人懷こい

ピーとおもちやの鳩笛の樣な甘い樂しい笛の音がすると、電車は中央東線の冷たい鐵の平行線の上を、ツーツと油の滑力で和らかく辷つて行く。赤い灯が澤山ついて、美しい若い女と、若い男とが、新婚の夜の樣な心持で列んで腰をかけて行く。

そして何處のステーションの赤い灯の前にも餘り止らずに、春の海の樣な靄の中を電車はツーッとわき目も觸らずに行く。

私は懷しい向側の灯の眼を、戀人を見かへす樣な心持でジツと見かへした。

森の中のアーク燈

大都會が秋の霧に覆はれて、ベールの陰から覗いてゐるやうに嬌羞を帶びた夜に、黑い森の中にキラ〳〵、キラ〳〵と輝くアーク燈の光ほど美しいものはない。

星の色をしたアーク燈、表情の烈しい、近代的の女の瞳のやうに輝いてゐるアーク燈、それが森の梢の奧から、顯れたり、隱れたりする時に、我等の胸は新しい夜の生命に目覺むるのである。

遠くから見た時には、森の形、アーク燈の光彗の印象から隔離して了つて、餘所の都會のやうに思はれる。

我等は其火に近づかうとは思はぬ、近づいたら屹度、人の影が映るに相違ない、我等はいつも都會を少し離れてみたい、然うして映る人影を空想してみたい、近づいて實際の人を見た時の失望を思つて、我等はいつも森を透かしてアーク燈に憧憬れる。

編輯局の三十分

犬が吠えた。よく吠える犬だ。

一時二十五分だ。カタツ、カタツと底響のする步き方をして、誰か人が社の横の溝板の上を步いて行く。

繪葉書賣が北の方の路次口から、をと年頃の古物らしい舊タイプの鳥打を着て入つて來た。水害の繪葉書が一組三錢でございます。これから聊か水害の實況を說明します。とベラ〳〵何か喋舌つて居る。眼の前の濵町迄水が來たといふのだに、水害の實況の說明をしたつて誰も聞き手があるまい。つまらない骨折をするものだと思つた。

次いで今度は又南の口から、小さいオモチヤをカタカタとならし乍ら、茶の萬筋の袷を着た日に焦けて色の黑い男が變な聲で越後獅子を歌ひつゝ、これはお子供衆のお稽古のおもちや、おのが姿を花と見て――、カタ、カタ、何にでも合ひますと云つて通る。これが「合ふ」で通るなら、鐵槌で釘をたゝいても歌澤に合ふだらう。

あまざけと妙にケの字にアクセントを附けたいつものお爺さんが通る。一時五十四分。

『模範』の創刊

時代は追々眞面目になつて來るのに、いつまでも挑發的や投機的の雜誌ばかり橫行しておては困る、此處に新しく文光堂より生れた『模範』は此の時代の要求に依りて現れたゞけに、至極眞面目である。初號を見たゞけでも、其態度の整然として、紳士的なるには敬服せざるを得ない、誰が讀んでも爲になる雜誌であらう、世間の評判も甚だ好いやうで增刷の分も直ちに盡きたさうである。常識を養ひたいと思ふ人は、男女に論なく讀んで爲になる好雜誌である、體裁も亦頗る美、紙數も多い（定價一部金十五錢）

詩人消息

△川路柳虹氏の詩集『路傍の花』は愈よ出版の運びとなつた、此稿を草するまでには未だ書物を手にすることは出來なかつたけれど、聞く處に依ると、紙數約三百頁、佛蘭西式の瀟洒な體裁ださうだ、我國最初の口語詩集として、世評に上ることであらう。

△北原白秋氏は牛込から青山原宿八十五番地に移居した。

△一時京都地方漫遊中の三木露風氏は東京に歸つて、目下『廢園』の再版に着手中。

△森川葵村氏も處女作を集めて『病める薔薇』と題し、出版の豫定で目下原稿整理中。

△横瀨夜雨氏の邸宅は過般の洪水で浸水したが、氏は其後水戸地方を旅行中であつたが、もはや郷里に歸つた筈である。

△綛越夏村氏は其第四詩集『星過し後』を郷里盛岡で出版した。

新　刊

○夢二畫集旅の巻　竹久夢二著

諸孃の間にも評判の夢二畫集は春、夏、花の諸巻に次いで『旅の巻』が出た、旅の感興は著者の感興と一致してゐる、著者はいつも放浪の夢を見てゐるやうな人であるから、此の詩歌的情調を線の上に表はした旅の巻は是非なければならぬ、殊に此一巻には寫眞版、原色版なども多く交へてあるから、見た眼にも變化があつて一層讀者を娯ませるであらう（定價金七十錢、麴町洛陽堂發行）

○酒ほがひ　吉井勇著

スバルの歌人、吉井勇氏の歌集である、酒に醉ひ、詩に醉ひ、人に醉ふ、君は藝術的の香ばしい骨を持つてゐると同時に、人生を華やかに美くしく見てゆく現代の若い詩人である、君の歌風は『明星』『スバル』を通じて、常に一家を成して來た、此處に一巻の集あるは當然であらう、藤島氏、高村氏、木下氏の釘裝は此集に尤もふさはしい、クロース本綴、函入の洒落れた製本である（定價金八十錢、神田表神保町昴發行所）

○煤　烟（第二巻）　森田草平著

愚に第一巻を出版して暫く間があつたと思つたら、其間に作者森田氏は煤烟の氣に入らぬところを書き直してゐたのださうだ、更に善くなつたことであらう、吾等は別に折を見て煤烟の文章の洗錬された處だけでも紹介したいと思つてゐる、内容は今更云ふまでもない（定價金七十錢、日本橋區如山堂發行）

○クリミヤの天使ナイチンゲール　村田勤著

クリミヤの天使と謳はるゝ、フロレンス、ナイチンゲール孃の傳記であります。孃の逝去は偶然にも著者が本書を脱稿する僅か前だと云ふ事である、兎に角此際博愛の化身とも云ふべき孃の生涯を知らんとするものに取ては唯一の良書であらう、行文亦平易にして多趣なる口語體で、刺激分子少きがなかなかに宜く、淑女諸君は一讀すべきもの、家庭の讀みものとして亦尤も適してゐる。四六版二百五頁、裝釘赤のクロース表紙で美くしい。（定價五十錢、京橋區尾張町警醒社發行）

○禮嚴法師歌集　與謝野寬編

與謝野寬氏、其父十三回忌に當り、父禮嚴法師の歌集を編みて、同好の人に頒つた、誠に美しい志である、法師は京都に住み、維新前後には天下の名士とも交はり、兼て文事の嗜みが深かつた、一代の詠歌三萬首に近かつたさうである、此集は其中より選まれたのである（定價金五十錢、神田錦町明治書院發兌）

○雜　誌　界

▲『學生文藝』といふ雜誌の一號が出た、文藝の記事と共に社會一般に對する讀物が多い▲『清流』は府下待梅町の野崎小蟹君の主筆で、地方文學雜誌である、これも一號出づ▲『少年文藝』と云ふのは從來岡山で發行してゐたが、今回東京に支部を置き面目を改めて出た▲秋田雨雀氏等數名の文士集りて近く『劇と詩』といふ雜誌を創刊するさうだ▲『趣味』は目下休刊中▲『早稲田文學』秋季特別號には諸大家の新作小說載る

○新社會劇の發展　嘗て牧師の家を演じた新社會劇團は、中尾熊夢を主として再び一座を組織し近く第二回の興行を爲す筈で脚本は一番目土肥春曙氏の『勝利』、二番目は中村春雨氏の『波』である、此際後援協會を起し、會員を募り（會費一圓、五十錢、三十五錢）て特別に觀劇の便を計るさうである、申込所は牛込江戸川畔清風亭内社會劇團事務所

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小説と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る
▲定期號の投稿は每月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。地賞金七拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の賞格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す。
壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七〇九番

○定期發行分（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	…郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	前金四拾三錢五厘	……同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	前金八拾四錢	……同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	前金壹圓五拾六錢	……同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	…郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	前金三拾八錢	……同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	前金七拾二錢	……同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部──十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	…郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	前金壹圓二拾二錢	……同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	前金貳圓二拾八錢	……同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢
〆切	每號十五日前		

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○博報堂○弘報堂○東京勉强社

明治四十三年九月廿五日印刷
明治四十三年十月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地 松本魁
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約販賣元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇 定價金拾五錢 郵税壹錢五厘